

---

# インフィニット・ストラトス その刀に宿す心

逆刃刀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス その刀に宿す心

### 【Nコード】

N2189T

### 【作者名】

逆刃刀

### 【あらすじ】

世界で3人目の男子として、IS学園に來た男神城剣斗。彼が持つ刀、影打その刀に込めた彼のおもいとは…

こうゆうのを書くのは初めてなので、色々指摘してくれたら幸いです。

俺が世界で二人目の男子…じゃないの！（前書き）

とりあえず書いてみました。読みづらいでしょうが、徐々に上手くなると思います。温かく見守ってください。

俺が世界で二人目の男子…じゃないの！

「ここがIS学園か…にしても、でかいな」

神城剣斗かみしろけんとうこと俺はそんなことを言いながら世界で唯一のIS操縦者養成学校である、IS学園の門にいた。

「それにしても、学園の人はまだ来ないのか。全く、どんだけ人を待たすんだよ」

自分の腰に携えてる愛刀、影打かげうちに手をあてながら、そんな文句を言っていると、

「すみませ〜ん。遅れました。」

そう言いながら猛ダツシュしてる女性がいた。この人が、学園の人か？剣斗はそう思ったが、あまりそう見えなかった。理由としては、童顔なのである。着ている服も、子供が無理して大人の服を着ました。そういった感じである。(まっ、人は見かけで判断しちゃいけないもんな)そう思ってる内に、女性は俺の所に着いた。

「はあはあ…か…神城…剣斗…君…ですね？」

「はい。そうですけ(とりあえず、すぐ来てください！)…はい？」  
女性はそう言うなり、俺の手をとって再び猛ダツシュ。俺は考える暇も無く、IS学園の1年1組の教室の前に連れてこられた。

「す…すみません。会議が長引いてしまったもので。」

「別にいいですよ。ええと、あなたは…。」

「あつ、私はあなたのクラスである、1年1組の副担任、山田真耶です。」

拍手をしながら、自己紹介をする山田先生だが、ずっと走ったせい  
か、なかなか呼吸が落ち着かない。「山田先生、よかったらこれ、  
これ使ってください。」

あまりにも、気付そうだったので、俺は制服のポケットから、小型  
のボンベを取り出し、先生に渡す。

「これは…なんですか？まさか、ヘリウムじゃないですよね？」

物凄い疑いの目を向けられる俺、いやいや、いくら俺でも入学そうそう、先生に嫌われる事しませんよ。だって、成績に響そうだもん。

「安心してください。中身は酸素ですよ。」「酸素：ですか。いつも、持ってるんですか？」

先生は、珍しいですね。と呟きながら、酸素を吸っていく。

「はい。俺の体にはちょっと問題があつて、だから、この酸素ボンベは欠かせないんです。」

「問題：ですか？」

山田先生には、そつちの方が興味深かつたらしく、顔を覗き込む。

「そつ、そんなことより、早く入りましようよ。時間がないんですよ。」

俺は必死に話をそらす。

「あつ、そつでしたね。それじゃあ、付いてきてください。」

「はい！」

元気よく返事する俺だったが、内心では、少し焦っていた。(あぶねーあぶねー。今それを聞かれるわけには、いかないんだな。…それにしても、あいつに会うのも久しぶりだな)久しぶりの友ともとの再開に心を踊らせながら、俺は山田先生と教室に入る。その瞬間さつきまで、和気あいあいと話していた女子達の会話が止まる。

それも当たり前だ。

ほとんど女子しかいない、このIS学園の教室に急に、刀を持った男子が入って来たわけだしな…

「ええとみなさん、見ての通り、男の子の転校生です。それでは、自己紹介をお願いします。」

急にそんなことを振られ、俺は一瞬困惑するが、山田先生が、こつちです。と誘導するので、一応みんなの前に、何か女子の視線が鋭い。まるで、みんなから銃を向けられてる気分だ。正直自己紹介なんてしたくなかったが、みんなの視線に負けて、自己紹介をする。

「神城剣斗だ。まあ見ての通り男だ。刀を持ってるから物騒に見える

るかもしれないが、みんなと仲良くやりたいと思う。とりあえずよろしくな。」

しゅん…

まるで、葬式のように誰も喋らない。(まずい！もしや、やっちなった俺！)冷や汗をかきながらそう思っていると「お…男…。」

「うん？ああ、俺は男だよ。」

「きゃ…きゃ…」

「きゃ？」

「きゃああああ！」「うわっ！」

あまりに大き

な女子の高音に俺は耳を塞ぐ。「男子だよ！男子！」「しかも、なかなかのイケメン！」

なかなかで悪かったな「刀持ってる！正にジャパニーズ！」

なんだよそれ：女子から出てくる色々な言葉に突っ込んでいく俺。

「またうちのクラス！これで3人目！」

そうそう、俺は世界で3人目の男子：あれ？3人目？おかしくないか？テレビではISを動かしたのは一人だけのはず、だから俺は2人目のはずなんだが：俺は訳が分からず、山田先生に視線を向けると「あつ、言い忘れてましたが、神城君が来る前にもう一人男の子が来てたんです。」

笑顔で言う山田先生。いやいや、そうゆうのは先に言いましたよ先生。2人目だと喜んでいた自分が恥ずかしいです。(そういえば、あいつはどこにいるんだ？)剣斗はクラスを見渡しある人物を捜していた。

俺が世界で二人目の男子…じゃないの！（後書き）

案の定読みずらかったですね。すみません。次回の話で何とか剣斗のISを出そうと思います。

## 友との再会と専用機

「よお一夏。元気だったか？」

朝のHRが終わった後、俺はすぐに一夏の元に行った。

「まあな。それにしても、もう一人の男子が剣斗なんて驚いたよ。」

「俺はそれよりも、俺達以外に男子がいた方が驚きだよ。で、その男子は誰だ一夏？」

「ああそれはだな…おっ、噂をすればなんとやらだ。オーイ、シャルルちよつとこつち来てくれ。」

一夏はたった今教室に入ってきた生徒をかける。

「なあに？一夏」

声ができる方を見た時、俺の思考回路は完全に停止していた。

「シャルル、こいつは俺の幼なじみの神城剣斗だ。」

「はじめまして、フランス代表候補生のシャルル・デュノアです。」

シャルルとなのる金髪の男の子は笑顔でこちらに手をだし、握手を求めている。その様子は正に貴公子と呼ぶにふさわしい感じだった。

「シャルル……デュノア？」



「そうだけ。シャルルはあのデュノア社の社長の子供なんだぜ！」  
自慢気に話す一夏だったが、あまりその話は耳に入ってなかった。  
「どうしたの？神城君？」

シャルルが心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。心配そうにしていたのは一夏も一緒だった。

「ん？いや、気にしないでくれ。よろしくなシャルル。俺のことは剣斗って呼んでくれ。」

「うん。よろしくね剣斗。」

2人は握手をしながら笑顔で挨拶をする。(そうだ。あの子がここにいるわけがないんだ。ただシャルルと似てるだけだ。あの子がここにいるわけがないんだ) 剣斗が自分の頭を整理していると、一夏が時計を見て

「やばい！次は実習訓練だ！シャルル、剣斗！すぐに着替えに行くぞ！」

一夏は俺の手をとって走り出す。シャルルはしっかりと後ろを付いてきている。

「おい、一夏。何をそんなに急いでるんだ？」

俺はまったく状況が呑み込めず、一夏に説明を求めている。

「俺達男子は実習訓練の時は、少し遠くにある更衣室で着替えなくちゃいけないんだ。もし遅れたら、千冬ね…、織村先生に怒られるからな。」

織村千冬の名を聞いた途端、俺はたくさんの冷や汗をかいていた。俺はあの人が苦手だ。今まで何十回、何百回もあの人にしごかれたからだ。織村先生に怒られるのが嫌な俺は逆に一夏とシャルルの手を取り全速力で走った。

更衣室に着いた俺は軽い酸欠を起こしており、すぐに持っていた小型酸素ボンベで酸素を吸収していた。

「剣斗、だ…大丈夫？早く着替えないと」

「ああ、そうだな」

心配してくれるシャルルに手をあげ、俺はすぐにISSーツに着替える。

今日の実習訓練は第三アリーナでやるらしい。俺達以外の生徒はみんな既に集まっていた。

「遅いぞお前たち！」

その声に俺の体は一気に固まる。正に蛇に睨まれた蛙である。それも当たり前だ。声の主は元世界最強である織村千冬だからである。

「…す、すみません。」「」

「まあいい。よし、では罰として、織村、神城お前達で全力演習をしろ。」

「…はい？」「」

俺と一夏は思わず聞き返し、俺は強く反論する。

「いや、織村先生。俺はまだ全然ISに載ってないんですけど（やれ…）……わかりました。」

あんな目で睨まれたら俺にもう拒否権はないと悟り、一夏の方を向き真剣な顔つきでこう言った。

「一夏。やるなら全力でやるぞ。いいな？」

「勿論そのつもりだぜ。だけどお前何回ISにのつたんだ？」

「まだたったの2回だよ。まあそれでも負けないけどな。」

そう言い合いながら2人は離れた位置に立っている。

「来い！白式！」

一夏が白式の名を呼ぶと、一夏は光の粒子に包まれ一夏は白式を装備する。白式は名前の通り白色のISで背中には大型スラスタがある。

「次は俺だな。いくぜ！来い！ホープ（希望）！」

俺は左手に付けられたブレスレットに手をかざしISを呼ぶが…なかなか来ない。

「おい剣斗。まだか？」

「ま、待て！もう来るはずだ！」

そんな2人のやり取りを見て転けている人がほとんどだった。

「おい神城…早くしろ」

織村先生の冷たい声が聞こえて俺は危機感を持ち、もう一度強く祈る（頼むホープ来てくれ！でなくちゃ俺が殺られる！）そんな俺の気持ちも伝わったのか、俺の周りに光の粒子が集まりホープが装着される。

「あれが剣斗のIS？」

シャルルは半疑問に近い言葉を発する。それはここにいるほとんどの生徒が思っていたことだ。

剣斗のISであるホープは、灰色を基調としたISだが、ISでありながら体に装着されてる装甲は限りなく少なく、スラスタースリキ物も見当たらない。ホープの武器としては、右手に握られてるピーム式のライフルと左手にある実体シールド、そして、腰の所にある刀だけである。

「それが剣斗のISか。見た感じスラスターが見当たらないがいいのか？」

「ないもんはないんだ、仕方がない。まあそれでも負ける気はしないけどな」

「そうか、じゃいくぜー！」

「来い！一夏！」

そして、お互いのISは全速力で相手に向かって行った。

## 友との再会と専用機（後書き）

次からあまり書いたことのない戦闘を書いてみます。上手く書けるか不安ですが、精一杯頑張ります。

また、ここで少しオリ主の説明をします。

名前 神城剣斗

身長は一夏とほとんど同じ。髪は黒髪の短髪だが、所々に白髪がある。

好きなこと

お菓子作り、野球、剣術修行、トレーニング

嫌いなこと

宿題

幼い頃に親に捨てられ、そこからできるだけ一人で生活していたので家事はある程度できる。お菓子作りはすきがこつじてうまくなった。彼がいつも持つてる愛刀・影打は剣術を教わった師匠から譲り受けたもの。

とりあずこんなものです。またいずれちゃんと書こうと思います。

## 白式vsホープ(前書き)

はじめての戦闘です。

## 白式 vs ホープ

「いくぜ！」

2人は全速力で相手に突っ込んでいく。しかし、剣斗のISホープはほとんどスラスターが無いので、そのスピードの差は一目瞭然であった。(やっぱ白式の方が速いか！なら)このままぶつかっても勢いで負けると判断した剣斗は、右手に持っているビーム式ライフル(燕)で一夏を撃つ。

「おわっと、あぶねーあぶねー。いきなり射撃かよ。最初位お互いの得意な剣でやるだろ普通。」

「格闘しかないお前に射撃武器を使わないわけないだろう！」

「そりゃそうだなっと！」

燕のビームを上空に急上昇することで回避した一夏を剣斗は追わずただ一夏に向けて燕のトリガーを引いていた。

「そう言う割りには、しっかり狙えてないぞ。」

「当たり前だ。この武器を使うのも、こいつで戦うのだって初めてなんだからよ。」

「だったら速くこっち来いよ。」

必要以上に挑発してくる一夏。それもその筈だ、一応ホープもISなので飛ぶことはできる。しかし、白式のようなスラスターが無いので、空中戦になったら明らかに白式が有利になる。それは剣斗も解

っていることなので、こうして空中にいる一夏を追わず、射撃によって白式のシールドエネルギーを減らそうとするのだが、（やつぱり銃なんて撃つたことないから当たらないか、さて、どうするか）するとホープから新たな情報が送られる。（なんだ？銃の射撃変更？まったく分からないがやってみるか）剣斗が銃の射撃変更を命じると、ビーム式ライフルモード「燕」からモード「雀」に変更しましたと情報がくる。射撃変更をすると、先程まで単発で撃っていたビームが「燕」の時よりやや小さくなってるが、3連射できるようになっていた。

「うわっ！いきなりなんだよそれ」

さすがの白式もこの連射は避けきれず、少しずつシールドエネルギーを削っていく。

「さすがに不味いな。だったらこっちもいくぜ！」

すると一夏は避けるのを諦めこっちに向かってくる。まさか、こんな真っ正面から来るとは思わず、俺は一瞬怯んでしまう。

「もらいー！」

一夏はこっちにくる勢いそのままに白式の唯一の武器である「雪片式型」を叩きつける。  
ガキーン！！

俺はとつさにシールドで「雪片式型」を受けとめて一安心するが、  
「あまいぜ剣斗ー！」

一夏は油断していた俺の腹に思いっきり蹴りをいれてくる。



「がはっ」

あまりの衝撃に一瞬体がよろめく。

「よし。これで決める！」

一夏がそう言うのと「雪片式型」の刀身が開き、そこからエネルギー刃がでてくる。

「まずい！確かこれは」

そう、それは白式のワンオフ・アビリティー（唯一仕様の特殊才能）であり、エネルギー性質ならそれが何であれ無効化・消滅させる白式の最強攻撃能力「零落白夜」である。

「悪いがそれを喰らうわけにはいかないんだよ。」

俺はとっさにモード「雀」のビームライフルで一夏を撃つ。だがそれでも一夏を止められない。とっさに後ろに下がる剣斗だが、「零落白夜」の剣先が少し触れただけでホープから警告音がでる。

シールドエネルギー 残り 75

「げっ、まじかよ。全くどんな攻撃だよそれ。スゲーな。」

剣斗は一夏を誉めていたが、一夏の表情は険しかった。

「どうした一夏？楽しく無いのか？俺はすごく楽しいぜ。」

「俺も楽しいぜ。だけどよ、なんでお前剣を使わないんだよ。」

それは他の生徒も思っていたことだ。彼は教室に入ってきた時もうだが、普段から刀を持つてる感じだった。だからみんなは彼が刀をどんな風に使うか興味があつた。それが今まで刀を使うどころか、刀に触れてすらいない。

「刀を使うか使わないかは俺の自由だろ。それに一夏は「零落白夜」を使ったからもうほとんどシールドエネルギーも残ってないだろうし、次で決めるよ。」

笑顔で言う剣斗に一夏は表情を変えずに言う。

「それはお前も同じだろ。悪いが次で決めるのは俺だ。」

「そうかそうか。じゃお互い次で決めるか。」

「そうだな。」

そして一夏と剣斗はお互いに距離を取り、振り返った瞬間に相手に向かっていく

「「うおおおお！！！！！！」」

剣斗は一夏より先に仕掛けようとしたが、やはりイグニッション・ブースト（瞬時加速）を使った白式にスピードで勝てるわけ無く、逆に白式に先に攻撃され俺のシールドエネルギーは削られ

「勝者、織村一夏！」

こうして俺のIS対戦は見事な黒星スタートとなった。

演習が終わり、剣斗と一夏はお互いのISを待機状態にする。その瞬間、剣斗の呼吸が一気に乱れる。

「はあはあ…はあはあ…」

「おい剣斗！お前大丈夫か！？」

心配そうに一夏や他の生徒が駆けつけてくる。

「だ…大丈夫だ。気にしないでくれ。」

「でもお前。」

「大丈夫だよ。こんなのその為にこれがあるんだから。」

そう言いながら剣斗はISスーツとしては珍しいポケットから更衣室に入ってきた時に使っていた小型酸素ボンベ取り出した。暫くして剣斗の呼吸が落ち着く。

「なっ、言っただろ。」

その顔は笑顔だが明らかに無理をしていた。

「おい神城。」

「何ですか 織村先生？」

「少し保健室で休んでおけ。」

「いや、俺は大丈夫で（休め）…解りました。」

織村先生の優しい心遣いにより保健室に行く事になった俺、何人かの女子が付き添おうとしていたが、大丈夫だよ。と言い一人で保健室に向かう剣斗だが、保健室に行くまでに彼は何回も酸欠になって足を止めていた……

## 白式vsホープ(後書き)

いかがでしたか？

あまり上手く書けていませんでしたか？

これから頑張っていきます。

感想待っています。

ランチタイムとドイツ人(前書き)

今回やっとラウラが登場します！

## ランチタイムとドイツ人

保健室で休み終えた俺は一夏に誘われて、現在食堂にいる。

「そういえば一夏、そいつとはどういった関係なのだ？」

黒髪のポニーテールの女子が聞いてくる。

「それは私も聞きたかったですわ一夏さん。見た感じお二人は知り合いのようですが…」

今度は金髪ロン毛の女子が聞いてくる。お前らそればっかだな…

「そういえばまだお前達に紹介してなかったな。こいつは俺の幼なじみだ。小6から中2まで一緒だった。鈴は知ってるよか？」

「当たり前でしょ！よく遊んでたじゃない。いやでも久しぶりね剣斗、元気にしてた？」

「一応な。鈴は少し大人っぽくなったか？」

「あつ当たり前でしょ！私は今成長期なのよ。」

そう言いながらも満更でもない様子のツインテールの女子である鈴、その頬は若干赤くなっている。

「剣斗、こっちは箒俺のファースト幼なじみでこっちはセシリア、イギリスの代表候補生だ。」

「へえ、よろしくな箒、セシリア。」

「こちらこそよろしくな剣斗。」

「同じ専用機持ちとして頑張りましょ。」

2人と挨拶を交わすと話題は直ぐに一夏の模擬戦の話になった。

「それにしても、あなたのISはなんなのよ」

「いや、なんなのよと言われても…」

「確かに剣斗のISは変わってるよ」

俺の隣でパエリアを食べてるシャルルもそう言ってくる。

「そうかな」

「そうだよ。だってまずホープにはスラスターがないじゃん。あれじゃ空中戦がまず勝てないしもしオルコットさんとやったらほとんど勝てないと思うよ」

シャルルは的確にホープの欠点を指摘してくる。

「でも俺は結構気に入ってるんだけどな。」

「それでも俺に負けただけだな。」

一夏は和食セットの焼魚を食べながら満面の笑みで言う。ちなみにみんなが食べてるのは、箸と一夏が和食セット、セシリアは洋食セット、シャルルはパエリア、鈴はラーメンで俺はチキン南蛮である。チキンとタルタルがよく合いご飯がすすむ。他のやつもおいしそうだな。早く全部食べたいな。

「大丈夫さ直ぐに追いつくよ。なんたって俺は努力家だからな」



「俺だって努力家だぜ」

「そうですね。一夏さんは誰よりも頑張っておりますわ！」

「いやいや、そんな向きになるなよセシリア」

それにしても、何故セシリアはこんなに一夏にくっついてるんだらうか？刹那俺の左前、つまり一夏の前の席から異様な殺気が出ている。

「一夏…、貴様何故そんなセシリアとくっついてる」

その殺気を出しているのは筈である。その殺気は凄まじいもので、周りの女子も異様な雰囲気を感じて周りを見渡している。

「い、いや、筈落ち着けよ。なあセシリア？」

「あら、一夏さんは嫌なんですか？」

「いや、そんなことは無いけど」

「ならば、よろしいでしょ」

セシリアは更に一夏にくっついていく。

「い…一夏。き…貴様」

これは不味いなと思った時にはもう遅かった。

「死んでしまえー！」

どこから取り出したのか箒は真剣を手にとり一夏に切りかかった。  
「ばっ、ばか！」

セシリアがくつつついていたため、避ける事が出来ない一夏。周りも一夏が斬られたと思ひ悲鳴を上げるが…

「なっ、何！」

「おいおい、そんなもん振り回すなよ危ないだろ」

間一髪、俺は自分の愛刀（影打）で箒の刀を受け止める。まあ、実際には俺は刀を鞘から出していないが。

「何をするんだ剣斗！私はいつを斬らねば気がすまん！」

「いやいや、何言っただよ箒！」

一夏は強く反論する。まあそりゃそうか。誰だって殺されそうになれば、必死に抵抗するな。

「うるさい！とっと斬られる！」

流石の俺も真剣を振り回す箒に少しムカついてきた。

「おい箒、お前いい加減にしるよ」

剣斗は低い声で箒に言う。

「お前が一夏にイラつくのはわかる。だがな、そうやって人を殺す道具である真剣を振り回すのは良くないんじゃないか？」

「な、なんだと？」

「それに今ここで俺とお前が勝負しても勝つのは絶対俺だぞ」

俺は不適な笑みを浮かべる。

「だったらやってみろ」

箒はそれでも刀をおろさず一夏を斬ろうとする。もうここまでくると女の執念って凄いな。

「全く面倒だな」

俺は箒が刀を振り上げた瞬間を狙い一気に刀を抜く。そのまま箒の刀を弾くと、箒をそのまま壁に押し付け、その首に刀を当てる。

「悪いが一夏は大事な友達なんでね。そいつを斬ろうとするなら悪いがあんたを斬るぜ」

「っ！」

箒から嫌な汗がでてるのがこちらからでもわかる。少し肩が震え始めた箒に俺は笑顔で言った。

「それではサヨウナラ、箒さん」

一夏が止めようと立ち上がったがもう遅く、剣斗は首に当てていた刀を一気に横に振った…

「あ、あれ？」

だがしかし、箒の首からは血が出ていない。

「どうゆうことだ？確かに私は…」

全く状況がわかっていない箒、それは一夏達もそうであった。確かにあの時剣斗は箒の首に刀を当てていて、その刀を横に振っていた。それでも箒はまったくの無傷である。

「箒の刀は良いやつだな。でもちゃんと相手の刀も見なくちゃダメだぜ」

剣斗は箒を掴んでいた手を離し自分の刀を見せる。

「！！　そうかそれは逆刃刀か」

「当たたり〜」

「ねえ一夏。逆刃刀って何？」

シャルルは当たり前だが刀のことは知らないの、不思議そうな目をしながら一夏に聞いていた。

「やっぱシャルル知らないか。逆刃刀はな、普通の刀には切る部分の刃と、切れない峰という部分があるんだ。だけど逆刃刀はその刃と峰が逆になっていてつまり、普通に斬ろうとしても切れない様になってるんだ。」

「へえ〜そうなんだ」

シャルルは関心しながら一夏の話聞いていた。たけど筈は納得してない様子だった。

「何故そんな刀を持っているんだ？ふざけてるのか貴様！」

「ふざけてないよ。こうすれば人を傷つけなくて済むしな。さっ、早くご飯食べようぜ」

俺はみんなを半ば強制的に座らせ食事を再会させる。すると、一人の女子が目止まった。

「なあ一夏。確かあいつってうちのクラスだよな」

「ああ、一応な」

一夏はまるで渋柿みたいな渋い顔をしながら答える。

「一応ってなんだよ。何かあったのか？」

「あいつ転校してそうそう、一夏に平手打ちしたのよ！」

鈴は思いっきりトレイを叩きつけながら怒号を放つ。つうか今のでトレイにひびが入ったぞ。物は大事にしろよ。

「ふう〜ん。であいつってなんて言うの？」

「ラウラボーデビッツヒさんだよ。ドイツの代表候補生で専用機持ちだよ剣斗」

流石はシャルルみんなのことをよく知ってるな。

「専用機持ち？だったら尚更仲間外れは駄目だろ。」

なんていうか俺は仲間外れとか、そうゆうの嫌いなんだよな。

俺は自分のトレイを持ちラウラの元へ行く。ラウラは長い銀髪で左目に眼帯をしている。決して身長は高くないがその冷たい雰囲気にも近づこうとしない。

「ラウラ一緒に食おうぜ」

「誰だ貴様は？」

「誰って、同じクラスの神城剣斗だ」

「知らんな、とっと消えろ」

ラウラそう言い放つと食事を再会する。だけど俺はそんな言葉を無視してラウラの前に座る。

「なあなあ、お前も専用機持ちなんだろ」

「……」

「今度一緒に練習しようぜ」

「……」

「なあ聞いてる？」

「……」

剣斗はラウラに話し掛けるがラウラは一方的に無視する。周りもどうなるか興味があるようで2人のやり取りをみていた。

「なあそれうまいか」

「……」

「俺にも一口頂だ…！いと！おいおい、痛いじゃないか」

ラウラは自分が食べていたパスタを食べようとした剣斗の手をサバイバルナイフで切りつけた。剣斗の手の甲から赤い血がだらりと流れる。

「私は消えると言ったはずだ。」

ラウラは人を傷つけたにも関わらず平然とした顔で言う。

「てめえ！」

一夏は立ち上がってラウラの所に行こうとするが、

「一夏は来なくていいよ。面倒になる。」

「でもよ…」

一夏は納得いかない様子だったがそれを無視してラウラの方を向く。

「悪かったラウラ。確かに急に話し掛けるのは良くなかったな」

「ふんつ。怪我をしたくなければ私に近づかないことだな」

ラウラはそう言い放ち食堂を後にする。

「剣斗大丈夫!？」

シャルルが直ぐに駆け寄ってくる。どうやら思ったり出血していたらしく、血は俺の手を伝って床にぼたぼたと垂れていた。

「こんぐらいは平気だよ。舐めれば治る。」

「もうダメだよ!しっかり消毒しないと」

シャルルはしょうがないなあとつぶやき、ポケットからハンカチを取り出し俺の手に巻いてくれた。この時また俺は昔の事を思い出していた。

「本当似てるな…」

「ん?なんか言った?」

聞こえないように言ったはずが聞こえていたようだ。俺はとっさに否定する。

「い、いや。何でもないよ。それよりありがとな」

「えへへ、どういたしまして」

笑顔で言ってくるシャルル。その姿を見るたびに俺は考え込んでしまう。(それにしても、本当にシャルルはあの子に似てるな、兄妹か?いや、そんな話は聞いてないしな。うーん。謎は深まるばかりだ。あっそう言えば俺って一体どこの部屋なんだろう?山田先生に聞かなくちゃ)

そう思った剣斗は放課後急ぎ足で職員室に向かった……



## 剣斗のケーキと放課後トレーニング

「ええと、俺の部屋は…おっ、ここか」

夕方俺は山田先生に教えてもらった部屋の前にいる。一応自分の部屋だがノックしてから入ることにした。

「一夏、シャルル。俺だ、入るぞ。」

そう。当たり前といえば当たり前だが、俺は一夏とシャルルと相部屋になった。まあ女子と相部屋はまずいからな。

「あつ、剣斗随分遅かったね。」

笑顔でシャルルが迎えてくれる。

「ああ、ちよつとやるがあったんだ。」

「それよりも剣斗、なんで、わざわざノックなんてするんだよ。ここはお前の部屋でもあるんだぜ。」

「まあそうだけど、もし2人がいけないことしてたらまずいだろ?」

「いけないことって何だよ!するわけないだろ!」

耳まで真っ赤にして否定する一夏、本当にこいつは面白いな。

「冗談に決まってるんだろ。全く一夏は…」

「お前が言つと冗談に聞こえないんだよ。まあいいや。お茶でもい

れてくるよ。」

「おい一夏、いれるなら紅茶にしてくれ。」

「なんで紅茶…、もしかして、お前のケーキか？」

「そうだよ。今日は俺の入学祝いということだな、さっき作ってきた。」

「久しぶりに剣斗のケーキが食べれるのか！よし、早速紅茶いれてくるぜ。」

余程俺のケーキが楽しみなのか、一夏は早足で紅茶を入れに行く。

「剣斗って、ケーキ作れるの？」

シャルルは2人の会話に入れてなかったが、以外そうな顔で見える。俺ってそんなケーキを作らなそうな顔か？

「まあな、俺お菓子とか好きだからよく自分で作って食べてるんだ。」

「へえ、なんか以外だな。」

「そうだよ。だけどこいつの作るお菓子は、本当においしいんだぜ。なんたって世界大会で優勝したからな。」

丁度一夏が紅茶を持ってきた。

「そうなの剣斗、スゴいじゃん！」

シャルルは興奮した様子で俺に迫ってくる。ちょっ、近いですシャルルさん。

「別にすごくないよ。世界大会だって所詮ジュニアだしな。」

「そんなことないよ！それはとても誇れることだよ！」

「そ、そうか。ありがとな。よし、じゃケーキ食べるか」

「剣斗、今日は何のケーキだ？」

一夏はまるでプレゼントを貰った子供の様に聞いてくる。そんなに楽しみなのか？まあ嬉しいことだが…

「今日はシャルルが俺のケーキを食べるの初めてだから、ベタかもしれないがイチゴのショートケーキだ。」

俺は箱からケーキを出しながら説明すると、シャルルが味を乗りだしてきた。

「わあ、すごくキレイで美味しそう。」

「シャルルはケーキ好きなのか？」

「うん！大好き！」

「そっか俺と同じだな。シャルルは何のケーキが好き？」

「ええと、僕はね…（ちょっと待った！）…どうしたの一夏？」

俺がシャルルと話していると一夏が急に割って入ってきた。

「それより先にケーキ食べようぜ。」

「夏は今にもよだれが垂れてきそうである。流石にこれ以上はまずいな…」

「そうだな。それじゃあ食べようぜ。」

「うん（ああ）」

2人はケーキを口に運ぶ。その瞬間2人の顔から笑みがこぼれていた。（ああ、その顔を見ると作ったかいたがあつたな）

「相変わらずお前のケーキは美味しいな。」

「そうか？こんなの誰でも作れるよ。」

「そんなことないよ！」

俺が言った言葉をシャルルが速攻で否定する。

「このケーキすごく美味しいよ！スポンジは丁度いい時間で焼いてるからすごくふわふわしてるし、生クリームだって決して甘過ぎ無くて紅茶ともよく合うよ。普通のお店のケーキより何倍も美味しいよ！」

シャルルは瞳をキラキラ輝かせながら感想を述べている。さすがの俺もここまで誉められるとは思わず、頬をつっすら赤くする。

「そうか、じゃその言葉有り難く頂戴するよ。んっ、そう言えば—  
夏とシャルルはシャワーどうしてるの？」

俺はケーキを食べながら二人に聞いた。

「シャワーは一夏が先で僕がその後になってるよ。剣斗も先でいいからね。」

（うーんそう言われると、先に入りづらいな。まあシャルルが良いならいつか。あっそうだあの事も聞いとかないと）

「あとさ、俺朝もシャワー使っけどいいか？」

「朝にか？」

一夏はイチゴを食べながら首を傾げる。

「そう。俺って朝にトレーニングとかしてるから汗かくからさ。いいか？」

「俺は別にいいぜ。シャルル？」

「僕も平気だよ」

「そうかありがとう。」

俺はお礼を言ってケーキを食べようとすると

「なあ剣斗」

「なんだ一夏？」

一夏の顔からして明らかに何か頼もつとしている。こいつは昔から

顔に出るから本当にわかりやすい。

「そのトレーニング俺も…(ダメだ)」

俺は一夏の頼みを即刻却下した。

「なっ、何でだよ。」

「簡単な話だ。今のお前じゃ俺のトレーニングについてこれない。」

「そんなことねえよ」

一夏はなかなか諦めてくれない。しかし、ここはしつかり断らなければいけない。実際今の一夏だと絶対トレーニングについていけないはずだ。俺は心を鬼にする。

「いいか一夏？俺の朝のトレーニングはな、まずランニング10キロから始まり、そこから筋トレして、竹刀を使って素振り500回、そして最後に刀を使って実際に意識した練習だ。一夏、俺は本当についてこれるか？」

「ぐっ。」

さすがの一夏も無理だとわかったのだろう。悔しそうな顔をしている。シャルルがそれを心配そうに見ている。

「でもいつかは一緒にやろう。」

「「えっ？」」

明らかに一夏とシャルルの頭には？が出ている。そんな2人に俺は笑顔で続ける。

「確かに今は無理だろうが、一夏もこれから鍛えればきつと体力が付いて、俺のトレーニングにもついてこれるだろう？俺はその日を楽しみにしてからの。わかったか一夏、これは俺がお前を認めてるってことだからな」

俺は一夏の前に拳を突きつける。最初はあっけにとられていた一夏だったが、

「ああすぐに追いついてやるよ！」

一夏は俺の拳に自分の拳をぶつけた……

「ええとね、一夏がセシリアさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからで、剣斗は空中戦闘のことを理解してないからだよ。」

俺が転校生してもう一週間が経った。俺達は今アリーナでシャルル先生指導を受けている。

「一応わかってるつもりだったんだが…なあ剣斗？」

「ああそうだな」

「2人ともあくまで知識だけって感じたね。だから僕と戦っても勝

てなかつたんだ。」

「「うう〜」」

恥ずかしながら俺と一夏は先程シャルルと戦ったが、見事な程の完敗だった。因みに俺は未だに専用機持ちに勝ち星無し。情けない…

「とりあえず2人はそれぞれ苦手な部分の特訓をしようか」

「「はい先生！」」

「ちよつと先生はやめてよ」

シャルルは手を横に振りながら否定してるが満更でもない様子だった。

「ねえ、ちよつとアレ…」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ。」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど…」

急にアリーナ内がざわついて、俺達はその注文の的に視線を向けた。

「……………」

そこにいたのは転校してそうそう一夏を平手打ちし、俺の手を切りつけたドイツ代表候補生ラウラ・ボーデビッツヒだった。

「おい」



ISのオープン・チャンネルから声がする。

「なんだよ」

明らかに一夏の声は怒っていた。

「貴様も専用機持ちらしいな。丁度いい私と戦え」

いきなり一夏に戦いを挑んでくる。いいなあ一夏…

「イヤだ。今お前と戦う気はねえ。」

一夏は全く興味が無い様子だ。何でだよ勿体無い。

「そうゆうことだから、またな。」

「ふん。なら、無理にでも戦わせてやる！」

一夏がラウラに背中を見せた瞬間、ラウラは漆黒のISを戦闘状態にし、左肩に装備された大型の実弾砲を撃ってきた。

ガッキーン！

「こんな場所できいきなり撃つなんてどうかしてるんじゃない？」

「貴様…」

横からシャルルが割り込みシールドで実弾を弾いてラウラに銃口を向ける。

「シャルルいいよ。早く帰ろう」

それでも一夏はラウラを無視する。おいおい、そんなことするとあうゆう子はまずいよ。

「おのれ私を無視する気が、面白い。私を無視するとどうなるか教えてやる。」

するとラウラはもう一発実弾を撃つ、しかしそれは俺達を狙ってなかった。

「あいつまさか!?!」

一夏が慌てた表情を見せる。それもそのはず、その砲弾はアリーナで練習していた同じクラスの相川さんを狙っていた。何よりやばいのは、その生徒はISを装着していないのだ。もしその状態で当たったら確実に怪我をし、最悪の場合死んでしまう。

「相川さん逃げて!」

「えっ!?!」

一夏は大声で叫ぶがもうその砲弾は相川さんに当たろうとしていた。

ガキーン!

「何!?!ぐわ!」

「!?!?!」

一夏達は一瞬何が起こったか理解できなかったが、相川さんの方を見てやっと理解出来た。

「ラウラ。いきなり人に撃つのはよくないよ」

「また貴様か」

ホープを纏った剣斗が相川さんの前に立っていた。だが一夏達が驚いたのは…

「剣斗が刀を抜いた…」

一夏はそんな言葉を漏らす無理もない、剣斗は今まで何回も模擬戦をやったが、今まで刀を抜いた事がなかった。いつも何で刀を抜かないんだよと聞いても

「刀を使う必要が無いからな」

そう言っつていつも話を反らしていた。その剣斗が刀を抜いたのだ驚くのも無理ない。だがシャルルは他の所で驚いていた。それはラウラも同じだった。

「まさかあんな大型実弾を刀で弾き返すなんて…」

そうなのである。剣斗は実弾と相川さんの間に入るとそのまま居合いの構えをして高速で刀を抜いてラウラの実弾を弾き返した。先程シャルルがしたように、砲弾の向きを変えることは出来る。それでも剣斗がしたように大型の実弾を弾き返すなんて普通のIS武器じゃ簡単に壊れてしまからだ。

「忠告したはずぞ神城剣斗。邪魔をするなと」

「おっ、名前覚えてくれたんだ。ありがとな。」

冷たい言葉を突きつけるラウラに笑顔で答える剣斗。しかし笑顔とは裏腹に剣斗が怒っていることは誰にでも分かった。

「ふん。ならばまずお前を倒す」

「残念だがそれは無理だぜ。なぜなら…」

丁度騒ぎを聞きつけた先生が続々とやって来た。」

「ふん。」

流石にこれ以上は無理だと判断したのかISを解除してアリーナを後にする。それを見て俺もISを解除する。するとやはり呼吸が乱れる。その様子を見て直ぐ様シャルルが酸素ボンベを持ってくる。

「剣斗これ。」

「はあはあ…、シャルルありがとな。これさえあれば大丈夫さ」

俺はISに乗ると毎回酸欠になるので訓練が終わった後はこうしていつもシャルルが酸素ボンベを持って来てくれる。

しかし今回は呼吸がなかなか落ち着かない。

「ちよつ大丈夫剣斗？」

「ああ大丈夫さ…多分」

「多分って…」

「しょうがない俺が剣斗を保健室に連れてくよ。」

「すまんな一夏」

一夏は剣斗をおんぶして保健室に運ぼうとする。

「そうだシャルル。今日は先にシャワー使ってくれ多分俺達は遅くなる」

「うんわかったよ。剣斗をよろしくね」

「ああ」

そして一夏は剣斗を保健室に連れて行った。

「さっきはすまなかったな一夏」

「気にすんなよそんなこと」

保健室で休み終えた俺達は自室に戻っていた。

「それにしてもお前毎回酸欠になるけど大丈夫か？」

「大丈夫だよあんぐらい。あゝあそれにしても今日は疲れたな」

俺達が部屋に入るとシャルルは丁度シャワーを浴びていた。

「「あつそういえば確か」」

「ボディソープ切れてたな」

「シャンプー切れてたな」

一夏と剣斗はお互いにボディソープとシャンプーを持って洗面所に入る。

ガチャ

ガチャ

丁度俺達が洗面所に入ると同時にシャルルがシャワー室から出てきた。

「ああシャルルこれかえの……」

「一夏……剣斗……」

「誰？」

「誰って僕だよシャルルって……わあ！」

シャルルは急にしゃがみこむ。だがおかしいのはそこではない。確かに目の前いるのはシャルルである。だが明らかに目の前にいるのは女子だ。何故わかるかって？ふふふ簡単だよトソン君って何言ってるんだよ俺……とりあえず理由は簡単胸があるからだ。多分サイズはCカップだろう……って何考えてんだよ俺！俺は直ぐ様バスタオルをシャルルに掛ける。

「と、とりあえず俺達は外にいるから落ち着いたら出てきてくれ。」

「うん」

そう言うと俺は一夏の腕を掴み洗面所を後にした。

「なあ剣斗」

明らかに顔が真っ青な一夏が話し掛けてくる。

「なんだよ一夏」

「シャルルは女子だったのか？」

「お前も見たからわかるだろう？」

「ああ、でも一体どうなってんだよ!？」

「ああもう落ち着けよ！俺にだってわかんないんだから！とりあえずシャルルが話してくれるまで待とう」

「ああそうだな」

俺は何とか一夏を落ち着かせてベットに座らせる。

そんな中、剣斗にはある一つの考えがあった。

（そうか、シャルルは女子だったのか…もしかしたらシャルルはいや、それはシャルルの話を聞けばわかるだろう。とりあえず今は待つか…）

俺と一夏はただ静かにシャルルを待っていた…

## 剣斗のケーキと放課後トレーニング（後書き）

すみません。今回も読みずらかったですね。改めて読み返すと会話と会話の間にもう少し人物の様子や表情を書いた方が良かったですね…次から修正していきます…



語られる真実と過去（前書き）

今回は会話が大半を占めます……

## 語られる真実と過去

ガチャ…

あれから10分は経っただろうか、シャルルが洗面所から出てくる。俺達がさっき見たのは夢だと信じ振り替えるが…やはりそこには女子がいた。

「ごめんね、待った？」

シャルルはいつものスポーツジャージを着ていたが、いつも着けていただろっコレットをしてないせいか胸が強調しているかのようだった。

「いや、そんなことないよ。なあ一夏。」

「ああ、それよりシャルルその…」

一夏は一体どうなってるのか早く知りたい様子だった。

「うん、わかってる。」

シャルルは俺達の向かい側に座る。だがその顔にいつもの笑顔は無かった。

「実はね……………」

…というわけなんだ今まで黙っててごめんね。」

「……………」

俺達は絶句していた。シャルルの話はあまりにも残酷なものだった。シャルルは確かにデュノア社の社長の子供だが実際は社長と愛人との子供らしかった。そしてデュノア社は経営不振になり丁度その時シャルルの母親も病気で亡くなり、その時色々調査した結果IS適正が高かったらしく、シャルルはそのままテストパイロットになった。そして会社の経営不振から救うため、白式のデータを盗むために男として入学させられたらしい。

「まあ、こんなところかな。でもばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されてデュノア社も今までのようにいかないだろうね。もう僕には関係ないけど」

「……………」

「ふう、なんか話したらスッキリしちゃった。聞いてくれてありがとう。」

シャルルはとびつきりの作り笑顔をする。すると一夏はシャルルの肩を掴んでいた。

「いいのか、それで」

「え…………？」

「それでいいのか？言い訳ないだろ！？親がなんだよ。どうして親

だからって子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろう、そんなの！」

「い、一夏……」

シャルルには明らかな戸惑いと怯えの表情をしていた。

「落ち着けよ一夏」

「これが落ち着いていられるか!？」

一夏は怒りをあらわにしていた。勿論俺だって怒っているさ。ただけどなあ……

「親がいなけりゃ確かに子は産まれない。だからってな、親が子供の人生を決めて良いわけがないんだ!そいつの人生はそいつが決めなくちゃいけないんだ!」

「どうしたの一夏。何か変だよ?」

「ああ、悪いつい熱くなった。」

一夏はシャルルの肩から手を離し再び座る。

「俺は……、いや正確には俺と剣斗は両親に捨てられたんだ。」

「あっ……」

きっとシャルルは資料で知っていたのだろう。申し訳なさそうにしている。

「なんかごめんね……」

「気にしなくていい。俺には千冬姉がいたしな。」

「俺も両親にはもう会ったしな。」

「えっ、そうなのか？」

一夏は心底驚いた顔をしている。（あれ？これ一夏に話してなかったか。まあいいや今話そう）

「俺は確かに赤ん坊の頃親に捨てられたよ。だけど捨てられ町の人  
がみんないい人だったからな。すすく成長したよ。そしたら小3  
の時かな？町の人が俺の両親を見つけて俺の所に連れてきたんだ。  
俺は怒るよりもまず先に、何で捨てたか聞いたんだ。そしたら何て言  
ったと思うよ？」

2人は無言のままであった。まあそりゃそうか。

「理由は笑えるぜ。何と俺が男だったからだよ。」

「「！？」」

2人は信じられないといった顔をしている。あゝあ、だから話した  
くないんだけど……

「どうやら両親はどうしても女の子が欲しかったらしいんだけど、  
俺が産まれた。両親は俺を見た瞬間捨てようと思ったらしいぜ。」  
「そ……そんな」

シャルルは何とか声を振り絞った感じだった。一夏は今だ何も言え

ない様子だった。

「そして俺は両親と完全に縁を切りましたとさ……」

「そんなことがあったのか」

「まあな、それよりシャルルはこれからどうするんだ？」

「どうするって……時間の問題だよ。フランス政府だってこの事を知ったら黙ってないしね。僕は代表候補生をおろされて、牢屋いきだよ」

「シャルルはそれでいいのか？」

俺は真剣な顔つきで聞く。

「良いも悪いも僕には選ぶ権利はないよ。」

「うーん」

俺は頭を捻って何か良い策は無いか考えるがなかなか思い付かない。すると一夏が、

「だったらここにいろ。」

「「えっ？」」

「特記事項の中に、生徒はどこの国家・組合・団体に属さないというのがあったはずだ。つまり学園にいれば少なくとも3年は大丈夫だろ？その間に何か良い案でも考えようぜ。」

「……………」

俺とシャルルは啞然としていた。その様子に一夏が慌てる。

「ど、どうした？」

「いや、よく覚えたな一夏、俺特記事項なんて一個も覚えてないぜ。」

「勤勉なんだよ。俺はな」

「ははは。違いねえな」

「でも駄目だよ。」

「「へ？」」

一夏の案をシャルルは暗い顔をして否定する。

「その特記事項だつてあくまで原則だしね。それにいつかはばれるんだしね。これ以上迷惑はかけられないよ。」

「シャルル……………」

一夏は納得いかない顔をしている。俺だつてそうさ。だつてシャルルはきつとあの子だから……………」

「シャルル、それでもお前はここに残つてもらつ。いいな？」

「剣斗？……………でも僕は……………」

シャルルはまだ迷惑はかけられないと思ってるのか……、しょうがないな。

「フランス政府がなんだ。そんなのがシャルルを連れていこうとしたら、俺がこの影打でそいつらをなぎ払うよ。」

俺は自分の刀に手を当てて笑って見せる。

「だ…駄目だよ…これ以上…みんなに迷惑は……」

シャルルの目には今にも涙が溢れそうだった。

俺は立ち上がるとシャルルを優しく抱き締めた。

「け、剣斗」

「ごめんな、今まで辛い思いさせて。誰にも相談出来なかっただろう。だがな、ここには俺や一夏がいる。一人でなんでも抱えようとするな。安心しろ。俺が絶対守ってやる。俺は約束だけは守る男だからな。だからここに残れ、いや、俺はシャルルに残っていて欲しいな。駄目かな」

「本当に守ってくれる？」

シャルルは上目遣いで俺を見る。そんな目されて嘘なんて言えないよ。まあ言う気は無いけどな。

「ああ本当だよ。俺がお前に「希望」を見せてやる。だからもう一人でなんでも抱えようとするな。いいか？わかったな？」



「剣斗……っわー！」

きっと今まで溜めていたのが溢れたのだろう。シャルルは俺の胸で大声で泣く。一夏は困惑した様子だったが俺はシャルルの頭を撫でていた。

（これでやっと約束が守れる。その為に俺はこの力を得たんだ。この影打とホープをな……）

「はあ〜」

「何ため息ついてんだよ一夏」

今俺達は教室の中にいた。教室といっても今は夜なので誰もいない。月夜に照らされた教室はとても幻想的だった。俺達は先程買ったジュースを飲みながら話していた。ちなみにシャルルはあの後泣き疲れたのか、すっかり眠っている。その後俺が一夏を部屋の外に誘ったのだ。

「で、どうして部屋から出たんだ。」

「一夏は自分の席に座りながら聞いてくる。」

「シャルルに聞かれたくないからな。」

「何をだ？」

「まだ憶測だが俺は以前シャルルに会ってる。」

「ぶつ。なんだって？」

一夏は飲んでいたジュースを一気に吐き出す。おいおい、ちゃんと拭けよ汚いから。」

「一夏、俺が中一の夏休み家に居なかったの覚えてるか？」

「ああ、あつたなそんなこと。お前あの時何処行ってたんだ？」

「ちよつと世界を回ってた。修行の一環としてな。」

「ぶつ。世界だと？」

一夏は再びジュースを吐き出した。お前しつこいぞ。芸人かお前は

……

「続けるぞ。お前は色んな国に行った。ところがある国で色々会つてな。俺は身心ポロポロの状態でフランスについた。けどその時は体も傷だらけでとても動けなかった。その時偶々ある人の家の前にいた。それがシャルルの家だった。シャルルは明らかに怪しかった俺を家に入れて看病してくれたら。だけど俺はそんなシャルルすら怪しく感じた」

「ん？なんでそう感じたんだよ」

一夏は自分で吐き出したジュースを拭きながら聞いてくる。まあ常識で考えたらそう思うわな。」

「言つたろ。身心共にポロポロだったて、特にこつちがな。」

剣斗は胸に手を当てながら言う。一夏はそれで察したのか、それ以

上は何も言わないでいた。一夏のこんな優しさがとても嬉しかった。

「俺はシャルルの優しさすら畏としか感じられなかった。そしてある程度傷が治ったある日、俺はシャルルに刀で切りつけようとした。この影打じゃなく真剣でな、今考えてみても最低だよな俺は、命の恩人に対して刀を突きつけたからな」

剣斗の顔は今まで見せたことない程暗いものだった。それでも一夏は黙って話を聞いてくれていた。

「俺は直ぐに我に返ってシャルルから剣を離した。そしてまだ傷は癒えてなかったが、直ぐに家を出ようとした。だけどシャルルはそんな俺の手をとってあることを言ったんだ。何だと思う？」

「わからないな」

一夏は優しい目で答える。

……「そんな傷じゃまた直ぐ倒れちゃうよ。とにかく傷が治るまでうちにいなよ。大丈夫、お母さんから許可はとったから。」

「なんて言うんだぜ。シャルルも馬鹿だよな。自分が殺されそうになっていたのに他人の心配をしてんだぜ。そして俺は少しの間シャルルと暮らした。そして別れの日にある約束をしたんだ。」

「約束」

「ああ、シャルルはあの日凄く泣いてたんだ。丁度さっきの様なきつともう会うことは無いと思っただな。だから俺はシャルルに言ったんだ。今の俺は凄く弱い。けどいつか強くなって俺が強くな

つて戻ってくる。それまで待つてな。となどうだくさいだろ？」  
俺は笑いながら顔を上げる。

「？でもなんでシャルルは剣斗の事を知らないんだ」

一夏がもつともな事を聞いてくる。

「まあそれは仕方がないよ。俺はその時名前を言わなかったし、様子も今とは全然違かったぜ。多分一夏が見てもわからなかったぜ。」

「そうか」

「……………」

暫くの間沈黙が続いた。だが先に口を開いたのは剣斗だった。

「というわけなんだ。だから俺はシャルルを命を掛けて守る。いやシャルルだけじゃないこの目に映るすべての人を守りたいんだ。だから俺は必死で修行してこの影打を手に入れたんだ。」

一夏は依然黙つたままである。

「さて、お話は終りだ。もう帰ろうぜ。」

「なあ剣斗」

立ち上がった俺に一夏が声をかけてくる。

「なんだ？」

「話してくれてありがとな。俺はお前の話を聞いて本当によかったよ。」

「俺も話せてよかったよ。……あっそうだこの事はシャルルには内緒だぜ？」

「わかってるよ。さあ早く帰ろうぜ」

「ああ」

2人は立ち上がり教室を出ていく。

(俺は本当に恵まれてるよ。こんな素晴らしい親友がいるんだもん  
な。やっぱりこんな体になってもISに乗れるようになってよかった  
ぜ。そして絶対に守って見せる。一夏もシャルルも、この目に映る  
すべての人をこの影打とホープでな)

俺は影打とホープに手を当てながら改めてそう誓うのだった……

## 語られる真実と過去（後書き）

いかがでしたでしょうか。今回は剣斗とシャルルは過去にあったことになりました。でもまだシャルルは気づいていません。それと剣斗には体の事など色々謎な事が多いですが、いずれわかっていきます。温かく見守ってください。

ラウラの實力（前書き）

本日二つ目です

## ラウラの實力

「それにしても、この距離は何とかならないかな」

「そうか？こんぐらいの距離なら別に問題ないだろ」

俺達は今廊下を走っている。何でかって？簡単だよ。トイレに行くためだよ。ここES学園には以前まで男子が居なかったから男子の使えるトイレが学園内に3つしかない。毎回授業が終わったら中距離走である。まあもう慣れたけど……

「何故こんな所で教師など」

「まったたく……」

ふと話し声が聞こえて、俺達は身を隠す。一人は声からしてラウラだろう。そしてもう一人は声を聞かなくてもこの威圧感でわかる。千冬さんだ。

「私には私の役割がある。」

「このような所に何の役割があるんですか！」

あのラウラがここまで声を上げるのを初めて見た。そんなに千冬さんが好きなのか？

「お願いです、教官。再びドイツでご指導を！ここでは貴方がいる意味がありません」



「ほづ、何故だ？」

「ここにいる奴等は意識が甘過ぎます。ISをファッションと勘違いしている。そのような奴等に教えても意味など……」

「その辺にしとけよ、小娘」

「うっ……」

あゝあ千冬さん怒ってるよ。さすがのラウラも黙るしかないね。ありあ

「少し見ない間に偉くなったな。15歳でもう選ばれた人か。良いもんだな」

「私はただ……」

ラウラの事が震えてるのがこちらからでもわかる。きっと怖いのだろう。千冬さんに嫌われるのが

「さて、授業が始まるな。早く教室に戻りな」

ラウラは何も言わずに教室に戻る。そして千冬さんが振り返る。あつ、まずい。

「盗み聞きか？お前達」

ビクン！

俺達の体からは一気に嫌な汗がでる。

「まあいい。とつとと教室に戻れ。それでは月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。」

「トーナメント？そんなのあったか一夏」

「何言つてんだよお前。冗談だろ？」

「いやいや、本当に知らないって……」

「ばしーん！」

千冬さんから見事な出席簿アタックをもらう。尋常じゃない程の痛みが俺の脳を駆け巡る。あつ、でも今ので思い出した。そうだ月末に一週間かけてやる。学年別個人別トーナメントがあつたんだ。すっかり忘れてた。

「はい。今思い出しました。もう大丈夫です。それでは失礼します。行くぞ一夏」

「おつ……」

その後俺達は急いで教室に戻つが、途中で他の教師に捕まりお叱りを受けた。もうこんなのいやだなあ……

所変わって現在は放課後。俺達はこれから特訓をしようと廊下を歩いていた。シャルルもあれからは何事もなかったかの様にしている。俺にとつてはとても気になるところだが、シャルルがいいならいっ

か。

「なあ一夏、シャルル。今日は何処が使えるんだ？」

「ああそれはな……」

「第3アリーナだ」

「「わあっ!?!」」

「ぎゃー!」

不意に後ろから声がしたので俺達は声を上げる。

どうやら声の主は箒だった。箒は俺達の反応が気になったのか、眉をひそめながら一夏の横に行く。

(それにしても、箒は本当に一夏が好きだな)

これはあくまで俺の予想だが、箒は一夏に惚れてる。だって明らかに俺の時と反応が違うもん。俺の時は普通なのに、一夏だと時々頬を紅くするんだもん。箒だけではない。セシリアと鈴もそうである。鈴に至っては前に相談されたことがある位だ。いいなあ、一夏はもてて……

「……そんなに驚くか？失礼だぞ。特に剣斗はぎゃーとは何だぎゃーとは!」

「すまん。ちょっとビックリしただけだ。許せ」

「まあいい。それより早く第3アリーナに行くぞ。時間は有限なのだから」

確かにそうだ。時間は一秒だって無駄に出来ない。俺達がアリーナにつくと何やら慌ただし様子だった。

「何かあったのか？」

「こつちで先に様子を見てみよう」

シャルルは観客席のゲートを指差す。確かにそっちの方が早く様子が見れる。俺達は観客席へ向かう。

「何か模擬戦をしてるみたいだね。それにしても様子が……」

ドドーン！

「なんだ！？」

一夏が爆発のする方を見ながら叫ぶ。俺達もそれに沿って音のする方を見とそこにいたのは、

「鈴！セシリア！」

一夏は叫ぶがその声が届くことはない。観客席には他の生徒に被害が出ないように特殊なエネルギーフィールドが展開されるからだ。そして、鈴とセシリアの視線の先には奴がいた。

「ラウラ・ボーデビィット……」

ラウラはその身に漆黒のIS シュバルツエア・レ ゲンを纏って、専用機持ち相手に2対1で戦いを有利に運んでる。

「やばいなあのままじゃ……」

俺が言い切る前にラウラはワイヤーブレードで二人をラウラの元にたぐり寄せ、そこから一方的な暴虐が始まった。

「あああ！」

ラウラは抵抗も出来ない二人に拳をたたきつける。二人のシールドエネルギーはあっという間に減っていき、操縦者生命危険域に達する。このまま続ければ、ISは強制解除される。そうなれば命に関わる。

それでもラウラは攻撃を止めない。あまりの酷さに目を背ける生徒もいる。そしてラウラの口元は段々歪んでいく。

「ねえ、あれ以上はまずいよ剣斗。剣斗……」

シャルルは俺に話し掛けてきたが、その言葉が止まる。筈も同じだった。俺はこの時表情は変わっていないが異様な雰囲気を出していた。それは殺気にも似たようなものだった。

「ちょっとやりすぎだなあ、ラウラ。さ、て、と、……いくぜ一夏！」

「わかってる！」

一夏は白式を展開し、「零落白夜」を発動し、アリーナのバリアーを切り裂く。

「俺がラウラの気を引く。その間に一夏は二人を！」

「わかった！」

俺もホープを展開、同時にモード「雀」のライフルでラウラを狙い撃つ。

「また貴様か、神城剣斗…そんなにやられたいか？」

「俺も少し怒ってたんだ。悪いが時間稼ぎをさせてもらっよ」

「大丈夫か二人とも!？」

「う…一夏…」

「無様な姿を…お見せしましたね。」

「今は喋るな。とにかくここから離れるぞ。」

一夏は二人を抱えてシャルルの元へ行く。

「一夏!二人は!？」

シャルルは慌てて寄ってくる。

「シャルル、二人を頼む。俺は剣斗を援護する」

「わかった」

一夏は二人をシャルルに任せて振り替えるとそこには驚きの光景が

映る。

「うそだろ……」

一夏は開いた口が塞がらなかった……

「くっ、くっ」

ラウラは剣斗相手に有利に試合を運ばれていた。二人は距離を取って戦っているが、ラウラは一度も剣斗に攻撃を与えられていなかった。

「どうしたラウラ？早くやるんじゃないのか」

「今すぐやってやる！」

ラウラは叫びながらワイヤーブレードで剣斗を襲おうとするが、

「甘いよ」

剣斗はホープの二つ目の武器である日本刀「真打」でワイヤーブレードの先端部分を弾いていく。

「なら、これなばどうだ！」

ラウラは次にレールカノンで剣斗を撃つ。

ガキイン！

だがそれも剣斗は真打で弾き返す。そしてラウラにむけて「雀」を撃つ。それは確実にラウラのシールドエネルギーを減らしていた。

「とつとと、墜ちろー！」

ラウラは瞬時加速をして剣斗に近づく。それは一見無謀にも見えだが、

「やばい！」

ラウラは剣斗に近づくと、右手を俺に突きつける。すると俺の体がまるで見えない力で押さえつけてるかの様に動かなくなった。

「はあはあ…、やっと捕まえたぞ。神城剣斗」

ラウラはプラズマ手刀を展開する。

「死ねえ！」

ラウラが剣斗を切りつけようとした瞬間、俺達の間誰が割り入ってきた。

「やれやれ、お前達は問題しか起こさないのか？」

「千冬さん！？」

その人物は普段のスーツ姿でISの近接ブレードを持った千冬さんだった。まったくこの人は本当に人間か？



「模擬戦をするのは構わないが、アリーナのバリアーを破壊して黙認は出来んな。この決着は学年別トーナメントでつける。いいな？」

「教官がそうおっしゃるなら……」

ラウラは素直につなぎISを解除する。俺にもそんなぐらい素直になれよ……

「お前達もいいな？」

「はい……」

千冬さんはその言葉を聞いて、アリーナ内のすべての生徒に向けて言った。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！生徒は次々とアリーナを後にする。俺もISを解除しようとする。ラウラが近寄ってくる。

「神城剣斗」

「なんだ？」

俺は笑顔で答える。

「私はただ織村一夏を排除するだけだ。邪魔をするな……」

「だからってはいとは言えないな。」

「ふん、そうか」

ラウラもアリーナを後にしようとするが、振り向いてこう言った。  
「お前が邪魔をするなら、お前も排除する覚悟するんだな」

ラウラはそのままアリーナを後にする。

(さて、鈴達も心配だし俺も戻るか)

剣斗はいつものようにホープを解除するが、そこであることに気づく。

(あつ、俺今ISスーツじゃないから、酸素ボンベないじゃん)

気付いた時にはもう遅く、俺は激しい酸欠に襲われその場に倒れ込んだ。

(馬鹿だな俺も。それにしてもラウラのやつ可哀想な奴だな。何とかしないと……。それよりまず自分を何とかしないと……)

そこで剣斗の意識は飛んだ……

## ラウラの實力（後書き）

今回は急いでやったので雑になってしまいました。次からは気をつけます。

俺のパートナー（前書き）

今回は意外と長めです。

## 俺のパートナー

「あれ？ここは……」

「あつ、気が付いたんだ剣斗」

「俺は一体……」

現在の状況。俺はベッドで寝ている。そして隣には鈴、その奥にはセシリアがベットにいて周りには一夏、シャルル、箒がいる。

「全くシャルルに感謝しろよ」

一夏はお茶を渡してくれる。とりあえずお茶で喉を潤す。ふゝ、生き返るぜ。

「シャルルがお前が酸素ボンベを持ってないのに気づいて、直ぐに駆け寄って行ったんだぞ」

…そうだ思い出した。鈴とセシリアがラウラにやられてて、俺と一夏が飛び出して何とかなったんだが、酸素ボンベを持ってないのにISを解除したせいで倒れたんだ。本当情けない。

「そうだったのか。ありがとなシャルル」

「どういたしまして」

シャルルは笑顔で答えるのだが、（やばい、シャルルってやつは可愛い部類に入るよな……）シャルルが女の子、ましてやあの時の娘だと思つと妙にドキドキしてしまう。いかんいかん。他の奴に変な目で見られてしまう。落ち着くんだった俺……

「しかし何でラウラとバトルすることになったんだ？」

一息着いたところで、一夏が鈴とセシリアに疑問に思っていた事を訊いていた。

「ええと、それは……ええと、」

「なんと言いましょつか……女のプライドを侮辱されたからですわ」

「ふん……」

「ちよっと、一夏に剣斗！何よその興味ありませんみたいな反応」  
「やばい、ばれた。それにしても、女子は人の心を読むのが得意なのかな？コツがあるなら是非教えて欲しい。」

「そんなこと無いって」

一夏が必死に否定していると……

ドドドドドドッ！

「な。何だ？地震か？」

ドカーン！

「何っ！」

あるところか、保健室のドアが吹っ飛んだ。つか、どっちだったらドアが吹っ飛ぶの？

「織斑君！」

「デュノア君！」

「神城君！」

まるで冬の雪崩の様に女子生徒が保健室に入ってくる。たちまち保健室は女子生徒で一杯になる。そして一斉に手を伸ばしてくる。何これホラーゲーム？俺撃っちゃうよ？

「どうしたんだ一体？」

男子を代表して俺が聞く。あつ、でもシャルルは女子なんだ。まあ今はそんなことどうでもいいや。

「……これ見て！」

あつちもまた、女子代表の一人が紙を机に叩きつけた。

「どれどれ……………ふん。成る程ね。」

「何一人で納得してんだよ」

一夏が不満そうに俺に聞いてくる。わかったわかった。今から説明するから少し待てよ、お前もこのホラーの仲間か？

「どうやら月末にやる学年別トーナメントは、二人組のペアでやるらしい」

「……だから！」

また手が伸びてくる。もう本当に撃つよ。怖いから……

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「私と組みなさい、神城剣斗！」

おいっ、何で俺だけ命令形？俺だけには選択権が無いんですか？ん？待てよ。でもそれじゃあ……

「え、ええと……」

ああやっぱり、シャルルが困ってる。確かにシャルルが他の女の子と組んだらばれちゃうよな。シャルルが女の子なの……。

「あつ……」

シャルルがこっちを見てるのに気付く。俺の視線に気付いたシャルルは視線を床に向ける。きつとまた、迷惑はかけられないとでも思ったのだろう。全くこの娘は……でも俺もペアを組むならアイツと組まないといけないし……仕方がないここは一夏に一肌脱いでもらおう。

「悪いが、一夏はシャルルと組むことになってるし、俺も組む相手決めてんだ。ごめん」

「「えっ？」」

一夏とシャルルは状況が理解出来ず、頭を傾げる。俺はそんな二人に視線を送る。

（合わせる……）



二人はやつと状況が理解できたらしく話を合わせる。

「ああそうなんだ。俺はシャルルと組むんだ。なつシャルル？」

「う、うん。そうなんだ。だからごめんねみんな」

「くくえくく」

女子からのブーイングの嵐。そしてその矛先は俺に向けられる。

「織斑君とデュノア君は納得だけど、神城君は誰と組むの!？」

やっぱりそうなるのか……。覚悟はしていたが、ここからが勝負だ。

「誰だつていいだろ?とにかく無理なんだ。すまん」

「えくそんなの納得出来ない」

なかなか食い下がらない女子生徒達、ちつ、予想以上にしつこいなコイツ等。こうなったら使いたくなかったけど、あれを使うか。はあまた俺の株が下がるよ。

「しつげえんだよ。あんた等は」

「くく!!」「くく」

俺が低い声と冷えきつた視線を送ると、女子生徒達の肩が密かに震える。やっぱりこうなるんだ。本当に嫌になるな。でも諦めない君等が悪いんだよ。

「これ以上しつこいと……」

俺は刀に手を当てると一人の女子が、ひっ。と小さく悲鳴を上げて涙目になる。そんなに怖いか、俺が、流石にショックだな。まあこれだけ念を送れば大丈夫か。

「冗談だよ。安心しな、俺がこの刀で人を斬る事はないから。さっ、納得した人は他のパートナーを探してきな。」

流石にあの目をされた後に反抗する娘はいない様で、続々と保健室を後にする。そして保健室には最初のメンバーだけが残る。

「……………」

重苦し空気が保健室を漂っている。頼むから誰か喋ってくれ。

「そついえば剣斗は誰と組むんだ？」

一夏がナイスタイミングで俺に質問してくる。

「あーそれはな……、おっ、もう晩飯の時間か一夏、シャルル食堂に行こうぜ。たぶんそいつも食堂に居るだろうし、そこで誘うからな」

「了解。鈴とセシリアは……、無理そうだな。」

「そ、そんなことありませんわ！このぐらいの怪我どつて……」

……………痛っ！

「私も行くわよ。一夏……………ぐっ！」

やはり傷が痛むのだろう。二人は顔を歪める。アホかコイツらは無理したって意味ないだろ。

「誰がアホだつて(ですって)！」

また読まれた。もう此処に居るのやだな……さっさと行こう。

俺は一夏とシャルルの手をとって食堂に向かう。後ろから鈴とセシリアが何か言ってるが、それを無視して俺達は食堂へ向かった……

「ところで剣斗。その箱は何？」

俺達は今、食堂へ向かう廊下にいるのだが、シャルルが俺の手に持っている箱に疑問を抱く。

「これか？これは今回の交渉には欠かせないものさ」

俺達は食堂に着くとそれぞれの料理を頼む。因みに料理は一夏がフライ定食、シャルルがビーフシチュー、そして俺がカツカレー。本当ここの食堂は美味しいよな。どんだけ食べても飽きないぜ。

「なあそろそろ誰と組む気なのか教えるよ」  
席を探しながら一夏が聞いてくる。

「ああ、それはな……、おっいたいた、じゃ俺は交渉してくるから。……そつだ。お前達、特に一夏はこれから何があっても邪魔すんなよ」

俺は一夏達に念を押し、ある少女の元に行く。俺の目的の女子が誰かわかったらしい一夏は凄い目付きで俺を見る。おいおい、これは一夏の為なんだぜ。そんな顔をすんなよ。

その少女は何時ものように一人で食事をしていた。

「よう、ラウラ。元気してた？」

「…また貴様か」

ラウラは一瞬こっちを見てまた食事を再会する。因みにラウラが食べるのは、ホワイトソースがたっぷりかかったパスタである。これもつまそうだな。

「ラウラはさあ、学年別トーナメントがペアになったの知ってる？」

「当然だ」

「そうかそうか。それでペアは決めた？」

「その必要は無い。抽選で決まった奴と組む」

「ふん。じゃ俺と組まない？」

「何？」

ラウラは視線を再びこちらに向ける。そして盗み聞きしていたのであるう女子達も驚いた表情をしている。所々に「なんでボーデビィッヒさんと？」と言った言葉も聞こえてくる。

「ほらっ、俺だつて専用機持ちだしある程度は力に…（断る）」

ラウラは俺が全部言い終わる前に、俺の申し出を断った。

「何でだよ」

「お前みたいな雑魚と組もうが抽選で決まった奴と組もうが対して変わりはない」

ほお、そこまで言うか。まあ弱いのは否定しないし。ここまでは予想通りだ。さて、ここから頑張りますか。

「だけど俺から見れば、ラウラも対して強く無いと思うぞ」

「何だと？」

ラウラの鋭い眼光が光る。やっぱり怖いな。でもここで退くわけにはいかない……。俺は更に挑発する。だがそれはある意味自殺行為である。例えるなら地雷地帯をもつダッシュするようなものだ。なっ、馬鹿げてるだろ？

「それにお前そんな人を傷つけて楽しいか」

「ああ楽しいさ。弱い奴が私にひれ伏す様…これ以上楽しいものは無い。」

ラウラは冷血な笑みを見せる。その反応に周りの女子はみんな引いていた。

「その考えを持つてる時点でお前は弱いよ。人を傷つけるのが楽しいだあ。下らないなあ。そんなんでも人の上に立てると思ってるのか

？それは笑えるな。そんなんで人がひれ伏すと思ってるのか？」

「何だと貴様！」

ラウラは立ち上がって怒号を放つ。あともう一押しだ。

「だったらお前の言う力で、俺をひれ伏せて見ろよ」

「そんなにやられたいなら、やってやる！」

ラウラはそのままサバイバルナイフを取り出し、剣斗を以前の時の様に切りつけようとすする。

グシュ…

「き、貴様」

ラウラからは驚きの表情が読み取れる。そして周りからは、キヤーと言つ女子の悲鳴。うるさいなあ全く。

「剣斗お前何やってるんだよ！」

遠くで一夏が叫ぶ。それでも念を押したお陰か、邪魔をしてくない。念を押しといてよかったぜ。まあもし一夏が邪魔をしようとしても、思いっきりにらめ付ければ止まっただろうけど……。

「なんのつもりだ？」

「なんのつもりって、俺は唯ナイフを止めているだけだど」

そう俺は、ラウラが持っていたナイフを止めている。…まあそのやり方が良くないんだよな。俺はラウラが右手に持っていたナイフを

左手で握りしめている当たり前だがナイフの刃の部分……。当然俺の左手からは血が出ている。その血は俺の左手を伝ってラウラの Pasta に垂れる。「くっ、この」

ラウラはナイフを押し下したり引いたりするが、俺も思いっきりナイフを握っているため、ナイフは俺の手から抜けられない。その様子にラウラは苛立ちを覚える。

「どうしたラウラ？早く抜いてみるよ」

俺は握っていた手に更に力を込める。ナイフは俺の手に更に食い込んでいく。それに伴って、出てくる血の量も増えていき、いつしかラウラの Pasta は俺の血で真っ赤になっていた。

「なかなか俺をひれ伏せることができないな」

「その手を、離せ」

「何でだよ。楽しいんだろう？人を傷つけるのは」

「離せ……」

ラウラの声は微かに震えている。恐らく恐怖しているのだろう。ナイフを握りしめても表情一つ変えない俺に……

「俺とペアを組むなら、手を離すよ」

「誰が貴様なんかと……」

思ったより堅いな。早く何とかしたいのに、流石にこれは痛いよ。今にも泣き出しそうだよ俺……

「じゃ早くひれ伏せてみるよ。」

更に手に力を込める。流石にこれ以上は駄目だと思ったのか、シャルルが駆けつけようとする。

「わかった。貴様とペアを組む。だから手を離せ」

「わかった」

俺はあっさり手を離すと、ラウラに用紙とペンを渡す。

「じゃこれに名前を書いて」

ラウラはナイフをしまうと、すらすらと名前を書く。

「だが神城剣斗。私からも条件がある」

名前を書き終えたラウラがこちらに視線を向ける。

「私の邪魔をするなだろ？わかってるって」

「わかっていればいい」

「そうだ。新しいパスタ貰ってくるよ。流石にその血のパスタは食べないだろう？」

俺は立ち上がるがラウラがそれを止める。

「いや、いい。私はもう部屋に戻る」

「ん？そうかじゃまたな」



「……………」

ラウラは無言で食堂を出ていく。周りには沢山の野次馬がいたが、ラウラが立ち上がるとみんなは直ぐに道をあけた。「剣斗、左手大丈夫!？」

「お前ふざけてるのか!？」

一夏とシャルルはめっちゃくちゃ怒っていた。

「そんなに怒るなよ。それにこうなるのは予想通りだ。だからこの箱を持ってきた」

俺は一夏とシャルルを宥めながら、箱から消毒液と包帯を取り出す。

「それってもしかして……………」

「そう、救急箱」

俺は消毒液を左手全体にかける。すると、当然の如く激痛が体を駆け。あまりの痛さに俺は顔を机に叩き付ける。これはこれで痛い。

「大丈夫、剣斗?」

「ああ、何とか…。そうだ。シャルル、悪いけど包帯を巻いてくれないか?」えつ、何でシャルルに頼むんだって?別に俺にやましい気持ちはないよ。でも一夏に頼むよりも、上手そうなシャルルに頼むのが普通だろ。

「うん。いいよ」

シャルルは慣れた手つきで包帯を巻いていく。

「で、何でラウラと組んだんだよ？」

大変ご立腹な一夏さん。全く人の気も知らないで、

「何でって、これは一夏の為なんだぜ」

「俺の？」

「一夏にとっては予想外の言葉だったのだろう。本当にコイツは…」

「そうだよ。俺だって本当はシャルルと組みたかったさ」

「ふえっ！」

シャルルは何かに驚いたのか、包帯を床に落とす。

「どうかしたかシャルル？」

「ううん。何でもないよ。……はい、これでおしまい」

「おう、ありがとな。じゃ話を戻すぞ。ラウラはお前に相当な恨みを持っている。まあ検討はついてるが。…それでもし、学年別トーナメントでラウラと当たったらラウラはお前を完膚なきまでにボコボコするはずだ。そこで俺がラウラとペアを組んでそれを抑えるって訳だ。まあ言わば俺は、刀の鞘って所かな」

俺は淡々と説明するが、段々と一夏の顔がしぼんでいく。

「おい、どうしたんだ一夏？」

「いや、何かお前に腹が立ってた自分が恥ずかしくてな」

一夏はこうゆうのも一々気にするからな。まあそれが一夏の良いところなんだけど…

「まあ過ぎたことは置いて早く食べようぜ」

俺達はその後何も無かったかのように食事をした。

因みに：ラウラが残した、剣斗の血入り特性パスタは俺が美味しく頂きました。流石にこれにはみんな引いてました。でも案外美味しかったです。ほんのりとした鉄みたいな風味が…このぐらいにしよう。あんまり言い過ぎると俺は本当に変人扱いだ。

「すまんが一夏とシャルルは先に部屋に戻っていてくれ」

「え？」

現在俺達は食堂の前にいる。食事を終えた俺達は早速部屋に戻ろうとしたが、俺にはある用事があった。

「すまん。ちょっとホープについて山田先生に呼ばれてるんだ」  
「わかった。じゃ先に戻ってるぜ」

そう言って俺達は別れた。

（さてと、何とかラウラとペアを組めたな。後はアイツがトーナメントでやり過ぎない様にするだけだ。…それにしても、何で俺が呼ばれたんだろう？ホープについてって言ってたけど…。まっ、行けばわかるでしょ）

疑問に思った剣斗だったが、あまり気にせず早く部屋に戻りたかったので、走って職員室へ向かう。そして毎度のように先生に見つかり、お叱りを受けてから向かう剣斗だった…。

俺のパートナー（後書き）

どうだったでしょうか？ 何か最近シャル、ラウラ以外の出番が…  
…これからはきっちり増やしていきます！

疑いの目とシャルルの思い（前書き）

今回も会話が多目です

## 疑いの目とシャルルの思い

「失礼します」

現在の時間、午後の8時俺は山田先生に呼ばれて職員室に来ていた。それにしても、職員室はいくつになっても慣れないな。悪いことしてないのに悪いことをした気分になる。

「あら、神城君。どうしたの？」

俺達に数学を教えている、イタリアのフラン先生が俺に話しかけてくる。因みにこの人も山田先生と同じ元代表候補生だ。一度演習の相手をしてもらったが、三分も持たなかった。

「いや、山田先生に呼ばれたんですけど、山田先生の席はどこですか？」

「それならあそこの奥の席よ」

「わかりました。ありがとうございます」

俺はフラン先生にお礼を言って山田先生の元に行く。山田先生はこんな時間でも忙しそうに仕事をしている。

「あの〜、山田先生？」

「あっ、神城君。待ってました。さっ、こちらに座ってください」  
山田先生は俺に気付くと一端仕事を中断して、俺に座るよう椅子を出してくれた。俺が椅子に座ると山田先生はコーヒーを持ってきて

くれた。

「これどーぞ」

「ありがとうございます。それにしてもこんな時間まで仕事ですか？大変ですね」

「いえいえ。私こういう仕事好きですから」

他愛のない会話をしながら俺達はコーヒーを飲む。山田先生が入れたコーヒーは俺を気にしてか少し砂糖が多めに入っていた。俺も苦いのはあまり好きじゃないので、その甘さが丁度よかった。

「それで山田先生。何で俺が呼ばれたんですか」

ある程度コーヒーを飲んだ後、俺は本題に入る。

「あつ、そうでした。用というより、先生が神城君に聞きたい事があるんです。」

「聞きたいことですか？」

「はい。それはあなたとその事です。」

山田先生は俺の左手に付いてる待機状態のISを指差す。

「俺とホープについてですか？」

大体聞かれる事はわかっていたが、一応聞いてみた。

「率直に聞きますね神城君。あなたは何故ISに乗った後、酸欠になるんですか？」



予想的中である。山田先生は生徒想いだからいつかは聞かれるとは思っていた。

「神城君は入学した時私に体に問題があると言いましたね。それと関係があるんですか？」

「……………」

俺は何も答えない。それでも山田先生は続ける。

「しかもそれは日に日に悪くなっています。」

「それは俺の体力が無いからですよ」

俺も言い訳を試みるが、相手は元代表候補生だ。そんな嘘はすぐばれる。

「それはあり得ません。神城君の体力は最低でもこの学年ではトツプなんです。……………お願いします。先生に話してくれませんか？」

「……………」

それでも俺は黙秘を続ける。そんな状況が10分位続いて山田先生が立ち上がる。

「いくら私でも、これ以上は黙っていただけません。織斑先生に報告させてもらいます」

その言葉を聞いた時には、俺は山田先生の手を強く握っていた。

「神城君？」

「それだけは、勘弁してください。もしそんなことを織斑先生に報告されたら、俺はISに乗れなくなる」

「でもこれは神城君の為であって……」

「俺から力を取らないでくれ！」

俺はつい大声を出してしまう。周りの先生がこちらを見ている。山田先生が大丈夫です。気にしないで下さい。と言ってその場は乗りきれた。

「とりあえず落ち着いて下さい」

「はあはあ…、すみません」

俺と山田先生は再び椅子に座る。

「山田先生お願いします。俺から力を取らないでください。力を取られたら俺は守れなくなり。俺が俺じゃ無くなる。俺が此処に居る意味が無くなる……」

「でもそれじゃあ……」

俺の豹変ぶりにも驚いて、山田先生は心配そうな顔をする。

「大丈夫ですよ。ちゃんと医師にも見てもらってますし、俺だってこれ以上辛くなるのは嫌ですから、まだ酷くなるなら俺からちゃん

と報告します。」

「わかりました。でも約束してください。これ以上酷くなったら絶対に報告してください」

山田先生は俺に迫ってくる。ちよつ、先生近いです…その、胸が。山田先生のその大きな胸は男子にとってはIS以上に厄介な武器である。

「わつ、わかりましたから。その近いです」

山田先生は俺が何の事に対して（特に胸だか）言ってるのかわからしく、顔を真っ赤にして俺から離れる。

「すつ、すみません。あつ、もう部屋に戻ってくれて構いませんよ」

「わかりました。心配かけてすみません。それでは失礼しました」俺は山田先生に頭を下げ、自分の部屋に戻った。

（山田先生には悪いけど、俺はどんなに酷くなっても報告する気はありません。たとえこの体がボロボロになっても…。さてと、その事は置いて今日は明日のトーナメントに備えて早く寝よ）

「ただいま。一夏にシャル…ル？」

「け、剣斗？」

今俺の目の前には信じられない光景が写し出されていた。

シャルルは何故かコルセットと女性用の下着しか身につけておらず、四つんばいになっている。そして何故か一夏は気絶している。これ

は…もしや…

「失礼しました！」

俺は速攻で部屋から出る。するとシャルルが慌ててドアに行く。

「違うよ剣斗！誤解だよ！僕たちにやましいことはないよ！」

「ははは。大丈夫だよシャルルさん、僕は何も見てないよ。ははは……」

完璧に俺の口からは魂が出ていただろう。

「何を言ってるの剣斗！？とりあえず説明するからドアを開けて！」

「でもシャルル、着替えた？」

「あっ」

どうやらシャルルはまだ着替えて無かったらしい。もしあのままドアを開けてたら、大変なことになっただろう。

「着替え終わったらおしえてくれ。その間に俺も落ち着く」

「うん。わかった」

暫くしてやっと俺は部屋に入れた。俺はすぐにでも説明して欲しかったが、気絶してる一夏をほっとくわけにもいかず、一夏をベットに寝かしてから説明してもらうことにした。

「ええとね。じゃ説明するね。剣斗と別れた後、僕と一夏は部屋に

戻って着替えようとしたんだ。一夏は部屋から出て言っただけだ、それじゃあ、怪しまれちゃうからお互いに背を向けて着替えただ。そしたら着替えてる途中で僕がズボンに足を引っかけてちやっ転んじゃったんだ。そしたらあの体制になって、一夏もこっちを見てね。僕も恥ずかしくて悲鳴を上げそうになったんだ。それを一夏が止めようとしてもみ合ってる内に、その一夏に下着を下ろされて…、僕もつい一夏のアゴにかかるとを振り上げちゃって、それで一夏が気絶して何とか下着を上げたら剣斗が入ってきたんだ」

「ふうん」

俺は何とか状況が理解できた。成る程ねえ、そうか一夏がねえ。

「そうかそうか。わかった。そしたらやることは一つだな」

「なっ、何をするの？」

「決まってるだろ？まずは一夏をボコボコにする。完膚なきまでにな」

俺はすやすやと眠る一夏の前に立つと、影打を鞘から取り出す。

「わあ〜！駄目だよそんなことしちゃ！」

慌ててシャルルが止めに入る。

「離すんだシャルル！コイツは一回シバく！」

「僕は大丈夫だから。ね、だから一回座ってそれに剣斗に聞いて貰いたい事があるんだ」

「聞いて貰いたい事？」

俺は何とか気を落ち着かせ、シャルルの向かいの椅子に座る。

「うん。昔にあった人なんだけどね。話してもいいかな」

シャルルは上目遣いで聞いてくる。だからそれ止めて、俺に拒否権が無くなるから。

「別にいいぜ」

「ありがとう。えっとね、その人に会ったのは中学1年の時なんだ。その人は全身傷だらけで僕の家の前で倒れてたんだ。すごいでしょ」

「へえ〜。それはすごいな」

というよりそれ俺じゃん。全身傷だらけで家の前で倒れてたって、完璧に俺じゃん。でもやっぱりシャルルは気付いてないか…

「でね、最初は驚いたんだけど、あまりにも酷い怪我だったからつい家に入れて看病したんだ。今思うと、あんな怪しい人を何で家に入れたんだろうって思うよ。それである程度彼の傷が治った時にね彼は僕にあることをしたんだ。何かわかる？」

「いや、検討もつかないな」

嘘である。俺は答えを知っている。そいつは、いや俺はシャルルに最低な事をしたんだ。

「なんと彼は僕に刀を当ててきたんだ。最初は何が起きたかもわからなかった。勿論怖かった。だけどね、その時彼の目が見えてねその目はとても怯えてたんだ。彼は直ぐに僕から離れてまだ治りきつ

ていない体で家を出ようとしたんだ。そのまま見送ることも出来たんだけど、僕は何か彼をほおっておけなかったんだ。それで僕は彼に此処に居てって言ったんだけど、僕って変かな？」

シャルルは照れ笑いをしながら聞いてくる。

「変なんかじゃ無いよ。シャルルのしたことは立派だよ」

そうだ。シャルルがあの時俺を引き留めてくれたから今の俺があるんだ。もしあのまま家を出てたら、きっと俺はどっかで野垂れ死んでいただろう…

「えへへ、ありがとう。話を続けるね。その後暫く一緒に暮らしたんだけど、やっぱり彼も家を出る時が来たんだ。僕はその時もう会えないって思ってた泣きしてたんだ。そしたら彼がね、俺はいつか強くなって戻ってくるって言うてくれたんだ。僕はその言葉がとて嬉しかったんだ。きっと彼ならまた戻ってきてくれる。そう思ってた彼と別れたんだ。だけど、その1年後にお母さんが死んじゃって直ぐにデュノア社の人 came たんだ。最初は彼が戻ってくるからデュノア社に行くことは嫌がっていたんだけど、幾ら待っても彼は戻って来なかったんだ。それで僕は諦めてデュノア社に行ったんだ。でも普通に考えたら戻ってくるわけないのにね。でも僕は彼に戻って来て欲しかったんだ。その時凄く寂しかったから……」

「……」

俺は何も言えないでいた。確かにその頃俺は早く強くなるうと、剣術修行をしていた。だけど、よく一夏達と遊ぶことが多かった。シャルルは辛かったはずなのに…。俺はたちまち自分が許せなくなっていた。

「でも馬鹿だよ。彼はもうその約束だつて覚えてないだろうし…  
なのに僕は彼が戻ってくると思つて…待つててさ……」

シャルルは今にも泣き出しそうだった。その姿を見るのが、俺にはとても辛かった。すべて自分のせいであつたんだ。自分が弱いからシャルルは泣きそうなんだ。…だけど、

「それは違うぞ、シャルル」

「へ？」

「彼はきつとその約束を忘れてるわけがない、だけどまだ自分の力に自信が無いんだよ。だからそいつが戻ってくるまで、待つてやってくれ。そいつが強くなつて戻つてきても、シャルルが待つてなかつから意味無いからな。」

俺はシャルルに今自分出来る最高の笑顔を作る。

「うん。わかつた僕待つてるよ。だから今だけ……」

シャルルは俺の胸に顔を付けると一夏を起こさない様に必死で声を殺して泣いている。

（俺はシャルルをこんなにも悲しましてしまった。だけどあともう少し待つててくれ、きつといつかは……）

今はもうみんなはベッドの中にいる。しかし、彼女だけは起きていた。



「剣斗……」

彼女は不意に彼の名を呼ぶ。

（何で僕は剣斗に色々話しちゃったんだろう…。）

僕は人生は波乱だった。家の前に倒れていた彼、僕は彼に恋をしていたのかもしれない。だけどそんな彼とも別れて、母が亡くなった後は僕の人生は止まっていた。だから父に何を命じられても何も感じなかった。勿論日本に行くことも…、だけど目の前の彼に会って僕の人生は再び動き出した。

（本当に剣斗は彼に似てるな）

シャルルはベッドから出ると、剣斗の元に行く。

「ありがとう剣斗。君のおかげで僕の、うっん、私の人生はまた動き出したんだ」

そんなことなど知らない剣斗は毛布を剥がして寝ていた。

「全くもつ…」

シャルルはまるで、母が子にするように優しく毛布を剣斗に掛ける。

「おやすみ、剣斗…」

そしてシャルルは恥ずかしそうに剣斗の額にキスをした…。

## 疑いの目とシャルルの思い（後書き）

次回は苦手な戦闘です。戦闘はもっと長く書けるよう頑張ります。

楽しい学年別トーナメントの開幕…(前書き)

本日二つ目です。

## 楽しい学年別トーナメントの開幕…

「それにしても、すごいな…」

一夏の言葉につられて俺も観客席を見る。よく見るとそこには世界各国のお偉いさんがいる。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認に人が来てるからね。一年にはあまり関係ないけどトーナメント上位入賞者には早速チエックが入ると思うよ」

「ふ〜ん。ご苦労なこつた」

一夏はあまり興味が無いようだ。どうせ一夏の頭の中はあいつの事で一杯なのだろう。

「一夏はラウラの事で頭が一杯だな」

「まあな。それに鈴とセシリアも悔しいだろうし」

そう。鈴とセシリアは今回の学年別トーナメントには参加できないらしい。どうやらISの損傷が酷かったらしい。あいつ等は代表候補生なのにトーナメントに出れないから、あいつ等の評価はが落ちたろう。

「ラウラは絶対俺が…」

一夏は自分の手を強く握りしめていたが、シャルルが自分の手を重ね、その拳をほぐす。

「感情的になっちゃ駄目だよ。彼女は一年では最強のはずだから」  
「ああ、わかってる」

「さて、お二人さん。そろそろ対戦表が出ますよ」

俺は一夏とシャルルに手招きをしてモニターの前に行く。

「早く戦いたいな」

「剣斗はさつきから、そればっかだね」

「だってこんな風にみんなと戦える機会何てそうそう無いぜ。なあ  
一夏」

「そうだな。お、対戦相手が決まったぞ」

モニターにトーナメント表が映し出される。だがその組み合わせに俺達は口を開けてしまった。

「……え?」「」

一回戦は、俺・ラウラ対一夏・シャルルとなっている。

「ごめん。待ったかラウラ?」

「……」

俺は今アリーナ内で一夏とシャルルがいる反対側で、自分のパートナーであるラウラに話しかけていた。

「なあーラウラ。お前は一夏を潰したいんだよな？」

「そうだ」

「じゃあ。俺がシャルルの相手をするから、その間にラウラは一夏を倒しといてね」

「言われなくてもそうするつもりだ」

そう言い放ちながら、ラウラはシュバルツエア・レ　ゲンを装着する。そして俺もホープを装着して、アリーナの中央に向かう。

「一戦目で当たるとは。待つ手間が省けた」

「そりゃよかったな。俺も同じ気持ちだぜ」

試合開始までカウントダウンが始まる。

5、4、3、2、1

「叩きのめす」

お、ハモった。なんだコイツら仲良いじゃん。試合開始と同時に一夏は瞬時加速でラウラに切りかかる。

「おおおー！」

「ふんっ」

ラウラは右手を突き出す。すると以前俺がやられたように、一夏の動きが止まる。

「あれがA I Cか」

鈴とセシリアから聞いた話では、A I Cは慣性停止能力の略らしい。あれをやられるとI SのP I Cが止められるらしい。それによって体が動かなくなるのだ。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだな」

「では私が何をするかわかるだろう」

そんなの誰にでもわかる。ラウラはそのままレールカノンの砲口を一夏に向ける。だが一夏に焦りの色は無い。何故なら……

「させないよ」

シャルルが一夏の頭上を越え、六一口径アサルトカノン「ガルド」でラウラを撃つ。

「ちっ！」

シャルルの射撃に流石のラウラも後退せざるを得なかった。シャルルが更に左手にアサルトライフルを呼び出す。シャルルの左手に光の粒子が集まり、一秒もかからず銃を呼び出す。

これがシャルルの得意なラピッド・スイッチ「高速切替」である。これによりシャルルは時間を掛けずに武器を呼び出すことができる。これがあるので、シャルルの専用機であるラファール・リバイブ・カスタム2には20もの武器がある。

それによって呼び出した武器で続けてラウラを狙撃する。

「おいおい、俺を忘れるなよ」

俺は対して早くないスピードでシャルルに接近してビームライフルをモード「燕」で撃つ。

「勿論忘れてないよ。」

「じゃ、暫くお付き合い願おうか」

俺はシャルルを狙撃して、一夏とラウラから引き離す。

「成る程、僕と一夏を引き離す作戦ね。だけど、剣斗に僕が止められる?」

「さあな。でも最初っから全力でいくぜ!」

俺はシャルルとの距離をなくすと、ホープの近接ブレード「真打」でシャルルを斬る。

「くっ!」

だがシャルルは直ぐ様武器をしまい、近接ブレード「ブレット・スライサー」で俺の攻撃を受け止める。

「まさかいきなり刀を抜くなんて、本気だね」

「まあな。でないとシャルルは止められないし。あとねシャルル…  
…これ以上近接戦を持ち込むのはよくないよ」



俺は真打でシャルルを一気に切りつける。いくらシャルルでも俺の斬撃を防ぎきれないようだ。

「まさかここまでとはね……。じゃあ距離を取らしてもらおうよ」

シャルルは俺から距離を取るため、後退しようとするが、俺がシャルルの右手を掴みそれを許さない。

「えっ!?!」

「おいおい、つれないなもう少し付き合えよ」

シャルルの片手を塞いだ俺は更に斬撃を加える。

(これならいける!)

俺がそう思った時、シャルルの口が笑ってるのが見えた。

「わざわざ、射程にいてくれるなんて、剣斗は優しいね」

バシユン!

シャルルの盾の装甲が弾け、中からリボルバーと杭が融合した装備が姿を現す。あれは資料で見たことがある。ラファール・リバイブには単純な攻撃力なら第二世代型最強とうたわれる武器があると。それは六九口径パイルバンカー「灰色の鱗殻」通称……

シールドピアス「盾殺し」!

「ぐわあ！」

俺はとつさにシールドでガードしようとするが、そこは盾殺しと言われるだけの事はある。シールドは簡単に碎けて俺はアリーナの端まで飛ばされる。

「悪いね剣斗。少しそこで寝ててね」

笑顔で言うシャルルだが、その笑顔が今まで一番怖いです…。

「神城君、やっぱりやられちゃいましたね」

教師だけが入れる観察室で、真耶と千冬は戦闘映像を見ながら率直な感想を述べている。

「当たり前だ。神城とシャルルでは技術の差が開きすぎてる。だが神城はまだ戦闘不能になった訳では無いからこれからどうなるかはわからんぞ」

二人はモニターを見ながらも一人の生徒に注目する。

「強いですね。ボーデビッツヒさん」

「ふん」

関心してる真耶に対して千冬はつまらなそうにモニターを見ている。

「全くあいつは、力ばかりを求めおつて…」

千冬はこの試合はラウラが負けるだろうと思いつつも静かにモニターを見ていた。

「どうした。貴様の實力もその程度か？」

「まだだー！」

強がる一夏だが、その表情に余裕は無い。ラウラはプラズマ手刀と四本のワイヤーブレードで確実に一夏を追い込んでいた。一夏も雪片式型一本でよく凌いでいるがそろそろ限界だった。

「では、そろそろ終わりにしよう」

ラウラは右手を突き出す。すると一夏の動きは完全に止まる。

「しまった！」

「ふふふ、終りだ死ねえ！」

ガン！ガン！

プラズマ手刀が一夏に届く前に銃弾がラウラと一夏の間を割って入る。

「お待たせ一夏！」

シャルルはラウラと一夏の間に入りラウラを牽制する。

「シャルル、助かったぜ。剣斗は？」

「あつちでダウン中、まだ完全に倒してないけど」

一夏が剣斗の方を見ると、アリーナの端で全く動かない剣斗がいた。

「ふん。雑魚が」

だがラウラはパートナーがやられても表情一つ変えない。所詮剣斗はラウラにとってパートナーではないのだ。

「てめえ、だったらこれで決めてやる！」

零落白夜を発動し、一夏はラウラに突進する。その後ろからマシンガンを呼び出したシャルルも参戦する。

「いくらこようが、貴様等に負けるわけがなかるう！」

ラウラは一気に四本のワイヤーブレードで一夏とシャルルを襲う。

「甘いぜ（よ）！」

一夏とシャルルは二手に分かれて左右からラウラに攻撃を仕掛ける。

「小癩な」

一夏とシャルルは決してラウラに近づかず、ラウラの回りをまわりながら攻撃をする。攻撃といっても、シャルルの射撃だけがそれでも確実にラウラのシールドエネルギーを減らしていた。

「ええい！邪魔だ！」

痺れを切らしたラウラは、シャルルの射撃を無視して一夏に攻撃を仕掛ける。

「一夏！くっ」

直ぐにフォローに行こうとするシャルルだが、ワイヤーブレードがそれを許さない。

「シャルル！」

「人の心配をしてる暇があるのか！」

ラウラは両手のプラズマ手刀で一気に入夏を切るつける。

「ぐわあ！」

一夏はかなりのダメージを受け、床に倒れる。

「はあはあ…、これで私の勝ちだ！」

高らかに勝利宣言をするラウラだったが、それをオレンジ色の物体が邪魔をする。

「まだ終わってないよ」

「貴様…まだ居たのか!？」

「酷いな。忘れないでよ」

「…だが私の停止結界の前ではむりよくっ!？」

シャルルは瞬時加速を使ってラウラに突撃する。

「何故貴様が瞬時加速を!？」

「一夏達がやってるのを見て覚えたんだ。それにこの距離ならAIは使えないよ。そしてこれを当てられる!」

シャルルは先程から出してあったシールドピアスをラウラに突きつける。

「!!!!!!」

ラウラにもシールドピアスの威力は知っていたのだろう。ラウラの表情からは余裕が消える…。

「これで決める!」

ガギーン!!

アリーナ内に鈍い金属音が響く。しかしそれは、シールドピアスがシュバルツェア・レゲンに当たった音では無かった。

「だから、俺を忘れるなって!」

「け、剣斗!？」

「貴様いつの間に!」

剣斗はまだ痛む腹を押さえながら、ラウラを後ろに下げる。だが二人の表情は驚きで一杯だった。

「まさかシールドピアスまで防ぐ何てその刀スゴいね」

そうである。剣斗はシールドピアスが当たる前にラウラの側に行く  
と、そのまま真打でシールドピアスの軌道をずらしたのだ。

「そうだろ、すごいだろう。この刀はある意味最硬の刀だよ」

「確かにその硬さは羨ましいね」

二人は戦いの最中だが楽しそうに会話をしていた。

「ふざけるな…」

「ラウラ？」

ラウラは後ろで何かを言い始めた。

「ふざけるな！ふざけるな！ふざけるな！私がこの私が負けるわけ  
…」

「負けてたよあのまんまだったら…」

「そんなことはない。私は、私は…、！！ああああ！！」

突然ラウラは今まで聞いたことがない声を上げる。すると、シュバ  
ルツェア・レ　ゲンがどんどん変形していった。

「なんだよ、あれ…」

「俺が知るかよ…」

シュバルツェア・レ　ゲンだったものはラウラを包み込みながら、  
地面に降り立つ。そして変形し終わったシュバルツェア・レ　ゲン

はまるで少女の様な姿をしており、その手にはある武器が握られていた。

「雪片…」

一夏は微かに声を振り絞る。確かにあいつが持つてるのは雪片に似ている。いやまるで本物みたいだ。

「「!!」」

刹那黒いISは俺達の間の懐に入ってくる。そのまま居合いの構えから横薙ぎに刀を振るう。

「「ぐっ!!」」

「「剣斗（一夏）!!」」

この状況が心配だったのだろう。幕はピットから、シャルルも反対側から駆け寄ってくる。

「いてて、あいつやるな」

ホープは殆んどエネルギーを削られていたが、何とかまだ装着されてる。しかし一夏の白式はエネルギーが付きたのか、待機状態に戻っていた。

「一夏!ここは一旦引くぞ!」

「……がどうした」



「一夏に俺の声は届いていない。」

「それがどうしたあ!」

何と一夏は生身で黒いISに向かおうとする。何とか箒が一夏を止めた。

「何をしている!馬鹿者!」

「うるせえ!あいつ、ふざけやがって!」

「おいどうしたんだ一夏!?!」

「あれは千冬姉のものだ!なのにあいつ…、ふざけてる!」

「お前は本当に千冬さん千冬さんだな」

俺は呆れ顔で言う。

「それだけじゃねえ!あんな力に振り回されてるラウラもきにくわねえんだよ!」

「だからって、白式のエネルギーはないんだぞ」

「でも…でも…」

箒に痛いところを突かれ何も言えない一夏。仕方がない今回はシャルルに人肌脱いでもらうか。

「だったらいつちよやってみるか?一夏」

「は？」

一夏は意外そうな顔をしている。

「シャルルならエネルギーを移せるんだ。だから頼むシャルル」

「うん。任せて」

シャルルは俺達の前に向かって来る。

「けど！」

「ん？」

シャルルは指を指してくる。

「約束して、絶対負けない。そして無事に帰ってきて」

「「勿論だ！」」

「よし。じゃ始めるね。……エネルギー流出を許可する……一夏、白式を一極限定にして。それで零落白夜はつかえるから」

「わかった」

一夏は白式を呼び出す、ラファールにもあまりエネルギーが無かったのだろう。白式は右腕と武器が限界だった。

「ありがとなシャルル。これだけあれば充分だ」

「それじゃあ行くぜ。一夏」

「おう。(い、一夏!) ?なんだ筈」

筈は急に一夏を呼ぶ。その目は真っ直ぐ一夏を見ていた。

「死ぬな……。絶対に」

「何をしてんだよ。ばか」

「ばかとはなんだ!ばかと(信じる)…え?」

「俺を信じる筈。心配も祈りも俺には要らない。ただ待っててくれればいい。」

「一夏…」

おうおう、いい雰囲気だなあいつ等は、全く何をやってるんだが…  
「そろそろ行くよ」

俺は一夏の肩にてを置く。

「ああわかつてる」

一夏は雪片式型を、俺は真打を手に持ち黒いISの前に立つ。

「「いくぜ!偽物やろう!」」

俺と一夏は同時に切りかかる。だがそこは千冬さんそっくりなだけはある。俺達はなかなか一撃を当てられない。

「このままじゃ、エネルギーが…」

「もう限界かい？織斑君」

「へっ、まさか！」

更に俺達は激しく切りかかる。流石の黒いISもこれは防ぎ切れな  
いと思っただのか、空高く逃げる。

「くそ！あの野郎！」

「一夏最後は俺が決める！だから、雪片式型を貸せ！」

「でもそれじゃあ…」

「今のお前じゃ飛べないだろ！お前の分も決めてくる！だから！」

「あー、もうわかったよ！頼んだぞ剣斗！」

俺は右手に真打、左手に雪片式型を持ち、空に居る黒いISに切り  
かかる。

やつは居合いの構えから横薙ぎで俺を迎え撃つ。その一撃は正に必  
殺である。だがそれに心はない！

「ラウラ、お前もいい加減目を…」

俺は真打で雪片を弾き黒いISを崩す。

「さませー！」

俺は真打と雪片式型で十文字に切り裂く。

ガ、ガ、ギ…

黒いISから電流が走り、十文字に割れる。そして中からラウラが現れる。

「あっ…」

一瞬だけ目が会った。眼帯が外れた金色の左目と…その目には涙が溢れる。まるで助けを求めているようだった。

「全く世話が焼けるな」

俺はラウラを優しく抱き締めた。だがそこで問題が起こる。

「なっ、ここに来て限界かよ！」

ホープのエネルギーはここで尽きて待機状態に戻ってしまう。

「うわあ〜!!」

俺とラウラは地上に落ちていく。

(はあはあ…このままじゃ二人とも落ちちゃう。その前にこの酸欠を何とかしないと)

剣斗は慌ててポケットから酸素ボンベを取り出そうとする。

ゴハアツ!

今まで酸欠だけだったはずの症状が、遂に吐血までするようになった。さらに最悪な事に吐血した時に間違っって酸素ボンベを落と

してしまった。

「あーもう駄目だね。これは死ぬしかないじゃん。」

下で一夏達が何か言ってるがそれすら聞こえない。

「ただとお前だけは死なせねえよ。お前はまだ生きる「希望」を見てないんだから」

俺は更にラウラを強く抱きしめる。こんなんで何とかなるとかなると思えないが、今はこれに懸けるしかなか

「ちつくしょう。せめてラウラだけでも助けないと…」

その声に力は無い。だが彼はその左手につけられたブレスレットを見て閃く。

(もうこれに賭けるしかねえ！)

俺は左手につけられたブレスレット。つまり待機状態のホープを取り外すと、それをラウラに握らせた。

(頼むホープ！あと一回だけ根性見せてくれ。それでラウラを助けてくれ)

ホープは俺の想いに答えてくれた。エネルギーはないはずなのにホープはラウラに装着する。これで絶対防御があるのでラウラが死ぬことはない。あくまでラウラだけだが…

「ありがとなホープ。最後の最後に俺に答えてくれて…。ラウラ、お前とはもつと話したかったな。まあもし俺が生きてたら、もつと

沢山……」

ドォーン……！

すべてを言い終える前に俺とラウラはアリーナの中央に落下した…

…

## 楽しい学年別トーナメントの開幕…（後書き）

今回は原作を参考にし過ぎました。すみません。次回で原作二巻が終了です。これが終わったら少しの間オリジナルの話を書きます。お手本が無いので、どうなるかわかりませんが、楽しみにしてください。



二人の新たなスタート（前書き）

これで原作二巻が終了です。

## 二人の新たなスタート

「ここは…森？」

何故か俺は森にいる。ここが何処かはわからないが、妙に心が落ち着く。

「さうと。どうするか？」

とりあえず俺は近くにあった木に座る。

「何か俺、忘れてないか？」

俺は必死で思い出そうとするが思い出せない。自分はさっきまで何をしていたのかを…。

「まっ、いいや。ここは気に入ったから、暫く此処にいよう」

そう思い、俺は瞳を閉じて一眠りしようとする。

「駄目だよ。君は此処に居ちゃ」

「？」

何処からか少女の音がする。俺は起き上がり周りを見渡すが、少女の姿は何処にも無い。

「君には帰る場所があるんだから」

「！」

また少女の音がする。俺には何が起こってるのかさっぱりだった。  
「ほら、こつちだよ。君の帰る場所は」

後ろから声がして、振り返ろうとした時には俺は少女に手を引つ張られていた。その少女の顔は見えないが、俺はこの少女を知っている気がした。

「君はみんなに見してあげないと駄目なんだ」

「…何をだ？」

「それはね…」

少女は走りながらも、こつち言った。

「希望だよ」

「ん？確かここは…」

「剣斗！気がついたんだね！」

「あれ？シャルル？」

「もう！心配したんだよ！」

シャルルはそう言うなり、俺に抱きついてくる。おい！それはまずいよ！俺達まだ男同士なんだから。ほら、一夏以外の女子の視線が痛いよ。

「シャルル。ちょっと落ち着けっ！痛っ！」

「ごめん剣斗！痛かった？」

シャルルは俺から離れると心配そうに見つめてくる。いやいや、こ  
うなったのシャルルが抱きついたからだよ？

「そういえば俺って何してたんだ？」

「お前覚えてないのか？」

「あんまり。ここは…保健室だよな」

「当たり前でしょ。アンタ何いつてんの？」

鈴が俺の言葉に冷たく返す。どうやら俺は今保健室にいるらしい。

そして周りにはいつもの専用機持ち（筈は除く）のみなさんがいる。

「お前、俺と一緒に暴走したラウラを止めようとして、お前が空中  
でラウラを助けたんだが、そのままホープのエネルギーが尽きて落  
ちたんだよ」

一夏は優しく説明してくれる。そうだ。思い出した。俺はラウラと  
空中から落ちて、俺は何とかラウラにホープを装着させたんだ。

「おい！それじゃあラウラはどうなった！ラウラは…ぐっ！」

直ぐに起き上がろうとする俺だが、想像以上に体のダメージは大き  
く。激痛がはしる。

「落ち着いて剣斗。ボーデビィツヒさんなら隣のベッドで寝てるか  
ら」

俺はシャルルが指差す方を見る。そこではラウラがすやすや眠っていた。

「ラウラに怪我は？」

「それなら心配ないよ。軽い筋肉痛とかはあるけど、それ以外は軽傷だってさ」

シャルルの言葉を聞いて、安堵の息を漏らす。

「そうか。そりゃよかった」

「良いものか」

！！！！

俺達は一斉に声のする方を向く。

「織斑先生……」

丁度千冬さんが保健室に入ってきた。その瞬間、保健室の空気はガラリと変わり。俺達は何も喋らなくなる。

「全くお前は無茶をしおって」

千冬さんは困り果てた顔をしている。面目ない。ん？でも待てよ……  
「織斑先生、何で俺は生きてるんですか？生身で落ちたんですよ？」

確かに俺はあの時生身のまま落ちたはず。普通だったら死んでるはずだ。

「お前達はISに助けられたんだ」

「ホープにですか？」

「そうだ。あの時お前のISはエネルギーは尽きていたはずだが、何故かラウラに展開され、地面に落ちる瞬間にPICが作動したんだ」

「へーそうなんですか」

「どうやら俺はホープに助けられたらしい。コイツには頭が上がりないな。」

「それよりお前、吐血したけど今は大丈夫なのか？」

「一夏が急に訊いてくる。それは多分みんなが思っていた事だろう。」

「ああ、あれは一時的なものだから今は大丈夫さ」

「いやでもよ。吐血するなんてただ事じゃ無いぜ」

「まあな。でも大丈夫。今度ちゃんとした医師に診てもらおうからな」

「そうか、ならいいけど。じゃ俺達は帰るぜ」

もうすでに時間も時間も会ったため、一夏達は保健室から出ていく。いつの間にか保健室には、俺とラウラと千冬さんしかいない。

「あの、織斑先生」

「何だ神城？あと今は千冬さんでいい」

「わかりました千冬さん。それであのラウラの黒いISはなんだったんですか？」

「はあ…」

千冬さんはやはりなと言いたげな顔をしている。でもこれは聞かなくちゃいけない。ラウラの為にも。

「一応機密事項なんだが…まあいい。お前はVTシステムを知ってるか？」

「いえ。知りません」

「やはりな…。VTシステム。正式名称はバルキリー・トレース・システムだ。過去の世界大会の部門入賞者の動きをトレースするシステムだが、それは現在IS条約でどの国家・組織・企業においても、研究・開発・使用が禁止されている。それがラウラのISに積まれていた」

「成る程。でも何でVTシステムは条約で禁止されてるのですか？一見すごいシステムに感じますが…」

千冬さんはやれやれと言いながらラウラを見る。

「VTシステムは操縦者への負担が大きすぎるんだ。それにそんなものを全員が使ったら、そこから進歩しなくなるぞ」

それもそうである。努力もせず力が手に入ったら、人は努力をしなくなる。そしたら人はそれ以上強くなれない。

「まあとりあえず私から言えるのはそこまでだ。私も仕事があるから戻るぞ」

千冬さんもこの事件で仕事が増えたのだろう。千冬さんは保健室から出ようとしますが、出る前にこちらを振り返る。

「そつだ神城。ラウラの事頼んだぞ」

「え？何ですか？」

千冬さんはニヤリと笑って見せる。

「見せてやるのだろうか？」「希望」を

「なっ!？」

俺は耳まで真っ赤にする。千冬さんはそれを見て大笑いしながら保健室を出ていく。やっぱりこの人には敵わないな…。

「VTシステムか…」

「!?!。ラウラ、起きてたのか？」

「ああ、さつきな」

ラウラは起き上がりこちらを見ている。俺も体が痛んだが、無理をして体を起こす。

「私が力を求めたからあんなことに……」

ラウラの顔からは後悔している事がよくわかる。



「そんなに自分を責めるなよ。力を求めるのは、悪いことじゃ無いよ」

「すまない神城」

ラウラはこちらを見てはいないが、何故か謝ってきた。俺には何でラウラが謝ってるのかわからない。

「何でラウラが謝るんだよ。それに神城なんてよそよそしいから剣斗でいいよ」

「：私はお前に迷惑を掛けすぎた。それにお前を傷つけ、今回なんて下手したらお前が死んでいたかもしれない」

「そんなの気にすんなよ。今回だって別に俺は死ななかつたんだから」

俺にとっては自分の事よりラウラが無事の方が大事だからな。

「そうか。…なあ剣斗」

ラウラは急に俺の方を見てくる。その顔は随分疲れていた。

「なんだ？」

「出来れば、私の過去を聞いてくれないか」  
「えっ、またか」

前日にもシャルルから聞かれていたので、つい本音が出てしまった。

しまったと思った時にはもう遅く、ラウラの顔はどんどん沈んでいく。

「そうか：嫌だったかすまなかつたな」

「ま、待て。嫌じゃないぞ。是非聞かせてくれ」

俺は必死で自分の言葉を否定する。ラウラの顔が少しずつ明るくなる。

「そうかよかった。じゃ聞いてくれ。まず私の名前であるラウラ・ボーデビッツはあくまでも識別上の記号だ。一番最初につけられた記号は、遺伝子強化試験体C - 三七。人工子宮から作られ、鉄の子宮から生まれた。ただ戦う為だけに作られ、生まれ、鍛えられた」

「マジかよ」

遺伝子強化試験体なんてテレビの中だけだと思っていた。でもその試験体は今俺の目の前にいる。ただ戦う為だけに。

「私は闘いに関しての様々な知識を教えられた。私は優秀だった。性能面において、最高レベルを記録し続けた。だがISが現れてそれは変わった」

無理もない。ISは世界最強の武器だ。いくら今まで優秀でも、ISの前では無力だ。

「その適正向上の為に行われた処置「ボードン・オージェ」によって異変が生まれた」

ラウラは左目の目に手を当てながら話していく。

「これはな剣斗。疑似ハイパーセンサーとも呼ばれて、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、肉眼へのナノマシン移植処理のことだ。そして、その処理をした目を「越幕の瞳」と呼ぶ。だがな、この処理によって私の左目は金色へと変質し、常に稼働状態のままカットできなくなってしまう、制御不能になった。この事により私は他の者から後れを取ることになった。トップから転落した私を待っていたのは、部隊員からの嘲笑と侮蔑、そして出来損ないの烙印だった」

「……………」

俺は静かにラウラの話聞いてるようだったが、実際は怒りで何も言えなかっただけだった。そんなことも知らずラウラは話を続ける。

「だがそんな私にも光が見えた。それが教官との出会いだった。教官の教えを忠実に実行することで、私は再びトップに立った。そして私はあの人に憧れた。その強さ、凛々しさに。だがそんな教官も織斑一夏の話をする時は、ただの人だった。私はそんな表情をさせるアイツが許せなかった。だから私は織斑一夏を排除しようとした。……まあ話はここまでだ。長くなってすまなかったな」

この話でやっとラウラの事がわかった。成る程、こんな事があれば、あんな冷たくなるし、千冬さんに憧れるわけだ。だがそんなことよりも…

「ム力つくな」

「剣斗？」

「なんだよドイツの人達は！遺伝子強化試験体だと？人の命を何だと思ってるんだ。越界の瞳だってそうだよ。本当にドイツはふざけてる！」

ラウラは最初は驚いた表情をしていたが、直ぐに穏やかになる。

「お前は本当に優しいな。だが私みたいに望まれない命など、どうなってもいいのだよ」

「ラウラ……」

俺はベッドから起き上がると、ラウラの座り、

ペチン。

デコピンをした。

「お前は望まれない命なんかじゃねえよ」

「だがな剣斗。私には親と呼べるものはいない。こんな体じゃ人間なのかも分からない。そんな私の命など、望まれてるわけが……」

ペチン！

またデコピンをする。今度は思いつきり。流石にこれは俺の指も痛い。そしてラウラはあまりの痛さに涙目になっている。

「痛っ！何をするのだ!？」

「もう一回言うぞ。お前は望まれない命なんかじゃ無い。だいたいそれは自分が決めることじゃない。他人が決めることだ」

「他人が？」

「そうだ。他人がそいつと話していて、楽しいなあーとか、もっと一緒にいたいとか思っていたら、それはもう望まれた命だ」

「ふっ」

ラウラは小さく笑って見せる。

「それだったら私は望まれない命だよ。私はみんなから嫌われていく。みんなが私を恐れてる。みんな（そんなことはねえよ） えっ？」

俺はラウラの言葉を遮ると、ラウラの頭を優しく撫でる。

「確かにみんなはお前の事を嫌って、恐れてるかもしれない。けど俺はラウラと話していて楽しかったし、もっと仲良くなりたいと思っただよ。それだけでお前は望まれた命だよ」

「剣斗……」

「それにみんなだって、これから仲良くしていけばいいんだよ」

我ながらナイスアイデアだ。まあ当然なのだが。

「だが私には、それすらどうすればいいかわからない」

あっそうか。ラウラはこんな経験も無いのか。これは以外と大変だな。

「簡単だよ。明日のHRでみんなに謝ればいいんだよ。そうすればわかってくれるよ。みんな良い奴ばかりだからな」

「そうか。なら早速明日やってみるか」

するとラウラは今から練習してるのか、何かぶつぶつ言い始めた。顔を赤くして言ってる姿は何故か可愛らしく見えた。これなら大丈夫だろう。いざとなれば、明日俺がフォローすればいいしな。

「じゃ俺も部屋に戻るよ」

俺は立ち上がろうとするが、体が痛み直ぐにふらついてしまう。

「おい。無理をする必要は無いだろう」

ラウラは俺の身を心配してくれてる。なんか嬉しいな。

「いや、やっぱり部屋に戻るよ。やることもあるしな」

「そうか。で、では……」

ラウラは何かもじもじしながら何かを言ようとしてる。何か欲しいのか？

「また明日な。バイバイ」

「!!!!」

ラウラは顔を真っ赤にしながら、上目遣いで小さく手を振ってる。その姿はあまりにも可愛すぎた。今俺の心拍数はかなりの数値を出

しているだろう。

「おう。また明日な。…バイバイ」

俺も小さく手を振り、保健室を後にした。

保健室に一人になっていたラウラは、いつの間にか笑顔になっていた。

「剣斗……」

アイツは一体何者なのだろう。最初は唯鬱陶しいだけだったのに、今はアイツと一緒に居たいと思う。だからさつきも、部屋に戻って欲しくなかった…。

「初めて…頭を撫でられた」

ラウラにとってそれは、初めて味わった人間の温もりだった。

「私もこれから変わる。剣斗と一緒に居るために」

沈んでいく夕日に強く誓うラウラであった…

「ただいま。あれ？一夏？」

夕方俺は保健室から戻ってきたが、部屋には一夏はいないでシャルルだけがいる。

「一夏はお風呂に行ったよ。何か今日から使えるみたい」

「えっ、じゃ俺も直ぐに行かなくちゃ！」

俺は早速風呂に入る準備をする。俺も日本人なので風呂は好きだ。だがIS学園には男子が少ないので、普段は大浴場が使えないのだ。一応部屋にもシャワーがあるが所詮はシャワー、風呂には到底及ばない。

「ねえ剣斗」

「なんだシャルル？」

俺は今にも大浴場に向かおうとしたがシャルルに止められる。早く行きたいのに……

「ちよつと此処に座って」

「でも俺今から大浴（座って）……いや、だからこれから大浴（座って）……はい」

俺はシャルルにいわれるがままに椅子に座るとシャルルは俺の肩を強く掴んでくる。

「あの、シャルル？」

「なんであんな無茶するの？」

「え？」

それは意外な言葉だった。シャルルは更に手に力を入れる。

「あんな無茶して死んだらどうするの！約束したじゃん。無事で帰



ってくるって」

「いや、だからこうして無事に…」

「そのどこが無事なの！剣斗はわかってないよ。あの時は偶々ホープが展開されたけど、普通だったらあのまま落ちてたよ」

それは否定出来ないな。あの時は本当に運がよかった。

「だけどあのままだとラウラがな…」

「何でそんなボーデビッツさんの肩を持つのか？彼女は剣斗を傷つけたんだよ。そんな娘助けたって」

「なあどうしたんだよシャルル」

明らかにシャルルの様子がおかしかった。

「だって、彼に続いて剣斗まで戻ってこないと思うと僕は、僕は…」  
またこれか。シャルルがこんなにも心配してくれてるのは嬉しいけどな。

「なあシャルル。お前にとってボーデビッツとはどうなってもいいのか？」

「いや、それは…」

答えに戸惑うシャルル。辺りをキョロキョロし出す。そんなことしたって答えは無いぞ。

「シャルルは本当に優しいな。お前はどんな奴でも平等に接して、平等に優しくできるんだもんな。俺にはとてもできないよ。」

俺は肩を掴んでいたシャルルの手をとり、そっと握りしめる。

「それに俺は何処にも行かないよ。その彼が力を付けて戻って来るまで」

「本当？」

シャルルは得意の上目遣いで聞いてくる。だから、それは反則だろ。

「ああ本当だよ」

「わかった。じゃお風呂行ってきて良いよ」

シャルルは笑顔で言う。それは最初のとは違い優しい笑顔だったな。

「あとね剣斗」

俺はドアノブに手を付けたところでまた呼び止められる。そろそろ俺も風呂行きたいのに…

「僕ね。自分に正直に生きようと思うんだ。」

「自分に正直に？」

「うん。それは剣斗が居たからだよ。剣斗が色々僕に教えてくれたんだ」

「俺何か教えたか？」

「色々教えてくれたよ。剣斗は僕に」

俺には何一つ思い当たるものは無いが、それがシャルルの助けになったと思うと嬉しい。

「まあ、それならいいか。じゃ行ってくるよ」

「うん。いつてらっしゃい」

俺はシャルルに見送られて大浴場に向かった。大浴場は想像以上に広く。俺と一夏でも充分楽しめた。その後部屋に戻った俺達は他愛もない会話をして眠りについた。

翌日。朝のHRにシャルルの姿がなかった。シャルルは先に行つててと言うので先に行つたが、未だ教室にいない。何かあったのか？

「みなさん、おはようございます…」

教室に入ってきた山田先生は何故かふらついている。そんなに仕事が大変だったのか？でも仕事好きって言ってたもんな。

「神城君、一夏君。何を考えてるか知りませんが、先生を馬鹿にする、先生も怒りますよ。はあ…」

山田先生はため息をつく、ため息つくくと幸せ逃げますよ。

「今日ですね。みなさんに…転校生を紹介します。でもすでに紹介はすんでるんですが…ええと…」

山田先生、何を言ってるんですか？日本語を下さいよ。でも何？転校生！？

クラスのみんなも転校生の言葉に反応して騒ぎ出す。それにしてもまた転校生か？

「じゃ、どうぞ」

「失礼します」

あれ？この声は…

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願います」

スカート姿のシャルロットが礼をする。俺達、いやクラス全員がポカンとしている。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。……はああ、また仕事が増えていきます」

山田先生ご愁傷様です。でも待てよ？

「え？デュノア君って女の子？」

「やっぱりね！美少年じゃなくて美少女だったのね」

「でも待って！神城君と一夏君は同室だから知らないことないよね！？」

「しかも昨日つて、大浴場は男子だったよね!？」

女子達が一気に騒ぎ出す。でも待て、俺達は風呂は一緒に入ってないぞ。でもこれはまずい。本能がそう告げている。

バシーン!

教室のドアが何か空気みたいなものに当たって吹っ飛ぶ。まさかこれはい!?

「一夏あ!!!」

俺の予想は見事に的中し、IS「甲龍」を装着した鈴が教室に入ってくる。

「死ねえ!!!!!」

そして勢いそのままに衝撃砲を一夏に放つ。…でも待てよ。一夏を狙ったつてことは後ろに座る俺も……

「「ぎゃー!!!!」」

俺と一夏はとにかく叫ぶしかなかった。そして時が遅く感じる。そうか。これが走馬灯か。まさか死ぬ前に見れるなんて……。っておい!走馬灯を見るって事は俺死ぬじゃん。あゝあ。せつかく昨日運よく生き延びたのにな……  
ズドドドン!!!!

「はあはあ……」

怒りのあまりに軽い酸欠を起こしている鈴。その怒れる姿は龍にも見えるし、毛を逆立てた猫にも見えるって……あれ？俺達…生きてる？何で？WHY？

「大丈夫か？一夏、剣斗」

「「ラウラ！」」

俺達には今ラウラが天使に見えていた。

ラウラは「シュバルツェア・レ　ゲン」を展開して、お得意のAICで衝撃砲を相殺してくれたのだらう。でもいつもの大型レールカノンがない。

「助かったぜラウラ。それよりお前のISもう直ったのか？早いな」  
「コアは辛うじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

俺達に簡単に説明を済ますと、みんなの方を向く。おっ早速昨日言ったことをやるのか。

「その…みんな。今まですまなかった。これからは反省して変わっていく…、だからその…ええと…」

ラウラはその次の言葉がなかなか言い出せずにいる。山田先生もどろろするか戸惑っている。まあラウラにしては頑張った方が、よし今回は俺が人肌脱ごう。

俺はラウラの元に行くと、その手を優しく握る。

「剣斗？」

ラウラの顔はリンゴ位に顔が真っ赤になっている。可愛らしいなコ

イツは。

「大丈夫だよラウラ。自信を持って。恥ずかしいことなんて無いよ」  
俺はラウラに笑って見せる。ラウラは一度深呼吸をすると意を決して言葉を言う。

「だから、私と仲良くして欲しい…」

「………」

俺以外のクラスの全員が黙り込んでしまった。その反応にラウラは戸惑う。

「や、やはり駄目か」

ラウラは顔を下に向ける。

「……かつ」

「……か？」

「……可愛いー！……！」

俺が転入してきた時と同じ様に、高い声を出す。相変わらずづづるやいな。

「可愛いー。ラウラさん可愛いー！」

「顔を赤くしちゃって、可愛いー！」

「まるで妹みたい！」

「えっえっ？」

ラウラは女子の反応に戸惑っていた。だがその表情はどことなく嬉しそうだっただ。

「よかったな、ラウラ。これからは仲良くしよう……むぐっ!？」  
ラウラに握手をしようとした俺はラウラにぐいっと胸ぐらを捕まれ、そのまま強引に唇を奪われた。勿論ファーストキスだ。

「神城剣斗！お前は今から私の嫁になった！これは決定事項だ！異論は認めん！」

「はい？つうかなんで嫁？婿じゃないの？」

「日本では気に入った相手を嫁にすると聞いた。だから、お前は私の嫁だいいいな！」

いや、いいなと言われても……。はっ！

刹那俺と一夏は背後に異様な殺気を感じる。だが振り向くことは出来ないな。振り返ったら最後、後はどうなるかわからない。

「一夏！」

「おっ！」

一夏は前から、俺は後ろのドアから逃走を試みる。どうやら一夏には箒、セシリア、鈴が追ってるらしい。アイツは墜ちたな。さらばだ一夏。お前の犠牲は無駄にしない！



フニユ。

「ん？」

勝利を確信した俺だったが、誰かに当たった。俺は機械のようにゆつくりと顔を上げる。

「……」

シャルロットがいた。

「にこっ」

「に、にかっ」

ああ、今日もシャルロットの笑顔は明るいな。その笑顔につられて俺も笑顔を返す。俺笑ってるかな。

「剣斗って他の女の子の前でキスしちゃうんだ。僕、びっくりしたよ」

「あのねシャルロットさん？僕はしたんじゃない、されたんだ。だから、それを仕舞いなさい。僕死んじゃうよ？」

シャルロットは今ISを展開して、シールドピアスを俺の腹に当ててくる。

「大丈夫だよ。ISを展開する時間はあげるよ。そしたら大丈夫だよね？」

大丈夫なはずが無いのだが、シャルロットの目は本気なので一応ホープを展開する。

「は、はは、ははは……」

俺はもう笑っししか無くなる。そして本日二回目の走馬灯を見ることになる。

ドガアアアンッ！

俺は一気に廊下の端まで飛ばされる。

「ふんっ！」

シャルロットはISを解除して教室に戻っていく。

(いてて。まったくシャルロットは容赦無いな。まっそれでも、ラウラは友達ができそうだし、シャルロットも、また昔の様にシャルロットって呼べるし……。ああ、そろそろ教室に戻らないと……)

教室に戻るためにホープを解除するが、また酸欠&吐血を起こして倒れる剣斗だった……。

## 二人の新たなスタート（後書き）

いかがでしたか？次からはオリジナルの話です。大間かなあらずじを話すと、シャルロットがフランスの人に連れていかれそうになり。それを阻止するために剣斗が頑張ります！是非楽しみにしてください！

忍び寄る影と病（前書き）

一日空いての投稿です。

## 忍び寄る影と病

「うーん。まさか吐血までするなんてな……」

目の前の男性は、あごを擦りながら唸り声を上げる。

俺は今、学園の診察室にいる。だがその相手はいつもの保健室の先生では無い。

「どうにかありませんか？バルバさん」

今俺の診察をしているのは、アンドリユー・バルバ。俺の専属医師兼ホープの専用整備士である。

「無理を言うな。こんなの今の医療じゃ意味がない」

「ですよね……」

最近の俺の症状は日に日に悪くなる一方だった。以前までは酸欠だけだったのにそれに吐血までし始めたのだ。流石にみんなも心配しだし、とうとう千冬さんに医師に診てもらってこいと言われてしまった。俺も好きでこうなったわけじゃ無いのに……

「まあ。お前がISに乗らなければそれで済むんだがな」

「それは絶対できません。それだったら死んだ方がましです」

そうだ。ここで力を失うわけにはいかないんだ。力を失ったらシャルロットに自分の事も話せないしな。

「それはわかっているが、でもこれからもISに乗り続けたら次はどうなるかわからんぞ」

さっきまでの笑顔は何処へやら、バルバさんの目が鋭くなる。

「それは自分が一番わかっていることです。……それじゃあ俺も腹減ったので朝飯食べてきます」

「あつちよつと待て剣斗」

食堂へ向かおうとする俺をバルバさんが止める。何？まだ言うことあるの？俺これでも腹減って死にそうなんだけど。

「お前から頼まれた新武器もうできたぞ。既にインストールしてあるから今日から使ってみな」

「流石バルバさん。仕事が早いですね」

俺は茶化す様に言うがそれもそのはずだ。バルバさんはISを造った天才、篠ノ之束が唯一助手と認めた位だからな。寧ろそれならもつと早く造れよ。

「わかりました。早速今日から使ってデータを送ります」

俺は丁寧に礼をすると、急ぎ足で食堂向かった。

（次はどうなるかわからないか……。さてさてどうなるか楽しみだな……）

「あつ剣斗。こっちだよ」  
俺が食堂に入ると、シャルロットがこっちに手を振ってくる。どうやら俺の席を取っといってくれたらしい。それは有難い。今日は遅く来たので知らない女子と食べるのも覚悟していたからな。

「あれラウラ？何でお前だけ食べてないんだ」

俺はシャルロットとラウラの間で座ると他のみんなは食べ始めているのに、ラウラは一口も食べてない。  
おいおい、食べ残すのは良くないぞ。せっかく作ってもらったんだから。

「ふ、夫婦なのだから一緒に食事を取るのは当たり前だろう」  
「それでも冷めたら美味しくないだろ」

「……私は剣斗と一緒に食べたかったのだが、迷惑か？」

「いや、そんな事は無いけど……まあいいや早く食べようぜ」

「うむ」

因みに今日のメニューが俺が秋刀魚の塩焼定食、シャルロットはカルボナーラ、そしてラウラは前に俺が血まみれのを食べたホワイトパスタである。

相変わらずどれも美味しそうなのだが、ラウラのは冷えているので少し勿体ない。よし。ここは

「なあラウラ。まだ手付けてないなら、交換しようぜ。やっぱり冷めたのは美味しくないし」

「だがそれでは、お前が冷めたのを食う事になるぞ」

「俺はいいんだよ。ほら、俺の席を取つといてくれたじゃん。そのお礼だよ」

ラウラは最初は躊躇していたが、シャルロットも交換したらと言われ、お互いのトレイを変えた。

「それにしても、やっとちゃんとしたホワイトパスタが食べれるぜ」

「ちゃんとした？それはどういう意味だ？」

「まずい。また本音が、」

「そっかあんたは知らないのよね」

鈴がチャーハンを食べながら会話に入ってくる。勿論一夏、箒、セシリアもいる。というよりは一夏がいるから箒達がいると言った方が正しいだろう。それより頼むから鈴は余計な事を言うなよ。

「あんたが剣斗とペアを組むのを決めたとき。血だらけのパスタがあったでしょ。あんたはそのまま帰ったけど、剣斗は勿体ないとか言っただけだよ」

またこいつは余計な事を。俺が目で訴え、鈴もやっと気づくがもう遅く、ラウラは顔を下に向けていた。

「そっか。私はあの時お前を傷つけただけではなく、不味いご飯を食べさせていたんだな……」



まずい！なんとかフォローしなくては。俺が悪い訳じゃ無いのに。  
「気にするなよラウラ。あれはあれで美味しかったぞ！」

「そうだこいつは変だから、あれでも美味しいんだ」

俺のフォローに援護してくる一夏。

「そうだぞラウラ。こいつはゲテ物が好きなんだから気にするな」  
続いて等。

「そうですねラウラさん。剣斗さんは血を好む様な人ですから、気にしないでよろしくてよ」

更にセシリア。

「そうよこんな変人の事なんか気にしないで良いのよ」

最後に鈴。何だろう。みんなが援護する度に俺の心が痛むような……。って何でみんな俺を変人扱い！？そりゃ確かに俺は血だらけの Pasta を美味しそうに食べてたよ。でもそれは個人の好みでしょ。

「みんな。次は剣斗を傷つけてるよ」

「……あつ」「……」

シャルロットは直ぐに俺をかばってくれる。本当に優しいなこの娘は……。

「相変わらず騒がしいな、お前達は」

!!!

「織斑先生。いらしたんですか？」

俺は恐る恐る話しかける。

「私が居て何か迷惑？」

「いえ。大歓迎です。」

俺は首を大きく横に振りながら言う。千冬さんは俺のその様子が面白かったのか、小さく笑っている。

「まあいい。それよりデュノア。今日はお前に用がある。会議室に  
来い」

「えっ、僕ですか？何故ですか」

千冬さんは他の人に聞こえないように、シャルロットに耳打ちしようとしている。俺は席が隣なので、耳に澄まして声を聞こえとす。

「フランスからお前に用があると言って来ている」

「「!!!」」

そんな馬鹿な。何故もうフランスの人が来ているんだ。幾らなんでも早すぎる。俺の聞き間違えか。

俺は自分の聞き間違いだと思ったが、シャルロットの表情を見てやっぱり聞き間違いでは無いことがわかった。

「……と言っわけだ。今から会議室に来てもらう。いいな」

「はい」

シャルロットは何か立ち上がるが、その顔は真っ青である。

「シャルロット!」

俺はとっさに立ち上がり、シャルロットの肩を掴んでいた。

「ど、どうしたの剣斗?」

「えっ?ええと...」

まさか聞いてた何て言えないしな。

俺が言葉に迷っていると、シャルロットはそっと微笑み返してくれた。

「大丈夫だよ。すぐ戻ってくるから」

他の人から見れば、その時のシャルロットの笑顔は正に天使の様な輝く笑顔だが、事情を知ってる俺からしたらその笑顔は無理に輝かそうとしている様に見える。

「あ、ああ」

「じゃ行ってくるね」

「いつてらっしやい」

シャルロットが千冬さんに連れられて食堂から出ていくと、俺は一夏の手を取り出し走り出す。

「おい。どうしたんだよ？」

俺の異様な慌てぶりに同様する一夏。そして俺が一夏を連れ出した事で第達も後をついてくる。

「どうやら。フランスからシャルロットに用があるんだつてよ」

「何だつて!?!」

ようやく事の重大さに気づく一夏。

「でも何でこんな早く。まだシャルロットが女子としてこの学園に来てから一週間だぞ!?!」

「俺に聞くなそんなもん」

だが一夏の言うことは正しかった。幾らなんでもフランス政府の人が来るには早すぎる。精々一ヶ月は掛かるものだ。それなのに何故？

「ここか。シャルロットが入った会議室は」

「それよりどうなってるか説明しろ!?!」

俺達より少し遅れた第達が聞いてくる。

「どうやらフランスからシャルロットを連れだそうと、学園に来たらしい。だから話を聞いてみる」

「でもどうやって聞くのだ？会議室の防音対策は完璧だぞ」

ラウラが的確に問題点を指摘してくる。

「それなら大丈夫だ。さつきシャルロットに盗聴器を付けた。妨害電波も効かない優れたものだ」

そう説明しながら俺はポケットからイヤホンを取り出し耳に付ける。みんなも会話が気になるのか、みんなが耳を俺の耳に近づける。その時イヤホンから声が聞こえた。

「君がシャルロット・デュノアかい？」

イヤホンから男性の声が聞こえてくる。

「はい」

「私はフランスから来た。カルラと言います。そしてこの娘は私の専属のボディガードであるフランと言います。勿論IS操縦者です」

どうやら中には千冬さんとシャルロット以外の二人いるらしい。だがまだ状況がわからない。

「その二人が一体僕に何のようですか？」

「僕ね……。どうやら本当に性別を偽っていたらしいですね……」  
「！！！！」

やっぱりこの男はシャルロットが性別を偽っていたのを知ってるらしい。つまり用件は……

「単刀直入に言います。あなたをフランスに連行させてもらいます」

「！！……何故ですか？」

シャルロットの声は明らかに同様していた。

「知ってるくせに白々しい。所詮は愛人の子供って事か？」

俺は更に驚いた。何故シャルロットが愛人の子供って事を知ってるんだ。幾らなんでも不自然だ。だがそれよりも、ここままほっとくわけにはいかない。

ガシッ！

俺は立ち上がるうとしたが、ラウラにその手を捕まれる。

「何をやる気だ？」

「決まってる。今から中にいる奴をぶん殴る！」

「落ち着け。今お前が行ったら事態は悪化するだけだ」

「くっ」

俺は何も言い返せなかった。

「とにかく座れ。まずは話を聞くぞ」

「ああ、わかったよ」

とりあえず俺はその場に座り込む。シャルロットが愛人の子供だということを知らない、箒達は動揺していた。だが今はそんなことに気を使ってる暇は無い。

俺は再びイヤホンの音に耳を澄ます。

「愛人の子は関係無いですよ。それも政府の調査で知ったんですか」

「おやおや、デュノアさんは何か勘違いしている。私は政府のものでは無いですよ」

「!?!?!」

ますます状況がわからなくなっていく。何故政府の人じゃない人がシャルロットを連行する必要がある？

「私の目的はねシャルロットさん。あなたを材料にすることですよ」

「材料……ですか？」

「そうです。どうやらフランス政府はあなたが性別を偽っていたこととは知らない。だから私はあなたを使ってフランス政府とデュノア社からお金を頂くというわけです」

「そんなことをしても無駄ですよ。僕が性別を偽っていたことを知ったら政府は直ぐに僕を牢屋にいますよ」

「そうですか、それは残念です。ですがデュノア社はそうはいかないでしょうね。デュノア社はこの事がばれたら確実に倒産ですからね。いくらでもお金を払ってくれるでしょう」

男性の言うことはムカつくがその考えは正しいだろう。デュノア社は唯でさえ経営が上手くいってない。そんな時にデュノア社のテストパイロットが性別を偽った、しかも社長の愛人の子だとわかったら、確実にデュノア社は倒産するしかない。そしてその事を隠した

いデュノア社はいくらでもお金を払うだろう……。

「人を使って金稼ぎ何て、最低ですね」

「最低はどっちですか。愛人の子供で性別を偽るなんて。あなたの方が人間として最低ですよ。所詮は愛人の子か……」

「僕は最低かもしれない……。でもお母さんを馬鹿にするのは許さない！」

「ふん。所詮は愛人だろ。そんなのは人間のクズだよ。人間のクズの子はクズなんだから、利用されるだけましだろ」

「……そんな」

その言葉を聞いた瞬間。俺の中で何かが弾け、俺は直ぐに立ち上がった。

「待て剣斗！だからお前が行っても状況が悪くなるだけだ」

「うっせんだよ……」

俺は自分を止めようとしたラウラの手を振りほどき、一気にドアノブに手を当てる。

「おい！今すぐドアを開けろ！中にいる奴に話がある！」

「剣斗！？」

俺は何回もドアを押ししたり引いたりするが、鍵掛かっっていてなかなか開かない。



「無駄だ。そのドアは特殊な構造でできていて、大人が何回押しても決して開くことはない。開けるにはISを使わないと無理だが」

「ISを使ったら条約違反ですよ」

中から声がする。きっとカルラだろう。

「さあわかったら、さっさと教室に戻りなさい」

「……」

俺はドアに背中を向けて歩き出す。少し歩くと、ドアの方を向く。

「シャルロット、ドアの前にいるならどいてな」

「え？」

俺は盗聴器を通してシャルロットに警告すると、影打を鞘から抜き出す。そのまま弓を射るときの様に刀を引き、姿勢を低くする。

俺が居合いの次に得意な剣術。俺が覚えた剣術の中で最高の突進力を持つ突き。その構えをする。

「そんな扉で俺を止められると思ったか？ だったら一つ忠告してやる」

俺は一気に扉に向かって走り出す。

「そんなんじゃない、俺は、影打は、止められないんだよー!!」

そして、影打をドアノブに突き出す。

バギイイーン！！

扉は勢いよく吹っ飛び、目の前の男に向かっていく。しかしその男に焦りの表情は無い。

ガンツ！

とっさにISを部分展開した。女性がドアを弾く。

俺はその時初めてカルラとフランの姿を見た。

カルラは見た感じは二十代後半といった感じで、金髪を肩まで伸ばしてる。身長は俺より少し高く、メガネから見える目は人を見下してるのがよくわかる。

それに対してフランという人は、歳は俺等とそうかわらないだろう。彼女も金髪だがその髪はラウラのように腰のあたりまで伸ばしてある。身長は俺より拳一つ分低いようだが、その割には体が細すぎた。か弱い印象もあるぐらいだ。

「確か君は、神城剣斗君だよな」

「ああ、そうだよ」

「そんな君が何の用かな？」

カルラは椅子に座りながら俺に聞いてくる。本当なら今すぐにも斬りかかりたいが、そこを抑えて質問に答える。

「シャルロットが連行されるなんて納得いかない。だから来た。」

「ほう。そうですか。ですが私はちゃんと学園の許可を得たんです

よ」

「!？」

俺はカルラの言葉が信じられなかった。学園がこんな目的でシャルロットを連行するのを許可するわけがないはずだからだ。だがカルラはその俺の表情を見て笑っている。

「どうせ。学園にとっても彼女の様なクズは要らないでしょ。まあ私には学園が許可さえしてくれれば良いですが」

シャルロットは今にも崩れ落ちそうになっている。無理もない。あれだけクズ呼ばわりされたら大抵こうなる。シャルロットは望んでこうなった訳ではないのに……。だったら俺のやることは一つだ。

「だったら勝負しろ」

「勝負ですか？」

カルラは意外そうな顔をしている。

「そうだ。今から三日後、俺とこのフランがISで勝負する。俺が勝ったら、あんたには二度とシャルロットに関わらないでもらう」「ではフランが勝ったら？」

「その時は世界で二番目の男子IS操縦者として好きにしろ。そして俺のISであるホープもやる。これで文句ないだろう」

「……」

シャルロットだけではない。カルラも呆気に取られていた。だが直

ぐにカルラは笑い出す。

「ハハハ！それは良いですね。是非やりましょう。ですが宜しいのですか？フランはこう見えて、イタリアの次期代表の最有力候補ですよ。あなたに勝ち目は無いと思いますよが」

カルラは自信満々に言ってくる。その態度が妙にムカついた。

「そんなの関係ねえよ。相手が誰だろうと勝つのは俺だからな」

「わかりました。では三日後を楽しみにしています。何たってその日には私は沢山の金を得るための最高の材料を得るのですからね！」

そう言いながらカルラは会議室を出ていく。フランはその後をついていく。二人が去った後の会議室は閑散としていた。

「全くお前はまた面倒な事を……」

ここにきてやっと千冬さんが口を開いた。だが今はそんな事はどうでもよかった。

「織斑先生。本当に学園は許可したんですか？」

俺が一番気になったのはそこだった。もしそれが本当なら、きっと俺は今から学園長を斬りに行くだろう。

「それは私にもわからん……。だがしかしお前は本当に勝負する気か？」

「当たり前ですよ。勝負して勝ち、シャルロットを守ります」

「だがフランはお前より確実に強いぞ。お前が奴に勝つのは殆ど無理だぞ」

「……………」

俺は無言で唯千冬さんの目を見続ける。それで俺の決意を悟ったのか、千冬さんは深いため息をつく。

「もういい。やりたいならやるがいい。だが今日はもう教室に戻れないな？」

「わかりました。ありがとうございます織斑先生」

俺は影打を鞘に納めると、シャルロットの元へ歩み寄る。

「ごめん剣斗。僕のせいで、僕のせいで……………」

シャルロットは酷く自分を責めていた。そんな姿を見たくなかった俺はシャルロットの手をとり、無言で教室に向かった。

会議室から出るとき、一夏達とすれ違ったがそれすら無視して教室に向かった。

「……………」

二人の間に会話は全く無かったが、それでも剣斗の頭の中には三日後の事で一杯だった。

（正直フランに勝てる自信は無い。けど諦めるわけにはいかない。この体もそう長くは持たないんだ。だったら三日後の勝負にすべてを掛ける。そして必ずシャルロットを守って見せる！！）

剣斗は決意を胸に教室に向かう。……それでも彼の限界は刻一刻と迫っていた。

## 忍び寄る影と病（後書き）

いかがですか？やっぱりなかなか上手く書けませんね。何とか頑張らないと。

それと問題がもう一つ。最初に出てきた新武器ですが、まだ全くできていません。これはまずい。早急に考えなければ……。

とりあえずこの様な感じでオリジナルの話は続きます。何か指摘があれば言ってください。それを参考により良い作品にしたいと思います。

## 力の代償（前書き）

また1日置いての投稿…というよりは今後はこのペースで更新する予定です。



## 力の代償

「「「……」」」

現在俺達は授業も終えて、食堂で夕食を食べている。だが誰一人喋るうとしない。今日は朝からずっとこんな感じである。朝の出来事から俺達は一言も話していなかった。授業にもまったく身が入らず、千冬さんに出席簿で何回も叩かれたが、それでも全くの上の空で千冬さんも困った様子だった。クラスのみんなも俺達の異常さに驚いていたが、下手に話しかけることは無かった。

「…ねえ剣斗」

「なんだ」

意外にもこの静寂の均衡を破ったのはシャルロットだった。

「本当に三日後フランさんと勝負する気？」

「俺はそのつもりだ」

「……その勝負。止めてくれない？」

シャルロットの言葉はあまりにも意外で、俺は一旦箸を止めた。

「第一剣斗はどうしていつもそうやって頼んでもないのに人助けをしようとするの？」

「それはだな、ええと…何と言うか、その…」

俺は言葉が見つからず、脳をフルに使って考えたが、次にシャルロ

ツトが言った言葉で俺の脳は完全に機能停止した。

「結局は自己満足なんですよ」

「シャルロット…?」

「剣斗はそうやって人助けをして感謝されて優越感に浸ってるだけでしょ！今回だってそうだよ。僕は助けを望んで無かったのに勝手に入って、勝手に勝負を決めてさ。それで僕が感謝すると思ったの！?」

「……………」

剣斗は黙ったままである。

「ふざけないでよ！僕はそんな事頼んでないよ！」

「何だよそれ……………」

剣斗も遂に我慢の限界だった。

「何だよそれ！じゃ、お前はあのままで良かったのかよ！」

俺はテーブルを叩いて立ち上がる。周りの生徒達も急な怒声に騒ぎ出す。

「そうだよ。僕はあのままで良かったんだよ。だからもうほっといてよ！そんな風にされても迷惑なの！邪魔なの！」

「ああそうかよ！じゃもう知らねえよ。勝手に連れていかれちまえ！このバカ野郎！」

俺は席を立つと、そのまま食堂を後にした。

剣斗が食堂を後にした後、いつものみんながシャルロットを責める。

「シャルロット！何故あんな事を言ったのだ！」

箒が言うが、シャルロットは顔を下に向けたままである。

「あんだねえ！剣斗の気持ちを考えなさいよ！」

鈴が言ってもシャルロットは黙ったままである。

「シャルロットさんの行為はレディとして良くありませんわ」

「シャルロット。幾らなんでもあれはな……」

セシリアと一夏の言葉にもシャルロットは反応しない。

「……剣斗の為か」

「………ラウラ」

ラウラの言葉でやっとシャルロットが反応する。

「正直剣斗には殆ど勝ち目は無い。もし負けたら剣斗まであのカルラと言う奴の道具になってしまう。だからああして剣斗にはこの事に関わらないようにした。違うか」

ラウラはシャルロットの目を見ながら話していく。全てが読まれた

と思ったのか、シャルロットは重い口を開く。

「僕はね、剣斗の事が大好きなんだ。ラウラと同じぐらいにね……。そんな人が僕なんかの為に不幸になって欲しくないんだ。僕なんかの為に……。僕なんかの為に……」

いつの間にかシャルロットの肩は小刻みに震えていた。一夏はそれ以上責める事はせず。ラウラは優しくシャルロットを抱き締めていた……。

ドンドンドーン！

「みなさん長らくお待たせ致しました。これよりイタリアのフランさん対わが校の男子、神城剣斗君の対決を始めます！」

わあー！！

「何だよこれ」

「どうやらカルラが、これをイベントにしたようだな。まあある程度の事は隠してはいるが……」

一夏はラウラと今ピットで話していたが、そこには剣斗の姿は無かった。あれから三日が経つが、あの食堂の一件以来剣斗は学園から姿を消していた。

一夏が織斑先生に聞いても、知らん。の一言ですべて済まされてしまった。そして誰も剣斗の姿を見ずに三日が経った。

「……やっぱり剣斗、来ないわね」

鈴がそう呟くと、シャルロットはいつもの様に笑顔でみんなに話掛けた。

「これで良いんだよ。これなら剣斗を巻き込まなくて済むしね」

「……」

その言葉に返事を返すものは居なかった。

「シャルロット、このままだとフランの不戦勝でお前は連行されるがそれで良いのか？」

織斑先生はシャルロットに念を押すように聞く。それは最終確認だった。

「はい。これでいいんです。不幸になるのは僕一人だけでいいんです」

「……そうかわかった。では相手側にそう伝えてくる」

織斑先生はこの事をカルラに伝えるために、ピットを後にしようとしたが、

「待ってくれ、千冬姉！」

一夏が織斑先生を呼び止める。

「織斑先生だ。全く、で何の用だ？」

「きつと剣斗は来ない。だったら俺が代わりに…（誰が来ないって？）剣斗!？」  
織斑先生が出ようとしていたドアには今まで姿を見せなかった剣斗がいた。だがその体には、打撲や切り傷が多数あった。

「お前どうしたんだよそれ!？」

「これか。まあ努力の証ってことかな。おっ、それより勝負の前にトイレに行ってくるわ」

剣斗は現れてそうそうトイレに向かっていった。みんなはその様子に安心していた。唯一人を除いて

「織斑」

「何ですか。織斑先生?」

「剣斗の後を追え。奴はどうも様子がおかしい」

織斑先生の目は真剣その物だった。

「わかった」

織斑先生の様子を見て、急に不安になった一夏は剣斗が行ったトイレに向かって走って行った。ただただ何も無いことを望んで……

ウゲエ、ゲエ……はあはあ……。

一夏の不安とは裏腹に、剣斗はトイレで吐血を何回も繰り返していた。

(まさかISに乗らなくても吐血までするなんて……。本当にこの体は限界らしいな。けどまだばれる訳にはいかないんだ。直ぐにピットに戻らないと誰か来てしまう)

そう思い、立ち上がるうとする剣斗だったが、その時には一夏は既にトイレに着いていた。

「おい剣斗！何だよその血？」

「何でもない。もう戻る」

剣斗はトイレから出ようとするが、一夏は剣斗の肩を強く掴んでいた。

「なあ、お前の体はどうなってんだよ。やっぱりISと関係あるんだろ？」

「……」

「頼むから話してくれ」

最初は黙っついていようと思ったが、このままでは一夏は俺の肩を放しそうにないので、俺は全てを話すことにした。

「これはな、力の代償なんだよ」

「力の、代償？」

「そうだ。二年前、俺はシャルロットと別れた後剣術修行に打ち込

んだ。そのお陰で俺もある程度は強くなった。だが所詮ISには到底及ばなかった」

「でもそれは仕方がないだろ」

「そつだ。それは仕方がない事だった。だけど俺には自分の無力さが許せなかった。」

「そつか……」

一夏はいつの間にか俺の肩を離していた。別にこれ以上話す必要は無いとも思ったが、だがもう俺の口は止まらなかった。もしかしたら俺は一夏に話を聞いてもらいたかったのかもしれないかった。

「そんな俺が初めてISを動かしたのは高校に入つてすぐさ。休日に友達とISの試合を見に行ったんだ。そこで俺は無造作に置かれていたISに触れたら、そいつは俺に反応したんだ。俺はその時飛び上がる程喜んださ。やっとこれで俺も強くなれた。シャルロットに会いに行けるって。だけどその代償は直ぐに来たんだ……」

「あの酸欠か」

一夏は腕組みをしながら言うてくる。

「そつだ。俺が初めてISに乗った後、俺は酸欠になった。その時は何が起こったのか分からず、パニックになってそのせいで酸欠は更に酷くなつたんだ。一緒にいた友達も先に帰つてたし俺はもう駄目だと思つただけで、その時バルバさんに助けられたんだ」

「バルバさん？」



一夏は首を傾げてる。そうだ。一夏は元より他のみんなにもバルバさんの事話してなかったんだ。

「ごめん。一夏はバルバさんの事知らなかったな。バルバさんは今の俺の専属医師でホープの専用整備士なんだ」

「へえ」

「話を戻すぞ。バルバさんに助けられた俺はそのまま検査してもらったんだが、どうやらホープに乗った後は俺の心肺機能が著しく低下しているらしい」

「心肺機能が？」

「まあ、その代わりISに乗ってる間は逆に心肺機能が向上しているらしい。一種のドーピングみたいなものだ。でも酸欠だけなら良かったんだが、この間の学年別トーナメントで吐血した時から事態は急変した」

「どう急変したんだ」

一夏は唯短く聞いてきた。本当はもう聞きたくない様子だったが。

「あの後に久しぶりに検査をしたんだが、どうやら俺の体はかなりポロポロらしい。内蔵にも異常があつてそれによつて吐血していたんだ。そしてバルバさんにはこれ以上ISに乗ったらどうなるかわからないって言われた」

「それってもしかして」

「いつ俺の体が限界を迎えるかわからないらしい。全く嫌になるよ」

俺はため息混じりに言う。その顔はやけに冷静だった。

「何とかならないのかよ。それは！」

一夏は俺に怒鳴り付けてきた。

「ISに乗らなければ何とかなるかもしれない……」

「だったらさ！」

一夏の言うことは聞かなくてもわかる。一夏もバルバさんと同じ考えなのだろう。

「…一夏。俺はそれでもISに乗るよ」

「何でだよ！それじゃあお前が！」

一夏はまた俺の肩を強く掴んでくる。今度は本気で掴んできたので、正直痛かったがそれほど一夏が俺を思っていると思うと何だが嬉しかった。

「わかってくれよ一夏。ISが無くちゃ誰も守れないんだよ。今回だってISがあるからシャルロットを守れるかも知れないんだ。だから俺はISに乗り続けるぜ。例え死ぬことがわかっててもな」

「でも剣斗。お前はフランに勝てるのか」

一夏には不安の感情しか読み取れない位の暗い顔をする。

俺は一夏の肩にそつと手を置く。

「正直言うと、勝てる自信はないぜ。だけど俺は負けない、負けら

れないんだ。シャルロットとの約束だつてあるしな……」

「剣斗……」

一夏は未だに暗いままである。俺はそんな一夏に飛びつきりの笑顔を見せる。

「安心しろよ。きっと何とかなるさ。それよりも試合の時間も迫ってるし、早くみんなの所に戻るぞ」

俺は複雑な表情をしたままの一夏を無理矢理にピットまで連れていった。早くしないとまた吐血をしまいそうだったから。

「剣斗……」

ピットに戻った俺達を最初に迎えたのはシャルロットだった。その顔は何故きたの？と言いたげな顔をしている。

「待たせたなシャルロット。ちょっと待ってるよ、さくさくっと試合してくるぜ」

「……ねえ剣斗！」

ホープを装着しようとした俺にシャルロットは呼びかける。

「もう一回聞くな。何でいつも頼んでもないのに人助けをするの？」

俺はシャルロットの問いに真剣に考えてみる。周りのみんなも俺が何て答えるのか気になってるのか、俺の顔をまじまじと見てくる。「うーん…。すまん俺にもよくわからん」

「「「へ?」「」」

みんなは拍子抜けな顔をする。何だその顔は。こっちは真剣に考えただぞ。そんな顔をするなら俺の考えた時間返せよ。

「唯何となくほっとけないんだ。だけど今回シャルロットを助けようとしたのは……いややっぱり何でもない」

一瞬本当の事を言おうとしたが踏み止まる。

「えっ、何?何を言おうとしたの?」

シャルロットは不思議そうな顔をしている。

「いや、やっぱり後で話すよ。この勝負に勝ったあとにな」

そうだ。フランさんに勝てたらシャルロットに全てを話そう。まあ俺の体が持つかわからんが……。

「うん。わかった。待ってる」シャルロットはどうやら納得してくれたようだ。それを見て安心した俺は一呼吸置いてホープを装着する。

「それじゃあ、頑張ってきて来るか」

「ちよっと待て剣斗!」

今度こそアリーナに出ようとした俺を今度はラウラが呼び止める。

そろそろ俺、行かないといけないんだけど。

「どうした。ラウラ?」

「お前にこれを貸す」

ラウラは俺にラウラ愛用のサバイバルナイフを渡してくる。その柄の部分には黒ウサギが刻み込まれていた。確かこれはラウラの所属する軍隊の物だ。

「これは?」

「いいか。私はお前にこのナイフを貸す。貸すと言うことは必ず返さなければならぬのだ!だから、その……」

ラウラは言葉の続きが言えなくてもじもじし始めるが、ラウラの気持がわかった俺はラウラからナイフを受けとると、ラウラの頭をそっと撫でた。

「ありがとなラウラ。じゃあこのナイフ借りるよ。必ず後で返すからな」

「ああ、行ってこい、そして勝ってこい!」

ラウラに激励され俺は一気にアリーナに飛び出した。そこには既にISを装着したフランがいた。

「すみません。お待たせしてしまって。」

俺は丁寧に相手に礼をするが、フランは無言であった。

「それがフランさんのISですか?」

フランのISはラウラと同じ黒いISであった。その背中には八個の小型スラスタが備わっており、高速戦闘が得意であるのである。そして見た感じには武器は実弾兵器が主体だがその数が問題だった。見ただけでも右手のアサルトライフル、左手の大型ショットガン、肩にはガトリングガンで、足の所にはミサイルポッドも見える。更にインストールしたのも合わせればかなりの数の武器があるだろう。

「そうだ。名を「ジャッジメント」」

その時俺は初めてフランの声を聞いたが、その声はやけに弱っていた。

「「ジャッジメント」ねえ。俺を裁くつてか？」

俺は冗談混じりに言うが、フランの表情は全く変わらない。まるで人形のように。

「早く始めよう」

フランは淡々とした口調で言う。それには同感だ。早くしないとまたいつ俺の体が悲鳴をあげるかわかったもんじゃない。

「さあいよいよ試合が始まるようです！それではみなさん一緒にカウントダウンを！」

5！

俺は目を閉じながらビームライフルをモード「燕」にして構える。

4！！

フランはアサルトライフルをこちらに向けて構える。

3!!!

カウントダウンはどんどん大きくなっていく

2!!!!!!

—夏達も固唾を飲んでモニターに目をやる。

1!!!!!!

俺は閉じていた目をカッと開く。

ゼロ!!!!!!

「いくぜホープ！その手に「希望」を！」

俺は吠えながらフランに向かっていく。

（これが最後の戦いか……、いや、これで終わらせない。俺は勝つて見せる。そしてみんなの元に戻るんだ！）

だがその時には彼の体には既に新たな代償が起きていた……

## 力の代償（後書き）

いかがですか？

フランのISの説明がわかりづらかったかもしれませんが。申し訳ございません。

さて今回は又も苦手の戦闘です。できるだけ長く書けるように頑張ります！

それではまた次回を楽しみに！



## 限界（前書き）

やっと新武器が出せます……。

## 限界

「うおおおー！」

俺はビームライフルを撃ちながらフランに突っ込んでいく。

今回の作戦は至ってシンプルで、とにかく接近戦に持っていく事だった。射撃戦では圧倒的に不利なホープであるが、その分接近戦では異様な強さを見せる。

だから、今回の戦いでは如何に接近戦に持ち込むかが戦いのポイントだった。

「フツ」

だがそこは次期イタリア代表最有力候補である。ホープの事をよく調べていたのだろう。フランは空高く飛び上がると、そのまま剣斗に向かって肩のガトリングガンを撃ち始める。

「マジかよー！」

俺は急いでフランから距離を取ると、ガトリングを避けることに集中する。

(やっぱりこうなるよな、このままなら確実に俺がやられる。だったらもう捨て身だ)

決心した俺はタイミングを見計らってシールドを自分の前に突き出し、一気に全速力でダッシュする。

だがそのダッシュはフランに向かったものでは無かった。

俺はアリーナの壁にダッシュするとぶつかる直前に反転して、壁を足を付けるとそのまま踏み込んでフランに向かって跳び跳ねる。

「!?!」

この行動にはフランも驚いた様子だったが、これがこの三日間の特訓で見つけた空中にいる相手に対する最善策だった。

ホープにはスラスタールが殆ど無いので速く飛ぶことが出来ない。だったら壁などを使って跳び跳ねた方が速いのだ。

「もらったぜ」

俺は真打を抜くとフランを切上げようとする。

「甘いよ。君は」

フランは右手のアサルトライフルで真打を捌くと左手の大型ショットガン突きつける。そのショットガンはシャルロットが持つてるものより一回り以上大きい物だった。

「あらら…」

ガンッ!

ショットガンの弾を正面から受けた俺は地面落下してしまう。幸いにもあのショットガンは連射は出来ない様だった。もしあのショットガンに連射機能があったらもう勝負はついていただろう。

俺が地面に落ちたのを確認すると、フランは再びガトリングガンを撃ち始める。更に左手のショットガンを仕舞い、両手のアサルトライフルでも俺を狙ってくる。

「おいおい、それはまずいよ」

俺もまた、避けることに集中するがガトリングガンだけで精一杯だったのにそれに加えてアサルトライフルも俺を狙ってきて、俺のシールドエネルギーは徐々に減っていく。

「流石にこれ以上はまずいな。それじゃあ早速新武器のお披露目としますか」

俺は真打を納めると三日前に作って貰ったばかりの新武器を呼び出す。

「……それはデータに無かったな」

「そうだな。これは三日前にできたばかりの新武器だからな。データには無いはずだよ」

その新武器は二メートルはある斧である。名前はまだ無いが、一応「日熊」と俺は呼んでいる。

そしてこの「日熊」にはある機能があるのだが、それを発動させるには一定以上の衝撃を「日熊」に与えなければならなかった。

その為に俺は避けるのを止めてガトリングガンとアサルトライフルの弾、つまり衝撃を全て「日熊」で受け止める。

ゲージは少しずつ上がっていく。

(20%……、27%……、畜生、思ったより貯まるのが遅いな。それでも今は耐えなくちゃ)

容赦無く降り注ぐ弾丸の雨を必死に「日熊」で受け止める続ける。

「そんな守りばかりで、私に勝てるのか？」

フランは依然俺を狙いながらも、話しかけてくる。

「今は守ってばっかだけど、このままじゃ終わらないよ」

「そうか。ではそのまま終わらないことを願うでしょう」

フランは今までの射撃に足にあるミサイルまでも撃ち始めた。だがそのミサイルのお陰で「日熊」のゲージはどんどん溜まっていた。

(60%……68%……75%……よし、このままだったらきつと

……!?)

ゴホツゴホツ!

俺はまた吐血をしてしまう。フランはその様子に驚き射撃を中断する。

(まさかISに乗っていても吐血するのか!?)

俺はあまりの苦しさはその場に倒れ込んでしまう。

フランは空中から降りてくると、俺の元に歩み寄ってくる。何とか立ち上がるうとするが体が言うことを聞かない。

(もしかして、もうおしまい? 幾らなんでも早すぎるな。もう少し粘りたいが体が言うことを効かないよ)

俺は諦めて目を閉じたが、俺の体はいつの間にか立ち上がっていた。

「フランさん?」

フランは俺の元に歩み寄ると、俺を抱き抱えていた。

「これから10分間の休憩を取る。その間に続けられるかどうか判断してもらおう。いいな?」

フランは俺を抱き抱えたままピットに向かう。

「わかりました。ありがとうございます。フランさんは優しいですね」

ピットに着いた俺達を一夏達が駆け寄ってくる。

「大丈夫かよ剣斗！」

「大丈夫だよこん位休めば直ぐに……ゴホッ」

俺の吐血は更にひどくなつていく。俺がその場に倒れると、ピットにバルバさんが入ってくる。

「全く、何やってるんだお前は！」

「あの〜、今は関係者以外の方は……」

山田先生はバルバさんを追い出そうとするが、バルバさんは山田先生に怒鳴り付けた。

「バカ野郎！俺はこいつの専属医師だ」

バルバさんは山田先生を払いのけると俺に輸血を始める。

「いいか剣斗？この試合は終りだ。直ぐに治療を始めるぞ」

「待つてくださいバルバさん。俺は試合を続けます」

「は？何言ってるんだよお前」

「試合を終わりにしたらシャルロットが連れていかれちゃうんです。それだけは阻止しないとイケないんです」

「剣斗……、！？。待てよお前」

俺はバルバさんに抗議するが、バルバさんはあることに気付くと目

の前に二本の指を立てたみせる。一夏達には何をしてるのかわからず唯じつと見ていた。

「剣斗これは何だ？」

一夏達にはバルバさんが何故こんな事を聞くのか全くわからなかった。

「何って、手に決まってるじゃないですか」

「じゃあ、何本指を立ててる？」

剣斗はなかなか答える事が出来なかった。

「……四本ですか？」

「！！？？」

「やっぱりお前……」

一夏達は言葉を発する事も出来なかった。どうやら剣斗は目もあまり見えないらしい。

「大丈夫です。全く見えない訳では無いので戦えます。」

バルバさんに抗議する俺だが、バルバさんはそんな俺を山田先生の時よりも激しく怒鳴り付けた。

「いい加減にしろよ！俺は医師だ！患者であるお前を助けるのが俺の義務なんだよ……！」

俺は怒鳴り付けるバルバさんの腕を力強く握る。実際にはそんなに力はこもっていなかったが、それでもバルバさんの目をしっかり見つめていた。

「バルバさんには俺を助けるという義務があるかもしれません。で

も俺にもみんなを助けるといふ義務があるんです。それに言ったはずです。俺がISに乗れなくて、みんなを助けられないなら死んだ方がましですと」

「……………」

バルバさんは黙ったままである。

「お願いします………」

お互い見つめ合ったままだったが、バルバさんは観念したのか、頭に手を当ててため息をついた。

「わかったわかった。もう好きにしる。俺はもう知らんからな」

俺は握っていた手をそっと放して、何とか立ち上がる。

「はあはあ……。ありがとうございます。それより誰か酸素ポンベを頼む」

すると、シャルロットが酸素ポンベを持ってきてくれる。

「おっ、ありがとなシャルロット」

俺はシャルロットから酸素ポンベを受け取り、酸素を肺に満たしていく。

「ねえ剣斗……。もついいよ」

「何だよシャルロット急に」



「これ以上やったら死んじゃうかもしれないでしょ！？だったらもう試合なんて止めてよ！僕はどうなってもいいから！」

シャルロットは上目遣いでお願ひする。いつもならその上目遣いに唯従っていたが、今回はそうはいかない。

「それは駄目だよ。俺はあいつの思い通りにはさせねえよ。シャルロットの母さんをクズ呼ばわりしたあいつを」

「お母さんを？」

「そうだ。シャルロットの母さんはまるで太陽の様な人だった。親のいない俺にも親とはこう言うものなんだって思えたしな…」

「何で剣斗がお母さんの事を？」

シャルロットは困惑していた。

やべつ。また口が滑った。まあいいや、もう全部話しちゃおう。その方がきつと気持ち的にも楽になるだろう。

「俺はなシャルロット。中1の時に剣術修行の為に旅に出たんだ。でもそこで色々あつて傷だらけになつて死にかけてたんだが、ある少女に助けられたんだ」

「えっ、それって？」

シャルロットは口を開けて何かを言おうとするが俺は話を続ける。

「その少女と彼女の母さんは素性も明かせない俺を看病してくれた。俺が彼女に刀を突きつけても彼女は俺を心配してくれた。俺はそんな彼女達の行為が嬉しくてたまらなかつた。そして名前を名乗らなかつた俺に彼女の母さんが名前をつけてくれた」

俺は話していくが、シャルロットは衝撃のあまりにもう何も言えない状態だった。他のみんなもその彼女が誰なのかわかったらしく、この事を知っている一夏以外は呆気にとられている。

「その名前はシャニ。シャニ・デュノア。俺の第二の名前で、俺はその名前を誇りに思っている」

「……そんな」

未だに正常な考えが出来ないシャルロットに俺は笑って見せる。

「だから今回シャルロットを助けようとしたのは、神城剣斗の自己満足の為じゃなくて、シャニ・デュノアとして約束を守りたかったんだ。……まあ残念なことに俺はまだまだ弱いけどな」

俺はシャルロットに歩み寄ると、さっきラウラにしたように頭をそつと撫でる。

「ごめんな、今まで黙ってて。けど俺まだ自分に自信が無かったんだ」

「剣斗僕は……」

言いかけるシャルロットの言葉を聞きたくなかった俺はシャルロットに背を向けてアリーナに向かう。

「俺を信じるよシャルロット。俺は約束だけは絶対守る男だからな。じゃあ、行ってくるわ」

俺は再び「日熊」を呼び出しアリーナに飛び出した。

「剣斗。ううん、シヤニ。僕はもう良いんだよ、君さえ無事なら。だからもう無理はしないで」

シャルロットは手を合わせて祈っていた。彼が無事に戻ってくることを……。

## 限界（後書き）

毎度の事ながら、いかがでしたか？

今回は自分で読み返しても結構雑な気がしますね。申し訳ありません。

さて今回は剣斗がシャルロットに真実を話しましたね。本当はもっと後にしたかったんですが、どうしても何を書けば良いかわからず、書いてしまいました。

因みに剣斗の新武器である「日熊」はモンスターハンターのスラッシュアックスを元にしてあります。

それではまた次回で！

奇跡の代償（前書き）

今回で戦闘が終了です

## 奇跡の代償

「神城。君に聞きたいことがある」

アリーナにやって来た俺を空中で待ち構えるフランは俺に問いかける。

「何ですか？フランさん」

「君は何故そこまでする。そんな事をして君に利益はあるのか」

フランの問いに俺は呆れてしまう。

（全く、何で人は何かをやるにしても、損得を考えるのだろう。まあフランさんの場合はカルラに教え込まれたんだろうけど）

「何でってそりゃ……。いやこれはこの勝負の後に話します。それより俺からも質問して良いですか？」

「何だ？」

「フランさんの好きな食べ物は何ですか？」

「……」

観客席にいた女子生徒達はみんな頭に？を浮かべている。いやいや俺は変な事聞いてないですよ。俺の予想が合ってればその答えは

「そんなものはない」

やっぱりな。俺は次の質問に移った。

「それじゃあ、フランさんは今まで何を食べたことがありますか？」  
女子生徒達は更に？の数が増えていた。  
普通の人なら食べたことがある物なんて多すぎて答えられるわけが無い。だけど彼女は考える事なく答えた。

「パンとスープとサラダだけだ」

その答えに女子生徒達は騒ぎ出す。

だが俺が気になったのはそこではなかった。

「フランさんは何でそこまでカルラに尽くすんですか？フランさんの実力があれば、どっかの企業に入ればいいじゃないですか」

その言葉を聞いたフランさんは小さく笑って見せる。

「私はあの人に命を救われたんだ」

「命を？」

「そうだ。私は五歳の時に家の貧しさが原因で捨てられた。私には身寄りも居なかったため、私には死しか無かったんだ。そんな私を引き取ったのがあの人だった。あの人にとっては私も道具なのかもしれないけど、私の命の恩人には変わり無い。だから私はあの人に尽くすんだ」

「そうか」

世の中はわからないものだと、改めて俺は考える。俺もフランさんの様に捨てられた。だけど捨てられた人によってこんなにも人生は変わってしまうのか。

俺はフランさんに何ができるのか。その答えは既に出ていた。

「フランさん。失礼ですが、お年は？」

「17だ」

「だったら。この勝負に俺が勝ったときの条件を一つ増やしても良いですか？」

「条件？」

「そうです。もし俺が勝ったらフランさんにはこのIS学園に二年生として入学してもらいます」

「おやおや、それはいけませんね」

突然カルラの声が聞こえてくる。やはりフランさんを失いたくないらしいな、儲けてくれる道具として。

「いいじゃないですかカルラさん。あなたはフランさんが勝つと思ってるのでしょうか？」

「ええそうですよ」

「だったらいいじゃないですか」

「……まあいいでしょう。どうせあなたはフランに負けて私の道具になるのですから」

カルラは笑いながら通信を切る。相変わらずムカつく奴だが今は戦いに集中しようと思いき深呼吸する。



今の剣斗は目が殆ど見えないのでその分をISに補って貰うしか無かった。

「これで設定は完了っと。それじゃあ始めましょうかフランさん」  
俺は「日熊」を構えると、フランさんもガトリングガンの標準を俺に合わせる。

「いくぞ！」

フランは先程と同様に弾丸の雨を俺に降らせる。俺もまた同じ様に「日熊」で弾丸を受け止める。フランは俺が決して攻めてこず「日熊」で受け止め続ける事に疑問を抱いていく。

(なぜ彼は一向に攻めてこない？さつきからあの斧で受け止めてばかりで……、もしやあの斧には何か仕掛けでもあるのか。考えても仕方がない、攻め方を変えてみるか)

フランは両手のアサルトライフルをしまうと、大型ショットガンと短剣を呼び出し俺に接近してくる。

接近してると言っても、一夏のような直線的な動きではなく八個の小型スラスターを使つての複雑な動きで、俺も的を絞る事ができない。

「くそっ」

俺はフランから距離を取ろうとするが、その時にはもう俺とフランの距離は殆ど無かった。他の人から見たら接近戦に持ち込めた剣斗が有利と考えるが、それは間違いだった。

二メートルもある「日熊」ではこの零距离での接近戦は寧ろ不利になる。それにフランは短剣を持っているためよりこっちに分が悪い。「日熊」を一度戻して真打で戦うことも出来るが、それをするとせ

つかく溜めたゲージもまたゼロになってしまっ。そうなたら完全に勝機は無くなる。

「どうした。お前の好きな接近戦だぞ。攻めないのか」

「この零距离でよく言っよ」

フランは短剣で切り込んで隙を見てはショットガンを撃ち込んでくる。俺はシールドで短剣を捌き、ショットガンに対してはその衝撃を「日熊」で受け止めていた。

「本当に君は守ってばかりだな。そろそろ私も飽きた。もう決めさせて貰っ」

フランはシールドのある左手を蹴り上げると、短剣で「日熊」を弾きショットガンをお腹に突きつける。

「あらら本日二回目」  
「ガンッ！」

ショットガンによって吹っ飛ぶ俺をフランはアサルトライフルを呼び出し、ガトリングガンと共に追撃してくる。俺が居た所からは煙が立ち上がる。

暫く射撃をした後、フランは射撃を止めてこちらの状況を伺っている。

「全く危なかつたぜ。今のは」

「ほっ。まだ終わらないか、流石だな」

「そりゃそうだよ。それにこいつもやっとなまってる」

俺は砂煙を払い除け、「日熊」を一振りすると「日熊」の刃がスライド、連結して斧から大剣へと姿を変える。

「成る程。どうやらその斧は一定以上の衝撃か何かを与えると大剣になるらしいな」

「フランさんの観察力は凄いな。だけどこの「日熊」は大剣になるとあることが出来るんだ」

「あること？」

「そう。それは」

俺は「日熊」を上段に構える。

「瞬時加速」

俺はホープでは出来ない筈の瞬時加速でフランに向かっていく。

「バカな！」

咄嗟に防御しようとするが、反応が少し遅かった。俺はフランのアサルトライフルを切り裂くとそのままタックルをくらわせる。

フランは体制を立て直すと、空中に逃げる。

「何故ホープに瞬時加速が出来るんだ？」

俺はフランの疑問に素直に答える。

「違うよ。ホープがやっってるんじゃないよ、「日熊」がやっってるん

だよ」

「その大剣が？」

「そうだよ。フランさんの思った通り、この「日熊」はある一定以上の衝撃を与えると大剣になるんだ。大剣になると「日熊」には大型スラスターの役割もあるんだ。原理は俺にもよくわからないんですけど、確か空気を圧縮して一気に放出するみたいな感じですよ」

「成る程。正にスラスターの無いホープの為の武器な訳か。だが！」  
フランは両手にショットガンを呼び出す。

「そんなのは唯、直線的な加速ができるようになっただけだ。それならば一切問題は無い！」

「勿論。でも唯直線的な加速じゃないよ」

俺は再び瞬時加速でフランに向かっていく。フランはショットガンで俺を迎え撃とうとするが狙い通りだった。俺は空気の放出方向を変え、一回転してフランの背後に回る。

「何だと！？」

俺は今度はフランの背中に横薙の一撃を入れる。

「ぐっ！」

フランはショットガンで俺を狙うが、俺はそれよりも速く「日熊」の突きをフランに当てる。

「なめるな！」

フランは突きによって飛ばされながらも、ミサイルを撃ち込んでくる。

「そんなミサイルじゃ、俺は落とせないよ」

俺は「日熊」を前に突き出すと、「日熊」からは数多の方向に空気が放出されて、それがミサイルの方向を狂わせミサイルは俺の横を過ぎ去って行く。

「フランさん。実弾兵器しかないあなたにはもう勝機はありません。諦めてください」

だがフランに降参の意思はなく。続いてアサルトカノン呼び出し、空中に上がっていく。

「ふざけるな。私に敗北は許されない。負ければ私が私でなくなる！」

「そうか。じゃあ終わりにします」

俺は「日熊」の放出量を最大にしてフランに接近する。

フランはガトリングガンによって俺を牽制しようとするが、だがもう避ける必要は無い。俺はガトリングガンの弾を受けながらもフランとの距離を零にする。

フランの顔はみるみる青くなっていく。恐らく自らの敗北を悟ったのだろつ。だがそれでいい。負けることで事で得るものも沢山ある。それを知ることが彼女には必要だろつ。

「俺の勝ちだ!!」

「日熊」をフランに叩きつける。

俺は勝利を確信したが、そこで誤算があった  
バキーン!

「日熊」がフランに当たる直前に、「日熊」は柄の部分から折れて  
しまう。

所詮は「日熊」も試作武器。この戦いでは剣斗は既に「日熊」の利  
用限界時間を越えていた。

そして、そのチャンスをフランは決して見逃さなかった。

「うわあああ!!!!」

フランはまるで狂ったかのように全ての武器を撃ち込んでくる。剣斗  
はあっという間に煙に包まれるがそれでも攻撃を止めないフラン。  
弾を全て撃ち尽くした事でやっと攻撃が止まった。

「はあはあ…」

フランは肩で息をしている。呼吸が落ち着いた所でフランの顔から  
は笑みが溢れる。

煙からはホープの灰色の装甲がボロボロと落ちていった。

「そんな、剣斗」

ピットではモニターを見つめていたシャルロットが言葉を漏らす。  
「まだまだ！私の嫁があこの程度で殺られるわけがない」

そう言うラウラだが、その表情に余裕は無かった。

「みなさん。残念でしたね」

ピットにはカルラの声が聞こえるが、それに反応する者は居なかった。

「それでは約束通りシャルロットを連行させてもらいます」

その言葉を皮切りに入口から二人の男が入ってくる。

「なんだ貴様等は？」

「シャルロットは連れて行かせないぞ」

ラウラはナイフ、箒は日本刀を持ちシャルロットを守ることにする。  
だがシャルロットはその二人の間を抜けて男の元に行く。

「待てシャルロット！行つてはならん！」

呼び止めるラウラだが、シャルロットは首を横に振る。

「駄目だよラウラ。これは約束なんだから」

「シャルロット」

箒がその名を呼ぶ。

「箒、今までありがとう。一夏の事諦めちゃ駄目だよ」

シャルロットは次に鈴の方を向く。

「鈴は僕が女の子だとわかってても気さくに話しかけてくれたね。僕とても嬉しかったんだ」

次にセシリア。

「セシリアはすっごくプライドが高かったね。でもセシリアならきつとそのプライドに恥じない様に見えるよ」

次にラウラ。

「ラウラは僕の一番の友達だったよ。ラウラはまだわからない事が沢山あるだろうけど、きつとみんながしっかりフォローしてくれるよ」

シャルロットは最後に一夏の方を向く。

「一夏。君は僕が女の子だとわかったのに黙っててくれたね。僕は一夏の優しさに何回も救われたよ。本当にありがとう」

シャルロットはみんなに飛びつきりの笑顔を見せる。みんなは唯顔を下に向けることしか出来なかったが、一夏はモニターを見つめたままだった。

「一夏。貴様はこんな時に何処を見ている!？」

ラウラは一夏に怒号を放つがそれでも一夏はモニターを見続けていた。



「おい、まだ誰もフランの勝利を宣言してないぞ」

!!!???

みんなもその事に気づきモニターに視線をやる。

「あれは、一体」

そこには新たな姿のホープを纏った剣斗が居た。

煙からは現れた剣斗にフランは驚きを隠せなかった。

正確には、煙からは現れたISに驚いていた。

そのISは以前のホープの様な灰色の装甲ではなく、黄緑色の装甲をしている。所々にある深緑の装甲はまるで森をイメージさせる色である。

そして以前のホープとの一番の違いがスラスターである。そのスラスターは背中から四本の棒状のスラスターが飛び出していて、二本のスラスターの間から常にエネルギー状の翼が出ている。

「なんだそのISは？」

「何ってホープだよ」

「もしかして、セカンド・シフト「第二次形態移行」か」

「?。そんなわけないですよ。これはファースト・シフト「第一次形態移行」ですよ」

「何だと」

「それにしてもホープの奴も意地悪だよな。もうISには乗れないかもしれないのにファースト・シフトするんだもんな。それでもここでファースト・シフトしたのは有難いけどな……」

「もうISに乗れないだと？」

そうか。フランさんはこの事を知らないのか。

「ちょっと病気でね。さっき吐血したのもそのせい。それに今じゃ殆ど目が見えないよ」

「やはり私は理解できない。何故そこまでするのだ？」

「だから言ったでしょ。それは勝負が終わったら話すって。それより自分の心配したらどうですか。フランさんにはもう武器が無いんですよ」

フランはそれでも慌てる事もなく、全ての武器を投げ捨て短剣を呼び出す。

「その心配は要らない。私も接近戦は得意だし、君に一撃さえ与えれば私の勝ちだ」

痛い所を突かれた。ホープは先程までの攻撃でシールドエネルギーは殆ど残っておらず、フランの言う通りあと一撃さえ食らえば俺の負けだった。

「そうですか。なら俺も次で決めます」

俺は真打に手を添えると、居合いの構えをする。結局は俺は真打に頼るしか無い。そんな不甲斐ない自分に腹が立つと同時に最後は真打で決められる喜びもあった。

「……」

観客席の生徒達も固唾を飲んで二人を見つめている。

その時間はおよそ五秒だっただろうが、その場にいた全ての人がそれが無限に感じられただろう。

「行くぜ！」

先に均衡を破ったのは俺で、瞬時加速でフランに仕掛ける。フランは下手に動く事はせず、俺を迎え撃つ。

俺は居合いをするのに最も適した間合いに入ると、そのまま必殺の一撃をフランに与える。

はずだった。

スカッ

フランは俺が居合いをする直前に後ろに下がって、真打は虚しくも空を切る。

居合いは一撃必殺の技であるが、相手にそれを避けられるとそこには隙が生じてしまう。フランは今度こそ勝利を確信する。

「残念だったな。君が居合いをしてくることはわかっていた。正直、かわせるか不安だったがどうやら運は私に味方したようだ。終りだ  
神城剣斗！」

フランは短剣で俺の腹を突き刺そうとするが、

ゴンッ!

「!?!」

フランには何が起こったのかわからなかったが、鈍い衝撃がした自分の脇腹を見てやっと理解できた。

フランの脇腹には剣斗の鞘が当たっていた。

「居合いが避けられたら隙を生じるのは自分がよく知ってる。ましてやフランさんなら絶対避けると思っていました。だからこの二段階居合いをしました」

俺は真打を振り上げるが俺は腹に何かを当てられていた。

「ん?」

それはロケットランチャーの銃口だった。もう武器は無いと思っていたが、フランは最後の武器を隠し持っていた。

「神城、君は凄いや。このままでは私の負けだ。よって私は最後の賭けに出る!」

「ちっ」

俺は真打でロケットランチャーを斬ろうとするが、ロケットランチャーは既に発射され二人の間に爆発が起き、同時に落下する。

ビーー!!

ここで試合終了の合図が鳴る。つまり今ので勝負が決まったのだ。

俺とフランは同時にモニターに視線をやり、生徒達もモニターに視

線をやる。

そしてモニターに試合結果がでる。

・両者のシールドエネルギーが同時に尽きたため、引き分け。勝者無し・

「は？」

俺はIS勝負に引き分けがあるのかと疑問に思ったが、問題はそこでは無かった。

「じゃあ、約束は？」

俺が首を傾げていると、フランが立ち上がる。

「引き分けならお互いの約束は無効になる。つまりカルラさんはシャルロットにこれから一切関わらない事は無いが、カルラさんが君やシャルロットを連行することも無くなったよ」

「それってつまり……」

「剣斗……！」

ピットからシャルロット達が走り寄ってくる。とりあえず俺はシャルロットを守れたようだ。俺は心から安心するが、それと同時にあることに気づく。

（今ISから降りたらどうなるんだろう？ 確実に目は見えなくなるな。それとも心臓が止まっちゃうか？ なんかやだなあ……）

勿論後悔はしてない、それでも心残りはある。それでも避けられない事、俺は目を閉じホープを解除する。

「剣斗！剣斗！」

シャルロットの声が聞こえてくる。他にもラウラや一夏達の声もする。みんなは一体どんな顔をしているんだろう。

俺は見えないとわかっていても、そつと目を開ける。

そこには泣いてるシャルロットがいた。ハハハ、何泣いてんだよ。せつかく学園に残れるのに、ほら一夏みたいに笑ってみるよって、あれ？

「見えるぞ。それに酸欠や吐血もない……」

「そつ言えば」

俺が不思議に思っていると、バルバさんが遅れてやってくる。

「ちょっといいか。」

バルバさんは色々な器具を使って俺の体を調べていく。一通り調べ終わるとバルバさんは興奮した様子で俺に顔を近づける。

「剣斗！お前の体の異常が無くなってんぞ」

「まじ！？つまりそれって……」

「もう体を気にしなくて良いんだよ」

バルバさんは俺に抱きついてくる。バルバさんに続いてシャルロット達みんなが一斉に抱きついてくる。

正直苦しかったが、体の異常が無くなった事が嬉しくて俺達はバカみたいに大笑いしていた。

けど、その奇跡にも代償はあった。

ピキッ

「え？」

ホープの待機状態である左手のブレスレットにヒビが入りそして

パキイン！

「ええええ！！！！」

ブレスレットは粉々になり、地面にぱらぱらと落ちていく。

「ホ、ホ、ホープがああ！！！」

アリーナには俺の虚しい叫びが響いた……。

## 奇跡の代償（後書き）

いかがですか？

今回は手本が無い割りには戦闘を長く書けたのではないかと思いません。

さてさて、剣斗は自分のISを失いましたね。この後剣斗はどうするのでしょうか。それでも暫くは訓練機で頑張ります。

次回でこのオリジナルの話は終わりですが、この次にもオリジナルの話をやります。その後原作三巻に突入します。次のオリジナルは今回のより少し短くなります。それでもまともな話にできるよう頑張ります。

それではまた次回で！



## それぞれの約束（前書き）

今回でオリジナルの話はおしまいです。

## それぞれの約束

「乾杯!!」

「かんぱーい……」

現在俺達は俺&一夏の部屋で、シャルロット防衛記念パーティーをしている。

つか、防衛記念って何？俺防衛戦でもしたの。ボクシングですか、それともプロレス？まあどっちでもいいけど。

「で、あんたはそんな隅っこで何やってんのよ!」

鈴は飲んでいたコップを叩きつけて俺に文句を言ってくる。只今俺とみんなの温度差は凄まじいものだった。その温度差は砂漠と南極の差のようなものである。凄い温度差だろ？

「だって、だって……」

俺はみんなが騒いでる隅っこで、粉々になったプレスレットを接着剤で修復を試みてる。あの時アリーナで砕けたプレスレット、つまりホープである。バルバさんの話ではホープはコアまでやられてしまい。ISとしては完全に死んでしまったらしい。

「剣斗。気持ちわかるけどなあ」

一夏がこっちにコップを持ってくる。それでも俺はプレスレットの修復を続ける。

「わかってる。もうホープは死んでるって、でも俺は今までホープと一緒に頑張ってきたんだ。だからせめて、プレスレットの状態に戻してやりたいんだ」

「一夏はやれやれと言つと、俺から接着剤を取り上げる。」

「おい、一夏」

「だからつてお前がそんなくよくよしてたら、シャルロットが悲しむぜ」

俺はシャルロットの方を見ると、シャルロットは俺と目が合つと直ぐに視線を反らす。きつと自分のせいでこつなつたと思つたのだから。やっぱりシャルロットはいい娘だなと思つと、俺は未だ粉々のプレスレットを置くと一夏からコップを受け取り立ち上がる。

「そうだな。せつかくシャルロットを守れたんだし、今日は楽しむか」

「そうだぜ。今日ぐらいは楽しもうぜ」

俺達はみんなの輪に入ろうとするが、

コンコン。

「ん？誰だ」

突然のノックに驚きながらも俺はドアへと向かう。ドアを開けるとそこにはジャージ姿のフランがいた。ジャージは珍しい事にシャルロットが持つての奴の緑の色違いだった。

「あれ？フランさんじゃないですかって、どうしたんですかその痣！？」

フ란の顔にはいくつかの痣が見える。恐らく痣は顔だけじゃ無いだろう。

「これはあの人にやられた。今回失敗したから、それでこの後は好きにしると言われたんで来たんです」

カルラにやるせない気持ちが込み上げたが、今はそれを抑える。それよりも痣の手当てが最優先だからだ。

「とりあえず中にどうぞ」

「ありがとう」

みんなは突然の来客に驚いていたが、直ぐにその痣に目がいく。

「どうしたんですか、その痣!？」

シャルロットが直ぐに駆け寄ってくる。俺はとりあえずフランを自分のベッドに座らせ、俺の必須アイテムである救急箱からシップを取り出し貼っていく。

「神城」

「何ですかフランさん。それにこれはラウラにも言っただんですが、神城なんてよそよそしいので剣斗でいいですよ」

「そうか。なあ剣斗、これは戦いの前に聞いたことだが何故君はそこまでするのだ。戦いも終わったので教えて欲しい」

「ああ、そうでしたね」

俺はあの時シャルロットに聞かれた時の様にまた脳をフルに使って考える。みんなもまた今度こそ俺がまともな答えを出すことを期待してるようだ。俺はその期待を裏切らないように必死に考える。そしてある一つの答えが頭に浮かぶ。

「多分自己満足かな」

「自己満足？」

「そう。これは前にシャルロットに言われたんだけど、俺は頼まれてもないのに人助けをして、それで感謝されて優越感に浸ってるって」

「ち、違うよ剣斗。あれはね」

シャルロットは慌てて立ち上がる。俺はそんなシャルロットをなだめる。

「大丈夫だよ。シャルロットの気持ちはわかってるから落ち着いて」

「えっ、う、うん。わかった」

シャルロットは自分が慌てていた事が恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にして座る。

「それでな、シャルロットの言う通り俺は優越感に浸ってるんだと思うんだ。だけどそれでいいと思う」

みんなは真剣な顔で話を聞いている。

「優越感に浸ってるって何か嫌な言葉みたいだけど、それでも相手に感謝されると俺のやったことは無駄じゃ無いって思えるんだ。そう思うと何か嬉しくなってまた感謝されたくて勝手に人助けしちゃうんだ。変だよ俺も」

俺が苦笑いをしてみると、みんなは笑い出す。それはフランも一緒だった。

「いや、変ではないよ。それは君の長所の一つだ」

「流石私の嫁だな。私も鼻が高い」

フランとラウラが素直に感想を言ってくれる。俺も恥ずかしくなり頬をポリポリとかきながら時計に視線をやる。時刻は午後七時になっていた。

「もうこんな時間か。そろそろ食堂に行こうぜ」

「おっもうそんな時間か。よしみんな行くか」

一夏を筆頭にみんなも立ち上がるが、フランはどうしたらいいのかわからず周りをキョロキョロし出す。俺はフランの手をとる。

「フランさんも一緒に行きましょう。食堂には色々な食べ物もありますよ」

「……わかった」

俺達は部屋を出て食堂に向かう。

食堂に向かう間に箒達は誰が一夏の隣になるかで激しく言い争って

いた。

「一夏はモテモテだなあ。俺もあんな風になってみたいなあ、まあ無理だろうけど……。」

「す、すい……」

食堂についてフランが最初に言った一言である。まあ今までパンとスープとサラダしか食べたことが無い人から見たら凄いやなこの食堂は、

「フランさんは何を食べるんですか」

「ええと……、ちょっと待ってくれ」

フランは沢山ある食品サンプルを目を輝かせながら見つめては悩んでいた。それはまるで子供の様でついクスツと笑ってしまう。

「なかなか決まりませんね」

「その、こんなに食べ物があるとは思わなかったのでどれにすればいいか……」

「だったら、フランさんが知ってる食べ物を頼んでみたらどうですか」

「知ってる食べ物？」

「そうです。何か無いんですか」

「うん」

フランは頭を捻って記憶をあさっている。待つこと三分、やっと何か思い出したようだった。

「ここにハンバーグはあるか？」

「ハンバーグですか、ありますよ。フランさん、ハンバーグの事知ってるんですね」

俺がハンバーグを指差すとフランはハンバーグのサンプルから目を離せなかった。

「まだ捨てられる前に一度だけ食べたことがある。あの時はよく味を覚えてなかったからな。是非食べてみたい」

昔を思い出したのだろうか、フランは顔は暗くなっていく。

これはまずいと思い、俺は直ぐに食堂のおばちゃんに料理を頼む。頼んだ料理は五分もせず、作られる。俺達は頼んだ料理を持って既に座ってる一夏達の元に行く。

「剣斗、相変わらず凄い量だね」

シャルロットは苦笑いをしながらも席を勧める。俺はシャルロットの隣に座り、フランも俺の隣に座る。

今日のみんなのメニューは、一夏が海鮮丼、箒が肉じゃが、鈴は回鍋肉、セシリアはクリームシチュー、ラウラはシーフードパスタ、シャルロットはムニエルである。そして俺はフランさんと同じハンバーグにカレーライス、シーザーサラダ、唐揚げである。量にして



三人前はある。

「俺の体は燃費が悪いからな。それじゃあ、食べるとしますか」

みんなはそれぞれの食事に手を付けるが、フランだけはなかなか食べようとしない。

「どうしたんですか。フランさん」

「いや、本当に食べていいのかと思って」

「いいに決まってるじゃないですか。これはフランさんの料理なんですから」

「でもかしな……」

フランはそれでも食べることをためらってる。俺もそろそろ面倒になってきた。

「フランさん」

「何だ…むぐっ!？」

俺は一口台に切ったハンバーグをフランの口に押し込んだ。フランは最初は驚いていたが、ハンバーグをモグモグと噛んでゴクンと飲み込むと目をカッと開く。

「おいしい……」

「そうですね。この料理は美味しいんですよ。ほらこの唐揚げもおいしいですよ。食べてみて下さい」

俺は自分の唐揚げをフランの口に運ぶ。それは正に、はい、あ〜ん。  
である

フランは唐揚げをかじるとまた表情を明るくする。

「これもおいしい…」

「でしょでしょ。俺もここの唐揚げはオススメなんですよ」

俺はかじりかけの唐揚げを自分の口に頬張る。

「「あ〜！！」

途端にシャルロットとラウラが大声を上げる。俺は驚いて唐揚げを喉に詰まらす。

咳き込む俺にフランがすかさず水をくれたので何とかなった。

「もう何だよ。シャルロット、ラウラ」

「だって今の、か、か、間接！」

「間接って何が？」

俺がカレーライスを食べながら聞くと、シャルロット&ラウラはたちまち不機嫌になる。

「「もう知らない（知らん）！！」「」

俺には何故二人がこんなにも不機嫌なのかさっぱりわからない。でもきつと聞いたならもつと不機嫌になるんだろうな。

「そんなにへそを曲げるなよ。なあフランさん……ってフランさんはどうしたんですか！？」

フランに話をしようとした俺が見たのは、涙を流しながらハンバーグを食べているフランである。

本当に女子という生き物はわからない。この事はよく一夏とも様々な論議が交わされたものだ。その時の結論は女子はとにかく繊細だ！。との事だった。

「すまん。でもなんか嬉しくて」

「嬉しいって何がですか!？」

俺はおろおろとしながら一応聞いてみる。

「まさかまたハンバーグが食べるなんて思って無かったから。あの人にはいくら頼んでも駄目だったから……」

俺はこの時気付いた。今回は引き分けてシャルロットは守れたが、フランは救えなかった事に。

「すみません。俺が勝てばフランさんをIS学園に入学させて、救うこともできたのに……」

「自分を責めないで欲しい。私は君に感謝しているのだから。こうしてハンバーグも食べられて良かった、本当に……」

「そうですか……」

その後の俺達は誰も話そうとはせず。みんな静かに食事を済ませてそれぞれの部屋に戻った。

「……………」

現在の時刻は午前零時。俺は今フランと戦ったアリーナにいる。特に何かをするわけでもなく、唯ジッとアリーナを見ていた。俺は目を閉じて考える。

(とうとう俺はホープを失っちまった。体の異常が無くなったとはいえ、その代償はあまりにも痛い。俺はこれからどうするか……)「……………剣斗?」

!?

俺は反射で振り向くとそこにいたのは、

「シャルロットか」

「ちょっといい?」

ああ。と返事をする。シャルロットは俺の隣に来て一緒に座る。

「良くわかったね。ここに居るの」

「何かここにいる気がしただけ」

「そうか」

「……………」

暫くの沈黙。アリーナには何も聞こえない。全くの無である。

「ねえ剣斗」

「ん？」

「剣斗って本当にシヤニなの？」

「まあな」

短い会話。二人は決して顔を合わせない。

「何で今まで黙ってたの？」

「自分に自信が無かったんだ。シャルロットやみんなを守れる程の力を持った自信がな」

「だけど！」

シャルロットは俺の袖を強く掴んでいる。

「僕は早く言つて欲しかった。強く無くても良かった。傍に居て欲しかった唯傍に……」

シャルロットは顔を上げないが、どんな顔をしてるかぐらいは俺でも検討がつく。その顔を見たくなくて、俺はアリーナを見続ける。

「それじゃあ駄目なんだよ。唯傍にいるだけじゃ、守れない」

「でも、僕は……」

「それに俺はまた力を失った。また振り出しだよ。」

「!?!。まさか剣斗また居なくならないよね？また剣斗が居なくなつたら本当に僕」

俺はシャルロットが言い終わる前にシャルロットを強く抱き締めた。

「シャルロット。もうそろそろ自立しないと駄目だよ。だけど安心しろ。守れる保証は無いが、シャルロットが自立できるまではしっかり傍にいてやる。それしか俺には出来ないからな」

「本当だね。約束だよ」

「ああ約束だ。だからシャルロットには笑っていて欲しいんだ。泣いた顔じゃなくて笑った顔でいて欲しい。君の母さんの様に……」

「うん。わかった」

シャルロットは俺の胸から顔を上げると最高の笑顔を見せる。

それは久しぶりに見たエンジェルスマイルだ。

俺はその笑顔に安心してシャルロットを抱き締めていた手を離す。

「あかさ、剣斗」

「次は何？」

「僕、これからはどっちで呼べば良い？剣斗、それともシャニ？」  
俺は少し考えて、答える。

「シャニって名前は気に入ってるし、昔の様に呼んでもらいたい気持ちもある。けど、俺は今の本当の自分を見てもらいたいから剣斗って呼んでくれ」

「剣斗ね。わかった。それとね剣斗、僕の事は昔の様にシャルって呼んで」

「シャルか。その呼び方も懐かしいな…。わかったじゃそろそろ戻るかシャル」

「うん！」

二人は一緒に部屋に戻る。昔の様に二人仲良く…。

「みなさん。昨日はありがとうございました」

現在の時刻は午前七時場所は学園前である。フランが本国に戻るの  
でみんなで見送りにきたのだが、

「剣斗の奴、来ないな…」

一夏は辺りを見渡すが剣斗の姿が無い。一夏が朝起きた時には既に  
剣斗は部屋に居なくて、今に至る。

「全くあいつは何処で何をやってるんだ」

「本当に剣斗さんは何を考えてるのでしょうか」

「後でぶっ飛ばすわよ」

箒、セシリア、鈴がそれぞれに文句を言っがフランは気にしてな  
かった。

「良いんです。きつとまたいつか会える筈だから」

「フランさん」

シャルロットがフランに近寄る。

「シャルロットさんには色々迷惑を駆けました。申し訳ございません」

「そんな僕は気にしてないですよ。それよりもこれどうぞ」

シャルロットは自分がしていたリボンを外すとそれをフランの髪に付ける。

「これは？」

「フランさんは綺麗なんですから、もっとオシャレをしないと駄目ですよ」

「そうか。これからは少しはオシャレにも気に掛けてみる」

「おいフラン！待だか！」

用意してある車からカルラの声がする。相当ご立腹のようだ。

「それではみなさん、またいつか」

フランはドアに手を当てる。

「フランさ〜ん！ちょっと待って下さいー！」



「……剣斗」

「はあはあ……。間に合った」

「お前どこに行ってたんだよ！」

一夏は俺の肩を激しく揺らす。

止める。そんな激しく揺られたらせつかく作ったこれが台無しになる。

「フランさん。これ食べてみて下さい！」

俺は紙の箱をそつと開ける。そこにはシュークリームが入ってる。

昨日シャルロットと別れた後急いで作った物だ。だから正直今は凄い眠い……。

「これは何？」

「シュークリームです。甘いお菓子です」

「へ〜、シュークリームか……」

フランは箱から優しくシュークリームを取り出すと、それを一口かじる。その後もフランは無言でシュークリームを食べている。すべてを食べ終えると、俺の手を握る。

「ありがとう。とてもおいしかった」

「そうですか。それは良かった。また食べに来てください。待ってます」

「わかった。また来るよ絶対」

「早くしないかフラン！」

車から再びカルラの声が聞こえてくる。余程イライラしてるのだから。車をさっきから何回も蹴っている。

「あいつも本当につるさいな」

「私はもう行く。……剣斗」

「はいはい何ですか？」

「一つ約束しないか」

「約束ですか」

「もし私がイタリア代表になったら、是非試合を見に来て欲しい」  
約束の内容には少し驚いたが、俺はフランの手を強く握っていた。  
「わかりました。是非見に行きます！フランさんがイタリア代表になる日を楽しみに待ってます！」

「うん……」

フランは顔を赤くしている。俺も手を握っていた事に気付いて直ぐに離れる。

「すみません。つい興奮しちゃって」

「いや別にいい。それじゃあ、またな剣斗」

「はい！いつか！」

俺達は握手をすると、フランはそのまま車に乗り込む。俺は走り行く車に手を振っていた。

そして車が見えなくなった所で背後からの殺気に気付く。

これはもじゃ！

「剣斗。何で僕にはお菓子が無いの？」

「貴様は私の嫁なのに、私にお菓子を渡さないとはいい度胸だな」

「いや、これは時間が無くてですね……」

「「問答無用！！」」

「ぎゃああ！！！！」

朝から学園には俺の悲痛な叫びが響いた。

## それぞれの約束（後書き）

いかがですか？

やっと一つのオリジナルの話が終わりました。さて次のオリジナルの話は予定では四話位で終わります。

それと先日感想でフランをヒロインにしてとの要望がありました。僕は結構悩んでいます。なので簡単なアンケートです。皆さんはフランをヒロインにしたいですか？ 沢山答えてくれたらうれしいです。もしかしたらアンケート零の可能性もありますがその時は自分で考えます……。

沢山の意見お待ちしています。

それではまた次回で！

## 瓜二つ（前書き）

今回はいつもより少ない目です。

## 瓜二つ

「はあああ!!！」

ガキイーン!!

鈍い金属音をアリーナに響かせ、剣斗と箒は模擬戦を行っている。お互いの使用しているISは日本製の訓練機「打鉄」である。フランがイタリアに戻ってから既に一週間が過ぎていた。あの一件でホープを失った剣斗も今は打鉄で補っている。

「くっ!」

「甘いよ箒」

模擬戦と言っても、さっきから剣斗のワンサイドゲームである。相手がリバイブなら未だしも打鉄が相手なら接近戦になる。正直同じ打鉄での接近戦なら剣斗はこの学年ならトップの実力がある。

「そろそろ終わりにしていい?」

「まだだああ!」

箒は刀を振り上げ、渾身の一撃を与えようとするが俺はそれを待っていた。

ガシッ

「何っ!?!」

俺は振り上げた箒の両手を左手で掴む。これによって箒の動きは完全に封じた。

「箒。優しい俺が君にアドバイスしてあげるよ。まず君はどんな攻撃に対しても振りが大きすぎる。それじゃあ、避けてくださいと言ってるようなものだ」

「くそっ」

箒は俺がアドバイスをしながらも何とか刀を抜こうとするが刀はびくともしない。

おいおい、人からのアドバイスはちゃんと聞けよ。これは箒には大切な事なんだから。

「お前は熱くなりすぎだ。まあいいや。最後のアドバイスだぞ。相手に隙が無いのにそんな大技は良くないよ。それは唯自分をピンチにするだけだ」

ズダダダダン！！

俺が箒に斬撃を五回当てた所で箒のシールドエネルギーは零になる。俺の圧勝である。

「箒、お疲れさん。また腕上げたな。実際に戦うと良くわかるよ」  
「だが私は剣斗に一撃も与えられなかったがな」

模擬戦を終えた俺と箒は一夏達がいるアリーナの中央に行く。

丁度一夏もシャルとの模擬戦を終えたようだ。結果は見なくてもわかる。

「一夏。今回はどんぐらい減らした？」

「だいたい三分の一位かな」

「ハハハ。一夏もまだまだだな」

「それはお互い様だろ」

俺と一夏は楽しく談笑している。

しかし俺は実際に笑っていなかった。みんなの専用機を見るのが辛かった。自分に力が無いことが、ホープを失ったことが悔しくて堪らなかった。

けどみんなには悟られないように笑顔を作る。

「それにしても剣斗は接近戦なら僕達の中でも多分トップの実力だよ」

シャルはさっきの模擬戦を誉めてくれるが、今の俺には嬉しくなかった。

「唯の接近戦ならね。でもみんなとやったらそれぞれのISの特性があるからな。実際にやったら勝てないよ俺は」

シャルは俺が何を気にしてるのかわかったらしく話を反らす。

「そっだ一夏。次は剣斗とやってみたら？」

「剣斗とか」

一夏は驚いた表情をするが、満更でも無い様子だった。



「どつする剣斗。やるか？」

「いや、遠慮させてもらおうよ。正直一夏に勝てる気がしないよ」

「そうか……。また何時かはやろうぜ」

「ああ勿論だ」

俺は一夏と約束をする。

最近思うんだが、俺って色んな奴と沢山約束してないか？ここまで沢山約束すると全部守るのも大変だな。勿論破る気はないが……。

「ねえ。あの子って」

「うん。凄く似てる」

「似てると言うより、瓜二つだよ」

急にアリーナ内の生徒達が騒ぎ出す。生徒達が注目する的に視線をやるとそこにいたのは、

「おい、あれって……」

「剣斗？」

そこにいたのは男の子である。それだけでも驚きだが、一夏達が一番驚いたのは男の子の容姿だった。

その男の子は髪が短髪の銀髪だが所々に黒髪があり、その瞳も赤色をしている。だがそれ以外の身長や顔立ちは全く剣斗と同じである。髪と瞳を同じにしたらきつと見分けがつかないだろう。

「なあ剣斗、あれって誰だ？」

「一夏は俺に何か聞いてるらしいが、俺の耳には何も入ってこなかった。」

「どうしたんだ剣斗」

「な、何で……、何でお前が此処にいるんだよ!!」

俺は感情を露にするが、目の前の少年は動じること無く余裕の表情を見せる。

「そんなに怒鳴るなよ。六年振りの再会だろ。もつと喜べよ」

「俺はお前に会いたく無かったがな……」

二人は唯見つめ合ってるが、剣斗には少年と違い余裕が全く無かった。

「だからお前は誰なんだよ!」

「一夏も焦れったくなり俺ではなく少年に聞いていた。」

「あれれ〜。剣斗お前まだ話してなかったのか？駄目だよちゃんと全てを話さなくっちゃ」

「……………」

俺は何も言うことが出来なかった。目の前にあいつが現れた事で考えることが出来なかった。

「仕方がない、俺が話してやるか……。」

「いいか俺は剣斗で剣斗は俺なんだ」

「は！？何意味のわからないこと言ってるんだよ」

一夏は更にイライラを募らせるが、それでも少年が慌てることは無い。寧ろ楽しんでるようだった。

「一夏も暑くなるなよ。ちゃんと話すから」

「何で俺の事を知ってる」

「聞いたからだよ。それより話を戻すぞ。まず俺だが、俺は剣斗の二重人格の一人だよ」

「二重人格の一人？」

「そう。俺は六年前に篠ノ之束によって取り出された人格だ」

「「「……」」」

一夏だけでなく、シャルや篤も黙り込んでいる。そして俺に視線をやる。

「本当なのか？」

「……ああ」

俺は小さく返すのが精一杯だった。

「だけど」

俺は少年を睨め付ける。今までに無い程鋭く……

「今更何しに来たんだ？唯会いに来た訳じゃ無いだろ」

「当たり前だろ。俺が来た目的はな……」

少年はポケットに入れていた左手を出す。

！？

その左手にされていたブレスレットは俺が持っていた物と同じ形をしていた。

「お前を倒して、俺が本物になるんだよ」

少年は光に包まれISを装着する。

「ウソ。あれって……」

黄緑色の装甲に四本のスラスタ、そして腰に携えてる刀。

このISは紛れもなく…ホープだった。

## 瓜二つ（後書き）

いかがですか？

今回からまたオリジナルの話です。  
と言うわけでもう一人の男子です。もう一人と言っても元は一人だけど…。

さて昨日からやってるアンケートですが、只今六人から意見を頂いて皆さんフランをヒロインにする。という意見です。まだまだアンケート待ってます。

奴の実力(前書き)

本日二作目。  
戦闘です。

## 奴の実力

「あれは…ホープ?」

「どう見たってホープだろ。だけどホープは確かに」

一夏の言う通りホープはフランとの戦いでコアまで完全に壊れた筈だ。

でも目の前であいつが装着してるISがホープなものも確かだ。俺が言うから間違いは無いだろう。だけどそんな事はどうでも良かった。

「何でお前が……」

「剣斗落ち着け。先ずは相手の出方を」

一夏は俺を俺を落ち着かせようとするが、もう遅かった。俺の怒りはとっくにMAXを越えていた。

「お前がホープに乗ってんだよおお!!」

俺は刀を握りしめ打鉄でホープに斬りかかる。奴との距離が零になる寸前に居合いで右腕を狙うが、奴は俺の居合いを避ける事はせず呼び出した「日熊」で受け止める。

「いきなり居合いかよ。お前さっき筈にアドバイスしてたじゃん。そんな大技は唯隙を生じるだけだった!」

奴は全体重を乗せた「日熊」の一撃を俺の腹に喰らわせる。

「ガバツ!」

俺は一気にアリーナに端まで飛ばされる。

更に今の一撃で打鉄のシールドエネルギーは殆ど削られた。

「剣斗！」

「くそ。幕、剣斗を頼む！」

「わかった」

一夏とシャルロットはお互いのISを展開して奴に向かっていく。

「ちょっとこれ何よ！」

「あれはホープ!? 一体何がありましたの!？」

「とにかく私たちもシャルロット達に加勢するぞ！」

更に騒ぎを聞き付けた鈴、セシリア、ラウラも一夏達に加勢する。

「おいおい、五対一ってリンチかよ。まあその方が面白いけどね！」

「これでも喰らええ！」

先ずは鈴が衝撃砲で先制攻撃を狙う。

「衝撃砲って。わざわざこいつに衝撃を与えてくれるようなもんだ  
「よ」

奴は衝撃砲を全て「日熊」で受け止める。

「やっぱりか」



「鈴、衝撃砲は駄目だ！双天牙月で攻めろ！」

「わかってるわよ」

一夏と鈴はお互いの近接武器で奴に向かっていく。

左右からそれぞれに攻めていく一夏と鈴だが奴は「日熊」を短く持ち、二人の攻撃を受け止める。

「ヤバい。このままじゃ「日熊」にゲージが」

「そうだぜ。早くしないと勝ち目が無くなるぜ」

「ならこれならどう」

！？

奴が一夏と鈴に気を取られてる内にシャルロットが奴の懐に入りシールドピアスを撃ち込む。

ガキイイーン！！

しかしシールドピアスが奴に届くことはない。

「シャルロット忘れたのか？ホープには最硬の刀があるんだぜ」

奴は鞘に納めた状態の真打でシールドピアスを受け止めた。勿論鞘は砕けたが中の真打には傷一つ付いてない。それによって奴には殆どダメージは無いようだ。

奴はそのままシャルロットを蹴り飛ばし、一夏と鈴も「日熊」を振り回すことで払い除ける。

「キヤア！」

「やるな。面白い！セシリア、援護を頼む！」

「了解ですわ」

ラウラは瞬時加速で奴に突進する。

セシリアは上空に上がりビットによりラウラを援護する。

「君は楽しめそうだな」

ラウラは瞬時加速の勢いそのままにプラズマ手刀を展開し、奴に攻撃する。

奴も「日熊」でラウラの攻撃を防ぐが、セシリアのビットにより確実にダメージを与えられている。

「流石にこの数はきついな…」

「ならば大人しく降参するか？まあお前にその気があっても私はお前を許さないがな」

「ほう、何でだい？」

「お前は私の嫁を傷つけたからな」

すると奴は自分が追い込まれてるのに笑って見せる。

「何が可笑的い」

「ふん。何が嫁だよ。お前達は夫婦か」

「当然だ」

「唯戦う為だけに存在してる君が夫婦とは笑えるな。所詮君は戦っ  
ていれば良いんだよ。お前は人じゃ無い、兵器だ」

「!!。何だと貴様ー!!」

ラウラはワイヤーブレードを飛ばし、奴の両手を狙うがワイヤーブ  
レードが飛ばされる前にブレードの先端を切られてしまう。重りを  
失ったワイヤーは決して伸びることは無い。

「しまった!」

「あんな挑発に乗るなんて、お前は兵器として出来損ないだな」

奴は「日熊」でラウラを叩きつけてそのままラウラを斬り飛ばす。

「ラウラ!」

シャルロットは直ぐにラウラの元に寄る。

上空にいるセシリアもビットを一旦自分の所に戻して相手の様子を  
伺う。

「何だお前達。攻めてこないのか」

「……一夏」

ラウラから一夏に通信が入る。

「わかってる。俺が「零落白夜」で決める。ラウラ達は頑張っ  
て隙を作ってくれ」

「わかってる。頼んだぞ一夏」

「ああ。任せろ」

一夏は「零落白夜」を発動する。みんなもそれを見て作戦を理解してそれぞればらばらに分かれる。

「どつやら、一夏の「零落白夜」で決めたいようだけど少し遅かったね」

奴は「日熊」の刃をスライド、連結し大剣にする。

「ウソ！」

「もう大剣になりましたの」

「いくらなんでも早すぎだろ！」

奴はみんなの驚く顔を見て更に笑い出す。

「そうだ。一つ言い忘れてたぜ。「日熊」は衝撃を受けた時より衝撃を与えた時の方がゲージが溜まるのが早いんだぜ」

「マジかよ……」

こう思ったのは一夏だけでなくみんなもそうだった。「日熊」が大剣になったらあのフランですら全く歯が立たなかったからだ。

「どうするラウラ？まだ俺の「零落白夜」で狙うか」

「ああ。それに確か「日熊」はまだ試作品だから長時間は使えない筈だ」

「それも無理だよ」

！！

奴はまるで一夏達の心を読んでもかのように。二人の会話に割って入ってくる。

「この「日熊」はもう試作品じゃ無いから長時間の使用も可能だよ」

「……………」

「とうとう黙ったか、まあいいや。早く君たちを片付けて剣斗を倒して俺が本物なるとしよう」

奴は「日熊」を両手で持ち、突きの構えをする。みんなも相手に備える。

「行くぜ……………」

ドーン……………！！

！？

「鈴……………」

いつの間にか奴は鈴に突きを喰らわせていた。鈴は今の一撃でシールドエネルギーが尽きてしまいISが解除される。

「早い……」

元々「日熊」はスラスタの無いホープに瞬時加速をさせる為の武器だが、ファースト・シフトしたホープは瞬時加速が可能であり、つまり二つの瞬時加速を同時に行っているのだ。

今のホープは一瞬のスピードならどのISより速いだろう。

速いと言うことはその分突きなどの突進系の技の威力も増すのだ。

「はい。一人脱落、次は誰だ？」

「私ですてよ！」

セシリアは上空から再びビットで奴を狙う。

「そんな不完全なビットで俺が落とせるわけないだろう？」

奴はビットが射程圏内に入る前に瞬時加速でビットを追い抜き、セシリアの前に現れる。

「くっ！」

セシリアはミサイル・ビットを放とうとするが、奴はそれよりも速く瞬時加速の勢いを乗せた「日熊」をセシリアに叩き付けた。

「きゃああ……」

セシリアは地面に叩きつけられ、気を失ってしまふ。

「セシリア！」

「一夏！僕が気を引くからその間に「零落白夜」を！」

シャルロットはショットガンを呼び出し、奴に向かいながら撃ち込む。

「実弾兵器が効かないのは知ってるだろ」

「やってみないとわからないよ」

「はあ、シャルロットも面倒だな」

奴は「日熊」を前に突き出し空気を放出する。放出された空気によってショットガンの弾は奴に当たらない。だがそれもシャルロットの作戦の内だった。ガシッ

「何っ」

シャルロットは奴がショットガンの弾に気を取られてる内に瞬時加速で奴に近づき抱き付いて奴の動きを止めた。

「一夏！今だよ」

「うおおお！！」

一夏は「零落白夜」を発動した雪片式型で斬り付けようと瞬時加速する。

誰もが勝利を確信したが、その時シャルロットは奴が笑っているのが見えた。その笑いはまるで罨にはまったなと言いたげだった。

「まだまだ詰めが甘いな」

奴は「日熊」を自分とシャルロットの間に入れると空気を放出して、シャルロットから解放される。

「やべえ！このままじゃ」

そう、一夏がそのまま突っ込めばその斬撃は奴ではシャルロットに当たる。

一夏はスラスターを逆噴射して何とか止まるが、その時には奴は「日熊」を振り上げていた。

「残念だったなお二人さん」

奴はセシリアにしたように一夏達も叩き付ける。

「シャルロット！一夏！」

「後はお前だけだな」

奴はゆっくりと地上に降り立つ。

「許さんぞ。貴様——！！」

ラウラは左目の眼帯を投げ捨てる。

金色の瞳が露になると同時にラウラは瞬時加速をする。

「「越界の瞳」か。少しは楽しめそうだな」

ラウラは両手のプラズマ手刀で複雑に攻撃してくるが、奴は「日熊」とシールドでその二つを防ぐ。



「こんなものかラウラ。お前の実力は」

奴は先程の様に挑発してくるが、ラウラはその挑発には乗らず涼しげな顔をしている。

「いいや。まだ私にはこれがある!」

ラウラは右手を突き出すと奴の動きがピタリと止まる。

「A I Cか」

「そうだ。これで形勢逆転だな」

ラウラの口元は段々歪んでゆく。

「貴様はゆっくりといたぶってやる。覚悟しろ」

「勝っても無いのに余裕だな」

「ふっ、今にその減らず口が聞けないようにしてやる」

ラウラはレールカノンの標準を合わせる。

「喰らえ!」

ドン!

「なっ、何だ?……」

ラウラは腹部に強い衝撃を受けた。だがそこには何も当たってない。だが衝撃を受けた、つまりそれは

「衝撃砲か……」

「当たり。「日熊」の空気放出を正面に集中する事で鈴のと同じ衝撃砲が出来るんだ。残念だったな。AICは範囲が狭いからな」

奴は「日熊」でラウラを叩き付ける事はせず。唯ラウラの武器を破壊していく。

そして無防備になったラウラに以前ラウラが鈴、セシリアにやった時の様に一方的な暴虐が始まった。

「うわあああつ！」

「ラ、ラウラ……」

助けに行こうとするシャルロット達だがダメージが大きく立ち上がる事も出来ない。

ラウラは唯されるがままだった。パンチやキックは何発も喰らいラウラのISはもう原型を留めていなかった。

「ほらほら、どうしたんだよ強化試験体。お前は戦う為の存在何だからもう少し粘れよ」

「うっ、う」

ラウラは既に意識が朦朧としてるらしく、言葉を返す事も出来ない。

「もう意識も殆ど無いか……。それじゃあ飽きたしそろそろ終わらせるか」

奴は「日熊」を空高く振り上げる。

今のラウラには避ける体力も無かった。

(所詮は私もここまでなのか。戦う為だけの存在か……、そんな私にも生きる事を望んでくれる人もいたんだがな……)

自然とラウラの瞳からは涙が流れていた。

「最後に泣くとは情けない。もういい、終わりだ」

奴は「日熊」を叩き付ける。ラウラは諦めて瞳を閉じる。

ガシャン！

奴は何故か吹き飛んでいた。

ラウラは閉じていた瞳をそっと開く。

「剣斗？」

剣斗は奴が「日熊」を振り落とす前にその肩を掴み、奴の顔に右ストリートを喰らわせていた。

ラウラは剣斗が来てくれて安心したが、剣斗がだす雰囲気からラウラ自身も怯えていた。

「テメエは許さねえ。テメエは俺の手でぶっ壊す!!」

その言葉は彼が言ってきた言葉の中でも一番殺気が混じっていた。

## 奴の実力（後書き）

いかがですか？

今回は最後まで剣斗を出してみました。こんなのは初めてです。

さて次回では剣斗の新たな本性が出ます。楽しみにしてください！

それではまた次回で！

## 名前

「一夏！大丈夫か！」

「俺は大丈夫だ筈。それより剣斗の奴どうしたんだよ。あんな剣斗見るの初めてだぞ！」

一夏は剣斗から視線を離せなかった。

いや、正確には離すことが出来なかった。もし視線を外したらその際に斬られてしまう。そう錯覚してしまう程剣斗の殺気は凄まじいものだった。

「私にもよくわからないのだ。最初は黙り込んでいたのだが、急に立ち上がると壊すと言いながら奴に向かっていったのだ」

一夏は拳を地面に叩き付ける。強く叩き付けたせいで、一夏の拳には血が滲む。

「悔しいけど、今はみんな動けない。剣斗に掛けるしかないな……」  
一夏と筈は二人の神城の戦いに目をやった。だが今の一夏達にはどちらが味方かわからなかった。

(ムカツク……)

剣斗は心の中のどす黒何かが込み上がるのを感じる。

(あいつが現れたのも、あいつがホープに乗ってるのも、みんなが

あいつにやられてるのも、ホープをあんな風に使われてるのも、全てがムカつく……）」

剣斗は刀を握る手に更に力を入れる。

（だから壊す。あんな風に使われてるホープを、あいつの全てを俺がこの手でぶっ壊す！）

「おいどうした。とっとと立てよ」

倒れてる奴は不適な笑みを浮かべながら立ち上がる。

「フフフ。お前が俺を壊すって？なめんなよ、お前が乗ってるのは訓練機。それに対しても俺が乗ってるのは専用機だぞ。性能が違うんだよ性能が！」

奴が言ってるのは正しい。だが俺も何故か不適な笑みが出てしまう。

「性能が違うだって？関係無いよそんなの。所詮は君もホープも偽物だからな」

「何」

奴の表情が険しくなる。俺は奴に更なる挑発をする。

「偽物が本物に勝てる訳無いだろう。偽物がでしゃばるなよ。それに……」

「うるせー！」

奴は俺の言葉を遮る。

「俺は偽物じゃ無い！お前を倒して俺が本物の神城剣斗になるんだよ……！」

奴は「日熊」で突きの構えをする。

「剣斗気を付けて。その突きはかなり速いよ！」

シャルロットは剣斗に駆け寄ろうとするが、

「奴が何をしようが関係無い。俺が壊すと言った以上、それは絶対だ」

「剣斗……！」

シャルロットは剣斗を見つめるが、剣斗の視界にはシャルロットは入っておらず、唯その目には奴しか映って無かった。

「とつとと殺られちまえ！」

奴はホープと「日熊」の二つのスラスターによる瞬時加速で最速の突きをくり出す。

その加速には専用機持ちの誰もが反応出来なかった。

だが今の彼にはその加速すら無意味だった。

バキィッ！

「何……でだ……！」

今度は奴が腹に剣斗のパンチを喰らわされていた。

「確かにその加速は厄介だ。けどな、その加速だと動きが直線的に

なってしまう。そんな加速なら反応はできなくても、合わせる事は簡単だ。」

剣斗は奴をみんながいる方とは逆の方に投げる。

「それにそろそろ「日熊」も大剣を維持できないだろ。そして一度戻った「日熊」は当分ゲージも溜まらない。それが「日熊」の弱点でもあるがな」

剣斗の言う通り「日熊」の連結は解除されスライドし、元の斧の状態に戻る。

「くそつ、始めに使い過ぎたか」

奴は「日熊」とシールドを投げ捨てると真打を抜き下段に構える。

「ビームライフフル使えよ。そしたら勝てるぜ偽物でもな」

だが奴は何も喋らず俺を見ている。その顔には先程の笑みは無く真剣そのものだった。

「俺はお前を倒して本物にならなくちゃいけない。だったらお前の得意な近接戦で倒す。それが俺の決意だ」

「お前の決意なんてどうでもいいんだよ。どっちにしる壊す事には変わり無いんだから」

そう、奴がどう思うが関係無い。寧ろ有難い位だ。近接戦なら奴を確実に壊せる。

剣斗も打鉄の刀を抜く。だがそれは一本では無かった。二本の刀を呼び出し、左手では刀を逆手に持つ。



「いくぜ……」

二人の声は決して大きくは無かったが、その声には確かな殺気があった。

奴は瞬時加速で剣斗に近づき切り上げる。剣斗は左手の刀で受け流すと右手の刀で横薙ぎの一撃を喰らわせる。

「やっぱり接近戦で俺に勝つなんて無理なんだよ。諦めて壊されちまえ」

「まだまだ！」

奴は真打を鞘に納め居合いを試みる。剣斗はそれを紙一重で避ける。蹴りを顔面に喰らわせ、鞘が無い代わりに一瞬で刀を中段に引いて構えて二連撃の居合いを奴の胸に喰らわせる。その衝撃でホープの胸の装甲は殆ど弾ける。

「必殺の居合いもこれじゃ相手にならないな」

奴とは違い未だ不適な笑みを浮かべている剣斗。その表情は余裕に満ちている。

奴は剣斗から距離を取ると再び突きの構えをする。

「おいおい、また突きかよ。それはさっきやっても無駄だっただろ」

だが奴はそんな言葉も気にも止めず突進してくる。

「やれやれ、学習能力が無いなあ」

剣斗は奴の突きを二本の刀で受け止める。

パキイン！！

高い金属音と共に打鉄の刀が一本砕けるが、奴の勢いは完全に止まる。剣斗は再び刀を中段に構えてカウンターを狙うが、

「かかったな」

「何？」

奴はニヤリと笑うと、真打を目一杯体の後ろに引く。

「俺の得意な技は居合いでも突進からの突きじゃ無えよ。俺が一番得意なのは、この密着状態から全身をバネの様にして繰り出す突きだ」

「やべえな」

剣斗は後方に回避を試みるがその時には真打が一直線に剣斗の右手に向かっていく。

（決まった！）

奴は心の中で叫ぶが、その思いは直ぐに否定される。

「マジかよ！」

剣斗は向かってきた真打を避けるのは無理だと判断し、とっさに真打を脇に挟んだ。

「いやいや、今は流石に焦ったよ。でも今ので完全にお前の勝ちは無くなったよ」

剣斗は残った刀で奴の右手を叩き、奴が真打を離れた隙に真打を奪う。

「しまった!」

奴は慌てて距離を取ろうとするが、剣斗は刀をホープの四本あるスラスターの内の一本に突き刺し奴をたぐり寄せる。

「逃げるなよ。今から壊してやるから」

「くっ!」

奴の顔は恐怖や恐れで一杯になる。

それを見て剣斗の顔は更に歪む。そして先程奴がしていたように今度は剣斗が奴に暴虐を開始した。

先ずはホープのスラスターを壊していく。これで奴はもう逃げるところは出来ない。

剣斗は遂に本格的な破壊を始める。

諦めたのか抵抗する様子もない奴に剣斗は容赦無く斬撃を繰り返す。

切り落とし、横薙、切り上げ、袈裟斬り、突き

様々な斬撃によってホープの装甲は殆ど碎け、奴は本当にISを装着してるのか思ってしまう。

だがそれでも剣斗の斬撃が止まることは無い。

「「「……」」」

一夏達はその場に立ち尽くしていた。今の剣斗の姿は異常だった。剣斗はよく笑うが今の笑いは唯人に恐怖を与えるものだった。剣斗の行為はラウラや奴がやったのよりも残虐でどつちが味方かわからなくなっていた。

「止める剣斗！それ以上やる意味ないだろ！」

一夏の声も剣斗に届くことは無かった。

遂にホープはエネルギーが底を尽き解除され元のブレスレットに戻る。

剣斗は真打を振り上げる。

「やっとこれでお前を壊せるよ」

剣斗の顔には笑みが消え変わりに唯奴を見下していた。

(結局俺はあいつに勝てないのか、俺は所詮偽物だからか)

六年前に篠ノ之束によって剣斗から取り出された俺には常に偽物の言葉がつきまどっていた。

俺には名前なんか無かった。篠ノ之束からも「偽物君」と呼ばれてきた。

一体自分は何者なんだ？自問自答する毎日だった。そこである日、俺は自分なりに答えを見つけた。

神城剣斗を倒して俺が本物になる。

それから必死に特訓したのに結局あいつには勝てなかった。理由はわからない。自分が弱いからなのか、それとも自分が偽物だからなのか、だが今となってはどうでもいい。

（ハハハ。ミイラ取りがミイラになるってか、情けない）

奴は自然と笑っていた。それは不気味な笑いでなく、本当に自然な笑いだった。

「悪いが、お前は神城剣斗になれねえよ。だって俺がここで壊すからな」

剣斗は一気に真打を降り下ろす。

ガッ

！？

「止めるんだ……剣斗」

「ラウラ」

ラウラはボロボロの体で剣斗の右腕に抱き付いていた。

「お前は以前私に言った筈だ……人を傷つけるのを楽しむ奴は弱いと、お前はそんな弱い人間なのか？」

「！……」

この時剣斗は刀に映る自分の顔を見る。

その顔は酷く歪んでいて、自分で見ても恐れてしまう。

周りを見渡すと一夏達も怯えた顔をしている。自分は一体何をして  
いたのか。こんな事をして意味があるのか。

剣斗は奴を離すと、自分の拳を額に叩き付ける。額からは血がでる  
がそれでやっとな冷静になれた。

「ありがとうラウラ。ラウラのお陰で俺は正気に戻れたよ」

剣斗は今にも倒れそうなラウラの頭を撫でる。ラウラは嬉しそうに  
頬を赤くする。

「あ、当たり前だ。私達は夫婦なのだからな。お互いがカバーし合  
うのは当然だ」

「そうだな俺達はまだまだ弱いからな。お互いカバーし合わなくち  
やな。……それよりも」

剣斗は座り込んでいる奴に視線を移す。

「幾つか質問するがいいか？」

「ああいいぜ」

剣斗も座り込み奴と視線を同じにする。

「まずなんでお前がホープを持つてるんだ？ホープはコアまで完全  
に壊れた筈だ」

奴は呆れたような顔をする。

「こいつはホープと同じ姿をしてるだけだ。コアは全く違う。ほら訓練機だつて姿は同じだろ？あれと同じだ」

俺は成る程と関心してしまう。奴は恐らく束さんの近くにいた筈だ。だったらホープと同じのを作るなんてわけないだろう。それに気づかずキレてた自分が恥ずかしくなってくる。

「そうか。じゃあ次の質問だ。お前の名前はなんだ？」

「名前？あるわけ無いだろう。俺は常に偽物と呼ばれてきたんだ。だから本物になるのにこだわったんだ」

俺は申し訳無い気持ちで一杯になる。こいつは元は俺だったんだ、こいつだって本物の筈なのに今まで偽物と言われる。これはかなり辛いだろう。

「……じゃあ最後に、お前の剣術は誰に習った？なかなかのものだったぞ」

「俺には剣術を教わる人なんか居なかつたからな、全て我流だよ」その言葉に俺は驚いてしまう。我流であそこまで出来たのだ。もしかしたらこいつの方が剣の才能があるかもしれない。

「何だかんだでこうやってお前と話すのは初めてだな」

剣斗の言葉に今度は奴が驚く。

「初めて？俺とお前は一度話したことあるぞ」

「え？」

「お前覚えてないのか。まあ無理もないか人格を抜くのは脳に負担が掛かるって言ってたしな……」

剣斗は頭を押さえて何とか思い出そうとするが、なかなか思い出せず苛立つてくる。

「無茶するなよ。人間は忘れた記憶を簡単に思い出せないものだよ。家族との記憶でも無い限りな……」

家族？何が家族だ。親？兄弟？兄？弟……弟！そうだ。俺は以前こいつと話してた。

俺は昔から突然意識が無くなり、気が付いたら知らない場所にいる事がよくあった。

町の人達が心配して検査して初めて俺は二重人格だと知った。

けどその事を知ったからって何が変わる事は無く、俺は時々意識を失っては知らない場所にいた。

それでも六年前に意識を失い気が付くと俺は束さんの基地らしき所にいた。

「あれあれ〜。君は誰〜？」

突然現れた女性に俺は必死で説明した。俺が二重人格であること、勝手に人格が変わること全てを話した。すると束さんは俺にVサインを見せる。

「それならこの天才束ちゃんに任せなさい」



それから数日経って俺は束さんに呼ばれた。基地に着いた俺は早速ベッドに横にさせられ、頭に機械を付けられる。

「束さん。これは？」

「これによつて、君のもう一人の人格を取り出すんだよ。それから私の事は束姉と呼びなさい」

「はあ」

俺は正直不安で一杯だったが、束さんはもう何かのスイッチを押していて俺は意識を失った。

「うーん。変な気分だ」

頭がスッキリしたと言うよりは、何かが抜けてしまった感じだった。

「やあ剣くん。気分はどうだい？」

「良くは無いですね。……それより束さ（束姉だよ）束姉この隣のはなんですか」

俺の隣のベッドには俺と同じ姿の少年が寝ている。まるで鏡を見ているようだ。

「それは剣くんのもう一人の人格を移した体だよ」

「ふーん」

東さんはパソコンで何か作業をしながらも俺の質問に答えていく。  
「こいつって喋りますか？」

「そいつは無理だね。まだ人格と体が馴染んでないからね」  
「ふん」

俺は隣にいる俺のほっぺをつついてみる。勿論反応は無い。  
つまなくなつた俺は東さんの元に行こうとするが、

「待ってよ」

「え？」

確かに声がした。しかしベッドの俺は未だ寝ている。

「待ってよ」

「何だ？」

俺は自然とベッドの俺に駆け寄る。

「俺は誰だ？俺がこっちにいるって事は俺は偽物ってことだろ」

「いや、俺に聞かれても」

「俺はお前より後に自分が目覚めた。だから俺が偽物か」

小学生の俺に聞くなよと思いつつも、頭を捻って考える。

「うん。俺より後って事はお前は俺の弟なんじゃん」

「弟？」

「ああきつとそつだ。そつに違いない」

俺は一人で納得している。

「剣斗くん。そろそろ帰る時間だよ」

作業を終えた束さんが俺の手を引く。

「束姉、あいつも帰れないの？」

「それは無理だよ。彼は本来存在しない人だからね。あの子はうちで預かるよ」

「そんな……」

俺はベッドの俺に視線をやる。

「行っちゃうのか？」

束さんには聞こえないだろう声、でも俺にははっきり聞こえる。

「また来るよ。その時までには名前考えとくから」

「名前か……。わかった待ってるよ」

二人は心の中で指切りをした……。

そつだ。けどあの後俺が束さんに会うことは無かつた。

「やつと思ひ出したか」

「ああ頭がスッキリしたぜ」

「ではそろそろいいか？」

「「「!？」」」

振り向くとそこには千冬さんと山田先生がいた。こんだけ派手にやつたんだから先生が来るのは当たり前か…。

「そいつには色々聞きたい事がある。悪いが着いてきてもらつぞ」「待つてください織斑先生……、」

言い訳をしようとする剣斗を千冬さんは黙らせる。

「神城こいつのやつた事は言い逃れできないんだ。お前にもわかるだろつ」

「それは……」

剣斗は言い返す事が出来なかつた。

「……では山田先生お願いします」

「はい。わかりました」

千冬さんに指示された山田先生は奴の元に駆け寄る。

「立てますか？」

「はい。大丈夫です」

奴は力無く立ち上がり、山田先生に連れていかれる。

「ええと…あなたの名前は……」

山田先生も事情を知ってるのか、奴をどう呼べば良いか悩んでいた。

「それは……」

「神城信太……」

「「え？」」

奴と山田先生は同時に振り向くと、影打を突きつける剣斗がいた。

「どんなことがあっても己の信念を曲げず、太く強く生きて欲しい。そうゆう願いを込めて付けた名だ！お前は神城剣斗の偽物じゃない

！お前は神城剣斗の弟である神城信太だわかつたな……」

その目には涙が滲んでいる。

「なんだそれ、ダッセー名前」

その言葉だけ残し信太と山田先生はアリーナを後にする。

もう二度と会わないかも知れない一人。だが剣斗はまたいつかは会える事を信じていた。

ーが、その翌日のHRで。

「皆さん。今日からこのクラスに転入してきた神城剣斗君の弟さんです」

「ええ〜！」

今回は俺だけがばかでかい声で叫ぶ。

「なんでこいつがいるんですか。織斑先生」  
剣斗は全く状況が読め無かった。

「何を言っている。こいつは元々その為に此処に来たんだぞ」

「へ？じゃ昨日連れていったのって」

「入学手続きだ。まあ勿論たつぷりしごいてやったがな」

千冬さんは指をポキポキと鳴らしながら説明する。

それだけで昨日奴がどれだけ千冬さんにやられたかがよくわかる。

「それじゃあ、自己紹介をお願いします」

奴は一步前に踏み出す。

「俺の名前は神城信太だ。剣斗とよく似てるが間違えるなよ。俺は

剣斗じゃない信太だからな」

剣斗は正直喜んでた。奴が信太と名乗った事を、信太が弟と認め  
たことを、

「良かったね剣斗」

左隣にすわるシャルロットが笑顔で言ってくる。

「ああ、俺にも家族ができたよ！」

俺は満面の笑みで答えた。

## 名前（後書き）

いかがですか？

今回のオリジナルは早く終わってしまいました。本当はもう少し長く書くつもりだったのに……。

さてさて次回から原作三巻に入っていきます。お楽しみに！

因みにアンケートの結果ですが、アンケートに答えてくださった皆さんがフランをヒロインにとのことだったので、フランもヒロインに追加しました！

これでヒロインがシャル、ラウラ、フランの三人になりました。これからどうフランを出すか楽しみです。

補足・信太とフランのプロフィールはいつか書こうと思います。



早朝トレーニングとお買い物(前書き)

楽しみにしていた人も、そうでない人も久しぶりの投稿です。

## 早朝トレーニングとお買い物

チュンチュン

「うん……。もう朝か……」

雀のさえずりにより目を覚ます剣斗。

現在の時刻は五時前。剣斗は朝のトレーニングの為にいつもこの時間に起きる。前までは目覚まし時計を使っていて一夏も起こしてしまふ事もよくあったが、この生活にもようやく体が慣れて目覚まし時計が無くても自然に起きれるようになった。

「ん〜。今日も頑張るか……」

ふにゅ。

あれ？

布団の中で伸びをした剣斗の手に何か柔らかいものが当たる。それはマシユマロの様に柔らかかですべすべしたものである。

(またか……)

剣斗はそつと布団を上から少しめくる。

「やつぱり……」

そこには銀髪の少女、ラウラがいた。

困ったことにラウラはよく布団に忍び込んでくる。最近では二、三日に一度は布団に忍び込んでくる。

俺も鍵を掛けたりなど様々な対策を練ってきたが、ラウラはそんなの気にも止めずに突破して布団に入る。

俺も最近では諦めが付いて鍵を掛ける事もせずラウラが布団に忍び込んでくる事も気にしなくなった。……唯一つを除いて

「またこいつは、服を着ないで……」

ラウラは何故か布団に入るときは服を着ない。身に付けてるのは左目の眼帯と待機状態のISである黒いレッグバンドのみである。

以前に服を着ろ！と強く言ってみたが

「夫婦とは包み隠さぬものだ」

とあっさり却下されてしまった。

俺はいつもの様に自分のYシャツをラウラに着させる。勿論ラウラの裸は見ないように……

「さて、そろそろ行くか」

俺は一夏達を起こさないようにそっと部屋を出ようとドアに手を当てると、

「お前は何処に行くのだ？」

「！。。。ラウラ起きてたのか」

「いつも私が起きるとお前がいらないからな、今日は三時から起きていたのだ」

ラウラはベッドから起き上がると俺に歩み寄ってくる。  
Yシャツ一枚しか着てないラウラは何かエロかった。

「こ、これから早朝トレーニングだよ。生身の体でも毎日鍛えたいからね」

「ほう、流石は私の嫁だ。日々の鍛錬とは関心だ」

ラウラはうんうんとうなずくと直ぐに着替え始める。俺は突然ラウラが生着替えを始めたので反射的に後ろを向くが、一分もしない内に着替え終わる。

速えなこいつは、何かコツでもあるのか？

「それでは私もトレーニングに付き合おう」

「え、何で？」

「何でって、夫婦だからに決まってるだろう」

ラウラは当然の事を聞くなと言わんばかりにため息をつく。

「もつ色々違う所あるけどいいや。じゃあ行くかラウラ」

「ああ！」

「それで先ずは何をするのだ？」

剣斗とラウラは学園内にあるランニングコースにいる。ランニングコースでもIS学園がかなりでかいので一周が一キロもある。

ここはよく運動部も使うのだが時間も早いので今は誰もいない。

「最初はランニング五キロからだよ」

「思ったより少ないな」

ラウラはさっきとはうって変わって情けないと言う。

まあラウラの言う通り自分でも情けないと思っている。

以前一夏にはランニング十キロ、素振り五百回もやるなんて言ったが、実際にやってみると時間的にも体力的にもそれをこなすのは無理だった。まあ普通に考えればわかるのだが……

「良いんだよ。無理すると後々授業に響くしな。ほら行くぞ」

剣斗とラウラは軽く走り出す。

「そつだラウラにお礼言つとかないとな」

「何をだ？」

剣斗達は走りながらも会話をする。

「いや、信太の事だよ。信太はラウラに結構酷い事したのにラウラはよく話しかけてくれたからな」

約半月前に学園に入学してきた神城信太。

信太は学園に来て早々専用機持ちにケンカを売って見事にみんなを圧倒した。

まあ、信太が使ってたホープは俺が完膚無きまでに壊したので、信太も今は訓練機を使ってるが……

それはさておき、この事もあって信太はクラスでも浮いてる存在だった。

だが以外にも信太に一番声を掛けたのはシャルでは無く、一番酷くやられた筈のラウラだった。

ラウラが話すなら私も話してみよう。

そんな考えがみんなの頭でリンクしていき今ではみんな何も無かったかの様に接している。

「別に礼を言われる事はしてないさ。私は唯お前にやってもらった事をしただけさ」

「俺が何かやったか」

ラウラには悪いが、俺は何か特別な事をした記憶が無い。

「お前は私に沢山の事をしてくれた。そのお蔭でこんな私にも話せる仲間が増えた。だから信太にもそうなって欲しいから話しただけ」

だ」

本当にラウラは変わったと剣斗は思っていた。

以前のラウラは決して他人の事を考える娘では無かったが、学園に来てからは大きく変わった。これからはラウラも兵器としてで無く人として生きていけるだろう。

「それでもラウラが話しかけてくれて助かったよ。ありがとな」

俺はラウラの頭を撫でる。

「そうかそうか。まあそれなら良いだろう。たっぷり誉めるがよい」

「はいはいこれで良いんだろ」

「」

ラウラは何故か頭を撫でられるのが好きらしい。俺ががちょっとでもラウラの事を誉めると

「誉めるなら頭を撫でろ」

と言ってくる。

俺としても嫌では無いので頭を撫でるのだが、その時の顔がまるでテストで良い点数を取って誉められた子供の様に上機嫌になる。

ラウラは以外と単純だと思うが、そんな所も可愛らしく感じてしま

う。

そんな事を思いながらも剣斗達はランニングを終えその後はラウラがいたので今日は素振りをししないで、食堂で早めの朝食を取り教室

に行った。

「あれ、信太にシャル。早いな」

「おお剣斗達か、お前等も早いな」

剣斗達が教室に入るとそこには信太とシャルがいた。しかも何か話し合ってるようだ。

「何お前達話してんだ？」

「ああ？何でもねえよ。なあシャルロット」

「えっ、うん！何でも無いよ全く！」

信太の問いかけに首を縦に大きく振りながら賛同するシャルロット。うん。そこまで言われると余計聞きたくなるが止しておこう。あまりしつこいと嫌われちゃうし。

その後も一夏や篝などと続々と生徒が集まって、最後に千冬さんが教室に入り、朝のHRが始まる。

「あれ？織斑先生。山田先生はどうしたんですか」

一人の生徒が山田先生が居ないことに気付く。



これはかなり珍しい事だ。山田先生は仕事一筋といった感じで、今まで授業やHRに遅れたことは一度だって無い。風邪だろうか？

「山田先生は校外実習の現地視察に行ってるので今日は不在だ。よって山田先生の仕事は私が今日一日代行する」

「校外実習？」

千冬さんの説明に信太は校外実習の言葉に疑問を持つ。

「来週からある臨海学校の事だよ。三日間あるんだけど、初日は自由時間で残りの二日間はISの試験運用やデータ取りをするんだよ」

「へー、臨海学校ねえ」

信太の疑問にシャルが丁寧に答えてくれるが信太にはあまり興味が無さそうだ。

「おいおい、臨海学校だぞ。テンション上がんないのか？普通上がるだろう。俺なんかもうテンション上がりすぎてもう既に夜せんぜん寝れてないよ。」

「ええ、山ちゃん先に海に行っただんですか？ずるい」

「私も行きたくない」

「山ちゃん何やってんだろう。泳いでるよね、泳いでないわけ無いよね」

いつもの事ながらちよつとでも話題があると直ぐに騒ぎだす。よくもまあこんなにも言葉が出るものだ……

そしてそれを鬱陶しそうに千冬さんが黙らせる。

「ええい、静かにせんか。お前等も来週行くんだから騒ぐな。いいな」

「「「はい」「」」

みんなの声が見事に重なる。見事なチームワークだなこのクラスは

今剣斗とシャルと信太は夕食を食べるために食堂にいる。いつもいる筈のラウラは何やらドイツから連絡が入ったらしく今は居ない。一夏達も今は臨海学校に向けて色々準備をしているらしい。

「信太。今日何食う?」

「オムライス」

「じゃあ俺はハヤシライスにしよう」

「何でそうなるんだよ……」

剣斗達は正直下らない会話をしながら、テーブルを探す。

「ねえ信太君。こっちで一緒に食べよう!」

声のする方を向くとそこには相川さんとのほほんさんがこっちに手を振っている。

のほほんさんは相変わらず長すぎる袖をブンブン振り回している。のほほんさんよく見る。君の振り回す袖が相川さんの頭に当たってるぞ。相川さんの顔も段々恐くなってるぞ。

「ええとだな……、その……」

信太は何と答えて良いのかわからず、相川さん達と自分のオムライスを交互に見る。

信太はよく他の生徒に誘われるが、このように何と答えて良いのかわからず結局断っていた。

「信太、お前はあつちで食べてこい。お前はもつと他の奴と仲良くするべきなんだよ。だから行ってこい」

「……わかった」

信太は小さく言うとのほほんさんの方に行った。のほほんさん達は信太が向かった瞬間騒ぎだし他の生徒もどんどん集まってきて、信太が吞まれていった。大丈夫だろうかアイツ……

「あれ？剣斗、信太はどうしたの？」

シャルは自分の料理を持って来る。因みに今日のシャルのメニューは焼魚定食だ。

「ほれあそこ」

俺は人込みに吞まれる信太を指差す。その状況にシャルも苦笑いしかできていない。

「アイツは多分大丈夫だ。さっ、こっちも食べようぜ」

「うん……」

俺はまだ心配そうに信太を見つめるシャルを無理矢理ふたり用のテーブルに座らせる。

「あのさ剣斗」

食事をしていた俺にシャルが話しかける。

「何だ？」

「今週の日曜って暇？」

「日曜ねえ……」

俺は頭の中でスケジュール表を開く。  
日曜の予定……日曜の予定……うん。白紙だね。青空の雲より真っ白だね。

「凄い暇だね」

「だったらさ買い物に付き合ってくれない。臨海学校に必要な物買いたいから」

「わかったいいよ。じゃあ今度の日曜は買い物に行くか」

「うん！」

その日のシャルはずっと上機嫌で笑顔だった。

そして約束の日曜日。剣斗とシャルはショッピングモールに向かうモノレールに乗っている。

「今日はいい天気だな。買い物には最適だな」

「うんそうだね。……ねえ剣斗」

「どうしたんだシャル」

シャルは何かを言おうと口をもごもごしている。シャルは何か言いづらい事があると決まって口をもごもごする。そんな時は何かをやるわけでなく、唯じっと待つ。そうしていると自然とシャルは話し出す。俺がシャルと居て知ったシャルの特徴だ。

「以前さ剣斗は自分の事、剣斗って呼んでって言ったじゃん」

「言ったな」

「それでさ、やっぱり僕としてはね……そのね……」

シャルは次に指をもじもじとする。  
成る程ね。シャルの言いたいことはだいたい検討がついたな。

「別にいいぞ」

「えっ?」

「シャニって呼びたいんだろ。別に俺はいいぞ」

「本当!?!」

シャルは嬉しそうにこっちを見る。

「勿論。だけどシャニって呼んでいいのは二人の時だけだぞ。みんなが居るとややこしいからな」

「うんわかった!シャニか……シャニ……えへへ」

シャルはシャニと何回も呟いては笑顔になる。おいどうしたんだシャル。こっちに戻ってこい。

剣斗はシャルの目の前で手を動かすがシャルの反応は無い。

「到着、シヨッピングモール。お荷物のお忘れにご注意下さい」

「やべ!もう着いたのか。おいシャル!ああ面倒だ!」

剣斗はシャルの手を引っ張り急いでモノレールから出る。

「ふう、何とか間に合ったな。シャルそろそろ目を覚ませ」

剣斗はシャルのおでこに軽くデコピンをする。

「痛ってどうしてモノレールから出てるの？」

「全くシャルは…。ほら行くぞ」

剣斗は繋いだままの手を引く。

「えっなんで僕達手繋いでるの？」

「ん？ああすまん。今離すよ」

「い、いいよ。このまま行こー！ね！」

剣斗が離そうとした手をシャルが強く握る。ちょっと痛いですがシャルさん。手からあまりよろしくない音がしてるんですが。

だがそんな剣斗など気にもとめず、シャルは剣斗を引っ張っていく。さっきとはまるで立場が逆である。

「……………」

シヨッピングモールに向かう二人を見つめる人、もとい少年がいた。

（全くあの二人は大丈夫か？手を繋いでるから上手くはいつてると思うが…………）

信太は物陰に隠れながらも、剣斗とシャルを心配していた。何故信太が来てるかというところ、シャルロットに頼まれたからだ。この前に教室で話し合ってたのも、どうやって剣斗を買い物に誘うかだった。どうやら夕食の時に誘えたらしく、俺も安心したんだが、そしたら今度は

「お願い！心配だからこっさり着いてきて」

である。正直面倒だったが生憎俺も日曜は暇だった。それにこの後どうなるか結構気になっていた。

「さて、これからどうするのかな……」

「ほう、何やら楽しそうだな」

！！

信太が振り替えるとそこにはラウラがいた。

「ラウラ……何でお前がここに」

「私の嫁が朝から何処かえ出掛けるみたいだったからな着いてきて」

「着いてきたって」

「では私は剣斗に合流するので失礼する」

そう言っすたすたと歩き出すラウラ



(これはマズイ止めなくちゃ)

もしラウラが剣斗達に合流されたら、後でシャルロットに何て言われるかわかったもんじゃない。下手したら殺されるよ俺。

「ちょっと待つんだラウラ！」

「何だ？」

「もし急に合流したら剣斗は嫌がるぞ」

「むっ」

ラウラが少しばかり動揺する。

「剣斗は嫌がってそのままラウラの事嫌いになるかもな」

「それは困るな……」

ラウラはとりあえず歩くのを止める。

まあ実際にはラウラが合流しても剣斗なら快くOKするだろうが、俺がOKでは無い。

「だから俺に考えがある」

「ほうなんだ」

「ラウラは水着は決めたのか？」

「いや、学校指定の水着にしようと思うが」

信太はここだと言わんばかりに声を荒げる。

「そんなんじや駄目だ！」

「!？」

「そんないつもの姿を見せて意味あるか？ いや無い筈だ！ 剣斗はきつといつもと違うラウラを求めている筈だ！」

「確かに一律ある。だが私にはどれを選んだらいいかわからない」「安心しろ俺も一緒に選んでやる」

「本当か？」

ラウラの顔は少し明るくなる。

「本当だ。よしこれから水着を選んで剣斗を喜ばせるぞ」

「ああ、絶対嫁の視線を釘付けにしてやる」

信太とラウラは剣斗達が行った方とは逆の方に行く。

（正直水着なんて一切わからんがここは俺の天性の勘に全てを掛けよう！）

信太は不安を残しながらも、二人の買い物邪魔する最大の敵を撤退させた。

「そついえばシャルは何を買った？」

剣斗はシャルに手を引かれながら今三階にいる。

「水着だよ」

「そうか。俺も水着買わなくちゃ無いしな。おっここか」

エスカレーターから少し歩いた所に水着売り場があった。

「じゃあ男女別々だから一旦別れるか」

「あっ……」

握ってた手を離すとシャルは不満げな表情をして握ってた手を見つめる。

「どうしたんだよシャル」

「えっ、ううん。何でも無いよ」

「そうか。じゃ三十分後にまたここな」

「うん。わかった」

シャルは女の水着売り場に向かう。

剣斗も男の水着売り場に向かう。やはり男のはあまり種類は多くなく、俺は深緑の水着を手に取る。

(俺はこれでいいや。そうだ信太のも買わなくちゃ)

幸いにも剣斗と信太は体型が殆ど同じである。つまり剣斗が着れるなら信太も着れるということだ。

俺は自分の隣にあった黒色の水着を手に取る。

(まあ信太に好みは無いだろうしこれでいいや。さて、まだ時間はあるが先に待ってるか)

水着を買い、元の場所に戻るがやはりシャルはまだいない。仕方なく俺はベンチに腰掛ける。

「そのあなた」

「……」

「そのあなた!」

「ん、俺?」

いきなり声をかけられ、顔を上げるとそこには知らない女性客がいる。

「そうあなたよ。その水着片しとして」

またか……

ISが普及したことで女尊男卑の風潮が一瞬で浸透した。このせい

でISに乗れない人でも偉そうに命令してくる。本当に東さんは面倒なのを作ったな。

「これですか？」

「そう、あとこれもお願いね」

「了解」

俺は女性に頼まれた荷物を次々と片していく。以外と荷物は重く、少し汗ばんでしまう。

「あのすみません。彼は僕…私の連れなんです」

俺が粗方片付けが終わると、シャルが口を挟む。

「あなたの男なの。どうやらちゃんとしつけてるようね」

しつって俺は犬か？いくらなんでもそれは酷いだろ俺は人だぞお前の目は腐ってんのか。

「まあ手放さないようにね。そのワン」

女性は最後に俺を見下して去っていく。

「ありがとうシャル助かったよ」

「全く。シャニにはプライドが無いの」

シャルは呆れている。そんな軽蔑する目で見ないでくれ、俺だって

悔しかったんだから

「いや俺だってプライドぐらいあるよ」

「だったらしつかり断りなよ。シャニ、カッコ悪かったよ」

「だってさあそこで問題起こしたらシャルに迷惑掛けたる？」

「えっ」

「そんなプライドにこだわってシャルに迷惑掛けたら折角の買い物も楽しくないじゃん。俺にとってプライドなんておまけみたいなもんだよ」

「うっ、……そのごめんね。カッコ悪いなんて言っつて」

シャルは顔を伏せながら俺に謝る。早とちりをしてしまっつて恥ずかしいのだから耳まで真っ赤にしてる。

「気にすんなよ。実際にカッコ悪かったし、それよりシャル、水着は？」

戻ってきたシャルだったが、何故か手ぶらである。

「そのさ、シャニに選んで欲しいんだけど」

俺は暫く考えて答える。

「いや俺はここで待ってるよ」

「……それって嫌ってこと？」

シャルの目に涙がどんどん溜まっていく。それは今にも溢れそうになり、俺は慌てて否定する。

「違うんだよシャル！俺は楽しみにしてるんだよ！」

「楽しみに？」

シャルは今にも溢れそうな目で俺を見つめる。正にそれは小型犬の目である。

「ほら、今見ちゃうと臨海学校で見ても感動が少ないだろ？シャルは可愛いから当日の楽しみにしたいんだよ！」

「本当？」

シャルの問いに首がとれる位に首を激しく動かす。するとシャルの顔はどんどん明るく綺麗になる。

「わかった。じゃあ選んでくるから待っててね！」

「おう」

シャルは今度はスキップで女の水着売り場に向かう。その顔は本当に幸せそうだ。

（はあ、本当に女の子って難しいな。これだと臨海学校も唯じゃすまないな）

今後の展開に不安を隠せない剣斗だった……



## 早朝トレーニングとお買い物（後書き）

いかがですか？

やっぱりなかなか上手く書けませんね。自分のは会話ばかりで、何とか直そうとしてるんですが……

さあ次回は遂にあの人登場&久びさのあの人登場か！？

（もしかしたらまだでないかも）

それではまた次回の更新で！

**臨海学校スタート！（前書き）**

いよいよ臨海学校が始まります。

## 臨海学校スタート！

ジリジリリリ！！！！

朝から剣斗の部屋には目覚まし時計のでかい音が響く。

(うっ、うるさいなあもう)

剣斗は目覚まし時計で起こされるのが嫌いだ。人がせつかくいい夢を見てるのに、その夢を中断させてその上強制的に起こす。非常に不愉快だ。

だから普段は目覚まし時計に頼らず自分で起きるのだが昨日は今日の臨海学校が楽しみで眠れず、結局寝たのは深夜の二時だった。

なかなか鳴り止まぬ目覚まし時計を剣斗は布団から手だけを出して手探りで目覚まし時計を止めて布団から起き上がる。

「あれ？あいつ等が居ない……」

何時もなら左右のベッドにいる筈の一夏と信太の姿が無い。

「あいつ等もう起きたのか……」

未だ半分夢の中にいる剣斗は頭をかきながら立ち上がると、机に手紙が置いてある。

(なんだこれ？)

剣斗は置いてある手紙を読み上げる。

「何々、剣斗お前がなかなか起きないから先に行くぞ。荷物は俺が運んどく、遅れるなよ。」

PS・もし遅れたら織斑先生に殺されるぞ。多分……………信太より」

(遅れる？何がだ)

剣斗は手紙の内容が理解できずとりあえず時計を見る。時計には八時半と表示されている。

ふと剣斗は昨日のHRで山田先生が言っていた事を思い出す。

「みなさん。いよいよ明日から臨海学校ですね。明日が楽しみなのはわかりますが、バスは八時に出ますのでそれに遅れないように早めに寝ましょうね！」

(…………バスが八時で今が八時半…………バスが八時で今が八時半…………あれ?)

剣斗はあることに気付き夢から一気に現実に引き戻されるそれは目覚まし時計よりも確実に現実に引き戻される特效薬だ。そして剣斗の顔はどンドン青ざめていく。

「ね、寝坊した〜！」

剣斗の叫び声は部屋だけでなく、一年生寮全体に響くが誰もこの寮にはいないので全く反応がない。

「信太の野郎わざと起こさなかつたな！」

信太に対する怒りを全面に出しながらも剣斗は急いで着替える。何

時もなら三分以上は掛かるがこの時は何かに目覚め三十秒で着替えられた。

「ふん、人間やれば出来るって今はそれどころかじゃないだろ！」

自分でも訳のわからないツッコミをいれながら部屋を出て走り出す。走りながらも剣斗はこれからどうするかを考える。

（どうしようどうしよう！電車で行ってもあそこの周りには駅なんて無いし、タクシーでも間に合わない。つかあの距離をタクシーで行く為の金なんかねえし。でも早くしないと千冬さんに殺される」

剣斗にとっては遅れる事よりも、遅れたことで千冬さんに怒られる方が問題だった。

相手が山田先生ならまだ笑って済むのだが、あの世界最強ではそうはいかない。ましてや理由が寝坊なんて知られたら確実に俺は千冬さんが持ついくつもの必殺技の餌食になるだろう。そうなったら最後、きつと臨海学校も楽しめず帰った後も反省文を延々と書かされるだろう。

それだけは意地でも避けたい剣斗は急いで学園を出る。すると門のすぐ傍にはある物が置かれていた。

「成る程、これで間に合わせろってことか……」

剣斗には一筋の希望が見えた……

「海だあ〜キレイイ」

トンネルを抜けたバスでクラスの女子が声を上げる。

臨海学校の初日、海が夏の太陽の日差しを反射して輝いている。まるでみんなを歓迎してるかのようだった。

「おおこれが海がキレイだな」

「なあ信太」

初めての海に興奮してる信太に隣に座ってる一夏が肩を叩く。

「ん？」

「剣斗のやつ大丈夫か？やっぱあの時起こしてた方が良かったんじゃないか」

本当は一夏は剣斗を起こそうとしていたが、信太が後でちゃんと来るよと言って起こさせなかった。

織斑先生には体調が悪いので遅れて行くと報告した。織斑先生は最初は何か言いたげだったが何も言わずに唯わかったと言っただけだった。

「大丈夫だよ。きつと間に合うよたぶ…って、危ないよラウラ！」

一夏の心配をよそに海を眺めていた信太の手の横ぎりぎりにナイフが突き刺さる。後ろを向くと鬼の形相をしたラウラがいた。

「おい信太。もし剣斗が来なかったらどうなるかわかってるか」

「それはだな……」

言葉を濁す信太に今度は頭ぎりぎりにナイフが突き刺さる。

「剣斗が来なくてせっかくお前と買った水着が見せれなかったらその時は……」

ラウラは最後に後ろから信太の頸動脈にナイフを突き付ける。

目を見なくてもわかる。こいつマジだ。信太はとりあえずわらってラウラを落ち着かせる。

「大丈夫絶対剣斗は来るから。だからそのナイフを仕舞えよ」

「ふん」

どうやら納得してくれたらしく、突きつけていたナイフを仕舞う。信太は安堵の息をつく。

「そうだよ信太」

「!?!」

再び信太が振り替えるとラウラの隣に座るシャルロットが天使のような笑顔をしている。だがその笑顔に信太は寒気を感じる。

「僕も剣斗が来ないのは嫌だなあ。もし剣斗が来なかったら……」

シャルロットはラウラのようにナイフを突き付けたりはしないが、その言葉ナイフより鋭く、そこいらの兵器より威力は抜群だった。信太はシャルロットの笑顔と言葉に冷や汗が止まらなかった。

「だ、大丈夫だよ。き、きつと来るさ。ハハハ」

信太はかなり動揺してるのがわかる。

一夏は隣で静かに合掌している。おい貴様どういっつもりだ？いくら俺でもそれは怒るぞ。

ブウン！！

突然後ろからバイクのエンジン音がする。みんなが振り返るとそこには黒いバイクが走っていた。

「信太ー！どこだー！！」

「剣斗！？」

シャルロットはバイクの意外な運転者に驚く。

「お前何でバイクに！？つか免許は」

一夏は疑問に思ったことを聞くが剣斗はきっぱり答える

「そんなもんとづくに取った。それより信太は何処だ！」

「俺はここだよ」

信太はバスの窓から顔を出すと怒り狂ってる剣斗に手を振る。



「てめえよくも起こさなかったな！普通起こすだろルームメイトだぞ！」

「るっせえ！だいたい前日からドキドキして眠れない方が悪いんだよ！」

「ドキドキしねえてめえはどうかしてんだよ！」

「俺だつてドキドキしてるよ！」

「だったら少しは態度に出せよ！てめえは子供らしくねえんだよ！」

「どうだつていいだろ！文句あんのか！？」

「文句がありまくってるからこうやって怒ってるんだろ！」

「「「……」」」

二人の激しい兄弟ケンカにバスの中は静まりかえっていた。けどそんな状況を楽しんでる人もいた。

（シャニと信太もあんなにムキになっちゃってかわいいな）

シャルロットは二人のやり取りを見ていて一人クスツと笑っていた。いつもは冷静な筈の信太もあんなにムキになってるのはそれだけ剣斗に打ち解けた事だ。一時は二人は仲良くやれるか心配だったがそれはいらん心配だったとシャルロットはほっとした。

「ほう、剣斗は寝坊していたのか」

「「!!!??」」

バスの前方から威圧感たっぷりの声が聞こえる。その声で二人の兄弟ケンカは一瞬で止まる。

「私はあくまでも体調が悪いって聞いてたんだが……」

千冬さんの声に二人は目を泳がせる。

「それはですね……、おい剣斗お前何処行くんのだ!」

剣斗は段々小さくなっていく。実際には速度を落として後ろに下がっているだけだったが……

「おい剣斗何処に行くんだ? さつさとここにこい」

「……はい」

千冬さんの声に逆らうことは出来ず、剣斗は再び速度を上げて信太のいた所を過ぎて千冬さんの隣に行く。

「もう一度言う。私はあくまでも体調が悪いと聞いたんだが、貴様は寝坊したのか」

「はい。その通りです」

俺は決して千冬さんの目を見ない。まあ千冬さんの目を見て話したら絶対事故起こすけどね……

「いい度胸だな。本当なら貴様はこのまま学園に返して三日間反省

文を書かせるところだが、貴様は誰よりも臨海学校を楽しみにしていたしな」

「織斑先生……」

「二日目と三日目には特別メニューを用意してやる。感謝しろよ」

「はい……」

俺は自然と涙が出てくる。海の近くのせいかもしれないもより涙の塩分濃度が高い気がする。気のせいだろうか……

「どっちにしろもう目的地に着くからな。お前もしっかりついてこい」

「了解です」

暫くバスと並走していると、千冬さんの言葉通り目的地である旅館に到着する。

いつもの事ながらこの学園に関わる物は全てが規格外だ。目の前の旅館もかなりの大きさだ。これが貸し切りなのが凄い。絶対部屋余るでしょ。

俺はバイクを止めると、バスから降りてきた信太に斬りかかる。

信太は見事な真剣白刃取りでかろうじて刀が当たるのを防ぐ。

「あぶねえなお前！」

「お前は俺が壊す！今ここで……」

「お前それ前に言っただろ！その時こっちは本当に壊されたんだから冗談に感じねえよ！」

「冗談じゃない！俺は本気でお前を壊す！」

「ちよつと待て剣斗」

バスから飛び出した筈が二人の間に入る。

「お前最初に私に人に刀を向けるなど言っただろ。あれはどうなった」

「あの時は真剣で筈は殺そうとしていた！だが俺は逆刃刀で殺すんじゃないで壊すだけで骨を何本か折るだけだ！」

「いやいや、だからそれが駄目だって」

「てめえの御託はどうでもいい！てめえが起こさなかつたせいで俺がどれだけ苦労したか……」

「だからそれはお前がいけないんだろ」

「まだそれを言うかー！」

剣斗は筈を突き飛ばし再び信太に斬りかかる。その場にいたみんなが信太は殺られたと思ったがそこにまたあの人が現れる。

パパン！

「貴様等はいいい加減にしろ。やりたいのなら後でやれ。先ずは挨

拶からだいいな」

「「は、はい」」

二人は頭を押さえながら列に並ぶ。まだ不服そうな顔をしているがこれ以上は良くないと感じて大人しくする。

「いつか壊すいつか壊すいつか壊すいつか壊すいつか壊すいつか…」

「お前怖いよ」

剣斗の谷より深く、ゴキブリの生命力よりもしぶとい怒りに信太も後悔していた。

「それでは、これから三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の邪魔だけはしないように」

「「「よろしくおねがいします」」」

千冬さんの言葉の後に全員が挨拶をする。

この感じいいね。臨海学校だって実感湧いてきた。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」  
着物姿の女将さんもお辞儀をする。

歳は三十代に見えるが、しっかりとした大人の雰囲気漂わせてる。女将とは思えない綺麗で若々しかった。

「あら、こちらが噂の？」

俺たちに視線を移した女将が千冬さんに尋ねる。

「ええ、一応。今年は男子がいて、連絡も一人、二人、三人と増えてしまつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それにいい男の子じゃないですか。あら？そちらのお二人は双子ですか」

「兄の神城剣斗です」

「弟の神城信太です」

女将に聞かれた俺達は丁寧にあ挨拶する。

「ほらお前もさつさと挨拶しろ」

千冬さんに急かされ一夏も挨拶する。

「織斑一夏です。お願いします」

「うふふ、ご丁寧にも。清洲景子です」

女将もまた丁寧にお辞儀をするが、こういう大人の女性と関わった事が無い俺達は緊張してしまふ。

「それでは私はこれで失礼します」

「ええ、また後でよろしくお願いします」

女将はこちらに一礼して旅館に戻る。

女将が旅館に入るのを確認して千冬さんはみんなに向き直す。

「全員注目！」

千冬さんがそう言うとみんなは一瞬で整列する。少し遅れた俺達は千冬さんに出席簿アタックを喰う。つか何で臨海学校に出席簿？

「今回の臨海学校では臨時コーチを呼んだ」  
臨時コーチ？

周りでは異例の臨時コーチに騒ぎ出す。IS学園には元代表候補や元代表が先生をやつてるので、臨時コーチを呼ぶ必要が無いのだ。だから臨時とはいえコーチが来るのは非常に珍しい。

「今回のコーチは次の代表の最有力候補と呼ばれる程の実力だ。駄目元で聞いてみたが、ある奴の名前を出したら直ぐにOKしてくれた」

そう言うと千冬さんは何故か俺を向いて笑う。千冬さん、何故俺を見て笑うんですか？正直怖いんですけど、例えるならライオンに睨まれたシマウマかな？

「じゃあ来てくれ」

「はい……」

あれ？今の声どっかで聞いたことあるぞ。確か……、

剣斗が考えていると、その声の主はすたすと歩いてくる。その少女は腰まである金髪をシャルロットの様に首の所で束ねていて、スーツを来ている。千冬さん程では無いがそれでも十分大人の雰囲気がある。

そしてその右手の中指には彼女のISの待機状態である指輪がしてある。

「イタリアのフランです。教えるのは始めてですがみんなの為になるようしっかりやっていきますので、よろしくお願いします……」  
フランは軽く一礼するが、みんな予想外のコーチに黙ったまんまである。唯一人を除いて

「フランさん！」

剣斗は列から飛び出すとフランの手を握る。

「まさかこんなに早く会えるなんて思っていませんでした」

「うん。……臨時コーチを頼まれて、剣斗も来るって聞いたから……」

「そうですね。いやぁフランさんに会えて俺凄く嬉しいです！」

「私もその……嬉しい……剣斗に会えて……」

フランは妙に歯切れの悪い言葉を続ける。それに頼も段々赤くなっていく。

「今日はカルラは居ないんですか？」



何時もならずフランの傍にいた筈のカルラの姿が無い。居たとしても気分が悪くなるだけなので居ないのは有難いけどね。

「あの人は知らない。勝手に来たから」

フランの言葉に剣斗は驚く。フランにとってカルラは命の恩人で、どんな事をされてもフランはカルラに従っていた。そんな彼女がカルラに何も言わずに来るなんて彼女も少しずつ自分の考えを持つようになったのは良いことだ。剣斗は一人感心している。

「!?!。……剣斗、その男の子は？」

フランは剣斗の同じ姿の信太に驚いた表情を見せる。

「ああ、あいつね。あいつは俺の弟の信太だ。で、信太こっちがイタリアのフランさんだ。フランさんは本当に強いんだぞ」

「ふ〜ん。神城信太だよろしく」

「フランだよろしく」

フランと信太は軽く握手をして、挨拶を済ます。フランは始めてみるそっくりさんに興味津々らしく、剣斗と信太の顔を交互に見ている。

東さんが俺に似せて作った体だから似てるのは当たり前だけどな。

「それよりフランさんは最近どうですか!?俺は毎日ISに乗れて楽しくて楽しくて……」

バシィィィン!!

いつまでも止まらぬ剣斗の口に見かねた千冬さんが出席簿アタックを喰らわせる。

千冬さんの出席簿アタックは鈍器で叩かれるよりも頭に強い衝撃がくる。こんな一日に何回も喰らったら俺の頭狂っちゃうよ。

「鬱陶しいぞ。一旦列に戻れ」

「わかりました！」

久しぶりにフランに会えたことで上機嫌の剣斗はるるんで列に戻る。

だが彼は忘れていた。彼が戻る列には二人の鬼神がいることを……

「ほう、貴様。随分上機嫌ではないか」

「剣斗。フランさんに会えてそんなに嬉しい？」

ラウラとシャルは背後に炎を出しながらも待ち構えている。

「え？何でそんなに怒ってるの？」

「ほお、貴様は何故私達が怒ってるのかわからんか……」

「……ごめんなさい」

ラウラはかなり不機嫌らしくとりあえず謝る剣斗。だがそれは所詮火に油を注ぐようなものだ。

「何で剣斗が謝ってるの？何かやましい事でもしたの」

シャルはいつもの素敵な笑顔を見せてくれる。だけど剣斗には見え  
た。シャルの笑顔の奥にいる怒りのエンジェル様が、今にも弓を撃  
つてきそうなエンジェル様が見えた。

「ええとね。一旦落ち着こうよ。先ずはお互いの誤解を解くために  
話し合いを……」

「「「つるさーいー!」」」  
「ぎゅー!」

こうして一年生の楽しい(?) 臨海学校は剣斗の叫び声から始まっ  
た。

## 臨海学校スタート！（後書き）

いかがですか？

今回は久しぶりにフランさんが戻ってきました！やっぱりヒロインになったんだから臨海学校には参加させないかね。

それよりもう一人出す予定だったあの人（もうみんなわかっていると  
思うけど）は今回出せませんでした。すみません次回は絶対です。

それではまた次回の更新で！

## かき氷

「いてて、あいつ等容赦ねえな」

現在俺達は千冬さんに指示された部屋に向かっている。途中何人かの女子に、「部屋どこなの？」と聞かれたが、千冬さんに教えるなと念をおされてるので適当に誤魔化してきた。

「あれはお前が悪い」

信太は呆れた様子でため息をつく。

何？信太には何故シャル達が起こったのかわかったのか。だってら是非教えて欲しい。俺には未だにわからない。

臨海学校はまだ始まったばかりなのに俺の体は既にボロボロである。さっきまでシャル&ラウラの二人の鬼神にボコボコにやられていたからである。途中で千冬さんが止めに入らなかったらきつと俺は今ここにはおらず、きつと医務室にいただろう。それにしても久しぶりにあれ程の身の危険を感じたね。まさかシャルまで手を出すなんて思わなかったからな。でもこれじゃあ、海に行っても気まずいな。どうしよう…

「1014…1014…、おつ、ここだぞ」

地図を見ながら先頭歩いていた一夏が立ち止まる。俺達の部屋は女子達の部屋から結構離れていた。……当たり前か。

「やっと来たか。遅かったな」

「何で織斑先生が？」

俺達が部屋に入るとそこにはソファーに荷物を置く千冬さんの姿があった。一夏は一旦部屋から出て部屋番号を確認する。一夏は部屋に入ると首を縦に振る。どうやら部屋は間違っていないらしい。

「最初は三人部屋という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視したバカ共が押し掛けるだろうとなってるだ」

「「「ああ」」」

俺達三人は全員納得する。特に剣斗にはそのバカ共の一人が誰かだいたい検討がついていた。今はあえて誰か言わないけど。

千冬さんはため息をついて話を続ける。

「結果、私と同室になった。これなら、女子も簡単には近づかないだろう」

「そりゃそうだな。なあ信太」

「まあね。なあ剣斗」

「そうだな。わざわざ俺達の為だけに鬼がいる部屋にくるわけ……」

ギロツ！

俺が鬼と言つと、千冬さんが鋭い目付きで睨めつける。俺はゴホゴホと咳払いをして誤魔化す。

「一応言っておくが、同室とはいえ、あくまで私は教員だと言つことを忘れるな」

「……はい、織斑先生」

「それでいい」

俺達は部屋の奥に行くと、やはり教員が泊まるだけあつて部屋もかなり豪勢である。

部屋は和室になつていて、窓から見える景色は竹林や池があつて風流を感じる。それ以外にも少し和室には会わないが、トイレやバスルームも付いていて、浴槽は誰が足を伸ばせるぐらいの大きさだ。

「一応、大浴場も使えるが男のお前達は時間交代だ。普段は男女別になつているが、たかが三人の為に残りの女子が窮屈な思いをするのはおかしいからな。よつて、一部の時間だけだ。それ以外は部屋のを使え」

「……わかりました」

俺達は千冬さんの言葉に素直に返事する。千冬さんは俺達の態度に納得してソファアに腰掛ける。

「さて、今日は一日自由時間だ。荷物を置いたら好きにしていぞ」

「えっと、織斑先生は？」

部屋から出ようとしていた俺と信太に対して一夏は千冬さんが気になるようだ。こっちは早く海に行きたいのに、このシスコンめ。

「私は他の先生との連絡などの仕事があるからな。しかしまあ」

千冬さんは軽く咳払いをする。

「泳ぐぐらいはするだろう。せつかくどこかの弟が選んでくれたしな」

「そうですか」

一夏、お前は何をそんな嬉しそうな顔してんだよ。それに弟が選んだだと？お前達は姉弟で買い物か、仲いいね。シスコン＆ブラコンコンビが。でも兄弟で買い物か、いつかは信太とも買い物に行きたいな。

「おい一夏、そろそろいこつぜ」

「わかってるよ。それじゃあ、織斑先生行ってきます」

「羽目を外し過ぎるなよ」

千冬さんの注意に俺達はしっかりと返事して、部屋をでる。

さあ、いよいよお楽しみ的大海だぜー！！



「「「……………」」」

俺達は旅館を出てすぐの所で足を止めている。

俺達が何故足を止めてるかというと、その、ね。ウサギの耳がね、地面から生えてるんだ。勿論本当のウサギの耳じゃなくて、バニ―さんが付けてるようなあれ。それに引っ張ってね！という張り紙まである。

「なあ信太。たぶんこれって」

「付き合いが長い俺の意見としては、間違いないな」

一夏が信太に確認してみるが、信太には確信がある。つまりこれをやったのは束さんだ。

「どっつするこれ？」

「任せろ。このウサミミは俺が切り刻んでやる」

一夏が対応に困っていたので、俺が助け船をだす。俺はウサミミの前に立つと、影打に手を当て深呼吸する。

キイイン……

ん？何だ、どっからか高速で向かってるかのような音が……って、何！？

空から謎の物体が落ちてくる。しかもその形は

「何でニンジンなんだよ！」

俺はツツコミを入れながらも、そこから半歩下がり影打の刃の部分で巨大な機械のニンジンを真つ二つに斬る。

すると割れたニンジンが女性が飛び出し、俺に抱きついてくる。俺は突然の事に後ろに倒れてしまう。

「やあ、剣くん！おっひさー。六年ぶりだね！」

「やっぱり束さんですか……」

俺はため息をしながらも立ち上がる。束さんはどっかの童話に出てきそうなフリフリのワンピースを着ている。束さんも立ち上がると地面からウサミミを取り出し装着。この人のファッションは六年ぶりであっても理解できなかった。

「じらじら、剣くん。私のことは束姉でしょ」

「そうでした、束姉……」

「うんうん、素直な子は好きだよ。さあ、剣くんスキンシップのハグだよ！」

断つても意味が無いことを悟っていた俺は束さんとハグをする。ハグをしたことで、満足になった束さんはやっと一夏達の存在に気付く。

「いっくんもおひさだね。それに偽物君もいたんだ」

！！

偽物という言葉に俺は過剰に反応してしまい、眉をひそめる。

「偽物君も一ヶ月振りかな。ここに剣くんがいるってことは、やっぱり君は本物になれなかつたんだね。これで君は正真正銘の偽物だよ。おめでとうー！」

俺は一人拍手をしている束さんの肩を掴んでこちらを向かせる。

「どうしたの？わかった！ハグじゃスキンシップが足りなかつたんだね。仕方ないなあ、それじゃあキスしよう！」

束さんは口を3の字にして俺に顔を近づける。俺は束さんの額を手で押さえてキスだけは防ぐ。

「束姉。こいつは偽物なんかじゃ無いです。こいつは俺の弟の神城信太です」

「でもこの子は剣くんから取り出した人格だよ。つまり君の偽物じゃない？」

束さんは満面の笑みで言うてくる。悪気があって言うてるわけ無く、論理的に言うてくるから質が悪い。

「そんなの関係ないです。もう一度言いますが、こいつは俺の弟の神城信太です。だから偽物なんて言わないでください、お願いします」

俺は深々と頭を下げる。束さんは暫くうんとうなだれた後に答える。

「わかったよ。剣くんが言うなら、この子は偽物じゃ無いんだね。それじゃ、これから君はしんしんって呼ぶね!」

「ありがとうございます」

俺はまた深々と頭を下げる。束さんそんなの気にせず笑っている。

「いいんだよ剣くん。剣くんの願いなら私はどんな願いも叶えちゃうよ。それより剣くん。篝ちゃん知らない」

「俺もまだ見てないですね」

「そうか。まあ、この私が開発した篝ちゃん探知機で直ぐに見つかるよ。じゃあね剣くん。また後でね!」

束さんは見た目に似合わぬ速さで走り去ってしまう。相変わらずの全く読めない人だな。束さんは……

「剣斗……」

後ろから信太の音がする。今の一瞬のやり取りに頭が少し追いついてなかった。ちなみに一夏は全くついていけない。

「何だよ、信太」

「その、ありがとな。嬉しかったぜ」

照れ臭そうに信太がお礼を言う。俺は信太に歩み寄ると肩にそつと手を置く。

「気にすんな。兄が弟の為に何かするのは当然だ。さっ、早く海に行くぞ！」

「おう！」

「お、おう！」

ワントンポ遅れて一夏も付いてくる。

よし！今度こそ、楽しい海に行くぜ！

男子である俺達は別館の更衣室の一番奥を使用するように言われている。だが一番奥の更衣室をとすることは、女子の更衣室を横切るわけで、当然、中から女子達の会話が聞こえてくる。その会話の内容も女子しか居ないせいから、普段は聞かないものである。

「わ、ミカってば胸おつきー。また育ったんじゃないの〜？」

「ちょっと！も、揉まないでよおっ！」

「ティナって水着だいたーん。すっごいね〜」

「そう？アメリカでは普通だと思うけど」

……………。

俺達は無言のまま早足で更衣室へ。男子の着替えなんて早いもので、三分で更衣室を後にする。勿論影打は更衣室に置いておく。さすがに日本刀を盗む奴なんていないだろう。

さあ、いざ海へ。

「あ、織斑君達だ！」

「うそっ！わ、私の水着変じゃないよね！？大丈夫だよね！？」

「わ〜。やっぱり男子は体鍛えてるね。かっこいい〜」

「こっやって見ると、剣斗君と信太君って本当にそっくりだよね。体つきも殆ど一緒じゃん」

更衣室から出ると、ちょうど女子数人に会う。みんな可愛らしい水着をしていて、こっちが照れてしまう。

海についた俺達は俺達は、まずは準備体操を始める。海に来てそうそう足なんかつりたくないしな、念入りにやらないと。

一通り準備体操を終えると、ストレッチをしていた信太が背伸びをして立つ。

「すまん。俺ちよつと用事があるからあっち行くわ」

「わかった。後でビーチバレーやる予定だからそれには来いよ」

信太はわかったと短く答えて、歩いていく。

「い、ち、かっつ！」

「おわっ、鈴か。危ないな」

鈴は現れるなり一夏の肩に飛び乗る。こいつは昔から直ぐ一夏に飛び乗るな。まあ好きなんだから当然と言えば当然か。

「俺もあっち行くわ。バレーする時は呼んでくれ」

鈴の気持ちを知ってる俺は邪魔しちゃいけないと思いつつその場を離れる。振り返ると鈴が口をありがと動かしてるのが見えて、俺は親指立てて応援する。

「うっん。何しようかな」

一夏達と別れた後、特に一人ではやることもない俺は砂浜に座って海を眺めていた。砂浜で騒ぐ女子高生達。学園のみんなは可愛く、スタイルも良いので目の前の光景はなかなかのものだ。

かれこれ十分以上は海を眺めている。最初は泳ごうかなとも思った

が一人で泳ぐのは寂しいと思って、信太が戻ってくるを待っていた。

(トレーニングでもするか……)

そう思った俺は更衣室にある影打を取りに立ち上がる。

「あ、剣斗。ここにいたんだ」

!?

俺が振り返るとそこには鬼神の一人、シャルがいた。シャルの水着はセパレートとワンピースの中間のような水着である。色は夏を意識したイエローでシャニにピツタリである。

「や、やあシャルさん。ご機嫌麗しゅう?」

「どうしたの剣斗」

俺の片言の言葉になっている。それも当たり前だ。俺はさっきシャルを怒らしてボコボコにされたのだから。今も肩が少し震えて、夏の日差しのせいか汗が止まらない。

「もう僕は起こってないから、そんなに怯えなくていいよ」

「本当だよね?」

「本当だよ」

シャルは笑顔で答える。その奥には純粋なエンジェル様しかいない。どうやら本当に怒ってないようだ。俺はほっと胸を撫で下ろす。



「で、そのタオル野郎はもしや……」

シャルの隣にいる。全身をバスタオルでぐるぐる巻きにした人物がいる。バスタオルを全身に巻いていて暑いのか、タオルは少し湿っているのがわかる。こいつはアホだな。

「ラウラだよ。ほら、出てきなつてば」

「う、うるさい。いつ出るかは私が決める」

ラウラの声はいつもの声とは違って、弱々しい声だ。

「ほーら、せつかく水着に着替えただから、剣斗に見てもらおうよ」

「まて、私にも心の準備がな……」

心の準備って、どうせラウラは学園指定のスクール水着なんだから。心の準備なんか要らないだろ。

「もう、それは何回も聞いてるよ。早く出なよ、ラーウーラー！」

「ええい、シャルロット。お前もしつこいぞ！」

二人のコントみたいなやり取りに段タイラついてきた俺はずかずかと二人に元へ行く。

「ラウラ。さっさと出てこい」

「待つんだ剣斗。嫁ならここは準備ができるまで待つものだ」と

頑固として出てこようとしないラウラに、俺も我慢の限界が来た。

「もう面倒だ！強制的に出させる。いいな！」

俺はラウラのバスタオルに手をかける。

「なっ、やめるんだ剣斗！私はまだ」

「知るかー！」

俺はバスタオルを思いっきり引つ張る。バスタオルは空中をヒラヒラと舞って落ちて、ラウラの姿が露になる。

「笑いたければ笑うがいい……」

「……」

俺は口を開けたまま固まってしまふ。ラウラはスクール水着を着ていると思っていたが、ラウラが着ていたのは所々にレースが使われているワンピースで、真っ白な色をしている。

決して大人びた水着では無いが、ラウラには寧ろ落ち着いた感じの水着の方が可愛らしく見える。もじもじと落ち着かなそうなにしているのが、更に可愛らしくしている。

「ハハハハ！！」

「ちょっと剣斗！何で笑ってるの！？」

俺は思わず笑い出してしまい、シャルも俺を止めようとするが一度笑い出すとすぐには止まらなく俺はずっと笑っている。

「そうか。やはり変だったか……。私は帰る」

ラウラはゆっくりと歩きだし、バスタオルで再び体を巻こうとする。

「ちょっと待てよ。何で帰んだよ？」

俺は慌ててラウラからバスタオルを取り上げる。ラウラはこっちの顔を見ずに答える。

「だって私の水着は可笑しいのだろう？ だったらここにいる意味なんてない」

「可笑しい？ そんなわけないだろう。寧ろ可愛いじゃん」

「可愛い……」

「ああ、可愛いよ。なあシャル」

「うん。今のラウラ凄く可愛いよ」

「そうか、可愛いか」

ラウラは指をもじもじしている。「これも可愛いな。」

「では何故さっき笑った？」

ラウラは現実に戻ると納得いかないようで、俺に問い詰める。

「いや、ラウラはどうせスクール水着だと思ってたから、まさか水着を持ってるなんて思わなかったから」

「これはこの間、信太と買いに行った物だ」

「信太と？」

俺はラウラの口からでた以外な人物に驚く。俺はてっきりシャルと行ったのだとばかり思っていたので信太が関わってるのはかなり以外だった。

「ああ、あいつは良い奴だ。私が嫁を夢中にするために共に知恵を絞ってくれた。あいつには感謝してる」

「ふん、あいつがねえ。」

信太め俺に黙って買い物に行くなんて、どうせなら俺も誘えよ。一応、俺等兄弟だぞ。

「剣斗、これからかき氷食べに行かない？」

俺が信太に文句を言っているとシャルが話し掛けることに気付く。

「かき氷か？そうだな一度は食べとかないとな。海に来た気が……」

「山田先生、やはり私には……」

「もう何言ってるんですか。もう海に着いたんですから、後戻りできませんよ」

俺達が声のする方を向くと、そこには水着を着た山田先生と、ラウラ程では無いがバスタオルを羽織ったままのフランがいた。

「山田先生にフランさん。どうしたんですか？」

「うわっ、剣斗!？」

フランは俺の存在に気付くと、山田先生の後ろに隠れてしまう。あれ？俺避けられてない？

「あっ、剣斗君。丁度よかったです。フランさんを海に誘ったんですが、我々が用意した水着を着た途端行きたくないと言い始めまして……」

「あんな露出した姿で出るなんて恥ずかしい。私、みんなに比べてスタイルよくないし」

「そんな事ありませんよ。それはさっき見た私が保証しますよ」

山田先生は説得を続けるが、フランは「でも、でも」と言うばかりである。山田先生も困り果ててしまい、仕舞いには俺に頼みますと視線を送る。

俺も今、ラウラは何とかしたばっかなのに。俺は小さくため息をしながらも、断る事が出来ずに交渉を開始する。

「フランさん、スタイルなんて気にしなくていいんですから一緒に楽しみましょう」

「けど、やっぱり恥ずかしい。みんな私の姿見て笑うかも……」

「そんな事ないですよ。早くそのタオル取ってかき氷食べに行きましよう」

「かき氷？」

「食べたこと無いんですか？かき氷」

フランは黙ったままうなずく。よし、これで攻めよう。

「かき氷はですね。砕いた氷に甘いシロップをかけたもので、とても綺麗で美味しいですよ」

フランは興味津々に俺の話を聞いている。

「食べたいですか？」

「食べたい……」

「でもバスタオル羽織ったままだと、かき氷食べられませんよ」

「えっ……」

「でもフランさんはバスタオル取らないんですもんね。残念ですが、かき氷食べられないなんて、同情しちゃいます」

「うっ」

よし、あと一息だ。

「わかった……。バスタオルを取るよ。けど笑わないでくれよ」

「笑いませんよ」

先ほどまで大笑いしてた奴が言うセリフではないだろう。現にラウラが怖い目でこちらを見ている。そんなに睨むなあれは反則だった。少しの沈黙の後、やっとフランがバスタオルを取る。その瞬間俺達以外の周りには居た女子も動きを止める。

「ほら、みんながこっち見てる。だから嫌だったんだ。変だから」

フランはまた山田先生の後ろに隠れる。

「いやいや、フランさん。あなた勘違いしてるよ！みんなフランさんに見とれてんだよ。」

フランのスタイルは抜群だ。胸はセシリアに引きを取らない大きさで、なのにウエストはしっかり絞まっている。正にボン・キュツ・ボンが見事にはまるスタイルである。着ている黄緑のビキニがフランのスタイルを際立てる。

つか、フランさん。そのスタイルで自信が無いなら、あなたの理想のスタイルは何ですか？

俺は心の中で思いながらも、言葉にはださずにフランさんに手を差しのべる。

「フランさん、スタイル抜群じゃないですか。さっ、かき氷食べに

行きましょう」

「でもな……その……ええとな……」

ピキッ

俺は笑顔のままだが、その額には怒りマークが二つほど浮かび上がる。そして俺は山田先生の後ろに回り、フランさんのヒザ裏と肩に手をまわしてそのままお姫様抱っこのように持ち上げる。

「わ、わ、わ……」

フランさんの顔はたちまち真っ赤になる。だがこれはフランさんがいけないから、俺は気にしない。

「じゃあ山田先生。フランさん預かります」

「はい。お願いします」

俺はフランさんを抱っこしたままシャル達の所に戻る。すると、シャル&ラウラは仏頂面で待っている。

「剣斗！フランさんだけずるいよ！」

「貴様は私の嫁だぞ。だったら私を抱っこするものだろ！」

それぞれに文句を言う二人を何とかなだめて海の家に向かう。

海の家は木造で、何処か趣きがある。今は学園の貸し切りの為、店



の中には生徒しかない。

「フランさん、そろそろ下ろしますよ」

「ああ、すまなかつたな」

フランさんが俺の腕から下りると、俺達はかき氷を買う。

「俺はブルーハワイにしようかな。お前等は？」

「僕はイチゴにしようかな」

「では私はメロンにしよう」

「私は……レモンにしようかな」

俺、シャル、ラウラ、フランさんの順でかき氷を注文する。かき氷機からは砕かれた氷が雪の様に皿に降り注いでゆく。初めて見るかき氷にラウラとフランさんは夢中である。

「はいよ、嬢ちゃん達。少しサービスしといたからね」

肌をこんがり焼いた柄の良さそうな店員さんからかき氷を受け取った俺達は、海の家の外にあるベンチに腰掛ける。

「やっぱ夏といえば、かき氷だよな」

「確かに夏だとかき氷だね」

シャルは俺の考えに共感してくれる。でもこれに共感できない奴なんているのか？夏にかき氷を連想出来ない奴は俺は人と認めない。

まあ、考えは人それぞれだけどな。

「ほう、これはなかなかだな。是非部隊の者にも食べさせたいな」

「冷たく美味しいな……」

二人は初めて食べるかき氷に大満足のような。よし、ちょっと驚かしてやろう。

「ほらほら。ラウラ、フランさん見て見て」

「「なっ!」「」

俺は二人の前に自分の舌を出す。俺の舌は今、ブルーハワイによって青く染まっている。二人は俺の舌に心底驚いている。

「剣斗、その舌どうしたの?」

「さては、かき氷に毒を盛られたな。あのね、人の嫁に手を出すとはいい度胸だ」

二人は立ち上がると、ISを展開して海の家を破壊しようとする。

その目は怒りで染まっている。

これはまずい、こいつ等なら本当にやると思った俺は二人を止める。

「ちよつと落ち着けよ。これは毒じゃ無いくて、シロップのせいだ。ほら、お前等も舌出してみろ」

二人は言われた通りに舌を出し会った。

「!!。貴様、舌が黄色くなってるぞ！」

「ラウラさんも舌が緑色になってます！」

驚く二人の反応を見て、俺は腹を抱えて笑ってしまおう。シャルも可笑しくて笑っている。二人はそんな俺達に怒りの矛先を向ける。

「おい貴様等！何を笑っているのだ！私達をバカにしてそんなに楽しいか!!！」

「剣斗、シャルロットさん。そんなに笑われると私も傷つきます…

…」

「ごめんごめん。二人の反応が面白くてさ……」

ポンポンッ

ん？誰かに肩を叩かれて涙目の俺が後ろを向くとそこには信太がいた。

「よお、信太。もう用は済んだのか？」

「まあな。それより剣斗、一本やらないか？」

「一本か？」

「ああ、一本だ」

信太はそう言うと、ニカッと笑って見せた。

かき氷（後書き）

いかがですか？

今回はラウラの水着だけ変えてみました。どうだったでしょうか。僕的にはラウラはビキニよりワンピースとかの方が似合うと思って書いてみました。

さて次回は予定では夕食位まで進みます。

それではまた次回の更新で！

## 浜辺の戦い

「やるのか？一本……」

俺はめんどくさそうに信太に言うが、信太の顔はやる気満々で今更断ることは出来ないだろう。

「わかったよ。俺は必要な物取ってくるから、信太は浜辺で場所確保でもしといてくれ」

「わかった。早く来いよ」

俺は旅館に向かい、信太は浜辺に向かう。一本の意味がわからなかった三人は信太に続いて浜辺に向かう。

「信太。貴様等何をするんだ？」

ラウラがきいても信太は鼻歌をしていて、ラウラの話聞いてない。ラウラは今度は大声で言う。

「おい！貴様等は何をするんだ！」

「何って、面白い事だよ。黙って見てるよ、どうせ後でわかるから」

納得してない三人を気にせず、信太はまた鼻歌をし始めた。

「……ふう、こんなもんでいいか」

砂浜についた信太は周りにいた女子達に頼んで退いてもらい、海から半径十メートルの半円を足を使って砂浜に線を描く。ラウラ達は未だに信太達が何をしたいのかわからないが、いくらきいても「待つてればわかるよ」と言われてしまつので今はもう何も言わないで待つていた。

「シャルロット、これ何だ？」

一夏達もシャルロット達に合流する。その後ろには山田先生と千冬さんもいる。

「それが僕にもわからないんだ。信太は待つてたらわかるって言うんだけど……」

「へ」

一夏は信太を見るが、信太は唯ストレッチをしてるだけで何をするのか全く検討がつかなかった。

「ごめんね、ちょっと通して」

「やっと来たか剣斗。お前何するんだって、お前それなんだよ！」

「なんだよって、これからやるのに必要な物だよ」

一夏は俺が持つてる物に驚きの声を上げる。それは周りの女子も同じで千冬さんだけは「ほう」と笑っている。

俺が持つてる物はいつも持つてる影打、そしてもう一つは二メートルを超える大剣でその姿はホープが使用していた武器「日熊」の大剣の状態と同じ形をしていた。

「お前それ「日熊」か？何でISの武器なんか持つてんだよ」

「違うよ。これはISのじゃなくて、唯の大剣だよ。名前は馬をも斬ることが出来る刀、斬馬刀かな」

そう言いながら俺は半円の中に入って信太に影打を渡す。信太は影打を受け取るお互いに五メートル程離れる。

「なあ、お前達の言う一本って……」

一夏の言うことに俺達は声を揃えて言う。

「「そんなのきまってるんだろ」」

二人は刀を構えて言葉を続ける。

「「男同士の刀による一本勝負だよ！」」

「「ちょっと待てよお前等！」」

今にも斬りかかろうとする俺達を一夏が止める。何だ一夏、邪魔しようとするのか？そしたらお前から倒すぞ。



「そんな危ないことやっていいのかよ？」

「危ない？お互い真剣使ってるわけじゃないんだから大丈夫だよ」

「大丈夫って、剣斗の使ってるやつは大丈夫じゃないでしょ」

俺が説明しても一夏は納得いかずに俺達の勝負を止めさせようとする。よし、こうなったら

「織斑先生。別にやってもいいですよね」

みんなが千冬さんに視線を集める。一夏は先生なら止めるだろうと思っ、やったぜとどや顔をする。

だが一夏の考えは砂糖なんかより何杯も甘かった。見る、千冬さんは笑ってるぞ。

「面白そうだな。いいだろう、やっていいぞ」

「ちよつ、織斑先生！」

直ぐ様山田先生が反対するが、千冬さんはそれを無視して話を続ける。

「お前達！これからハイレベルな近接戦が行われる。あまり参考になるとは思えんがしっかり見とくように、いいな！」

「はい！」

いつの間にか集まっていた生徒達が元気良く返事する。納得してな

かった一夏も千冬さんが言うならもう止められないと思い、こちらの戦いに目を向ける。

一夏も実際はこの勝負が気になってるらしく、これから少しでも近接戦のコツを掴もうと熱い視線を送る。うん。一夏にしてはいい心掛けだな。一夏も少しは専用機持ちの自覚を持ったようだ。感心感心。

「さて、許可もおりたしそろそろ始めるか信太」

俺は斬馬刀を砂浜に突き刺した状態で構える。

「そうだな。今思えばこうやってIS無しでの勝負は初めてだけど、俺は負けねえぜ剣斗」

対する信太は影打を中段に構える。

ザザア……

波の音だけが聞こえて、二人は喋りもしなければ動きもしない。お互いに探り合って、仕掛けるタイミングを凶っている。周りの生徒達も固唾を飲んで見守っている。

とても長い五分が経ち、信太の額から汗が垂れた瞬間にその均衡は崩れた。

二人は同時に走り出す。しかし剣斗の斬馬刀は影打より何倍も重い。ため、剣斗のスピードはかなり落ちている。

「うおおりやあぁ！」

俺は自分の全体重を乗せて斬馬刀を叩きつける。信太は簡単に避けると俺との間合いを詰めて切り上げる。

「うわぁっ」

俺は半歩下がってこれをかわすが、信太はがら空きになった俺の腹に蹴りを入れる。

「ぐっ」

俺は痛む腹を押さえながら斬馬刀を横薙ぎに振るうが信太は後ろに下がって避ける。

「全く攻撃が当たらないなあ剣斗」

信太は余裕の表情で軽く跳ねている。俺も斬馬刀を持ち直し余裕の表情を見せる。

「今のは小手調べだよ。次からが本番だよ」

だがなかなか攻撃が当たる気がしないのも事実だ。

斬馬刀のようにこれだけ大きい武器だと自然と攻撃の型が限られてしまう。基本的には打ち降ろすか薙ぎ払うかの二択。ISのように重さが無くなってるならまだしも、所詮は生身の体なので型は決まってしまう。よってさっきの様に簡単に避けられ逆に一撃を入れられてしまう。だが、

「もう一回いくぜ！」

そんな理屈を言っても今更何も変わらない。俺は再び信太に斬馬刀を振り降ろす。勿論信太はこれを避けて俺との間合いを詰める。……だがこれが狙いだ。俺は斬馬刀が地面に刺さると同時に斬馬刀を軸に一回転して信太に回し蹴りをする。蹴りは信太の左腕に当たり、俺は遠心力を使って信太を蹴り飛ばす。

「やるな剣斗。面白くなってきたぜ！」

「そつだな信太。俺も楽しくてたまんねえよ！」

「アツハツハツハツハ！」

俺達は楽しくて自然と大笑いをしてしまう。考えてみれば、こうやって俺が真剣にやるのは師匠以外では信太が初めてだ。生身の勝負で一夏や箒相手では話にならない。だから箒と剣道をやるにしてもいつも手加減していた。勿論、千冬さんが相手では俺が話にならないのでやったことは無い。だから久々に全力を出せるのが楽しかった。ISの時とは違った興奮が ажいわれる。

きつとそれは信太も同じだろう。信太は剣術を我流で習っている。だから今まで誰とも打ち合いや試合などした事がない筈。だからこそ楽しいのだ、全力を出しても倒せるかわからない相手がいるのが自分の全力をぶつけられる事が楽しいのだ。俺も最初は乗り気じゃなかったが、今ではこの勝負を心から楽しんでいる。ある意味この勝負を挑んできた信太に感謝しなければならぬ。

「まだまだいくぜ！！」

お互いにそう叫びまた斬りかかった。その顔には以前のよような殺気は無く、唯純粹に楽しんでいる少年の顔があった。

「すげえ……」

一夏を含む生徒全員が二人の勝負に釘付けになっていた。

信太は日本刀なので素早い動きで剣斗の一撃を避けて反撃を狙う。一方、剣斗はあれだけ大きな大剣を使っているが大剣だけに頼らず、寧ろ大剣を利用してのパンチや蹴りなどの体術で反撃してきた信太に更に反撃を狙う。お互いに決定打はまだ打ち込めて無いが、それでも二人の勝負が凄いいことはみんながわかってる。

千冬さんは参考にしろと言ったが、ついていくのがやっとで参考にしようと思っても何を参考にしているかわからなかった。

「織斑先生。剣斗君も信太君も素晴らしいですね！」

山田先生は興奮した様子で千冬さんに話すが、千冬さんは鬱陶しそうにする。

「そうだな。二人とも剣術をしっかり習ってるからな、あのぐらいは出来て当然だろう」

普段通りの厳しい評価に山田先生は苦笑いしている。

「それにしても……」

隣にいた一夏は視線は剣斗達に向けながらも話す。

「あいつ等本当に楽しそうだな」

二人の使っている武器は真剣では無いが、当たり所が悪ければ骨折位はするだろう。それでも二人はずっと笑っている。

二人の戦いを見ながら千冬さんは小さく笑う。

「お前達には危険に見えるかもしれないが、あいつ等にとっては新聞紙でチャンバラごっこをしているようなものだろうな」

「チャンバラねえ……」

「それより織斑、今の所二人の戦いは参考になったか？」

「いや、正直ついていくのがやっとで」

ため息をつく一夏の頭に千冬さんが軽くチョップする。

「今はついていだけでいい。その代わりに、しっかり見とけよ。今はわからなくてもいずれ参考になるからな」

「はい！」

一夏は大きく返事をして、更に二人の戦いに意識を集中する。何か一つでも自分にプラスになることを見つげるために、唯じっと見て

いた。

「はあはあはあ……」

二人は一度距離を取り、呼吸を整えている。勝負が始まって十分以上経つが、先ほどから同じことの繰り返しである。

俺が斬馬刀で仕掛け、信太がそれをかわして俺との間合いを詰めて一撃を入れ、俺はその一撃に対してパンチや蹴りで反撃する。これを十分間で何回も繰り返している。

同じことを繰り返してはいるが、毎回仕掛ける毎にお互い様々な工夫をしていた。仕掛けるタイミングや攻撃の型などを工夫したが結果は一撃ずつ入る痛み分けとなってしまう。

（このままじゃちが明かないな。しゃあない、自信はないけどやってみるか）

俺は今までダラリと下げた状態で構えていた斬馬刀を持ち上げ上段に構える。

信太は一瞬驚いた表情を見せるが、直ぐに真剣な表情に戻り影打を

引いて突きの構えをする。

「やっぱお前には突きが一番似合うよ」

「俺もそう思ってるよ。でもお前それ辛くない？」

「……すこしな」

嘘である。少しどころではない、かなり辛い。今も腕がふるふるしてるから早くして欲しかった。これ以上はもう持たない。だから！

「先手必勝！」

俺は全力で走り、今までよりも早く斬馬刀を振り降ろす。体全体を使って振り降ろす一撃は当たれば勝負が着くが、信太は左に移動する事で簡単にかわして突きをしようとする。ここまではさっきまでと同じだがここからが違う。

俺は振り降ろした勢いを使って斬馬刀が砂浜に刺さると同時に跳びはねて半円を描いて奴の後ろに回る。

「やべっ！」

信太は慌てて突きを止め、こちらを振り向く。

「おせえ！」

俺は信太が振り返る前に斬馬刀を横薙ぎに振るう。

ガンッ！



信太は反射的に影打で受け止めるが俺はお構い無しに斬馬刀を振り抜く。信太はフワリと浮いて五メートル程飛ばされる。俺は追撃する為走り出す。だが信太は素早く起き上がると全力で走り俺との距離をゼロにする。

「しまった」

斬馬刀では大雑把な攻撃しか出来ないの距離をゼロにさせるのは良くない。だから俺は当たらなくてもいいので早めに攻撃する事で距離がゼロになるのを防いでいた。

俺はどうするか悩んだが、一度走り出した体は止まらず無理矢理に斬馬刀を振り降ろす。

「甘い！」

信太は避けることはせずに突きを斬馬刀の柄の部分に当てる。

俺は柄から伝わる衝撃におもわず手を離してしまう。

「もらい！」

信太は完全になら空きになった体に渾身の力で蹴りあげる。

「がはっ……」

蹴りは溝に近い所に当たり、一瞬気を失いそうになるが信太の鞘による二撃目を右腕に喰らって目が覚める。俺はあまりの痛みにはや

がみこんでしまう。信太は続けざまに三撃目を狙う。

(これ以上はマズいな)

俺は痛む体にムチ打ってしゃがみこんだ状態からタックルして信太の体制を崩し、地面に足が着くとそのまま飛びひざ蹴りを当てる。

「ぐっ」

信太は堪らず距離を取る。

「「「お、おおお〜!!!!」「」」

周りの生徒達は今までと違った攻防に歓声を上げる。

(随分周りのボルテージも上がってきたな。俺達の勝負がそんなに楽しいか、ちよつと嬉しいな。……でも、そろそろ頃合いだな)

俺は一度目を閉じて深呼吸をする。それを見て信太も深呼吸をする。周りは次はどんな攻防をするのかわくわくしながら二人を見ていた。

俺は何回か深呼吸をした後に背伸びをしながら言う。

「ん〜。今日はこの辺で終わりにするか」

「そうだな。わざわざ付き合ってくれてありがとな」

「気にすんなよ。俺も結構楽しかったぜ」

……ズデーン!!

あれ？千冬さん以外みんな転けてる。何で、何かあったの？

「ええ〜！何で止めちゃうの!？」

「これからが本当の戦いって感じだったじゃん！」

「最後まで殺ってよ！もつと血を出してよ！」

みんなは立ち上がるなり文句を言ってくる。

そんな文句言うなよ。こっちは最初から最後までやる気はなかったんだから。つか、最後に文句言った奴あんた他人事だと思ってるだろ。こっちは血を出す程やらねえよ。

俺達はああだこうだ言う女子達に「ごめんごめん」と適当に謝ってシャル達の所に戻る。

「どうだ一夏、少しは参考になったかな？」

「いや、ついていくのがやっとで、何を参考にしたらいいかわからなかったよ」

一夏は苦笑いをする。やっぱり一夏じゃついていくのがやっとか……

「でもちゃんと見てたんだろ？だったらいいさ、一夏もいつかはあの位できるよつになれよ」

「ハハハ……精進するよ。それより何でお前達途中で止めちゃうん

だよ。あれから面白くなりそうだったのに」

「一夏もか……。俺はため息をつきながらも砂浜に突き刺した斬馬刀に軽く寄りかかりながら説明する。」

「途中で止めた理由は三つある。まず一つ目はあのまま勝負を続けてたらどつちかが骨折してもおかしくなかった。それが原因で明日、明後日のES訓練に参加できなかつたら千冬さんに何て言われるかわからねえよ。そして二つ目はコイツだよ」

俺は斬馬刀をコンコンと叩く。

「ちょっと一夏持ってみな」

「おう。いっせえのって、おとととー！」

斬馬刀を持ち上げようとしたが、想像以上の重さに一夏はバランス崩す。

すかさずセシリアと鈴がサポートに入る。おうおう、好きな人のためなら飛んで駆けつけるとはこの事だな。まあそんなの言ったら二人に殺されるから絶対言わないけど。

「ととととと……。ふう、助かったぜセシリア、鈴」

「いえいえ、このぐらい当然ですわ」

「全く男なのに情けないわね。それにしてもかなり重いわねこれ」

一夏達は三人でやっと斬馬刀を振り上げててもバランスを崩さないでいられる。これを一人や二人でやろうとすると斬馬刀の重さにあっさり体が持っていかれてしまう。

「だろ？斬馬刀で長時間の戦いは腕にかなりの負担が掛かるんだ。もし、あれ以上の続けてたら明日俺の腕は筋肉痛で動かなかったよ」  
そう言いながらも、剣斗は一夏達が持っていた斬馬刀を一人で持ち上げる。それだけで剣斗が日頃どれだけ体を鍛えてるかがわかる。  
剣斗はもう一度斬馬刀を突き刺すと説明を続けた。

「で、最後の理由だがこれは単に疲れるからだ。俺も信太もまだビーチバレーや海を泳いだりしたいからな。ここで全体力を使うわけにはいかないんだよ」

「そうか、まあいつ止めるかなんて、やってるやつのは自由だしな。それで剣斗はこれからどうするんだ？」

これからか、特に考えてなかったな。そうだなまずは、

グウ

俺の腹からデカイ音なる。

「まずは腹ごしらえからかな」

俺は顔を赤くして、笑いながら言う。

「ハハハハ！」

周りのみんなも大笑いする。

腹ごしらえをした俺達はビーチバレーをしたり、海を泳いだり、唯砂浜を散歩したりして自由時間を満喫した。

## 浜辺の戦い（後書き）

いかがですか？

今回は生身の勝負を書いてみました。少し動きが単純過ぎましたね、やっぱり慣れないことはしないほうがいいかな……。。

さて今回はシャルやラウラ、フランのヒロインが全く出てきませんでした。こういうのもたまにはいいよね？

さて次回では赤椿の直前まで書こうと思います。水曜日に更新したいな……

それではまた次回の更新で！

## 夕食中のトラブル

時間はあつという間に過ぎ、現在七時半。大広間三つを繋げた大宴会場で、俺達は夕食を取っていた。

ここは座敷なのでみんな正座をしている。そしてこの旅館の決まりで「お食事中は浴衣着用」らしい。やっぱり旅館では浴衣だよな。

「なあ剣斗……」

「どうしたんですか？フランさん」

俺の右隣にすわるフランさんが呼ぶ。本当ならフランさんはコーチなので先生達という筈だけど、今回は千冬さんの計らいで俺達と食べる事になった。

「この魚は本当に生で食べるのか？私の読んだ本では魚は焼いたり煮たりするものだ」と書いてあったのだが」

フランさんは箸で摘まんだ刺身をプランプランと揺らしながらきいてくる。ここから、食べ物をもんな風に扱っちゃ駄目だろ。

「生で食べますよ。日本では普通に食べていて美味しいですよ。あとこれは刺身って言いますよ」

「刺身か……、うん」

フランさんは俺の説明に納得しながらも、食べるのを躊躇している。



「もし食べられないなら、何か違うもの貰ってきましょうか」

IS学園には様々な国、宗教の人がいるため当然中には刺身が食べれない人もいる。そんな人の為に焼き魚や煮魚など他の料理が用意されている。実際にセシリアなど、何人かの生徒は刺身でなくそつちを食べている。勿論、彼女達が残した刺身は全部俺がもらってる。こんなに刺身食えて、俺得してんな。

「いや、剣斗が美味しいと言うならきつと美味しいのだろう。食べず嫌いは良くないからな、私もチャレンジしてみよう」

フランさんはそう言って刺身を口の中に入れる。ほら、段々美味しくて顔が明るく……ってあれ？明るくなるどころか苦い顔になっているぞ。それどころか、今にも刺身を口から出そうとしている。何でだ？こんなに美味しいのに……

「剣斗、この刺身は全く味がしないのだが、こつちゆう物なのか？」

「味がしない…？フランさん、ちゃんと醤油とか浸けましたか」

「醤油を浸けないと駄目なのか」

「（やつぱりな） はい。醤油とか何か浸けないといくら刺身でも美味しくありませんよ。ほら、こつちやるんです」

俺は山盛りになっている自分の刺身から一つ取り、醤油とワサビをつけて食べる。

「こつちゆうか」

フランさんも見おつ見まねでやってみる。

そうそう、そうやって醤油をつけて、次にワサビをつけて、フランさん多分それワサビが多いと思うけど……

「~~~~~!!」

案の定、鼻を押さえて涙目になるフランさん。なにをしたいんですかフランさんは……。

「だ、大丈夫ですか？」

「ん、ん!!」

初めての刺激にうなだれるフランさん。俺は一応お茶を渡す。

「ゴクツ、ゴクツ。プハッ！剣斗！ワサビがあんな刺激的な物ならもっと早く言ってくれ！」

俺に怒鳴るフランさんだが、鼻声&涙目のせいで恐くはない。というよりは可愛らしかった。

「まさかワサビをあんな大量に食べるとは思わなかったので、すみません」

「おい剣斗!!」

今度は左隣に座るラウラに頬をつねられる。

「フランばかりでなく、私とも話せ!!」

「話せって言われてもな。ラウラは刺身とか正座は平気なのか？」

「ふん。私は生の食材を食べられる訓練を受けている。ジャングルで孤立無援になったときにも生き延びられるようにな。それに正座なんぞ、拷問の訓練に比べたらなんともない」

ラウラは自慢げに話す。うん、ラウラ、今は孤立無援でも拷問でもないからね。勘違いしちゃ駄目だよ。

「色々な意味で凄いなラウラは」

「そうか凄いか。では、ほれっ」

ラウラは俺の凄いの一言を待っていたらしく、頭を差し出す。

「お前も好きだな。ほれ、これでいいんだろ」

俺はラウラの頭をそっと撫でる。

「あっ、そうだ。フランさん、ラウラすまんが少し席を外す。すぐ戻る」

俺は立ち上がると、一つ隣の大広間にいるシャルの所に行く。

最初シャルは俺の隣だったのがフランさんが来たので席を移動したのだ。本人は「別にいいよ」と言っていたが、いかにも残念そうな顔をしていたので様子を見に来た。

「よう、シャル」

「わぁ！」

俺が後ろから肩を叩くとシャルは驚いて持っていた箸を落としてしまつ。俺はシャルが落としそうになつた箸を俊敏な動きで取る。我ながら今の動きは良かったな。

「もう、剣斗。いきなり後ろから脅かさないでよ。僕だってビックリするよ」

「そうか、それは悪かったな」

「全くだよ。それでどうしたの？」

「ああ。ちょっとシャルに言いたいことがあってな」

「言いたいこと？」

「そう。本当は昼に言おうとしたんだけどさ……」

俺はそつとシャルに耳打ちする。

「シャルの水着凄く似合ってたよ。期待した以上だったよ」

「えっ!?!」

シャルは不意に誉められて顔が一気に真っ赤になる。

「そつゆづことだから。俺はもう戻るよ」

「待って剣斗！っ……」

シャルは立ち上がるうとするが、すぐ倒れてしまい足首を押さえている。もしかして

「足、痺れたのか」

「うっ！……うん」

恥ずかしそうに返事をする、顔を下に向ける。シャルは顔だけでなく耳まで真っ赤にしてしまう。

「はあ、無理すんなよ全く。ほら、足伸ばして」

シャルは言われた通りに足を伸ばす。俺はシャルの足を優しくマッサージする。

「っ……ん……く……」

最初は痺れた足をさわられたことで顔を歪めるが、やがて痺れもとれてきたようだ。

「ありがとう剣斗。もい大丈夫だよ」

「そうか？じゃ今度こそ戻るな」

「うん。またね」

シャルと別れた後、俺が戻ると信太がコップを持って待っている。

「よお剣斗。水でも飲むか？」

「おう丁度喉が乾いてたんだ。サンキュー」

俺は信太からコップを受け取りそれを飲み干す。

「ふう、生き返ったぜ…ヒック、あれ体が熱くなってきたな」

俺は体が熱くなるのを感じると、立てなくなりその場に座り込んでしまう。

「おい大丈夫か剣斗」

一夏がすぐに剣斗に駆け寄るが剣斗の意識は朦朧としている。

「らいひよふらよ、いひひゃ。おれはじえんじえんよゆうらよ」

「どこが余裕なんだよ……」

一夏は剣斗の肩を揺らしていると、信太が腹を抱えて笑っている。

「信太。お前が渡したのって……」

「お酒だよ。剣斗がお酒に酔うとどうなるか見てみたかったんだ」

「お前、兄貴で遊ぶなよ」

一夏は剣斗を落ち着かせる為に信太を連れて水を取りに行く。

「おい剣斗！しっかりしろ」

ラウラは肩を激しく揺らす。

「ん〜。にゃうにゃ」

「な、なんだ……」

いつもと違う剣斗にラウラは身構えてしまう。

次の瞬間。剣斗はいきなりラウラに抱きつく。ラウラはあまりの事に足をつまずかせ倒れてしまう。

「にゃうにゃ〜。きゃわいいな〜」

剣斗はラウラに頬擦りをしながら頭を乱暴に撫でる。

「止める剣斗！みんながみているだろう！」

ラウラはどうか剣斗を離そうとするが、剣斗はそれ以上の力でラウラに抱きついて頬擦りを続ける。

「二人ともなにやってるの!?!」

騒ぎを聞き付けてシャルがやってくる。他の生徒は次に剣斗が何をするのかと騒いでいる。

「シャルロット助けてくれ！これはこれでいいのだが、これ以上はマズイ」

「なんでいぢがるんらよ〜にゃうにゃ〜。もしかしておれの〜ときら〜?」

「そうゆう問題ではないだろう!」

「そうかな〜おれはにゃうにゃのことしゅきだよ〜」

「!?!」

ラウラは剣斗の好きという言葉に体が固まってしまふ。ラウラは普段から嫁にする。と強気な発言が目立つが、実際に言われてしまふのは苦手である。

「もう!とにかく剣斗は離れて」

見かねたシャルロットが剣斗を引き離そうとする。すると剣斗はラウラを解放してシャルロットに抱きついた。

「しゃる〜。きみもきゃわいいな〜」

「ちよっ、落ち着いて剣斗」

「ぼくはおちつゆいてるよ〜。えへへ〜」

「あ、うー」

剣斗に頬擦りをされてシャルロットの思考は完全に止まってしまふ。シャルロットが解決策を考えようとしても剣斗の吐息が顔にかかると考えが吹っ飛んでしまふ。



いつも冷静なシャルロットでも、好きな男性に頬擦りなんてされたら所詮は恋する乙女なのだ。

「どうする？ 助けた方がいいかな」

「そしたら、剣斗君に頬擦りしてもらえるの!？」

「私、助けに行きます!」

「あつずるい。私が先だよ!」

完全に目的を見失った女子達が次は自分だとケンカを始めようとする。その間も剣斗はシャルロットに抱きついて、シャルロットも「あ〜う〜」としか言えず、ラウラは「かわいい、好き…」と繰り返してばかりでフランだけが平然と食事を進めている。

「うるさいぞ。お前達は静かに食事することもできんのか…」

騒がしかった生徒達を黙らせる為に大広間にきた千冬だったが、目の前の状況に固まってしまふ。

浴衣が半分はだけた剣斗が女子生徒であるシャルロットに抱きついて頬擦りをしている。シャルロットもシャルロットで嫌がる様子を見せずにいる。そしてその二人を見てきゃーきゃー騒いでいる女子達。

この状況のでは千冬だろうが山田先生だろうがどんな先生だろうが固まってしまっただろう。

「貴様等、公衆の面前で随分大胆だな」

「お、織斑先生！ち、違うんです。誤解です！」

必死で否定するシャルロットだが、その間も剣斗は頬擦りをしているので全く説得力がなかった。

「ほう、何が誤解か教えてもらおうか」

千冬は大広間に入ると剣斗達に近づく。その一步一步が死のカウン  
トダウンを数えているようだった。

「織斑先生、待ってください」

やっと戻ってきた信太が千冬の前に立つ。

「剣斗は酒を飲んで酔ってるだけです」

「酔ってるだど？」

「はい。今すぐ酔いを覚まさせるので許して下さい」

千冬は少し黙った後、頭に手をやる。

「わかった。だったら早くそのバカの酔いを覚まさせる」

「はい。一夏、剣斗をしっかりとおさえといてくれ」

「お、おう」

一夏は剣斗をシャルロットから離すとそのまま信太の前に立たせて後ろからしっかりとおさえる。

「あれ〜、いちきやくん。あいからずりりしいねえ〜」

「ハハハ……。おい信太、早くしてくれ」

次は一夏に抱きつきそんな剣斗に寒気を感じた一夏は信太に催促する。

「わかってる。では剣斗の酔いの覚まし方です。まずは、このやかんに入った水をかけます」

信太はやかんの蓋を開けるとやかんを逆さまにして水を滝のように剣斗にかける。それでも「えへへ、雨でも降ったのかな〜」と笑ってる。信太はそれでも気にせずやかんを投げ捨てる。

「そして、これが最後です。水をかけて少しだけ酔いが覚めかけてる剣斗の腹を……」

「「「腹を……」」」

「殴ります!」

ゴスッ……………バタン

そう言うなり、いきなり信太は剣斗の腹を殴り剣斗は倒れ込んでしまふ。みんなは啞然としていたが誰よりも現実に戻った一夏がつっこむ。

「何が殴りますだよ！そんな覚まし方ねえよ」

「嘘つくな。これはある天才聞いた情報だぞ」

「お前、その天才って……」

一夏は恐る恐るきいてみるが、信太の知ってる天才は一人しかいなかった。

「天才と言えば東さんにきまつてるだろ」

「だよな……。でもそれは間違った情報だと……」

ムクツ

！！

剣斗はゆっくり立ち上がる。みんなは当然まだ剣斗が酔ってると思つて身構えるが、剣斗は身構えるみんなを無視して信太の胸ぐらを掴む。

「てめえ、いきなり腹を殴るなんていい度胸だな。壊すぞ」

「ええ〜！剣斗今ので酔いが覚めたのか」

「酔いが覚める？そう言われると何だか頭が痛いけど何かしたのか？どつやら剣斗は酔った時の記憶がないらしく、自分が何をしたかわからずにいる。記憶が混乱してる剣斗にフランが刺身を食べながら説明する。」

「お前は酒を飲んで酔った勢いでラウラとシャルロットに抱きついて頬擦りをしたんだぞ」

「フランさん何をバカな事を言ってるんですか」

そんなことを俺がするわけない。もし、本当にしたなら俺はセクハラで訴えられてしまう。

「はいはい。私証拠VTRあるよ」

そういいながら、一年三組で新聞部の新聞集子がビデオカメラを俺に見せる。それにしても新聞さんって正に新聞部の申し子だよな。いつも新聞とか読んでそうだし……

そう思いながらも俺は新聞さんのビデオカメラの映像を見る。

「にゃうにゃはぎゃわいいな」

!?

「しゃるゝ、きみもぎゃわいいよ」

!?!???

「えへへ」

!?!???

俺はビデオカメラに映るだらしない自分に固まってしまう。

「剣斗君。これは見事な酔いつぶりだね。帰った後記事にするのが楽しみ……っであ〜！」

俺は新聞さんがこの事を記事にされると知ると持っていたビデオカメラを思いつき壁に投げつける。ビデオカメラは壁の柱にあたり粉々になってしまう。

「新聞さんこんなの記録に残してはいけませんよ。みんなの記憶の中だけで十分です」

「そんな〜」

わかって下さい。この事が記事にされたら俺はもう学園に行けなくなっちゃうんです。それだけは避けたいのだ。

「ほらバカ共、騒動が済んだのなら席につけ」

千冬さんが手を叩くとみんなは素早く自分の席につく。俺も今にもポキッと折れそうな心を支えながら席につくと早速千冬さんに注意される。

「剣斗、お前達男子は問題を起こすな。一々鎮めるのも面倒だ」

「はい。すみません」

これって俺が悪いのか。悪いのは酒を飲ました信太のはずでは……いや、千冬さん悪いと言うなら俺が悪いのだろう。千冬さんの言うことは絶対だ。千冬さんが正しいと言えば正しく、悪いと言えば悪くなる。流石世界最強、伊達じゃ無いな。

千冬さんが去った後はみんな黙々と食事をしたが、それでもさっきの俺の酔いっぷりに対してのひそひそ話が聞こえてくる。

みんな、ひそひそ話はせめてその人がいないところでやってくれ。

みんなはまた剣斗が酔うのを期待したが、剣斗が食事中飲み物に一切手をつけなかったのは言うまでもない……。

## 夕食中のトラブル（後書き）

いかがですか？

すみません。また予定の所まで書けませんでした。今度こそは赤椿の直前まで！

それではまた次回の更新で！



## 夜の女子会と第四世代

「ふう、さっぱりしたぜ」

現在九時。俺と一夏は食事を終えた後に露天風呂に入って今は部屋に戻っている。

「あそこの露天風呂最高だな。俺と一夏しかいなかったのがより良かったな」

「それにしても信太はどこに行ったんだろっな」

信太は食事を終わると「用事がある」とだけ言って大広間を出ていった。あいつ昼も用事があるって言ってたな。用事って何だろう？多分きいても教えてくれないだろうけど

「さあな、いつかは戻ってくるだろ。それより一夏あいつ等は何をしてんだ」

俺達が部屋に着くと部屋の前にはいつもの専用機持ちのみんなとフランさんがいる。でもみんなは部屋の前で何やらぶつぶつと会議をしている。お前等正直邪魔だぞ。

「お前達何やってんだ？」

ビクッ！

一夏が話し掛けるとみんなが同時に肩を動かす。何をそんなに驚いてんだよ。やましい事でもするつもりなのか？

「なんだ一夏か……。実はな織斑先生に呼ばれたのだがどうしたらいいのかわからずこうしているのだ」

箒の言葉に後ろのみんなが頷く。

「だったら入ればいいだろ」

「いや、でも入りづらいでしょ……」

鈴が軽くツツコム、まあ確かに千冬さんの部屋は入りづらいよな。何されるかわからんしな。

「何故入りづらいのだ？」

「お、織斑先生」

「まあいい。さっさと入れ。私もいつまでも暇ではないのだぞ」

「はい……」

みんなはおずおずと部屋に入り俺と一夏も続いて入ろうとするが千冬さんに止められてしまう。

「お前達は少しどっかに行ってる」

え？でもここ俺達の部屋ですよ。俺達は居てもいいはずでは

「これから女子同士の話をするからな。お前達が居ては出来んだろ」

「そうですか、わかりました。一夏、しゃあないから卓球でもしてようぜ」

「おっ、卓球か。旅館に来て温泉に入ったなら卓球は外せないな」

二人が去ったのを見送って千冬も部屋に入る

「……………」

どうしたらいいかわからない六人は取りあえず座ったまま黙っている。

「おいおい、いつものバカ騒ぎはどうした」

「……………」

それでも六人は黙ったままでいる。

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやる。オレンジジュースしか無いがいいだろ」

そう言いながら千冬は備え付けの冷蔵庫から人数分のオレンジジュースを取って渡す。

「い、いただきます」

全員が同じように言って飲む。女子が飲んだのを確認して千冬はニヤリと笑う。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「まあ、飲みましたけど……」

「もしかして、自白剤入りですか!？」

「お前は私がそんな事をすると思うか？」

「いえ、教官に限ってそんな事」

「だろ。安心しろ、ちょっとした口封じだ」

そう言って千冬は冷蔵庫から缶ビールを取り出す。そのまま蓋を開けると勢いよく飲む。

「プハアッ! やっぱ一日の終わりにはこれだな」

千冬はベットにかける。そこにはいつもの織斑先生はおらず、唯の仕事終わりの千冬がいた。女子全員はぼかんとしている。

「なんだお前等、私が酒を飲むのがおかしいか？」

「いえ、そういうわけでは」

「でも今は……」

「仕事中なんじゃ……」

「何を言ってる。ちゃんと口止め料は払ったぞ」

「あっ」

ここで全員ははめられた事に気付く。

「さて、前座はこの位でいいだろう。そろそろ本題に入るか」

千冬は一度ビールを置くと手を組んできく。

「お前等、あいつ等のどこがいいんだ？先ずは一夏からだ」

「私は別に……以前より弱くなってるのが腹立たしいだけです」

「あたしは、腐れ縁なだけだし」

「わ、わたしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

箒、鈴、セシリアの順で答える。

「そうか。では一夏にはそう伝えとこう」

「」「言わなくていいです」「」

三人は同時に声を荒げる。その様子を笑いながら一蹴して、千冬さんは再び飲みかけのビールに手をつける。

「それで、剣斗の方はどうなんだ？」

「僕……私は以前彼に会って……気付いたら恋に落ちてました。」

それに彼は約束してくれました」

シャルロットがぼつりと言うが、その声にはしっかりとした意志が伝わる。

「ほう。どんな約束だ？」

「僕がしっかり独立できるまで、傍にいてくれるって……」

シャルロットの顔は真っ赤になり、千冬はほうと言っている。

「成る程な。で、お前は」

オレンジジュースをちびちびと飲んでいたラウラは、千冬に話を振られびくつと肩をすくませながら答える。

「つ、強いところ……だと思えます」

「いや弱いだろ」

当たり前のように言う千冬に、珍しくラウラが食って掛かった。

「そんな事はありません。少なくとも、私よりは」

「そうですね」

ラウラの言葉にフランが続く。

「実力だけなら私達より弱いかもしれませんが、でも、剣斗は心はここにいて誰よりも強いです」

「そうか……。それでフランはあいつの何処が好きなんだ？」

「……私は剣斗の事が好きなんですか？」

「え？」

全員がフランの顔を見るが、その顔は冗談に言ってるものでは無かった。シャルロットが慌てて確認する。

「えつとですね、まずフランさんは何でコーチの話を受けたんですか？」

「剣斗に会えるからだ」

きっぱり答えるフラン。

ええ〜。

全員が心の中でツツコム。だったら普通好きだと思っただけでしょ……。

「フランさん……。剣斗と居て楽しいですか？」

「とても楽しいな。先程の食事も隣に居るだけで楽しかった」

「それじゃあ最後に、フランさんは剣斗と離れるのが嫌ですか？」  
「それはここに来たときからずっと感じていた。出来ることならずっと一緒に居たいとさえ思う」

ぞっこんじゃん！

全員が再び思ったが、喉まで出かかった言葉を何とか飲み込む。

「フランさん。それが好きってことなんですよ」

シャルロットが笑顔で言うと、フランの顔は少し困惑しながらも、喜びもあった。

「そうかこれが恋なのか。なんかいいものだな……。フッフ」

「なんだ、みんなあいつ等のそんなところが好きなんだ」

「うん。そうなんだよって信太！？どうしているの！？」

洗面所から何事も無いように出てきた人物は信太だった。全員が何故信太がいるのかという驚きと、話を聞かれたという恥ずかしさで頭が一杯だった。

「どうしてと言われても、俺が風呂に入ってたらみんなが入ってきたんだよ」

信太は千冬に指示されて、冷蔵庫からビールと自分用のオレンジジュースを手に取り千冬の隣に座る。千冬は信太からビールを受け取るとまた勢いよく飲む。

「織斑先生、俺が居るの知ってたんですからちよつと待っていてくれてもいいじゃないですか。女子同士の話じゃ無いんですか？」

「ふん。どうせこの中にお前の事が好きな奴はいないと思ったから



な

「それは酷いですよ」

「……………」

二人は淡々と話しているが、以前他のみんなはぼかんと口を開けている。

信太は話を止めると、シャルロット達を見る。

「お前達も物好きだな。剣斗と俺は姿はほとんど同じだけどさ。そんなに違うか？」

「……違う」「……」

三人は見事に言葉を重ねる。きっぱり言われてしまい、信太も苦笑いをしている。

「まあ、姉から見ても一夏と付き合える女子は得だな。あいつは料理や家事はなかなかだし、それにマッサージもできるぞ。どうだ、ほしいか？」

「……くれるんですか？」「……」

「やるか、ばかもん」

「……ええ」「……」

「女なら奪う気でこい。それこそ死に物狂いでな……………」

千冬は楽しそうに三本目のビールに口をつける。

信太は千冬と違ってシャルロット達に忠告した。

「俺は織斑先生のように奪えとか言わないし、剣斗がそこまで好かれてるのは弟しても嬉しい。けどな、お前達は剣斗の事が好きだろうけど剣斗自身は誰よりも自分を嫌ってるぞ」

信太は三人の目を見つめながら言葉を続ける。

「剣斗は自分に力が無いのが気に入らないんだよ。剣斗にとっては守ることが全てだからな」

「……………」

三人は信太の話を聞いて思い当たる事がいくつもあった。剣斗は誰よりも力に執着している。勿論、守る為の力だがそれでも剣斗の執着ぶりは凄かった。ホープを失ったときも、専用機を失ったシヨックより力を失ったシヨックの方が大きかった。

「まあ、俺から言えることはそれでも剣斗を好きでいてくれ。あいつはまだ、自分が好かれてる自覚はないだろうけど。だけど、それがいつかあいつの助けになるはずだ……………」

信太はそう言っておレンジジュースを飲む。彼女達は信太の言葉を全て理解できたわけでは無かったが、力強く頷いた。

臨海学校二日目。

今日は朝から夜まで一日中ISの各種装備試験運用とデータ取りをするらしい。

「ようやく、集まったか。      おい、遅刻者」

「は、はい！」

今日遅刻したのは意外にもラウラだった。ラウラにしては寝坊したようで頭には少し寝癖が付いている。

「そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「はい。ISのコアは……」

ラウラは淡々とコア・ネットワークについて説明する。凄いな、俺だったら絶対説明出来なかったよ。その為にも俺は常に十分前行動だけどな。偉いぞ俺。

「さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

安堵の息をつくラウラ。よかったラウラ。俺だったらあんなチャンスも与えられずに罰を受けていただろう。      考えただけで身震い

がするぜ。

「それでは、まず専用機持ちとそうでない者に分かれる」

俺と信太は今は専用機持ちではないので他のみんなに加わる。でも何故か箒は一夏達に加わる。あれ？箒は専用機持ってないよな。…もしかして。

「ちーちゃん！！」

向こうから誰かが凄いスピードで走ってる。誰かと言っても、千冬さんをちーちゃんと呼ぶのはあの人しかいない。

「……東さん」

「と、見せかけて剣く〜ん！」

東さんは急に方向転換して俺に向かってくる。

これはとりあえず殴っていいのか？

俺は影打に手を当てたがその前に東さんは千冬さんのアイアンクローによって止められる。

でも千冬さん、少しやり過ぎですよ。東さんの頭から変な音がしますが……

「相変わらず凄いアイアンクローだね。東さんの頭が潰れちゃいそうだよ」

「そうか。では潰してやろう」

千冬さんは更に手に力を入れる。

千冬さん、それ以上はもういいです。見てるこっちが痛くなってきました。

しかし、東さんは千冬さんのアイアンクローからあっさり抜け出す。東さんは着地すると、今度は箒の方を向く。

「やあ！」

「……どうも」

「久しぶりだね。こうして会うのは何年振りかな。それにしても、大きくなったね箒ちゃん。特におっぱいが」

「がんっ！」

手をいやらしそうに動かす東さんに箒は容赦無く木刀で吹き飛ばす。吹き飛ばされた東さんはそのまま岩にぶつかりそうになるが、「あつ」と言つが誰よりも先に信太が東さんをお姫様だつこで抱える。

「大丈夫ですか？東さん」

「おお、我が愛しの執事こと、しんしんではないか！助かったよ。もう少しで東さんの頭がかち割れちゃうところだったよ」

「いつものことですから……」

信太は東さんを優しく降ろしハグをする。どうやら信太はあつちでは東さんの専属執事。つまり、東さんの身の回りの世話をしていたのだらう。信太が俺より家事ができるのはそのせいだらう。

「おい束。自己紹介くらいしろ」

「え、めんどくさいな。私が天才の束さんだよ、はー」

そう言ってくるんと回りVサインをする。みんなもやっとこの人がISの開発者にして今までで最高の天才科学者・篠ノ之束だと気付く。けどイメージとかなり違ってたらしく、ぽかんとしてる。

みんな知らないのか、馬鹿と天才は紙一重という言葉を。

「お前はもう少しまともにできんのか。はあ……。それで、持ってきたのか？」

千冬さんがため息混じりに聞く。それを聞いて束さんの目がキラんと光る。

「ふっふっふっ。勿論だよーちゃん。さあ、空を見てみよ」

空を指差す束さん。その言葉に従って俺達は空を見上げる。

ズドォーンッ

「おわっ!?!」

いきなり、空から金属の塊が砂浜に落下してきた。

金属の塊は次の瞬間サイコロを開いたように開きその中身を俺達に見せる。

「じゃっじゃじゃーん！これぞ篝ちゃんの専用機こと『赤椿』！全スペックが現行ISを上回る東さんお手製第四世代のISだよ！」  
第四世代！？

東さんの口から出た意外な言葉にみんなは驚きの表情を隠せない。無理もない。今は各国が競って第三世代型ISの開発をしているのに東さんはそのさきの第四世代型のISを造ってしまったのだ。これでは各国の努力が水の泡になってしまう。

「それではここで心優しい東さんの解説タイム。第四世代はね『パッケージ換装を必要としない万能機』という、只今絶賛机上の空論中のものだよ」

「はあ……。それはすごいですね……」

東さんが天才であることを改めて思い知らされた。一体どうしたらそんな考えが出来るんだ？

「東。言ったはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだったっけ？てへへ、東さんやりすぎちゃった。まあそれは置いて、篝ちゃん今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！」

「……わかりました。頼みます」

篝が赤椿に乗ると東さんは空中投影のディスプレイをを何枚も呼び出しそれらを同時に扱う。

みんなは世界初の第四世代に興味津々で赤椿を見ている。しかし、俺だけがみんなとは違う気持ちで見ている。

（赤椿…… 筈の専用機で筈の新しい力。これで筈は確実に俺より強くなった。みんなはどんどん強くなっていくのに俺は逆に弱くなってきた）

赤椿はフィッティングとパーソナライズを終わらせ試運転をしている。赤椿のスピードと攻撃力は確かに他のISより一線を越えていた。

俺はそんな赤椿に嫉妬の目を向けてしまう。

「俺にも力があれば……」

俺はふと、束さんが昨日言っていたことを思い出す。

『私は剣くんの願いなら、どんな願いでも叶えるよ』

それは俺が専用機を造ってくれとお願いしたら束さんは専用機を造ってくれるだろうか。きっと束さんならすぐに俺の専用機を造ってくれるだろう。俺は束さんをお願いしようとしたが直前で止めた。

（よしておこう。貪欲に力を求めても意味がない。出きる限り今ある力だけでみんなを守ってみせる。それで駄目だったら束さんかバルバさんをお願いしよう……）

俺はそう決心して砂浜に降りてくる赤椿を見る。筈の顔は自信に満ちていた。

「たっ、大変です！お、織斑先生っ！！」



いつもより何倍も慌てている山田先生が走ってくる。

「どうした？」

「それが……」

山田先生は周りに聞こえないように千冬さんに耳打ちする。その内容を聞いて千冬さんの顔が険しくなる。

「わかった。それでは山田先生は他の先生達に連絡をお願いします」

「わかりました」

「頼むぞ。 全員、注目！」

山田先生が走り去った後、千冬さんは手を叩き生徒全員を振り向かせる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動に移行する。今日のテストは中止。各班、ISを片して旅館に戻れ！」

千冬さんが指示をするが、不測の事態に女子一同は騒ぎ始める。しかし千冬さんの声が一喝する。

「さっさと戻れ！以後、許可なく室外に出たものは我々で拘束する！いいな……！」

「……はいつ……」

全員は慌てて行動する。みんな今までに見たことのない千冬さんの様子に怯えてるようだった。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、オルコット、デュノア、ボーデビッツヒ、鳳、フラン！　それと、篠ノ之もこい」

「はい！」

専用機持ちのみんなは千冬さんに付いて旅館に向かう。当然俺と信太は呼ばれなかった。

「剣斗、気持ちはわかるが今は戻るぞ」

「……わかってるよ」

俺は信太を置いて旅館に向かう。

どうやら、この臨海学校も唯では済まないようだな。そう思わずにはいられなかった……

## 決意の弟と墜ちる兄

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間では、一夏達専用機持ちと教師陣が集められた。

照明を落とした薄暗い室内に、大型の空中投影のディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』及び、『死神の足音』通称ガルダが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの報告があつた」

千冬からの説明に、一夏と篤は啞然としている。しかし、他の代表候補生たちはこういった事態に対しての訓練を受けているお陰で落ち着いていた。特に軍人であるラウラの眼差しは真剣そのものだった。

「その後、衛生による追跡の結果、この二機はここから二キロ離れた空域を通過することがわかった。そして、この事態には我々が対処することになった」

一夏はまだ状況を理解しきれなくて、口を開けている。

「教員は訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してしまう」

「ここでやっと一夏も事の重大さに気付く。」

「それでは作戦会議をはじめ。意見があるものは挙手するように。」

「はい。」

早速セシリアが手を挙げる。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します。」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だからな。」

部外者である二人は部屋に戻れ。」

「え?」

千冬が視線をやる障子に全員が視線をやる。障子には大座敷が暗いせいで二人の人影が映る。

一人は腰に刀を携え、もう一人も刀こそ持っていないが二人の人影はまったく同じ。その二人は部屋にいるはずの剣斗と信太だった。

千冬に言われても二人は戻ろうとはせず、その場にいる。千冬は「しょうがない」と小さく言うと、二人に決定的な言葉を突きつけた。

「専用機を持たないお前達に何ができる?」

「……………」

二人は黙ったままだが、剣斗が動揺してるのはここにいる全員がわかる。

千冬は言葉を続ける。

「今のお前達に何が出来るんだ。訓練機でも使う気か。訓練機でどうにかなるほど、今回事態は甘くないのだ。訓練機で参加されてもかえって全員を危険に晒すだけだ。わかったらさっさと戻れ」

「わかりました……」

そう返事をして剣斗は部屋に戻る。信太も千冬に一礼して部屋に戻った。

剣斗達が戻った後の大座敷には嫌なムードが漂っている。それを千冬の言葉が振り払う。

「お前達も切り替える。剣斗達は仕方がないんだ。あそこで無理をされても、私は身の安全を保証できんだ」

「わかっています。私達は大丈夫ですのでISのデータをお願いします」

ラウラが代表で言う。全員も力強く頷く。その目には確かな闘気が宿っていた。

千冬は「わかった」と言っつて先生に指示をする。出されたデータを見て、代表候補生たちの意見交換が始まる。

「『銀の福音』、広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じ、オールレンジ攻撃が可能ですね」

「攻撃と機動の両方に特化した機体ね。厄介だわ。これじゃあ甲龍

だと追い付けないわね」

「この特殊武装が曲者だね。これだと織斑先生の言う通り、訓練機じゃ話にならないね……」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ」

「私的にはそちらよりガルダ『死神の足音』の方が厄介ですよ」

フランはもう一機のISデータを見ながら言う。

「一対一を得意とする機体だが右手の大型近接ブレード、左手のビームランチャー、右肩には実弾の左肩にはビーム式のキャノン砲で一撃が大きい。でも、一番厄介なのはビームランチャーとビームキャノンを連結して撃つ一撃だな。データでは直撃すれば恐らく専用機でも一撃で戦闘不能になるな……」

「ガルダについては今のところ問題はない」  
フランがガルダを解析するが、千冬はそれを止めさせる。全員千冬が何故そんな事を言うのかわからなかった。

「原因はわかってないのだが、現在ガルダは動く気配がない。恐らくはエネルギーを貯めているのだろう。だから今回は先に福音を……」

その後も作戦会議は三十分程続いた。

時刻は十一時。

作戦会議を終えた一夏は一旦部屋に戻っていた。だがその顔は晴れないものだった。

「信太はともかく、剣斗にはなんて言おう」

剣斗は今回の作戦に参加できなかったのをとても悔しがっていた。そんな剣斗になんと言えは言いのか考えていたが、良案が思いつく前に部屋に着いてしまった。一夏はゆっくりと部屋に入る。

「よお、お疲れ一夏」

信太は笑顔で出迎えてくれた。一方剣斗は一夏に背を向けて窓から外を眺めていた。

「あのさ、剣斗……」

「作戦、どうなった？」

一夏が言う前に剣斗が質問する。一夏は答えるか迷ったが剣斗ならいいと思って話した。

「二機いる内の一機はまだ動かないらしい。だからまず俺と篤がも

う一機を倒すことになった」

「そうか……」

剣斗は短く答えて立ち上がる。そこで一夏は剣斗の手に以前のホップの待機状態のブレスレットが握られてる事に気付く。

「剣斗、お前……」

「やっぱり駄目だったわ。どんなに強く願ってもホップは現れなかった。悔しいけど俺は力になれねえや。……だから」

剣斗は真っ直ぐ一夏の目を見る。一夏も決して視線を反らさなかった。

「頼んだぞ。俺達の方もみんなを守ってくれ」

「ああ、任せろ。俺が守ってみせる」

二人は拳をぶつけて約束した。



時刻は十二時過ぎ。

俺と信太はもう一時間ちかくは砂浜に座り込んでいた。千冬さんは部屋から出たら拘束すると言っていたが、先生たちも忙しくしてるため簡単に旅館から出れた。

「……………」

二人は砂浜に着いてから何も話してなかった。唯座って一夏達の帰りを待っていた。

一夏には任したと言ったが、あの時は悔しかった。他人に頼るしかないほど自分が弱いのが許せなかった。だが、いくら悔しがっても今の自分には何も出来ないのが現実でこうして一夏達の帰りを待つしかなかった。

「なかなか戻ってこないな」

信太が話し出す。

「相手は軍用ISだからな。そう簡単にはいかないさ」

「でも二人だけでよかったのか。俺には箒が浮かれてるように見えただけ」

それは俺も感じていた。箒は自分だけの専用機を手に入れて完全に浮かれていた。あんな状態のまま出撃しても、必ずどこかでミスをする。だから俺も二人だけの出撃に反対だった。だけど今の俺達には意見を言う資格は無いし、千冬さんやラウラがこの作戦に同意し

たのなら問題はないだろう。

「大丈夫さ。確かに箒は浮かれていたけどそこは一夏がしっかりサポートするさ。俺達は信じて待つだけさ」

「そうだけども……。おっ、二人が戻ってきたぞ」

信太がそう言う。俺も水平線の方を見ると白と真紅の機体がこっちに向かっていているがその様子がおかしかった。

よく見ると白いIS、つまり一夏はぐったりとしている。俺達は嫌な予感がして立ち上がり、大きく手を振って箒を呼ぶ。箒もこちらに気付いて砂浜に着地すると二人のISが解除される。

「おい、何があった！作戦はどうなった！」

「すまない、わたしのせいだ。わたしのせいで一夏が……。一夏が……」

一夏はぐったりと倒れたままで、箒も泣きながらずっと謝っている。これじゃ話にならないと考え、一夏を背負う。

「信太！俺は一夏を旅館に連れていく。箒のこと任せたぞ」

「わかった」

俺は一夏を背負って走り出す。

「おい一夏！しっかりしろ！大丈夫か！」

俺は一夏に何度も呼びかけたが、一夏が答えることはなかった。

「……………」

あれから三時間以上は過ぎただろうか。目の前の一夏は一度も目を覚ますことなく眠っていた。体の至る所に包帯が巻かれている一夏を傍らにいる剣斗は唯じつと見ていた。

信太から聞いた話では、一夏達は福音をあと少しまで追い込んだらしい。けど一夏はそこに偶々いた密漁船を庇い、そして動揺した筈を庇ってこうなった。

あれからセシリアや鈴などの専用機持ちが一夏の様子を見に来たが、誰も剣斗に話しかけるものはいなかった。唯一ラウラだけが「気にするな」と言ってくれたが、剣斗は自分を責めずにはいられなかった。

（俺に力があれば作戦会議に参加できて、二人だけで出撃なんてさせなかった。力があれば一夏はこんな怪我もしないで筈も悲しむ必要は無かった。力が、俺にも戦える力があれば…）

俺はやるせない気持ちを抑えることができずに壁に拳を叩きつけていた。

すると扉が開いて信太が入ってくる。けど振り返ることはしなかった。

「悪い知らせだ」

「……」

何も答えない剣斗。けれど信太は話を続ける。

「箒たちが勝手に出撃したらしい。しかも、最初は動かなかったガルダも動き出してな、ガルダにはラウラとシャルロットが向かって時間を稼ぎ、その間に他のメンバーが福音を倒すつてよ。それで俺達は……つて、どこ行くんだよ!？」

剣斗は急に立ち上がると部屋を出ていった。止めにいこうとした信太だったが直ぐに立ち止まる。

(どんなに悔しくても、今の剣斗にはどうにもできない。きっと直ぐに戻るだろう)

そう思った信太だが、剣斗はなかなか戻ってこなかった。信太は心配しながらも一夏の白式から詳しいISデータと作戦データを見る。

「この二機は本当に凄いな。こんな基本スペックが高いなんてな。それで先生たちが空域や海域を封鎖するのか。うん?先生たちは訓練機五機を使うのか。でも臨海学校には訓練機が六機あったはず……!?!。もしかしてあいつ!」

俺は慌てて部屋から飛び出して、訓練機が置かれてる洞窟に向かう。そこには案の定打鉄を装着した剣斗がいた。

「剣斗。お前なに考えてんだ。お前が行ったって戦いにならねえよ」  
「わかってるよ。俺はシャルたちに合流して一緒に時間を稼ぐ。打鉄でもそのぐらい出来るはずだ」

剣斗は今にも出撃しようとする。信太は必死で剣斗を引き止める。

「何でそこまで無茶すんだよ。守られるのがそんなに嫌なのか？それは仕方がないだろ。俺達には今は力が……」

「違うぜ信太。俺は守られるのが嫌なんじゃない。俺は弱いからなでも！」

剣斗の声は次第に強くなっていく。

「守られてるのに守れないのが辛いんだ！力が無いのが悔しいんじゃない！力が無くて守れないのが悔しいんだよ俺は……！」

信太は立ち尽くしたままだった。信太は本当の意味で剣斗の気持ちを理解できてなかった。その事が信太も悔しくて何も言えなかった。

「俺はもう行くぜ」

「ちょっと待て！やっぱ打鉄が相手に……」

剣斗は信太の言葉もお構い無しに出撃する。

「ああーもう。くそっ……」

信太は洞窟から出ると、一夏がいる部屋に戻った。

(こうなったら一夏の白式を使うしかない。白式で剣斗を連れ戻すしか……)

信太が部屋の扉を開けるとそこにはベッドから起き上がってる一夏がいた。

「一夏。目、覚めたのか」

「さっきな。心配かけたな」

「そうだ一夏！今大変なんだ！」

信太は一夏に眠ってる間のことを全て話した。ガルダが動き出したこと、箒達が勝手に出撃したこと、そして剣斗が打鉄で出撃したことも。

「なんか俺が寝てる間に随分話が進んでるな」

「そうだろ？だから一夏、お前が剣斗を連れ戻して(いや、俺は箒のほうに行くよ)……は？」

信太は一夏の言葉に耳を疑ってしまう。だが、一夏の目は冗談を言ってる感じではなかった。

「何だよ。このままだと剣斗は確実にやられちまうよ」

「だったら信太が行くべきだぜ」

「だから、俺にはISがないから頼んでんだよ」

「本当にそうか？」

一夏は信太のバックを開ける。そしてバックから剣斗が持つてるものと同じ形をしたブレスレットを取り出す。

「気づいてたのか」

「さつき起きたとき偶々な。いつ戻ってたんだ？」

「昨日の昼に用事があるって言っただろ。あの時にバルバさんかな。食事の後の用事で束さんに見てもらって完全に戻ってきたんだ」

「だったら、お前が行くしかないだろ。俺は箒達が、お前は剣斗が心配なんだから」

一夏はブレスレットを信太に渡すが、信太はそれを受け取るうとはしなかった。

「俺には無理だよ。これは元々俺のISじゃない、剣斗のISだ。剣斗だって俺がこいつに乗って納得するわけないんだ。だから俺はこいつには乗れない」

バシンッ！

一夏に頬を打たれた信太は床に倒れる。いきなりの出来事に信太は何も言えなかった。けど一夏は信太を無理矢理立たせて怒鳴り散らした。

「ふざけんなよてめえ！お前はそんなつまないプライドの為に剣斗がどうなってもいいのか！違うだろ、剣斗は自分に確かな力がないのにシャルロット達を守るために無理して行っただぞ。それなのにお前は守れるだけの力があるのに、俺には乗る資格がないだろ。だったら何で早く剣斗にそいつを渡さなかったんだよ！」

「それは……その」

信太が言葉に悩んでいると一夏はそつと手を離す。

「お前も守られるだけじゃなくて守りたいよな。やっぱ兄弟は似るもんだな」

「一夏、俺は……」

信太は何かを言いかけるが、一夏はそれを聞こうとはせず部屋から出る。一夏は部屋から出る前に一言だけ信太に言う。

「守れた筈なのに守れなかった。最低でも俺は嫌だぜ、そういうの」

一夏は走り出す。部屋に取り残された信太は一夏から渡されたブレスレットを強く握りしめる。

「一体俺は、何がしたいんだ」

信太はその後何回も自分に問いかけた。



大座敷では作戦を仕切る教師たちが予想外の事態に慌ただしくしている。

十分程前に旅館から二機のISが勝手に出撃している。一機は白式で、一夏が無事だったことにほっと胸を撫で下ろす教師たちだが問題はもう一機だった。

「剣斗君。今すぐ旅館に戻ってください！」

山田先生が剣斗が旅館に戻るように説得する。打鉄で出撃した剣斗は直ぐに教師たちにはれた。そして山田先生から通信が入ったが剣斗は山田先生の話の聞く気はなかった。

「大丈夫です。戦うわけじゃありません。時間稼ぎをするだけです」

「ですが、打鉄では時間稼ぎも出来ません。直ぐに戻ってきてください！」

「だからそのための武器も幾つか持ってきてます。罰も後でいくらでも受けます」

「そつゆう問題ではないです！」

山田先生にしては珍しく怒鳴っている。それほどこの事態はまずいのだ。

「山田先生、シャルたちが見えました。集中したいので一旦通信を切ります」

「ちょっと待ってください。剣斗君！剣斗君！！」

山田先生に有無を言わず剣斗は通信を切る。山田先生はどうしたらいいかわからず、頭をボサボサとかく。頭がパニックになってる山田先生に変わって千冬が指示を出す。

「こうなっては仕方がない。封鎖にあたって先生に奴を止めに行かせろ」

「待ってください！！」

突然大座敷に通信が入る。モニターを見るとそこにはホープを装着した信太が映っていた。予想外の出来事の連続で千冬以外の教師たちの思考は止まってしまい、体が動いていない。

「俺があいつを止めに行きます。出撃許可をお願いします」

千冬は判断に迷ったが、信太の目を見て決めた。

「お前には聞きたいことが沢山あるが今はそれどころではない。いだろう許可する。そのかわりしっかり剣斗を連れ戻せよ」

「はいー」

信太は力強く返事をして通信を切る。

（一夏、お前の言う通りだ。守れた筈なのに守れなかったのは俺も嫌だな。これは後で剣斗に渡そう。　　けど！）

ホープからエネルギーの翼が展開される。

（今はこの力で俺が剣斗を守るんだ。俺に名前を生きる意味をくれたあいつを！）

信太は高速で剣斗たちが戦っている場所に向かう。その目に迷いは一切無かった。

バキイイン

（これで三本目。思ったより速いな）

シャルたちに合流した俺だがガルダの圧倒的な攻撃力に追い込まれる。

「剣斗。下がって」

俺は一度後ろに下がる。代わりにマシンガンでシャルがガルダを牽制する。ガルダも一度後退して右肩のキャノン砲でシャルを狙う。

「おっと。その程度じゃ、この『ガーデン・カーテン』は落ちないよ」

リブアイブ専用防御パッケージは、実体シールドとエネルギーシールドの両方によってガルダの砲撃を防ぐ。ガルダは右肩だけでなく左肩のキャノン砲の砲撃も行う。

「これはちょっと、きついね。ラウラお願い！」

「任せろ！」

砲撃パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備したシュブアルツェア・レーゲンでシャルを援護する。

砲撃パッケージ『パンツァー・カノニア』。八十口径レールカノン「ブリッツ」を二門左右それぞれの肩に装備し、四枚の物理シールドが左右と正面を守っている。機動性の代わりに火力を重視したパッケージである。

二方向からの射撃にガルダは一瞬判断に迷う。そこに剣斗が斬りかかる。

ガルダは大型近接ブレードで受け止める。そしてすかさず両肩のキャノン砲で俺を狙う。

「げっ」

俺は反射的に打鉄の実体シールドで防御する。しかしガルダの攻撃力の前では訓練機のシールドはたいしたいみもなく、シールドは砕けて俺も近くの岩に飛ばされた。

「剣斗はそこで見てて。後は僕たちで何とかするから」

シャルはショットガンを呼び出してガルダに接近する。ラウラも距離を取りながらシャルを援護する。

俺も駆けつけようとするが今の一撃で打鉄のシールドエネルギーは0になってしまつて何も出来ない状態だった。

「訓練機じゃ、これが限界かよ」

俺が立ち上がると山田先生から通信が入る。

「皆さん、今織斑君たちが福音の撃退に成功しました。これから織斑君、篠ノ之さん、フランさんがそちらに向かいます。もう少しの辛抱です」

山田先生の報告を聞いて剣斗はほつとする。

（よし。これであとは一夏たちが来るまで持たせて、一夏たちが来たら俺は撤退だな）

剣斗がガルダを見るとそこには一生懸命持ちこたえるシャルとラウラの姿。しかし二人は徐々に追い込まれる。

ガルダは今までの遠距離からの射撃を止めて、接近戦でシャルを追い込む。ラウラも砲撃で援護しようとするが、ガルダとシャルが密着してるせいで上手く狙えない。

シャルもブレード・スライサーで受け止めるがそれも長くは持たない。ブレード・スライサーを弾いたガルダは密着状態のまま砲撃する。シャルのガーデン・カーテンもガルダの砲撃の全てを受けるのは限界で、やがて四枚のシールド全てが破壊される。

ガルダは近接ブレードをシャルに突き刺すように構える。

「シャルロット！」

ラウラが砲撃を止めて急いでシャルロットの元に向かうが、その時にはガルダは近接ブレードでシャルロットを突き刺そうとする。シャルロットは何も出来ずに目を閉じる。

ザシュ……

「え……？」

刺されたと思ったシャルロットの体には何故か痛みは無かった。その目をゆっくり開ける。

「ようシャル……。ギリギリセーフだな……」

シャルロットの目の前にはガルダに脇腹を刺された剣斗がいた。シャルロットのシールドが破壊されたときには剣斗は飛び出して、シャルロットが刺される前に間に入って盾になった。しかし、打鉄にはシールドエネルギーがなくISの防御機能は働かず近接ブレードが脇腹に突き刺さる。剣斗の脇腹からはおびただしい量の血が流れる。ガルダが近接ブレードを抜くと剣斗の体は崩れ落ちて行く。

「剣斗！」

シャルロットとラウラが手を差し伸べる。剣斗も手を差し伸べてその手を掴もうとする。

ガシャンッ

剣斗の目の前、シャルロットたちの後ろではガルダがビームランチャーとビームキャノンを連結させる。それはデータで見たガルダの必殺の一撃。それが剣斗に向かって撃たれようとしている。

(このままじゃシャルたちも……。くそっ、最後に動け！)

剣斗は最後の力を振り絞ってシャルロット達を後ろに突き飛ばす。そこで初めて二人はガルダが攻撃を仕掛けてるのに気付く。

剣斗は遠退く意識の中で二人を見る。

(よかった…これで二人は無事だな。でもこれはまずいよな、さすがに生きてられる自信が無いな……。そうだ最後に言っとかないと)

剣斗は言葉を言うことは出来なかったが、唇だけは動かしだ。

負けるな。

次の瞬間、凄まじい閃光が剣斗を包む。攻撃が止むと、原型を留められない程ポロポロになった打鉄と共に剣斗はそのまま海に落ちる。

「そんな……。剣斗……。剣斗ー！」

シャルロットは叫ぶ。しかし、返事が返ってくることはない。

唯、剣斗が落ちた所からは剣斗の血で赤く染まっているだけだった。



## 決意の弟と墜ちる兄（後書き）

いかがですか？

今回は福音は全く出ません。あとオリジナルISのガルダ。名前は適当につけました。意味不明な感じもしますがあまり突っ込まないで下さいね。

さて今回はあっさり墜ちてしまった剣斗どうなるでしょう。次はいつ更新できるか……

それではまた次回の更新で！

立ち上がる希望（前書き）

約一週間ぶりの投稿です……

## 立ち上がる希望

「剣斗！剣斗！！」

シャルロットは何度も剣斗の名を呼ぶが反応は無い。

「Kya…KyaKyaKyaKyaKya！」

後ろではガルダの甲高いマシンボイスが聞こえる。その音は一人が墜ちたことを心から喜んでるようだった。

「貴様！」

ラウラは怒りをガルダに向ける。一方のシャルロットは依然剣斗が墜ちた所を見つめている。その目に闘気は無く、涙も流れている。

「シャルロット！しっかりしろ。まだ戦いは終わってないぞ！」

ラウラは激を飛ばすが今のシャルロットに効果は無かった。そして、そのチャンスを見逃すほど相手も甘くはない。

ガルダはビーム兵器の連結を解除する。そして、ビームランチャーでラウラを牽制しながら瞬時加速でシャルロットに接近する。

「しまった！」

ラウラもガルダの後を追う。しかし『パンツァー・カノニア』を装備したラウラではガルダに追いつくことはできない。

間合いを詰めたガルダは近接ブレードでシャルロットを斬る。

「ぐっ……」

一瞬苦い顔をするシャルロットだが、反撃する様子もその場から離脱する様子も見せない。シャルロットには既に戦う意志は無く。剣斗がやられたショックから立ち上がれなかった。ガルダから見れば今のシャルロットは恰好の標的で、続けざまに攻撃を加える。シャルロットのエネルギーはどんどん減っていき遂には二桁になってしまふ。

ガルダはシャルロットの首を掴むと、剣斗に喰らわせた一撃であるビーム兵器を連結させて標準を合わせる。

「シャルロット、シールド・ピアスだ！その距離なら外さない！」  
ラウラの言葉もシャルロットには届かない。シャルロットの頭の中にあることが浮かぶ。

( 剣斗。ごめんね、守れなくて。今僕も会いに行くよ剣斗 )

シャルロットは輝きを増す銃口を見つめ、覚悟を決める。

キュイイインッ！

！？

突然、ガルダはシャルロットを掴んでいた手を離す。ガルダは左から荷電粒子砲による狙撃を受ける。ガルダは一旦距離を取ると再びシャルロットを狙うが次に右からビームライフルの狙撃を受ける。

「大丈夫か！？シャルロット！」

白式第二形態・雪羅を纏った一夏とホープを纏った信太がいる。

「剣斗はどうした」

信太がきくと、シャルロットはまた泣き出す。信太は海を見るとまだうっすらと赤く濁っている。

「まさか……」

「すまない。私たちが止めてれば」

駆けつけたラウラが申し訳なさそうに言う。

「お前たちが悪い訳じゃない。俺がもっと早くここに来てれば」

信太は一度、全員のISの状態を見る。

（フランさんとラウラはまだそこまでエネルギーは減ってないな。一夏はセカンド・シフトもして零落白夜があるから必要だ。箒はもう殆どエネルギーが無いな、いくら第四世代でもこれじゃ無理だ。シャルロットは……あの状態だとこれ以上は任せられないな）

信太は大声で全員に指示を出す。

「みんな！これから俺、一夏、ラウラ、フランさんとガルダを倒す。箒とシャルロットは剣斗を探してくれ。いいか、絶対に諦めるな。剣斗はまだ生きてる、諦めた奴はぶん殴るからな！」

全員が頷いて行動する。けど、シャルロットだけが未だ動けてない。

「シャルロット」

「信太……」

シャルロットからは鬨気どころか生氣すら感じない。信太はシャルロットの目を見て言う。

「シャルロット、お前が剣斗とした約束は何だ。お前が自立するまで傍にいてやるだろ。あいつは約束は絶対守る奴だ。だから、諦めるな。いいな！」

「う、うん！」

涙をこらえるシャルロット。だが先ほどとは違ってそこには生氣が満ちていた。

シャルロットは箒を追うように海に入る。

「さてと」

信太はガルダの方を向く。

「お前はちょっと許せないな。剣斗をやった代償は……」

信太はビームライフルをモード「燕」にする。

「高くつくぜー！」

「ここは……何処だ？」

沈んでいく剣斗の体。

何も無い海底に落ちて行く。

「そつだ。俺は刺されて、撃たれたんだ」

俺の脇腹からは血が出ているが、その血もこの広い海ではあっという間に薄れて何も無かったかのように消える。

「また俺は……守りきれなかった……」

何時だって俺はそつだった。

シャルロットに会う前のあの事件、あの時は何も守れなかった。

学年別トーナメントではラウラは救えても、シャルの心まで救えなかった。

シャルが連れていかれそうなきは、シャルは守れた。けどフランさんは救えなかった。信太の時は、信太は救えたけど俺はあいつのISを壊しちまった。

そして今回もシャルたちは一時的に守れたが、自分の身は守れなか

った。

俺は結局一度もみんなを守れたことがない。誰かを守れた時は必ず誰かを守れなかった。一体俺には何が足りないのか、分からない。いくら考えても答えが見つからなかった。

あと数センチで届きそうだったこの手も、今はもう数メートル、数十メートルと離れてしまった。

俺の体はゆっくりと海底に着く。ISからは生命危険信号が出続けている。このままでは生命維持機能も停止してしまう。だけど、俺は妙に落ち着いていた。もう諦めているのかもしれない。俺は伸ばしていた手を下ろす。

コッソん……

腕に何か金属みたいなのが当たり、俺は横を見る。そこには俺と同じ様に横たわる人の形をした金属の塊。

(これは……IS?何でここに)

俺はISに触れる。ISはそれに反応して光出す。

(?!……)。何だろう、こいつは妙に俺に馴染む。俺はこいつを知ってるのか?それよりこいつがあれば俺はまだ……)

そう思った俺だが、その思いを否定する。

(もういいや。俺だって充分頑張ったし、これ以上生きてもまた中



途半端に守れないだけだ。あんな思いするのは嫌だ、このまま死んじゃうのもありかな…)

勿論死ぬのは怖い。何も感じることの永遠の間。だけど裏を返せばそれは何も苦勞することも無く、あんな嫌な思いもしなくて済む。それはそれでいいのかもしれない。

俺は打鉄の生命維持機能を停止させようとする。すると、突然に打鉄に映像が送られる。それは海上で戦う信太たちの映像だった。

「なかなかやるな。だけど、こん位じゃ終わらないぜ!」

信太……

「これでどおだああ!」

一夏……

「ラウラさん、砲撃が甘いです。泣いてるなら撤退してください!」

「泣いてなどいない!唯、目にごみが入っただけだ。それに私に泣く理由があるか!」

「そうです。彼はきつと戻ってきます。だから泣く意味もない。私たちは彼が戻るのを待つだけです!」

フランさん、ラウラ……

映像は変わって海中にいるシャルと篝が映る。どうやら俺を探してくれてるらしい。

そんな事しなくてもいいのに……

「シャルロット。こっちには居ないぞ」

「こっちもだよ。もっと深い所にいるのかも」

「そうだな。もっと潜ってみよう」

みんな必死だ。必死で戦って、必死で俺を探してる。俺の帰りを待ってる。

けど、みんなが泣いてる。涙を流してるわけじゃないけど、心が泣いてるのがわかる。けど、それももうどうでもいいことなんだ。俺はこのまま死んじゃうんだから、俺には関係無い。誰が泣こうが、悲しもうが死ぬ俺には関係無い。そう言い聞かせ、映像から目を背けるように瞳を閉じる。

……関係無いけど、誰が泣いたり悲しんだりするのはやっぱり嫌だな。それに原因は明らかに俺にある。俺が生きるのを諦めたらみんなはもっと悲しむだろう。

それだけは、駄目だ。俺はあの日約束したんだ。みんなを守る、みんなを笑顔にする、そしてみんなに希望をみせると。

だけど、俺の体は痛みを通り越して感覚すら無い。立ち上がるうとしても肝心の体が言うことを聞かない。ふと、俺は隣のISを見る。もう一度触れるとそのISはさっきと同じ様に反応する。

そして、俺は願った。

（もし、お前が良かったら俺に力を貸してくれ。俺は今度こそ、みんなを守りたいんだ。誰一人欠けることなくみんなを。だから、俺

に守る力を貸してくれ)

キュイイイン!!

目の前のISは強い光を放つ。俺が目を閉じ、再び目を開けると何故か俺がさっきまで目の前にあったISを装着している。代わりに目の前には俺が装着していた打鉄が横たわっている。

直ぐ様そのISはフィッティングとパーソナライズを自動で始める。俺は横たわりながらもあることを確信する。

(そうか。俺がこいつを知ってるんじゃない、こいつが俺を知ってるんだ。こいつが俺に会わせてるから馴染むと思ったんだ)

いくら思い出そうとしてもこいつの事は知らない。何だかもしかしい気分になるが、その間にISのファースト・シフトが完了する。すると傷は塞がってないが今まで無かった体の感覚も戻ってくる。

俺は立ち上がり打鉄を脇に抱える。

「それじゃあ、がんばりましょうかね。……ええと、こいつの名前はって」

名前を知らないためデータを見ていく。データには名前未登録の文字が表示される。

「お前、名前が無いのか。名前が無いとやりづらいなあ。よし、今から俺が命名しよう」

俺は頭をかきながら考える。

一分程過ぎたあと、俺はホープのブレスレットを見て名前を決めた。

「決めたぞ、お前の名前。「希望」を糧にみんなを「未来」に導く  
IS。その名も……」

ヒューチャー。

「剣斗ー！どー！ー！」

あれからシャルロットと篝は何十メートルも潜って、何百メートルにわたって探しているが依然剣斗は見つからない。

「シャルロット。やはり剣斗はもう……」

半分諦めかけてる篝。しかしシャルロットは諦めずに探し続ける。

「剣斗！何処なの！返事してよー！」

シャルロットはまるで何かにとりつかれたかの様に探し続ける。篝はシャルロットの肩をとり顔を向けさせる。

「シャルロット、現実を見る！信太は諦めるなど言った。私だって諦めたくない。けど、いつかは見切りを付けて私たちも上のみんなに加勢しなければいけないんだ！このままでは次は一夏たちが」

「わかってるよ！」

シャルロットは大声で怒鳴る。

「僕だってそんな事わかってるよ。いつかは諦めなくちゃいけない。でも僕はそんなの認めたくないんだよ。剣斗が居なくなるわけないんだ。だって僕と約束したんだよ、約束を……したんだ。約束を……」

シャルロットは箒に抱きついて動かない。箒もシャルロットを優しく抱きしめる。二人の目は涙で溢れている。二人は何も言うことが出来なかった。何かを言うときは剣斗を諦めた時だと思ったからだ。だから二人は何も言えない、言いたくなかった。

「お前たち、そろそろ一夏たちに加勢してやれよ。これ以上はあいつ等も辛いぜ？」

「だけど、それは剣斗を諦めることになるよ」

シャルロットは顔をあげずに涙声で答える。

「なあ箒。一体誰を諦めるんだ？」

「そんなの決まってるだろ。剣斗の事に決まって……え？」

「剣斗？」

二人の視線の先には新しいIS、ヒューチャーを纏った剣斗がいる。一瞬幻を見たと思ったのか、二人は目を何回も擦る。

何だよお前たち。俺がここに居るのが嫌なのか？ だったら俺また戻って今度こそ死んでくるぞ。

「本当に、剣斗か？」

「当たり前だろ？ 幻でも幽霊でもない、本物の神城剣斗だ」

「剣斗〜！」

シャルがこっちに向かってくる。

そうそう、俺はこんな感動的な再開を待ってたんだよ。この後お互いに抱き合って、……シャル、ちよつと速くないか？ 瞬時加速並のスピードだぞ。そんなスピードで向かってきたら俺受け止められないよ。

ガッンッ！

「ぐえっ！」

シャルに見事なタックルをもらった俺は勢いを止められず七メートル程進んでやつと止まった。

「良かった、剣斗生きてたんだね！」

シャルは俺に抱き付いて頭を腹にぐりぐりと押し付ける。  
シャル、それは止めてくれ。まだ腹の傷塞がってないから。また開  
いちゃうよ。」

「シャル、落ち着け。今は早く一夏たちに加勢しないと」

「そ、そうだね。早く一夏たちに加勢しなくちゃ。ラウラもきつと  
待ってるよ!」

「よし。じゃあ行くか」

「その前にちょっといいか剣斗」

「何だ？」

「そのISはどうしたんだ？」

箒は俺の纏うISを指差す。シャルもそれに気付いて不思議そうな  
顔をする。

「これか？こいつはヒューチャー。海底で拾った」

俺の答えに二人は心底驚いた顔をする。まあ、それが普通の反応か。  
でもな箒、お前の赤椿だって貰ったもんだろ。それはそれで俺には  
驚きだぞ。

「拾ったって、ISは拾う物ではないだろ」

「細かい事は気にすんなよ。拾った物は俺の物だ」

「どっかで聞いたような考えだな」

「だから、気にすんなよ。それよりもう行くぞ」

「」「うん（ああ）！！」「」

俺は遥か上を見て、小さく笑う。

「それじゃあ、第二ラウンドといきますか」

「うおおおー！」

一夏は雪羅のクローモードでガルダに斬りかかる。ガルダはそれを近接ブレードで受け止めるとキャノン砲で反撃する。すかさず信太が一夏の手をとり後ろに放り投げる。

「無理すんな一夏！お前は俺の後ろで零落白夜を狙ってる」

「すまん。今チャンスだと思って」

「今ぐらいの隙だとすぐ避けられる。もっとでかい隙をつくるからそれまで待ってる」



一夏に忠告しながらも、信太はガルダの近接ブレードを真打で何とか防いでいる。ガルダは適当に振り回しているが、一撃があまりにも大きく信太も段々押されていく。

「これはまずいな。フランさん、お願いします」

「任せてください!」

フランはガトリングガンで牽制する。その間に信太は距離を取る。充分に距離をとったのを確認して、フランは足のミサイルを発射する。

ガルダがミサイルをかわしてる隙について攻撃しようと信太と一夏は接近する。

しかし、ガルダはミサイルを避けようとはせず左肩のビームキャノンを撃つ。ビームキャノンは今までの一本のビームでは無く、拡散していき全てのミサイルを撃ち落とした。信太と一夏はあわてて後ろに後退する。

「あのビーム拡散もできるのか」

信太は困り果てた様子で言うが、事態はかなり深刻だった。

「信太、白式のエネルギーも零落白夜があと二回出来るかどうかだ」

「私もエネルギーはまだ大丈夫ですけど、弾がもう殆どありません」

二人の報告を受けて信太は頭を悩ませる。

軍用IS相手に準備が悪すぎる。そう思いながらも次の作戦を考え

る。作戦といっても残る手はあと一つしか無かった。

「こうなったら一夏の零落白夜で決めるしかないか。一夏、俺が頑張つて隙を作るからしっかり後ろに居ろよ。フランさんとラウラは出来る限りの援護をお願いします」

「了解」

フランは距離を取り、アサルトライフルとガトリングガンで牽制する。その合間にラウラもレールカノンを撃つ。完全にフランたちに気を取られてるガルダに信太たちは瞬時加速で接近する。

信太たちに気付いたガルダはビームランチャーでフランたちを狙いながらも、残ったキャノン砲で砲撃する。

信太は避けることはしない。シールドを前に突き出して進んでいく。エネルギーはみるみる減っていくがそんなのお構いなしだった。ここでどんなにエネルギーを減らされても、一夏の零落白夜が当たればそれで勝負は決まる。

「今だ一夏。決めてこい！」

「当たり前だああ！」

零落白夜を発動させた一夏が斬りかかる。意表を突かれたガルダは反応に遅れる。

（いける！）

誰もがそう確信した。しかし、その瞬間。

ドゴォン！

!?

何かが一夏に直撃する。予想外の出来事に頭が混乱した一夏の動きが止まってしまっ。

一体今のは何だったのか。飛んできた方向に目を向けるとそこには青ざめた表情をしたラウラしかない。

「まさか、ここで誤射かよ！」

ラウラはみんなより離れて砲撃している。だから、牽制のつもりで撃った弾が一夏に当たってしまった。普段のラウラならこんなミスはあり得ないのだが、まだ心が落ち着いていなかったのだ。

ラウラも自分のミスが信じられないらしく、その場に立ち尽くしてしまっ。

そのチャンスを見逃すほど相手も甘くは無かった。

ガルダは近接ブレードで信太たちを払い除けるとラウラに接近する。

「やべっ！」

「私に任せて！」

瞬時加速でフランはガルダを後ろから蹴り飛ばす。さらにがら空きになったガルダの背中にロケットランチャーを撃つ。ガルダはロケットランチャーを受けながらもラウラに接近する。ラウラもレールカノンで砲撃するがその全てを近接ブレードで弾き落とされる。

「くっ…」

ラウラは砲撃を諦めて、その場から離脱しようとするがその時には

ガルダはラウラとの距離を十分に詰めていた。ガルダの近接ブレードをシールドで防ぐがそのシールドの間にキャノン砲を突き出して撃つ。

「ぐわああ!」

砲撃の勢いで体制を崩したラウラ。ガルダはラウラの腕を握り持ち上げる。そしてビームランチャーとビームキャノンを連結させる。助けに行こうとする信太たちが右肩のキャノン砲がそれを許さない。ビームのチャージはどんどん溜まっていき、ビームランチャーに砲口に光が集まる。

( 剣斗…… )

ラウラはガルダを見ながらさっき落とされた剣斗の事を考える。

( 出来ればもう一度お前に会いたかった…… )

ガルダのビームランチャーが放たれる、瞬間。

バシャンッ!

突然海から何か飛び出しガルダに当たる。そのお陰で砲口がずれてビームはラウラの横をかすめる。

「何だ今のは」

ガルダに当たった何かはそのまま近くの岩に落ちる。みんなが見る

とそこには剣斗が装着していた打鉄があった。

「隙ありいい！」

再び海から何かが出てくる。ガルダは出てきた何かを見ると同時に踵落としが右肩に当たり、海中に落ちる。

「まさか!？」

戸惑うラウラの前には全員が待ちわびた人物がいた。

「これ以上みんなには、手出しさせねえ！」

その少年は何も描かれてないキャンパスのように真っ白なISを纏っている。

「う………剣……斗」

ラウラの目には再び涙が溜まる。

涙で歪む視界映るのは、新たな力であるヒューチャーを纏った剣斗だった。

## 立ち上がる希望（後書き）

いかがですか？

剣斗の新しいESについては臨海学校が終わったらある程度詳しく書こうと思ってます。

それより最近、かなりのスランプです。  
依然から酷かった文が更にめちゃくちゃに……。一日でも早くこのスランプを脱出出来るよう頑張ります。

第三世代以上第四世代以下（前書き）

今までで一番間隔が空いた……

### 第三世代以上第四世代以下

「待たせたなラウラ」

「剣斗か、本当に剣斗何だな！」

涙を浮かべながらラウラが俺に言い寄る。他のみんなも集まってくる。みんなも同じ様な事を言う。何でみんなそんなに驚いてんだ？俺の帰りを待ってたよな。

「どうしたラウラ、泣いてんのか？」

「違う、これは目にごみが入っただけだ」

海底で見たのと同じ言い訳をするラウラ。強がってばかりのラウラに俺は笑ってしまう。

「心配かけたな」

「全くだ。嫁ならしっかりせんか」

「はいはい。気を付けますよ」

俺は他のみんなにも声をかける。

「私は信じていたぞ。君なら戻ってくるぞ」

フランさんは無表情だが少し目が充血している。



「フランさんがイタリア代表になるまでは死ねませんよ」

本当は一回死のうとしたけどね。

「一夏、生意気にセカンド・シフトかよ」

俺は次に一夏の雪羅を叩きながら言う。

「お前こそ何だよそのIS」

一夏もヒューチャーの装甲を叩きながら言い返す。

ヒューチャーは至ってシンプルな造りで、その色は白一色である。その背中に小型スラスタがあるだけである。それは以前のホープを連想させる。

「ちょっと拾ったんだよ。良いだろ」

「別に俺は白式で充分だよ。二つ持っても意味ないだろ」

「それもそうだな」

俺たちは戦闘中とは思えないように笑う。

そして笑う視線の先にホープを纏った信太が居る事に気付く。信太は決してこっちを見ようとはしなかった。俺はゆっくり信太のところにいく。

「何だよお前。ホープあったのかよ」

明るい口調で俺は言う。

「ああ、昨日な」

それに対しての信太は暗い口調で短く言う。

「でもこれからはお前がホープを使うんだよ。待ってる、今渡すから」

ホープを解除しようと左手首に右手を乗せる信太。だがその手に更に剣斗の手が置かれる。

「その必要は無いだろ。そいつは元々お前の専用機だろ」

「それは違うよ」

顔を落としたまま信太は言う。

「こいつはお前のホープを丸々コピーしたISだぜ。だからこれは俺のじゃなくてお前の専用機だ。俺には使う資格は無いんだよ」

そんな弱気な事を言う信太の手を俺は力の限り握る。ホープの装甲からはメキメキと音が鳴る。

「一つだけ聞けど。正直この事は聞きたくないけど、お前も簡単に言えば俺のコピーみたいなもんだ。けどお前は今も神城剣斗のコピーか？」

「それは……」

何も言えない信太。だがその手には力が込もっている。それは見て

満足そうに俺は笑う。

「違うだろ。お前は今、世界に一人しかいない神城信太だ。それと同じでこのホープだって俺のコピーじゃなくて世界に一つだけのIS。お前だけのISだ。寧ろ俺が使っ資格かねえよ」

「本当に、俺が使っていいのか？」

「当たり前だ。それにガルダを倒すにもお前の力が必要だ。力を貸してくれるか？」

信太は左手で俺の右手を握る。

「わかった。この力、存分に使わせてもらっよ」

信太には先ほどまでの迷いが一切無かった。これならもう心配する必要は無い。あとやることは一つだけだ。

俺が海を見ると丁度ガルダが海から飛び出す。

その様子からはあまりダメージは受けてないようだ。

「さて信太君。ここで一つ問題があります」

「何だよ気持ち悪いな」

「こいつヒューチャーって名前なんだけど、こいつ武器がなに一つも無いんだよ」

「はあ！？一つもない！？」

やっぱり怒りますか。でもそれは俺のせいじゃ無いからな、そんな

に俺を責めたって無いもんは無いんだ。

「一応何回もデータを見直したんだが、本当に武器が無いんだよ。これだったらホープや白式の方がましだな」

「のんきな事言ってる場合か。お前、素手で戦うつもりか」

いや、ガルダ相手に素手はさすがに無理があるだろ。そんなの死んでこいつて言ってるようなもんだぞ。でも武器がないのは困ったもんだな。誰からか武器を借りるしかないかな。

手を額に当てて考える人のポーズをとる俺。すると、突然通信が入り過剰に明るい声が聞こえる。

「やあやあ。どうやらお困りのようだね剣くん！」

「東さん……」

何処からはわからないが、強制的に通信を入れられた事に少し気が散ってしまう。この人は自由だな。

「剣くん、私のことは東姉でしょ」

「そうでしたね、東姉」

「分かればよろしい。それにしても、まさか剣くんがそのISを手に入れるなんて東さんも驚いちゃったよ」

そのIS？東さんはヒューチャーの事を知ってるのか。それは好都合だ。

「東姉、このIS知ってるんですか？」

「知ってるもなにも、それは東さんが赤椿の前に造ってたISだよ。何！？だったらヒューチャーも凄いISなのか。」

「でも途中で赤椿を造る事になったから、試作機の段階で捨てちゃった」

ええ、何で途中の止めちゃうの。最後まで造ろうよ。

「これも第四世代ですか」

せめて第四世代の機体なら例え試作機でもかなりの性能が出るはずだ。

しかし、世の中はそんなに甘くは無かった。

「違うよ剣くん。そのISは第三世代だよ」

終わった。武器の無い試作機第三世代で俺は何をすればいいんだ。だったらまだ打鉄の方がましだよ。

「心配しないで、第三世代でも唯の第三世代じゃ無いよ」

「何が違うんですか？」

俺はあまり期待はしていなかったが一応聞いてみた。東さんが言うことは半分は本当に凄くて、もう半分は本当に下らないからな。

「そのISは第三世代の中でも最も第四世代に近いISだよ」

「最も第四世代に近い？」

俺には束さんが何を言ってるのか理解出来なかった。

「剣くん、第四世代の特徴は？」

「パッケージ換装を必要としない万能機ですよね」

これは今日言われた事だからよく覚えてる。展開装甲という第四世代ISの装備が可能にしてんだよな。束さんまた凄いもの造ったな。いざとなれば、第五、第六世代も直ぐに造ってしまうのではないか。

「うんうん。しっかり覚えてたね、偉いぞ剣くん。」

何故か以上に俺を褒める束さん。あんな衝撃的な事言われたら誰だって覚えてられるよ。

「じゃあ剣くん。パッケージ換装の弱点は何かな？」

意外な問題に俺は一応考えてみる。けど思いつく答えは一つしか無かった。

「換装に時間が掛かることですか？」

パッケージ、特に専用機だけの機能特化専用パッケージ『オートクチュール』。これを装備すれば機体の性能と性質が大きく変わり、様々な作戦が可能になる。

だけど、このパッケージは一度装備するとデータの書き換えをしないとパッケージを変えられないのだ。だから、もしそのパッケージに不向きな相手だと殆ど勝ち目が無くなってしまふのだ。

でも、パッケージもそんな多く造れる物でも無いので、今の所そこまで問題視されては無いらしい。だから世界は進歩しないんだとバルバさんが言っていたのを覚えてる。

「そうだね。だからその弱点を束さんが取っちゃいました。あえて言うならそのISは『パッケージの超高速換装による万能機』かな」  
さらりと言って見せる束さん。

成る程、だったらこいつに今は武器がないのも納得できる。そしてらヒューチャーは第三世代というよりどちらかと言うと第三・五世代だな。どうやら俺は相当凄いもの拾ったようだな。

「因みに、こいつのパッケージはあるんですか？」

「こつちも試作品だけどあるよ」

パッケージも試作品かよ。欲を言えばどつちかは完成してほしかったな。

「そつちからインストール「粒子変換」して、こつちに送ることはできますか？」

「当たり前だよ。天才束さんには余裕のゆうちゃんだよ」

余裕なんだ、普通の人なら無理なはずなんだけどな。つか、ゆうちゃんって誰だよ。

「でもちよつと距離があるからな、一つ目が終わるまでは動かないで欲しいな」

「どのくらい掛かりますか」

「だいたい五分かな」

「五分か……」

五分は短いようだが、その間は動けないのはまずいな。憶測だけど俺が動かなかつたらガルダは俺を狙ってくるだろうしな、そうなたら五分も持たないだろうな。さて、どうしたものか。

「なに悩んでんだよ」

隣に居たので通信が聞こえていた信太。

「五分位なら手負いの俺等でも充分に持たせるよ。だから、とっと済ませてこい」

とてもさつきまであんな弱気な奴の言うセリフではない。それでも、この場にいる誰よりも頼りになれた。

「だったら、弟を信頼しますか」

俺はある程度後退する。そして、そっと目を閉じ精神統一をする。ヒューチャーからは束さんから送られる膨大なデータが表示されるがそれを見ることはしない。見なくてもヒューチャーが俺に合わせしてくれるからだ。俺に今できるのは戦闘に参加できるようになった時に100%の力を発揮することだ。



目を閉じてたのはたったの五分の筈なのに何十分にも感じた。焦りが出始めた時に束さんから通信が入る。

「剣くん待たせたね。一つ目が終わったよ」

俺は目を開ける。信太たちは未だ戦っているが満身創痍だった。それでもこっちには一撃も攻撃が来ていない。実際には何回は狙われたかもしれないけど、信太たちは約束通り五分間持たせてくれた。

「まずは、防御パッケージ『スカイ・キャッスル』だよ」

そう言つて束さんが何かのスイッチを押す。すると俺の体の周りに光の粒子が集まりヒューチャーに装着される。パッケージが装着されるとヒューチャーの色も白から黄色に変わる。

「ここで束さんの解説です。『スカイ・キャッスル』には12個の浮遊しているのがあるよね。その内の四つが射撃用のシールドビットで、もう四つが近接武器よりのリフレクタービット。最後の四つは踏み台だよ」

「踏み台？」

「うん。スラスタはまだ造ってないからその分の機動力を補うための踏み台だよ。あと武器もまだ無いから、とにかく殴ってみてね」  
随分半端なパッケージだな。最初は凄いと思ったのに途中から駄目じゃん。せめて一つぐらい武器は造ってくれよ。

「丁寧な説明どうも」

俺は適当に礼を言う。

「次のパッケージの準備が出来たら報告するね」

「よろしくお願いします」東さんとの通信を切って軽く深呼吸をする。心は充分に落ち着いている。

俺は踏み台……は可哀想なので、一応『ステアー（階段）ビット』と名付けたものを前に配置する。それを本当に踏み台のように使いながらガルダに接近する。

「信太、待たせたな！俺とバトンタッチだ」

「遅いんだよバカ、言われなくてもバトンタッチだよ。俺たちは殆どエネルギーが無いんだよ」

「すまなかつたな。後は任せろ」

俺と入れ替わるように信太と一夏は後退する。他のみんなは遠くから援護してくれてる。

「第二ラウンドの開始だぜ！」

ガルダは両肩のキャノン砲で俺を狙う。

「東さんのお手製を舐めんなよ！」

シールドビットが全ての砲弾を防いでくれる。

ガルダは砲撃を諦めて近接ブレードで斬りかかる。

「それだつたらこれだ！」

四つのリフレクタービットが俺の左手に集まる。リフレクタービットに当たった近接ブレードは衝撃を返されガルダは体制を崩す。

「一発目！」

俺はガルダの顎にアッパーする。

更に頭上に配置しておいたステアービットに足を付け、足全体をバネのようにして勢いを付けた拳を振り抜く。

「どうだ、少しは効いただろ……って、どうやらあまり効いてないみたいだね」

『スカイ・キャツスル』は防御パッケージなので攻撃に期待しちゃう駄目なんだろうけど、これは無さすぎでしょ。これじゃ時間稼ぎしか出来ないな、早く次のパッケージ来ないかな。

ガルダは体制を立て直すと再び砲撃する。

「だから効かねえよ」

シールドビットが俺の前に展開される。しかし、砲撃はさっきとは違った。

右肩のキャノン砲はシールドビットに当たった瞬間に爆発する。爆風から俺を守るために他のシールドビットが集まる。その隙に拡散に変更されたビームキャノンが撃ち出される。シールドビットは間に合いそうにない。

「思ったより学習能力あるな」

俺はステアービットで回避行動をとる。それでも拡散ビームを何発か喰らってしまう。拡散型なので一発毎とのダメージは少ないが、何発も喰らうわけにはいかなかった。

俺はとりあえず距離を取る。ガルダも様子を伺ってるのか、急に砲撃を止める。

「このパッケージは弱点だらけだな」

この短時間だけでも幾つかの欠点が見つかった。

一つ目はシールドビット、リフレクタービットは強制的に攻撃を防ごうとすることだ。ガルダのキャノン砲の爆発の時はシールドビットで守る気はなかったのにシールドビットは勝手に俺を守った。その結果、拡散ビームに反応出来ずにダメージを受けた。

もう一つは攻撃力の低さだ。打撃だけだとどんなに勢いを乗せてもこれっぽっちもダメージを受けた感じがしない。遠距離武器も無いのでこうして少しでも距離を取るとこっちは手出しできない。

それでも完成品になれば、こっちはダメージを受けずに相手に勝つことも可能だろう。ある意味将来性のあるパッケージだ。

けど、現在はまだ試作品の中でもかなり初期の物みたいだ。このパッケージでは少しずつエネルギーを減らされてしまう。

「東さんまだかよ」

「剣くん待たせたね、二つ目できたよ」

まるで俺の思いが届いたかのようなタイミングで通信が入る。

「東姉速くしてください。これ以上はちょっときついです」

「そうだろうね。『スカイ・キャッスル』はまだ形にしたようなもんだからこれが限界かな」

「何故それを最初にしたんですか」

「段々強くなつていく方が面白いでしょ」

「……………。もういいです。もう次のパッケージお願いします」

「了解の助！それでは続いているのパッケージは高速戦闘パッケージ『ミラージユ・ウイング』！！」

ピットたちは光の粒子となつて消え、変わりに新たな光の粒子が集まりヒューチャーに装備される。

『ミラージユ・ウイング』を装備したヒューチャーの色は青色に変わり、両手には大きさの違う銃が握られている。どうやら『ミラージユ・ウイング』にはちゃんとした武器があるようだ。とりあえず一安心だ。

高速戦闘パッケージと言うだけあつてしっかりとしたスラスターが付いている。背中には三つの大型ウイングスラスターがあり、その他にも中型、小型、超小型のスラスターが腰や足や腕につて、ちょっと多すぎないか？

「それでは剣くん。束さんの優しい解説パートツー！まずは武器からね。右手の長い銃は威力を重視した単発式の『クラッシュ』で、左手のちよつと短い銃は最大五連射が可能な連射性を重視した『シエーブ』だよ。因みにその銃は実弾だけど、弾切れはないから安心してね」

「何で弾切れしないんですか」

「説明してもいいけど剣くんにわかるかな？」

「……やっぱいいです」

多分めんどくさい理論があるのだろう。そんなの説明されても理解できないし、だったら早く次の説明いつてもらおう。この間もラウラたちが必死でガルダを引き付けてるからな。それでも武器は銃だけど、説明を聞く限りはホープのビームライフルの二つのモードがそれぞれ両手に持つてるようなもんだな。これなら使いやすそうだ。

「次に剣くんも気になってるスラスターだけど、今回はおっきいのからちっさいのまで全身に34個付いてるよ。やったね剣くん、スラスター34個なんて得したね」

「いやいや、得したねって34個は多すぎでしょ。そんな付ける必要があるのか。」

「詳しく説明すると、背中的大型ウィングスラスターが三つに、そのウィングスラスター一つにスラスターが三つ付いてるでしょ。それで腰部に6個で、両手と両足に8ずつ付いてて合計34個だよ。しかも、高速変則運動をすることで残像を残すことも出来るよ！どうかな剣くん」

「どうかなと言われても、残像を残せるのは凄いいけどこんだけスラスター付けて絶対に使いづらいでしょ。俺そんなに操作に自信ないんだけどな。」

「それじゃあまた次のパッケージで、さいなら〜」

説明を終えると勝手に通信を切る東さん。出来れば操作のコツを聞きたかったのに。

「どれどれ、どれほどスピードがあるか試してみるか」

俺は手始めに全てのスラスターを最大出力でガルダに向うが、

「っ!!」

予想以上のスピードに体がついていけず、そのままガルダにぶつかってしまう。慌てて距離を取ろうとすると、今度は下がりすぎてしまう。俺は何をしてるんだ？

「本当に扱はずらいな、こいつは」

俺はスラスターの出力を半分ほどに抑えて再び接近する。半分の出  
力でも34個もスラスターがあればかなりのスピードがでる。俺は  
『クラッシュ』の引き金を引く。『クラッシュ』自体はそこまで大  
きくはないが、反動が凄まじく体制を崩してしまう。

「くっ」

『クラッシュ』の弾を簡単に避けたガルダは近接ブレードを振り上  
げる。俺はその右腕に『シェイブ』を撃ちまくる。ガルダは怯むこ  
となく近接ブレードを振り下ろす。しかし、『シェイブ』を撃ち込  
んだ事でその軌道は少しずつ近接ブレードは俺の左頬ぎりぎりを  
かすめる。

「がら空きだぜ!」

『クラツシュ』と『シェイブ』の銃口をガルダの腹に押し付けて引き金を引く。今度は反動で体勢を崩さないように腕部のスラスタを吹かす。2丁拳銃の射撃を受けてガルダが一瞬怯む。

「おらああー！」

右脚部のスラスター4つを全てを吹かした渾身の回し蹴りを喰らわせる。ガルダは蹴り飛ばされながらも直ぐに体勢を立て直してこちらの様子を伺ってる。

(うーん。思ったよりダメージが少ないなあ)

かなりの長期戦になっているのにガルダにはダメージを受けてる様子がない。このままじゃ唯の消耗戦になるのは目に見えていた。

(とは言っても、『スカイ・キャツスル』は攻撃力は無に等しいし、『ミラージュ・ウイング』も機動力は充分すぎるほどあるけど攻撃力はそこまであるとは言えないんだよなあ。束さんも一つぐらいは攻撃力に特化したパッケージを造ってると思うからその間は慣れるためにもこいつで頑張るか)

小さくため息をつくど何故かガルダは俺に背を向ける。そしてビームランチャーとキャノンを連結させる。

「あいつどこ狙ってたんだ？俺はこっちにつて、まさかあいつ！」

直ぐ様ISのハイパーセンサーでガルダの向いてる方を見る。するとそこにはダメージを受けてうまく動けないラウラがいた。ガルダは俺よりも先にダメージを受けてるみんなをやる気なんだ。



俺は接近しながら『シェイブ』を連射する。しかし、ガルダはお構い無しにチャージを続ける。だったら接近戦に持ち込もうとするがそれは近接ブレードが許さない。

「ふざけやがって！」

これ以上攻撃しても止まらないと判断して、ラウラの元に駆け寄る。

「大丈夫かラウラ！」

「剣斗、私の事は気にするな。お前は直ぐに逃げるんだ」

「ふざけんな！仲間を見捨てるほど俺は薄情者じゃねえんだよ。そんな事言ってる暇あったらとっとと逃げるぞ！」

ラウラの肩を担ぐがチャージはもう殆ど終わっていて何時でも発射可能だった。

「くそつ、間に合いそうにねえなこれ」

「だから、お前は逃げろと」

「うつせえ！それしか言えないなら少し黙ってる！」

弱音ばかり言うラウラを俺は無理矢理黙らせる。

「ああ、どうすればいいんだよ（剣くんお待たせ）。束姉！」

それは正に救いの女神の声だった。俺は初めて束さんの声が頼もし

く感じた。

「珍しいねえ。剣くんから束姉なんて呼ぶの、束さんとても嬉しいよ。これは帰ったらご褒美だね。何がいい？私の手作り料理？手編みのマフラー？それともわ・た・……」

「今は早くパッケージを転送してください!!」

あまりにも焦れたい束さんについて怒鳴ってしまう。それでも束さんは無邪気に笑ってみせる。

「もうせっかく束さんがご褒美をあげようとしたのに。それじゃあ、剣くんのご要望におこたえして三つ目のパッケージいくよ！遠距離迎撃パッケージ『サテライト』！」

俺の体はまた光の粒子に包まれる。

(おれ、これで勝てるのかな……)

一割の期待と九割の不安を持つ剣斗だった。

### 第三世代以上第四世代以下（後書き）

いかがですか？

今回は結構独自解釈が入っています。パッケージの換装に時間が掛かるかはよくは知らないですが……。

また、パッケージの名前は正直適当です。単なる思い付きです。

さて、臨海学校編もあと3、4話ぐらいで終了です。そしたらまたオリジナルの話が続くかもしれません。それにオリジナルヒロインも増えていきそうです。最初に自分が考えていたものとはだいぶ変わってきましたが、このまま頑張っていきたいと思います。

それではまた次回の更新で！

補足

感想待ってます……。どんな些細なことでも充分です。あまりにも感想がないと思うと悲しくて手が止まってしまいます。……すみません。唯更新が遅くなっていることに対しての言い訳です。でも本当に感想は待ってます。

では今度こそまた次回の更新で！！

信頼の証(前書き)

やっぱり一週間空いちゃった(涙)

## 信頼の証

光の粒子が集まると、ヒューチャーの機体色は紫色に変わる。『サテライト』に換装したヒューチャーはかなり装甲が厚くなっていた。腕などの装甲はそこまで変わってないが、腰部と脚部の装甲は何枚もの装甲が重なっていて普通のISより二回り以上は厚くなっている。さらに剣斗の前には二枚の巨大な実体シールドがある。そして、『サテライト』の一番の特徴的なのは背中にある砲身である。その砲身は二つ折りされていて剣斗と同じ大きさで、それを伸ばしたら三メートルは越えるものである。まるで剣斗自身が巨大な砲台のようなパッケージである。

「さあ剣くん。お待ちかねの東さんの優しい解説第3段！」

「東姉、本当に手短にお願いしますよ」

「モチのロンだよ。私にもそっちの様子がばつちりだからね。それじゃあ解説ね 『サテライト』はその背中の砲身『アース・ブレイカー』一つだけだからね。でもその分威力は充分だよ」

やっと攻撃力に特化したパッケージが来てくれたな。出来ればそれをもっと速く欲しかったけどな。

「だけどね剣くん。この『アース・ブレイカー』は何回も撃てるもんじゃ無いんだよ」

「まさか、一回きりですか」

「それは剣くん次第だよ」

「俺次第？」

剣斗には束が言ってる事が理解できてなかった。そして二人の会話が聞こえないラウラも唯剣斗の顔を見ていた。

「分かりやすく言うと、『アース・ブレイカー』はエネルギー100%分しか撃てないんだ。だけど撃つときのエネルギーは調節可能だからね。だから、100%で撃つと一回きりだけど50%なら二回、20%なら五回撃てる仕組みになってるよ。それから……」

「すみません束姉。もう解説を聞いている暇がありません」

既にガルダはチャージを終えていて、こちらに標準を合わしている。

「今から構えたら何%で撃てますか？」

「だいたい40%だけどそれだけあれば充分のはずだよ」

「わかりました。じゃあ次のパッケージの時にまたお願いします」

「はいはーい。因みに次のパッケージが最後だからね。あとそのパッケージは機動力は無いから気を付けてね」

俺は束さんの話を最後まで聞かずに発射準備に入る。足を肩幅に開

くと足の部分からフックが飛び出し地面としっかり固定される。地面に固定されたのを確認してから『アース・ブレイカー』を右肩に担ぐ。『アース・ブレイカー』を担ぐと二つ折りになっていた砲身がその全貌を現す。

「ちよつと、重いな」

本来なら重さはISのエネルギーフィールドによって感じないはずだが、このパッケージの時はその力を少し弱めているのだろう。まあ、俺もそつちの方が狙いやすいけどね。

「それじゃあ、『アース・ブレイカー』の力を試してみますか」

ガルダはビームランチャーの引き金を引く。巨大なビームはみるみる俺たちに近づいていく。ラウラは俺の後ろで腰に手を回してしっかりと抱きついている。普段なら恥ずかしくて引き離すのだが、今は何故か落ち着いてしまう。

少し不謹慎かな？まあ、今ぐらいはいつか。俺は『アース・ブレイカー』の標準を向かってくるビームの中央に合わせる。

「いつけえええ!!!」

勢いよく引き金を引くと、ガルダのと引きをとらないほど巨大な白いビームが発射される。

二つのビームがぶつかり、お互いのビームが威力を相殺し合う。しかし、慣れない武器のせいか俺の狙ったところよりずれてしまい、結果として威力はかなり削れたが俺のビームはガルダのビームにかき消されてしまった。

「やっぱ射撃は苦手なんだよ!」

俺は二枚の実体シールドを正面に斜めで配置する。ビームは実体シールドの半分以上を削りながらも軌道が上に逸れて雲を引き裂いて消えてしまう。

「危ねえ危ねえ。でも、ちゃんと狙えたら4割の出力でも充分だったな」

「あれで4割か!？」

ラウラが驚きの声を上げる。

確かにこいつの威力はかなりのものだな。もし100%の出力で当たったら、簡単に相手のシールドエネルギーは0になってそれどころか、操縦者すら殺してしまうかもしれない。

束さん、逆にこれはやりすぎだよ。もう少し常識というものを考えて欲しいな。

「次は残りの60%全部を撃ち込むぜ」

俺はもう一度チャージを始める。ガルダも同じ様にチャージを始めるがまた俺たちとは違う方を向いている。

その先に誰がいるかなんて見なくてもわかる。さっきまで俺がいた位置、つまりその後ろにいたのは一夏達だった。

「あの野郎おお!!」

ガルダはあくまでも俺を無視して他のみんなから倒そうとしている。確実に殺れるみんなから。

「そんな事させるかよ!って、あれ!？」



今すぐガルダに向かおうするが、足がしっかり固定されていて動くことができない。フックを外そうとしても自分では外すことが出来ない。

「あつ、そう言えば束さん機動力が無いって言ってたな。成る程、こいつ自体がビーム砲だから機動力はいらぬのか。束さんも極端なんだよ。もうどうすればいいんだよ！ここから撃つちまうか、いやそれだと簡単に避けられるのが目に見えてる。そうだったら、もうあいつを止められない。……………そうだ！ラウラ！」

「なつ、なんだ？」

「俺をあいつの前に投げってくれ！足がしっかり固定されていて動けないんだよ」

「しかし、それではお前が……………」

「いいからやれ！シャルがどうなってもいいのか！？」

怒号を受けてラウラはびくりとしたあと、言われるままに俺の手を取り投げようと力を入れる。

だが、しっかり固定されていて尚且つ『サテライト』に換装したヒューチャーは普通のISより何倍の重さがありなかなか投げられない。

「ラウラ、ワイヤーブレードで俺の足の部分の地面をえぐるんだ。そのままワイヤーを使って思いっきり投げろ！」

「わかった！」

ラウラはワイヤーブレードを展開して、俺の足元に突き刺す。そして、地面ごと俺を持ち上げハンマー投げのように俺を投げる。

「頼んだぞ剣斗！」

「任しとけ！」

ガルダは接近してくる俺に気付き、近接ブレードを振り上げるがそれよりも速く俺はガルダの近接ブレードを左手で掴む。

「よおガルダ。お前もしかして俺の仲間をやるうとしてるのか？」

密着した状態だったので『アース・ブレイカー』は肩に担がず、砲身は伸ばしたままチャージを続ける。

「そんな事この俺が絶対に……」

俺はガルダを蹴り飛ばす。一定の距離が開いて俺は『アース・ブレイカー』を肩に担ぐ。チャージは既に完了済みである。

「さそるかよお！」

俺とガルダは同時に引き金を引く。二つの砲身の間は一メートルも離れていない。二つのビームは確実に二機のISを飲み込んでいる。

「ぐっ、かあっ！」

全身に激しい痛みが走る。先程削られたシールドをとっさに使ったのである程度はダメージを軽減できたが、それでも威力がちょっと

減った程度だった。

お互いのビームが止まりやっとなと視界が回復してきた。

（流石に今のは効いただろ。今ので倒れてくれたら嬉しいんだけどな）

しかし、剣斗の思いも一瞬で砕かれてしまう。ガルダはまるで何事も無かったかのように近接ブレードを剣斗に叩きつける。

今の攻撃でかなりのダメージを負った剣斗には避ける術も防ぐ術も無い。近接ブレードは左肩に当たる。

ゴキッ！

左肩から嫌な音が鳴る。痛みに顔を歪める剣斗をガルダは一夏たちの方に叩きつける。

「「剣斗！」「」

真っ先にシャルロットとフランが駆け寄る。他の全員も遅れてくる。

「いてて、あれでもダメージ無しかよ」「

「それでも無いらしいぞ」「

信太が指差すを見るとガルダも満身創痍だった。左部分にあったビームランチャーとビームキャノンはぐにやりと曲がってしまい、とても使い物にならないようだった。

「でも何であいつ動かないんだ？今だったらチャンスだろ」「

「自己修復だよ」

一夏の疑問に剣斗が答える。

「ガルダはダメージレベルがCに達しそうになると自己修復するようになってる。武器は無理だが装甲だったら直ぐに直せるよつだ。まあ、その間は動けねえけどな」

「だったら今は俺等がチャンスじゃないか」

一夏の言葉に剣斗はついため息をついてしまう。  
お前には今の状況が見えないのか。

「そうしたいが、ここにいる全員のエネルギーは二桁ばかりだぞ。そんなんであいつには勝てねえよ。せめて一人だけでもエネルギーがMAXだったら話は別だけどな」

「だったら一つに集めればいいんだよ」

「シャル？」

シャルロットはふわりと剣斗たちの元にやってくる

「忘れたの？リブアイブならエネルギーを移せるんだよ。前はエネルギーをあげただけだけど、今はエネルギーを貰うこともできるんだよ」

「本当か！？よし、だったら誰があいつを倒すか決めるか」

俺の言葉に、全員が俺を見る。

「おいおい、勘弁してくれよ。俺は今日初めてヒューチャーを使ってるんだぜ。だったら一夏の方がいいだろ。ほら一夏、見せ場を作ってやるから行ってこい」

「俺は福音で充分やらせてもらったからパス」

くそつ。一夏のくせに生意気な。だったら、この中で最強のあの人に頼むしかない。

「だったらフランさんが適任でしょ。この中じゃ一番強いはずだし」  
俺の提案にもフランさんは降参のポーズをとる。

「悔しいが私は完全に弾切れになってしまった。こんな状態じゃエネルギーがあっても戦力になれないよ。それに……」

フランさんは俺の頬をそつと撫でながら言葉を続ける。

「強さだけが全てじゃないんだよ。一番大事なのは、信頼だよ」

「信頼、ですか？」

「そつだ。強さなんて努力すればいくらでも手に入る。しかし、信頼はそうはいかない、私がいい例だよ。この中で一番強くても、この中で一番信頼は無いよ。逆に君は一番弱くても、一番信頼されるんだよ」

そう言われ、俺はみんなの顔を見る。みんなは何も言わずに力強く頷く。

みんなが俺を信頼してくれてる、こんなに弱くて駄目な俺を。だったら、俺のやることは決まってる。その信頼に全力で答えることだ。

「わかった。俺がみんなを守ってみせる」

「よし。じゃあ始めるね」

シャルはリブアイブから伸びたケーブルを一夏の白式から順にみんなに繋ぎエネルギーを移していく。そして、最後にケーブルはヒューチャーの右腕に繋がれ、そこからみんなのエネルギーが流れ込まれる。

とても不思議な感覚だった。でも、嫌ではなかった、寧ろみんなの気持ち伝わってくる感じがして心地が良かった。

「剣斗、これでみんなのエネルギーは全部渡したよ」

シャルの言う通り、みんなのISはいつの間にか待機状態に戻っていた。

これはかなりやっかいだ。まさかエネルギーを全部渡すとは思っていなかった。ISが無いと言うことは流れ弾がいっただけでも命に関わってしまうことじゃんかよ。本当に守りながらの戦闘か。

俺は殆ど修復を終えているガルダを見ながら拳を強く握る。

（今度こそみんなを守ってみせる。海の底で決めたんだ、もうあの時の過ちは絶対に犯さねえ！）

「け〜んく〜ん」

ガクッ

はりつめた空気の中に突然陽気な声が聞こえ、俺は転けてしまう。この人には空気を読むという行為が……できるわけ無いよな。だって東さんだもん。

「いやあ、素晴らしい友情だったねえ。東さんも感動しちゃったよ」

「東姉、空気を読めない人は嫌われますよ」

「その事に関してはノープロブレムだよ。何たって私は剣くんを愛されていれば充分だからね」

モニター越しに可愛らしくウインクを決める東さん。確かに可愛いですけど、ちょっと今はムカつきましたよ。

「はいはい、愛してますから最後のパッケージお願いします」

「うん。その言葉に東さんはメロンメロンだよ。そんな愛しの剣くんにはプレゼントだよ」

「……」

こんな焦れたいやり取りにも流石に慣れてきな。だけど、早いことしたことはないんだけどな。

そう思っていると今回は何のまいぶれも無しに光の粒子に包まれる。

「さあさあ、ご覧ください！4つのパッケージの中で最も完成形に近いパッケージ。様々な状況にも対応出来る姿はまるでナイト様！近・中距離戦闘パッケージ、『トラスト・ナイト』！！」

光の粒子が形を形成するなか、俺はガルダを見つめフツと笑って見

せた。

「お前は俺を、どこまで本気にさせるのかな？」

その顔はどこか楽しげだった。



## 信頼の証（後書き）

いかがですか？

今回でガルダを倒すはずでしたが次回に持ち越しになってしまいました。なんか最近自分の思った通りに進んでない気がする、いや実際に進んでないな。これからはもっと計画性を持ってやっていきます。

さて、ここでもう一つ。皆さんも読んで気付いたと思いますが、リブアイブやボーデビッツヒと書いていますがこれは字が違いますね。それは僕もわかっているんですが、僕の使ってる携帯じゃ、うに点を付けるやり方がわかりません。だからこれからもこう書きますがご了承ください。

それではまた次回の更新で！

秘密の瞳(前書き)

やっと…戦闘が…終わったぜ…(ボタン)

## 秘密の瞳

「これが『トラスト・ナイト』、最も完成形に近いパッケージか…」

『トラスト・ナイト』に換装したヒューチャーの機体色は深緑色に変わっていた。頭にはまるで中世の騎士をイメージしたヘルムが装着され、背中には二つのウイングスラスターが備わっているが、スラスターというよりは本当の翼のように滑らかに動いている。更に両腕部装甲からは50センチ程の短剣『アピア』が突き出ている。

『修復完了。これより敵機の排除行動へと移る』

ガルダは使い物にならないビーム兵器を切り捨て、近接ブレードを両手に持つ。

「やっと終わったか。こっちは待ってたんだ、とつとと始めるぞ」

「ちよつと待つてよ剣くん。東さんの優しい解説最終回がまだだよ！ええとねえ、『トラスト・ナイト』にはたくさんの武器があつてね、その一つが…」

「解説はいらないです」

東さんの言葉を俺は遮る。すると東さんはたちまち悲しい顔になる。

「ええ〜！もしかして私の解説がヘタだったの!？」

「違いますよ、逆に解りやすかったですよ。けど、解りやすすぎて

戦い方が決まってしまうんです。だったら自分で考えた方が今後のためになるんですよ」

「そうかな。しっかりパッケージを知るのは大切だよ」

束さんの言ってることは確かに正しいのかもしれない。けど、俺の意思は決して変わらなかった。

「束姉も俺を信じてください。俺は絶対に負けません」

束さんは一瞬黙った後、直ぐに明るい声で答える。

「わかったよ剣くん。今回は私も剣くんを信じてみるよ。そのかわり！」

ピシッと束さんは俺に指を指す。

「剣くんには一度私との買い物に付き合ってもらおうよ」

意外な要求に俺は驚く。しかし、俺としてはもっと凄いや要求がくると思っていたので少しほっとしながらも笑顔で答える。

「買い物ぐらいでしたら何時でも付き合いますよ。その代わりに日本をお願いしますよ」

「うんうん、勿論だよ。じゃあ私は遠くから剣くんの勝利を願ってるからね！ばいばい」  
通信を切った後小さく深呼吸をする。この行為も戦う前の癖になってきている。

深呼吸を終えた俺は『アピア』を突き出しガルダへ急加速、正面か

らぶっかり合っ。

「ファイナルラウンドと行くか！」

両手持ちになって更に重みが増したガルダの一撃を両手の『アピア』で受け流し、流れるような動きでガルダを押ししていく。

『敵機のレベルを更新。最大出力で対処する』

右肩のキャノン砲を俺の顔の前につき出す。そして連続で砲撃する。

「おっと危ねえぜ」

俺は後ろに下がりがりながら砲弾をヒラリと避ける。砲弾は海面に着弾すると同時に激しく爆発する。『スカイ・キャッスル』を装着していた時に使っていたものと同じ種類だ。

「こつちにだっついていつまでも近距離特化、遠距離特化ばかりじゃないんだよ！」

俺は手を空高くつき出す。すると、手の上で光の糸が寄り集まり6つの短剣を形成した。

『アピアダガー』それがこの短剣の名前である。『アピアダガー』は幾つかの型に命令することで様々な動きをしてくれる。まあ、射撃は出来ないがセシリアのビットの発展武器と言えるだろう。

「行くぞ『アピアダガー』！先ずは壱の型！」

命令を受けた短剣達は一斉に向かっていく。

「1、2は右から、3、4は左。5は下、6は上からだ」

集団で向かっていた短剣は命令通りに四方に分かれていく。しかし、動きは直線的な為ガルダは近接ブレードで短剣を一つ一つ正確に弾いていく。

「甘い甘い。そんなんじゃ防げないよ。『アピアダガー』 弐の型！」

短剣はその場で高速回転してガルダの周囲を漂わせる。ガルダは近接ブレードとキャノン砲で何とか脱出を試みるが一つが弾き飛ばされても他の短剣がその分を補い、その間に飛ばされた短剣が戻ってくるためなかなか抜け出せなかった。

「ほらほら、隙だらけだぜ」

俺の右手には巨大な槍『パラディンランス』が呼び出されている。

「今だけお前の技借りるぜ、信太」

腰を低くして突きの構えをし、瞬時加速を行う。『アピアダガー』から抜け出すのに必死になっていたガルダは一瞬だけ反応が遅れる。だがその一瞬が決定的な差に繋がった。

俺が突き出した『パラディンランス』はガルダのキャノン砲を突き刺し、そのまま無理矢理に引きちぎった。

「もっと頑張ってくれよ。俺を本気にさせてくれよ」

いつの間にか俺には余裕が出来ていた。それは自惚れではなく確かな確信だった。

ガルダは苦し紛れに近接ブレードを振り回す。俺はそれを簡単に避けてみせる。

「悪いけどこつちも長くは持たないんだ。そろそろ終わりにさせてもらうぜ。『アピアダガー』参の型！」

新たな命令を受けた短剣は相手の関節を押さえ付けるようにくつき、ガルダの動きを封じる。ガルダも仕切りに体を動かすが関節をしっかり押さえつけてるので動くことができない。

「この武器を呼ぶにはちよつと時間が掛かるんでな。拘束させてもらつたよ」

そう話す俺の後ろでは光の粒子がゆっくりと集まってくる。それでもなかなか形を形成出来ない。

これって呼ぶには時間が掛かるし集中力も必要なんだよな。結構めんどくさい武器なんだよな。その間説明でもしとくか……。

「お前に言つてわかるか知らんが。今呼んでる武器は『トラスト・ナイト』の中でも最強の武器『アピアカリバー』だ。まあ一言で言うなら唯大きな剣つてことだな。長さは確か7メートル位だったかな。ちよつと大きすぎる気もするけどまあいいか」

『……………』

ガルダはもう諦めたのか急に動かなくなった。

（もう諦めたのか？ちよつと手応えが無い気もするがあれを使わないで済むなら良しとするか）

とつておきを使わなくて済むことに安堵する俺の前でガルダが小刻みに震え始める。

俺は一步下がり『アピア』を展開して構える。

『非常事態によりガルダを暴虐モードへと変更します』

何の感情も感じられない機械音が聞こえると突然ガルダの近接ブレードが砕けた。更に装甲もいくつか外れスリムなボディになった。そしてまたアピアダガーから抜け出そうと抵抗を始める。

ゴキツ！ギギギ……

無理に抜け出そうとするので中の操縦者の骨がきしみ嫌な音が出る。

「おい！やめるんだ。これ以上は体が持たないぞ！」

俺は怒鳴るがガルダは止めようとしない。骨がきしむ音は段々と大きくなっていく。

このままじゃ本当に体が壊れちまう。

「随分卑怯な野郎だな！」

俺は仕方なく『アピアダガー』の拘束を止めさせる。

『Kya』

きつところなるのが奴にはわかっていたのだろう。拘束が解けた瞬間に俺に急接近してくる。

「なっ!?!」

あまりのスピードに今度は俺が一瞬だけ反応が遅れてしまう。懐に入ったガルダは拳を俺の顔に叩きつける。



「くっ！」

俺は左腕の『アピア』を盾にするが、ガルダの拳は『アピア』を簡単に砕いて顔面に見事にヒットする。勢いで吹き飛びそうになった俺の右手をガルダは握って自分のところに引き寄せる。ガルダは俺を充分引き寄せると腹に強烈な蹴りを喰らわせる。蹴りを受けたときに一時は塞がっていた腹の傷も開いてしまう。

「いつてえ〜」

腹を押さえながら顔を歪める俺にもガルダは容赦無かった。続けざまにストレート、フック、回し蹴りと見事な連続技をやって最後に踵落として俺はまた一夏達の所に落ちてしまう。

「剣斗！」

「ようシャル。わざわざ心配かけてごめんな」

「そんなのどうでもいいよ。それよりあれは何なの？」

「差し詰アメリカとイスラエルが情報提供をおろそかにしただけだろう。やはり全ての情報を渡すのが嫌だったのだろう」

後ろで冷静に状況を判断してみせるラウラ。ガルダは今『アピアダガー』で食い止めてはいるが、あれも長くは持たないだろう

「だけどまずいな。あのスピード、反応出来なかったと言うよりは目が追い付いてなかったからな」

「それじゃあ我が兄はあいつには勝てないと」

無駄に声を荒げる信太。だがその声とは裏腹に顔は笑っていた。

「何を冗談を言ってるんだ。みんなが俺を信頼してくれたんだぜ？  
だったら俺はそれに最高の形で答える。それに俺にはまだとってお  
きがある」

「「「とっておき？」」「」」

フランさん、箒、一夏が言葉を重ねて首を傾げている。  
俺はそんな3人を他所に目に手を当てる。

「これを使うのは何年振りかな。多分…2年ぐらいかな。これをみ  
せるのはシャルたちは勿論、一夏にだって初めてだぜ？」

そう言っただけ俺は目からあるものを取り出す。

「あれは……カラーコンタクト？」

一夏が呟くが直ぐにみんなは剣斗の目に注目する。そこにはいつも  
の見慣れた黒い瞳でなく、銀色の目をした剣斗がいる。

「何だよあれ？」

「もしかして、『越界の瞳』？」

「いやそれはない。『越界の瞳』にはいくつかの色があるが銀色何  
て聞いたことないぞ」

みんなは俺の瞳の色が変わったことに心底驚いているようだった。別にカラコン取ったんだから色が変わるのは普通だろ。

「これは『越界の瞳』じゃねえよ。ちゃんとした自前の瞳だよ」

「えっ？じゃあ何で何時もカラーコンタクト何てしてるの？」

「俺の目は普通の人の目より見えすぎちゃうんだよ。見えるのはいいんだがその分目の疲労もかなりのものなんだよ。だからいつもは黒のカラコンでそれを抑えてんだよ」

「へえ」

むっ。説明したわりには反応がまいちだな。だけどこの目って本当によく見えるんだよ。

「さてと、俺もあいつも長くは維持出来ないはずだからな。さっさとおわらせないと」

俺は瞬時加速でガルダに接近する。俺に気付いたガルダは『アピアダガー』を無視して俺を迎え撃つ為に右拳を引いている。

そして、お互いの距離が一メートルをきった時、ガルダは拳を前に突き出す。

あゝあ。やっぱり駄目だな、全くダメダメだよ。……だって、

「動きが丸見えだぜ？」

俺は拳が顔面に当たる直前に首を左にずらして避けると同時に勢い

よく向かってくるガルダの顔面にお返しと言わんばかりに拳を叩きつける。

ガルダは体制を崩しながらも回し蹴りで俺の顔を狙う。そんな顔ばっか攻撃すんなよ。そんなに俺の顔が嫌いか？

「どうせ当たらないから何処を狙ってもいいけどね」

回し蹴りを紙一重でかわすと残った『アピア』で横に切り裂き、呼び出した『パラディンランス』で追撃をする。

『パラディンランス』はガルダの装甲に突き刺さりそのまま何十メートルも飛ばされる。

「何だよ、久しぶりにこの目を使えると思ったたらこの程度かよ。こんななんだったら暴虐モードにならない方がよかったぜ。痛っ！！」  
目に激しい痛みを感じて反射的に手で押さえる。よく見ると手には血が付いている。どうやら目から血が流れているようだ。さらに視界もぼやけている。

「思ったより早いな。やっぱ2年振りの反動は大きかったかなあ」

剣斗がカラコンを付け始めたのは5年ほど前からだ。別になんか疲れると言っても普通の生活には影響は無かった。それでも彼がカラコンを付けたのは周りの目だった。

日本には銀色の瞳の奴なんてそうそういない。その為か周りの目は冷たかった。勿論全員がそうではなかったが、それでもまだ幼かった彼にはそれがたまらなく辛かった。

見かねた町のみんなが提案したのがカラコンと転校だった。カラコンには賛成していた彼だったが転校に関しては拒否続けた。転校し

たらまるで自分が逃げたような気がしたからだ。しかしカラコンしたまま登校したら今度はいじめに合うと心配した町の人は必死で剣斗を説得し、彼もまた町の人には世話になってるのでこれ以上は迷惑をかけないと思い転校した。

その転校先で出会ったのが一夏達だった。カラコンのお陰か、それともクラスみんなが良いやつだったお陰なのかは定かではないが彼は直ぐにクラスみんなと打ち解けた。

そんなある日、彼はある事に気付いた。カラコンを外した時は付けた時よりも物がよく見えたのだ。正確には動体視力が著しく上がっていると言った方が正しかった。最初はこの変化を楽しんでいたが、直ぐに目に激しい痛みを感じて恐る恐る触ってみるとベツトリと血が付いていた。この時には彼はもう一人暮らしをしていたのでこの事が周りにばれることは無かった。

この日から彼は寝る直前までカラコンを付けて、カラコンを付けてないときは極力物を見ないようにした。

その後月日が流れ彼がこの事を始めて話したのが剣術を習っていた師匠だった。師匠には彼がカラコンを付けてることを一目で気づいていた。師匠に嘘は無意味だと悟った彼は全てを話し、その後実際にカラコンを外した時の動きを見せた。当然その時目から血が出た。

一通り見終えた後、師匠は彼に2つの規制をかけた。

1つはこれまで同様不用意にカラコンを外さないこと。

2つ目はどうしてもカラコンを外さないといけない場面になったら3分間だけに限る。

更にこの2つの規制とは別にある忠告をした。

「いいかバカ弟子？その目はおそらくカラコンを付けていた時間が長ければ長いほど外した時の効力は高くなるだろう。だが、その分目にかかる負担も同じ様に増していく。さっきは3分間だけと言ったがどうせ3分も持たないだろうからそこだけは気を付けな」

彼は師匠の言葉を守りつい先程まで一度も寝る時以外はカラコンを外さなかった。

「師匠の言った通りだな。3分どころか1分がやっとだな。これじやあいつの動きは見えないしこうなったらあとやれるのは……」

ガルダは『パラディンランス』を引き抜くと瞬時加速を行う。俺とガルダの距離は一瞬で無くなり、ガルダはまた拳を叩きつける。

ガンッ！ガンッ！

『Gya!?!』

ガルダは驚いたように機械音を響かせる。

「我慢くらべといきますか！」

ガルダの動きが見えない俺には奴の攻撃が当たった瞬間にカウンターを仕掛ける、それしか勝つ手段がなかった。

「お前は我慢強いほうか？勿論俺は我慢強いぜ！」

それから二機の戦いに技術なんてものは一切無かった、唯あるのは力と力のぶつかり合いだった。

殴られたら殴り返し、蹴られたら蹴り返す。同じことが何度も繰り返されるが二機とも全く勢いが無くなることは無かった。

「いいねえ！お前もなかなか我慢強いじゃねえか！」

ガルダの打撃を喰い、23回目のカウンターを狙う。しかし、

スカッ……

ガルダは紙一重で避ける。

「ここで避けるかよ普通」

ガルダは空中で一回転して奴の得意技である踵落としをする。もう目が殆ど見えない俺には反応が出来ずにまた左肩に当たってしまふ。

バキンッ！

おそらく肩の骨が折れたであろう音が体全体に響く。何とか海面すれすれの所でスラスタ―吹かして海面上を飛んでいく。ガルダは瞬時加速で加速する。

『K y a  
』

勝利を確信したような機械音。しかし、ガルダには見えてなかった。剣斗の自信に満ちた顔が

「惜しかったな、今回は俺の勝ちだな」

左手を振り上げるとガルダの頭上に『アピアカリバー』が一瞬で形成される。

「おおおらあああ！！」

左手を振り下ろすと『アピアカリバー』も振り下ろされる。ガルダ

は振り返ると『アピアカリバー』を見事な白刃取りで受け止める。

「『アピアカリバー』も受け止めるなんて化物みたいな強さだな。けど、背中がから空きだぜ！『アピアダガー』伍の型！」

6個の短剣は『アピア』に集まり、一つの長刀へと変わる。

『アピア』で背中を切り裂くとガルダはこっちを見る。

「今度はそっちがから空きだぜ！」

続いて『アピアカリバー』で背中を切り裂く。ガルダはまた振り返りその隙に『アピア』で切り裂く。武器を持ってないガルダになす術が無く、『アピアカリバー』で4回切り裂いた時にやっとガルダ動きが止まり、ISが解除される。

「おっと危ねえ」

海に墜ちそうになった操縦者を抱きかかえる。

「終わったな」

目がかすんでよく見えないが、みんな無事のようにだ。

俺は空を見る。

最初は青かった空もいつの間にか夕日によって赤く染まっていた。

「あゝ、目と肩が痛てえ」

体中の痛みになんか文句を言いながらも俺はみんなの元に帰っていく。ここではみんなが笑顔で待っていた。



## 秘密の瞳（後書き）

いかがですか？

今回の戦闘はかなり長くなりましたね。それにかなり時間も掛かりました。やっぱり戦闘を書くのは大変ですね、相手が福音だったらもつと速く書けたかな？

まあそれは置いといて、次回で臨海学校編は終わりですがあと3、4話オリジナルの話をやった後に夏休み編に入ろうと思います。

それではまた次回の更新で！

## 終わり方(前書き)

皆さん指摘を受けて、今回からヒューチャーがフューチャーになります。

## 終わり方

「作戦完了 と言いたいところだが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいるんだな」

「……………はい」

帰ってきた俺たちに喜びに浸っている隙はなかった。

戻ってきた俺たちは背後に阿修羅を纏わせた千冬さんにごつぴどく叱られた。今は大広間で正座をしている。

「特に剣斗、貴様は学園の打鉄をあれだけボロボロにしたんだ覚悟は出来てるか？」

「勿論です」

短く、しかしはっきりと返す。だけどその視線は千冬さんと合っていないかった。

「お前は人と話すときはその人の目を見ると教わらなかったのか」今の俺の状況。目と脇腹からの出血は止まらず、目はあまりの痛さに開けていられずずっと閉じたままである。さらに右手で左肩を、左手で脇腹を押さえている。俺の出血がなかなか止まらないので俺の座ってる所にはブルーシートが敷かれている。

他のみんなにも同情の目をされている。それでも千冬さんは全く表情を崩さず説教を続ける。さすがは世界最強だな、容赦ないぜ。

「無理を言わないで下さいよ。俺もまさかこんなことになるとは思

わなかったので予備のカラコン持ってきてないんですよ」

「ではお前は明日もずっと目を閉じてるつもりか？」

そこが問題なんですよ。俺だって明日の訓練には参加したいし何よりフューチャーを色々いじってみたいんだよね。けど無いもんは無いんだもん。こればかりはどうしようもないよね。

本当にどうしましょ？

「剣くんお待ちせー！」

突然ふすまがビシッと開いて誰が俺にタックル、そのまま馬乗りになる。これは、脇腹にくるな。

「この声……束姉ですか？」

「声だけで分かるなんて、やっぱり私達の間には愛があるんだね！」

いやいや、声だけで分かるというか俺のことを剣くんと呼ぶのは束さんくらいですよ。

それに気のせいだろうか、何故か3つの殺気を感じるな。うん、今は無視しよう。

「で、どうしたんですか？わざわざここに来るなんて」

「それは今回剣くんは頑張ったからね、束さんからもう一つのプレゼントだよ」

そう言うなり俺の目を無理矢理開けさせる束さん。

「ちよつ痛いです束さん！まじで空気に触れるだけで痛いんですよ！」

俺の必死の頼みも束さんは鼻歌を歌いながらスルーしている。束さんはそのまま俺の目に何か目薬みたいのを指す。

最初こそは激痛が走ったがすぐに楽になって目のだるさも無くなってきた。

「はいじゃあ剣くんこれを目につけてね」

束さんに何かを手渡される。触った感触的にコンタクトみたいだったので一応付けてみる。

数回瞬きしてコンタクトを合わせて目を開ける。すると視力はしっかりと回復していた。

「こっちの目薬はあの目を使った後に指すことで少しだけ目の負担を和らげるよ。今付けてるカラコンは束さんのお手製で、一年間は付けっぱでも目が傷つくこともないしそれ自体が小型ディスプレイになってるからきつと役に立つよ！」

おお！正に最先端のカラコンだな。何より一年間付けっぱでもいいのが素晴らしい。意外とカラコンをはずしたり付けたりするのめんどくさいんだよな。

「用が済んだのならとつとと帰れ」

千冬さんが後ろからアイアンクローで束さんを引きずっていく。

「痛いよちーちゃん！束さんにはまだ剣くんと愛の巣作りが〜！」

「全く何が愛の巣作りだ。……………」

「ど、どうしたんですか？織斑先生」

何故か襖の所でこちらを睨んでいる千冬さん。まだ俺は何か悪い事をしたのか？

「…………まあ、よくやった。全員、無事でなによりだ」

「え？」

まさかの労いの言葉にみんなが固まってしまふ。  
千冬さんも恥ずかしくなったのか、すぐに背中を向けられてしまふ。

「それと剣斗もガルダを撃退したし、打鉄はこいつに直させるから処分は恐らく他のやつと同じだろう」

「あ、どうも」

そう言つて千冬さんを束さんを連れて大広間を後にした。  
よかった、もしかしたら俺学園やめさせられたかもしれないかったもんな。

「そ、それじゃあ、診断を始めましょうか」

さっきからずっと救急箱持つてうろつろしていた山田先生。  
この人も苦労人だな。

「じゃあれディーファーストつうことで男子は出ますか」

「だ、駄目ですよ！剣斗くんが一番重症なんですから剣斗くんからです！」

立ち上がるうした俺を無理矢理座らせる山田先生。

「俺は最後でいいですよ。こんなの軽傷ですよ」

「こんだけ出血しといて何言ってるんですか！とにかく服を脱いでください！」

そう言つて山田先生は俺の服を脱がせる。

「うわあ、エグいわねえ」

鈴が傷口を見ながら言う。実際には傷口の周りも血がベツトリとついているので何処が正確な傷口かはわからないが、それでもエグいのは確かだった。

「ええと、ごうゆう時はどうすれば……」

予想以上の出血に一人パニックになっている山田先生。

この人は役に立つのか役に立たないのかわからないな。

「とりあえず、ガーゼに消毒液を浸けて周りの血を拭いてください」

「わ、わかりました」

その後も俺の指示で自分の治療が終わり、その後は女子たちが治療をするとの事で男子3人は大広間を出た。

「…………なあ」

「何だ一夏？」

「俺たち…仲間を、守れたよな」

「…………さあな、それは俺たちが決めることじゃないさ」

剣斗はそっけなく返すとどっかに行ってしまった。

「どうしたんだあいつ」

「あいつにも色々あるんだろ。まあそれは置いて、今回は仲間を守れたんじゃないか」

「……………」

二人は少し黙った後

「おつかれ」

拳をぶつけ合った



ざあ……。ぞざあ……。ん……。

夕食の後、砂浜に座りながら俺は一夏の言っていたことを思い出す。

『俺たち……仲間を、守れたよな』

俺はふとそこにはいない人物に話しかけてしまう。

「俺はみんなを守れたかな？あの時あなたが言っていたことを少しは守れてるかな……ナタージャ」

誰が答えるわけでもなく、唯波が変わらずに流れているだけだった。

「」「」「」

砂浜に一人座り込んでいる剣斗。その姿を岩影で見つめる3つの影。その正体はシャルロット、フラン、ラウラだった。

「ついてきたはいいけど、これから僕たちどうしようか？」

「そんなの決まっている。嫁の隣に座る」

「私も同感です」

「でも、いきなり現れたら怪しく思わない？」

「確かに一理あるな」

「でもこのままだと進展がないのも確かです」

「うん」

三人揃って頭を悩ませる。

「そんな事考えずにいつちまえよ」

「!?!?!」

いきなり背後からの声に、驚いて振り返る。

そこでは剣斗と瓜一つの人物 信太が立っていた。

「いつの間になっていた」

「お前らが剣斗を追いかけるのに必死だったからなこっちも追いかけてやすかったよ」

「それで何の用だ？まさか嫁の邪魔をするのか？」

「まさか、俺はちょっと他の人によろがあつてな」

信太は三人の前に座ると人差し指を突きつける。

「ここで攻めないとあのバカには気付いてもらえないぞ。じゃんけんで順番でも決めて行ってこい」

言うだけ言って信太はまた何処かへ行ってしまつ。  
三人はお互いの顔を見合う。

「信太の言うことも正しいよね」

「ああ、だったら早速」

「恨みっこ無しの一発勝負」

三人は手を引つ込める。

「じゃ〜んけ〜ん、ぽん！」

「剣斗！」

「ん？何だラウラか」

「隣に座ってもいいか？」

「別に構わないぜ」

ラウラは黙って隣に座る。

「今日は疲れたな」

「疲れたどころではないだろ。貴様は刺されたんだから」

「ははは、そうだったな。それでラウラが泣いてたんだもんな」

「な！？私は泣いてなどいない！」

顔を真っ赤にして否定する。それじゃあ自分で認めてるみたいだな。  
でも……………

俺はラウラの頭を撫でる

「俺はあの涙に救われたんだぜ」

「私の涙にか？」

ラウラは見上げるように俺を見る。  
やばい、ちよっとかわいい。

「そうだよ。お前が泣いてるのが見えてな、これ以上誰かに泣いてほしくないと思って立ち上がったんだぜ」

「そうか、私なんかの涙でもお前の役に立てたのだな」

「私なんかじゃない、お前だからだよ」

「そ、そうか私の涙だからか……………」

俺は撫でていた手を退かす。

ラウラは何故止めた？と言いたげな顔をするが俺はラウラの顔を見ずに話した。

「なあ、ラウラは自分のことが好きか？」

「……昔は嫌いだった。戦う為だけに生きていると怖くなる日もあった。けどな」

急にラウラは立ち上がり数歩進むとこちらに振り返る。

「今は違うぞ。お前が私を変えてくれたからな。クラスや隊のみんなとのわだかまりも無くなったしな。今の自分が好きかはわからないが、今が人生で一番楽しいぞ」

そう言つて満面の笑みを見せる。

ほんの数ヶ月前までの同一人物とは思えない笑顔。けどその笑顔は彼女の人生の中でも一番の笑顔のはずだ。

「それは何よりだな」

正直嫁にされると言われたときはかなり心配したが今の人生が楽しいならそれに越したことはないだろう。

「剣斗は自分のことが好きか？」

予想はしていたが同じ質問をされてしまう。ラウラとしては当然自分のことが好きと答えると思っただろうが俺は正直に答えた。

「……俺は、世界中の誰よりも自分が嫌いだよ」

「信太も言っていたが力が無いことがそんなに嫌いかな？」

ほう、信太がな。やっぱ元同一人物にはわかっちゃうのかな。

「勿論力が無いのもそうだが、それだけじゃ無いぜ。それ以外にも自分の無謀さ、臆病さ、汚さ。例をあげたらきりが無いよ」

そう語る剣斗の目は鋭く、砂を握る手にも力が入っていた。

「そうか、それでも私は今のお前が好きだがな」

「俺も今のラウラの方が好きだぜ」

好きという言葉にラウラは過剰に反応する。

「当たり前だろ、私たちは夫婦なのだからな！」

「だからそれはおかしいだろって」

「ふん。まあいい私は一足先に旅館に戻らさしてもらっぞ」

「俺はもう少しここにいるよ」

「そうだな、まだ居てもらわないと困るからな」

「え？何で」

「待っていればわかるさ」

わかるとはどういう意味だろう。俺にはさっぱり分からず、また海

を眺め始めた。

「どうだったラウラ、感触は？」

ラウラが戻ってくると早速探り出すシャルロット。  
一方フランは何も言わずに剣斗を見つめていた。

「悪くはなかったな」

「それはよかったね。よし、次は僕だね！」

自分に気合いを入れてシャルロットは立ち上がる。

「私も応援してるからな、頑張ってこい」

労いの言葉を送ってラウラは旅館に戻る。

しかし、ラウラの心には剣斗の言葉が残っていた。

『……俺は、世界中の誰よりも自分が嫌いだよ』

（私は、剣斗にもっと自分を好きになって欲しい。お前は自分が思っているよりもずっと素敵な人間だと、だから私が教えてみせる。

お前が私にしてくれたように今度は私がお前を変えてみせるぞ)

夜空にある満月に力強く誓うラウラだった。

「シャルニ」

「その呼び方をするってことは、シャルか」

「うん、隣に座って(いいぞ)なんか早くない?」

「言われる気がしたんだよ。嫌なら座らなければいいしな」

「そんな事ないよ、座らせてもらっね」

ちよこんと隣にシャルは座る。

「その……お腹の傷は大丈夫?」

シャルは包帯でぐるぐる巻きにされてる腹を心配そうに見つめる。

「ん?これか、一応内蔵に傷は無かったからな、夕飯はガッツリ食べたから明日には塞がってるだろ」



「人間の傷ってそんなすぐに治るの？」

俺の場合は飯をたらふく食べれば簡単に治るのだよ。勿論食べるときはたんぱく質とカルシウムを中心に摂るな。これが一番大事なんだよ。

「早く治るのは良いことだろ？」

「それはそうだけど、ごめんね僕を庇ったせいでシャニがこんな大怪我しちゃって」

「気にすんなよ、俺は自分のやったことに後悔してねえからな」

「そついう問題じゃないよ！」

言った後に自分の大声にはっとするシャル。

「い、ごめん。ついムキになっちゃって」

「別にいいさ。そんならい心配してくれてんだろ」

「うん……」

シャルって責任感が強いよな。良いことなんだけど強すぎるんだよな。適当に流してもシャルのことだからきつと気にするだろうしな。

言葉が思い付かない俺は何も考えずに思ったことをそのまま話した。

「でも、あそこで俺が飛び出さなかったらシャルが傷ついていた。俺にはそれが耐えられないよ」

何の偽りもないまっすぐな本心にシャルは顔を真っ赤にする。  
俺って変なこと言ったか？思ったことを言うのは良くないのか。

「それより僕もシャニに聞きたいことがあったんだ」

これ以上この会話を続けるのが恥ずかしくなったのか、シャルは話題を変える。

さすがはシャルだな、すっかり空気を読めてる。俺もあのまま続けるのは恥ずかしかったからな。

「今更聞きたいことって何だよ、答えられる限りは答えるぜ」

「そう？ええとね、僕とシャニが出会ったときってシャニは凄いボロボロだったじゃん。僕に会う前って何があったの？」

「シャルに、会う前……」

あの時の事を思い出そうとしたとき、肩が急に震え出す。抑えようと両手で押さえるが肩の震えは一向に収まらない。

「いいだよシャニ、無理に話さなくても！」

俺の異常に気付いたシャルは一緒に肩をさすってくれる。肩の震えも数分経つとやっと収まった。

「ごめんシャル。このことはまだ自分の中で整理出来てないんだ、だから今はまだ話せない。本当にごめん」

俺は深々と頭を下げる。

シャルには知る権利がある。それなのに自分の都合で話すことが出来ない。本当に俺は最低だ、だから自分が嫌いなんだ。

「シャニが悪いんじゃないよ！僕がシャニの気持ちも考えなかったのがいけなかつたんだよ！」

今度はシャルも頭を下げる。何か俺が下げさせたみたいでいやだな。

「嫌な雰囲気になっちまったな」

「そうだね……」

「……」

二人は黙ったまま海を眺め続ける。

波の音を聞きながら月夜に光る海を眺め俺とシャルの距離は次第に近づいていく。

「あのさ、シャルのお母さん、シエルビアさんは最後なんて言っただ？」

言った後に後悔した。シャルは俺の過去を聞かないようにしたのに俺がシャルの苦い思い出を聞いているのだ。

シャルも一瞬暗い顔になるが、しっかりと答えた。

「もう一度、あの子に会いたかつたねって言ってたよ。お母さんもシャニのこと本当の子供のように思ってたからね」

「！！？……そうか」

シエルビアさんは最後にそんな事を言っていたのか。何で一度くらい遊びに行かなかったのだろうか。シャルの言った通り、約束にこだわっていた自分がアホらしく感じる。

シャルもシエルビアさんのことを思い出したのか、顔を下に向けている。

シャルはまた泣きそうになってるのか？それは困るな、シャルにはもう泣かないで欲しい。

「よし、夏休みは一緒にフランスに行こう」

「え！？」

「フランスはいい所だし、俺もシエルビアさんに挨拶ぐらいしないとな」

「それって、二人つきり？」

ん？シャルはどうして二人つきりにこだわるんだろう。他のみんなが居ても楽しいと思うけどな。

「シャルが二人つきりがいいなら、二人で行くけど」

「できるなら二人で行きたいな…」

「わかった、フランスには二人で行くか」

「うん！えへへ夏休みが楽しみだなあ」

まだ夏休みまで2週間はあるのに、気の早い娘だなあ。

「僕はそろそろ戻るね」

「ああ、俺はもうちょいここに居た方がいいのか？」

「ええ〜と、もう少し居た方がいいかな……」

ラウラといい、シャルといい、何でここにいるのがわかったんだろう。一応ここは俺が見つけた穴場なだけだな。

俺はシャルに手を振って見送るとまた海を眺め始めた。

「フランさん、終わりましたよ」

「そ、そうか。つ、次は私だな」

フランは誰が見ても分かるほど緊張していた。

「大丈夫ですか？ 凄い緊張してるみたいですけど」

「だ、大丈夫だよ。じゃ、じゃあ行つてきます」

フランはゆっくりと立ち上がり、これまたゆっくりと歩いていった。

「そ、そつだ。ここで攻めなくちゃ、攻めなくちゃ駄目なんだ」  
それでも意思だけはしっかりしていた。

「け、剣斗」

「次はフランさんか…隣、座りますか」

コクン

フランさんは頷いて、まるでロボットのようにゆっくりと隣に座る。  
どうしたんだろう、フランさん緊張してないか？

「今回はフランさんにお世話になりっぱなしでしたね」  
今回の戦いではフランさんの活躍は大きかった。しっかりとした牽制などで目立ちはしなかったが、俺や一夏より充分な働きをしてくれたと思っている。

「そんな事ないよ。私は脇役みたいなものだったよ」

「何を言ってるんですか、脇役がいるから主役が輝くんですよ」

「そうか、脇役も悪くはないな」

「何だかんだで臨海学校も明日で終わりですね」

「また、辛い日々の始まりだよ」

砂をいじりながら話すフランさんの目はとても悲しく、切なかった。

「私は勝手に臨海学校に参加したからな、戻ったらまたカルラさんに叩かれてしまう。別に前まではそれでも良かった、生きてるだけで充分……そう思ってたけど」

フランさんは頭を俺の肩に乗せる。

女性特有の香りに頭がくらくらとしてしまうがブンブンと頭を振って正気を取り戻す。

いかんいかん。今はフランさんの話を聞かなくちゃ。

「君と出会って変わったよ。あの時一緒に食べたハンバーグの味は今でも鮮明に覚えている。シャルロットさんから貰ったリボンも私の宝物だよ」

ポケットからリボンを取り出して俺に見せてくれる。リボンは綺麗に折り畳まれていて大切に使っているのがよくわかる。

「一番の変化は私にも欲ができたことだな。私もオシャレをしたい、美味しいものを食べたい、そして何より剣斗に会いたいと思えた。けどあの人は許さなかった。私が少しでもお願いすると暴力を振るうんだ。やっぱり私が欲を持つちゃいけないのかな」

最後の方は声が振るえていてあまり聞き取れなかったが、フランス人が悲しんでるのぐらいはわかる。

改めて自分の弱さが気に入らない。あの時に勝っていればフランス人の今の願いも全部叶えられたはずなのに…

俺はフランスさんの肩に手をやるとそっと引き寄せる。

「欲なんて人間なんだから持つてるのは当然なんですよ。それを誰かが縛っていいわけがないんです」

「そうなの？」

「そうなんです」

フランスさんは海を見ながら、そうだ私だって人間なんだと呟き納得してくれた。

だいたいカルラは普段フランスさんにどんなことをしてんだよ。今度あったときは一発ぶん殴んなきゃ気がすまないな。

「だけどな剣斗、カルラさんは嫌いだけど私が一番嫌いなのは時間なんだ」

「時間、ですか？」

俺が聞き返すとフランスさんは黙って俺の手を握り話し出す。

「だってそうだろ。時というのは必ず来る。なのに苦しい時間は長いの楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。現に剣斗に再会



するまでは一年以上に感じたのに、臨海学校はまだ一日も経った気がしないよ」

そう話すフランさんの目からは涙が流れ、頬を伝わり俺の肩を流れる。

俺は肩に当てていた手で涙を拭う。

「確かに時間って勝手に過ぎるし、楽しい時間はあっという間過ぎちゃいますよ。でもさ、だからこそ俺たちはその一瞬を精一杯楽しもうと思っんですよ。それに時間が勝手に過ぎるってことは別れてもまた会える時が勝手に来るってことなんじゃないですか」

「また会える時？」

「そうですね。いざ会おうと思えば最低でも夏休みには俺がイタリアに会いに行きますよ」

俺は覗き込むようにフランさんの顔に笑顔を見せる。  
フランさんは顔を赤くして他所を向いてしまう。

あれ？俺の笑顔変だったか。シャル程じゃないけど自信はあったんだけどな。

「じ、実はな、今度イタリアで大きな大会があつてそれに優勝したら国家代表になれそうなんだ」

「なんだ、だつたらまた直ぐに会えるじゃないですか！いやあ良かった良かった！」

「……………」

俺が喜びながら笑っていると、フランさんは困惑顔になっている。

「何で私が代表になるのが前提なんだ？」

「何でって、フランさんと戦った後イタリアの代表から候補生まで全員のデータを見ましたけどフランさんの方が上だと俺は思ってますよ。いや、確実にフランさんの方が上ですよ、俺が保証します」

自信満々な俺の表情を見て、フランさんは大笑いする。

「そうか、君が言うなら間違いないだろう。だったら私も次の大会は本気で代表を狙ってみよう」

「頑張ってくださいね、俺も早くフランさんに会いたいですから」

その言葉を聞くと今度は耳まで真っ赤にしながらも立ち上がりこちらを見つめる。

もうその目には悲しみや不安は一切無かった。

「もう一度、確認の為に約束してくれないか。私がイタリア代表になったら試合を見に来てくれないか」

俺も立ち上がって答える。

「勿論ですよ。今度は8月ぐらいに会いましょう」

「うんー」

その後はどうやらもう待たなくてもいいらしかったので、フランさ

んと砂浜を散歩してから旅館に戻った。

それにしても夏休みはフランスとイタリアに行くのか。しっかり予定立てなくちゃ宿題終んなさそうだなあ。

翌日、3日目はIS及び専用装備の撤収作業を10時頃に終え、今は全員がクラス別のバスに乗り込む。

俺は行きはバイクで来たが、左肩の影響で乗れそうにないので偶々免許を持っていた信太にバイクを託した。

「あゝ……」

「お前大丈夫か？」

窓際の席に座る俺の隣で一夏はうめき声をあげる。

どうやら昨日は一夏も旅館を抜け出したらしく、篝ともいい雰囲気になっていたらしいがそこでセシリアと鈴に見つかってしまい一時間近く追い回されたが一夏は言っていた。

「すまん…誰か、飲み物をくれないか？」

渴れそんな声で頼む一夏だが、

「な、何を見ている!」  
と箒。

「知りませんわ」  
とセシリア。

「ごめんね、今持っていないんだ」  
とシャル。

「喉が乾いたなら、ツバを飲めばいいだろ」  
とラウラ。

鈴は二組なのでいない。  
俺は外を見ながら口笛を吹いている。  
誰も飲み物をくれないことを悟った一夏はぐったりとする。

バかな一夏め、箒たちの気持ちも察しずにいるからこうなるのだ。  
俺がにんまり笑っていると、車内に見知らぬ女性が入ってきた。

「ねえ、織斑一夏さんと神城剣斗くんっているかしら?」

「あ、俺が神城でこっちが織斑ですけど」  
名前を呼ばれたので素直に返事をする。

その女性は、おそらく二十前半くらい。最低でも俺たちよりは年上で、鮮やかな金髪が印象的だった。  
格好はブルーのサマースーツを着こなしている。スーツといっても

オシャレ全開のカジュアルスーツ。開いた胸元から見える大人の膨らみについ視線がいつてしまう。

「ふーん、君らがねえ」

女性は興味深そうに俺たちを眺める。

「あの、あなたは………？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「え？」

女性の予想外の言葉に一夏が困惑していると、女性はいきなり頬にキスをした。

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

「え、あ、う………？」

「じゃあ、またね。バイ」

「ちょっと待ってください」

バスから降りようとしたナターシャさん呼び止める。

「何かしら？もう一人のナイトさん」

「ガルダの操縦者はどうしたんですか？怪我がひどかったんですか」

俺には自覚はないが、もしかしたらやり過ぎたのかもしれない。戦いに夢中になって、操縦者のことをすっかり忘れていた。

「安心して、あの娘も無事よ。あの娘は人見知りだから恥ずかしいんですって」

俺は思わず安堵する。あれで操縦者が大怪我をしていたら、また中途半端にしか守れなかったことになる。それだとせつかく手に入れたフューチャーに申し訳ない。

「だったら伝言をお願いしてもいいですか？」

「いいわよ。何かしら」

「今度は正々堂々一対一で勝負しましょうと伝えてください」

ガルダは俺よりは強かった。だからこそ、訓練して今度は一人で倒したいと思った。

「さすがは男の子ね。わかったわ、そう伝えておくわ」

ひらひらと手を振ってバスから降りるナターシャさん、すると入れ替わるようにしてフランさんが入ってくる。

「フランさん、もうお別れですね。やっぱり寂しいですね」

「大丈夫だよ、8月にはまた絶対会えるから」

それは次の大会で絶対優勝すると宣言していることを示していた。

「そつでしたね、待ってればいつかは会えるんですし気長に待ちますね」

「……………」

急にフランさんは顔を真っ赤にして黙ってしまつた。

「どうしたんですか」

俺が顔を伸ばすと、一夏同様に頬にいきなりキスをされた。

「ふ、は、ん……………」

「……………さっきバスから出てきた女性にこうするのが良いって言われた。じゃっ、またね！」

逃げるようにバスから出ていくフランさんを俺と一夏はぼーっとしたまま手を振って見送る。

……………。

……………まずいな。

なんとなく、なんとなくーのだが、イヤな予感がして俺と一夏は振り向く。

「浮気者め」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいなんですのね」

「剣斗ってモテるねえ」

「貴様には嫁の自覚がないようだな」

来たときは二人だった鬼神も、標的が違うとはいえ四人に増えている。

「「きよ、今日は許してくれるかな？」」

俺と一夏はマイクを向けるように聞いてみるが、見事に逆効果だった。

「「「「いいとも」なんて言うか！」「」「」

「「ぎゃ〜！！」「」

こうして波乱続きだった臨海学校も、俺の悲鳴で始まり、俺と一夏の悲鳴で終わった…。



## バルタニア共和国

ズダダン！ズダダダン！！

「きゃー！ー！」

「うわぁっ！！」

「お母さん！どこー！？」

至る所から聞こえる銃声と悲鳴。耳を塞いでも聞こえる音、目を反らしても見える景色。

それは今でも覚えている地獄そのものだった。見える景色には常に血が飛び交い、村人の悲鳴と共に次々と倒れていく。

俺は恐怖のあまり、思考が全く働いてなかった。

「大丈夫よ」

「！？」

この地獄には似合わない澄んだ声が聞こえる。

「私が、あなたを守ってみせるから」

そう言う彼女も腹に銃弾が当たり、かなり出血している。それでも決して大きくない体で俺を隠すように覆い被さっている。

「こうしてれば大丈夫よ。まさか兵隊さんも死体の下に生きてる人

がいるなんて思わないし、もし銃弾が来てもあなたに当たることはないわ」

それは彼女が死ぬことを前提に話されている。

「……………！」

恐怖で声が出ない俺は必死で首を横に振る。

嫌だ、彼女が死ぬなんて考えられない。彼女には生きていて欲しい。

しかし、彼女も同じ様に首を振る。

「私も生きたいけど、もう駄目なんだ。自分のことだからよくわかるの」

彼女の言ってることを理解したくない、認めたくない。でも現実には正直だった、大量出血により、彼女の顔色はどんどん悪くなっていく。彼女は最後に俺を力強く抱きしめる。

「だから最後のお願ひ。あなたの声で私の名前を呼んで」

「」

口を動かして彼女の名前を呼ぼうとするが、なかなか声が出ない。何度も何度も同じ口の動きをする。せめて彼女の最後の願いを叶えてやりたい。その思いで声をだそうとする。そして出た言葉は彼女は勿論、俺自身も驚きだった。

「死ぬのは嫌だ…生きたい……………」

一瞬自分でも何を言ってるのかわからなかった。数秒後に自分の言ったことを理解する。俺は彼女の願いを無視して自分の欲を言ってしまったのだ。直ぐに彼女の名前を呼ぼうとするが、また声がでなくなる。ただ口から空気が漏れる音がするだけだった。

彼女も一瞬驚き、悲しみの表情を浮かべるが、にこりと笑って次は強くでなく優しく抱き締めた。

「いいのよ、あなたの気持ちはわかってる。あなたは生きたいのよね、それはいいことよ。だから代わりに……うっ！」

彼女は突然顔を歪める。よく見ると肩からも血が出ている。どうやら、流れ弾が当たったみたいだ。

そして俺は彼女の腕の間から見た、男性の兵隊と眼帯をした銀髪の少女が撃ち合っているのを。

（やめる！これ以上撃ち合うなよ。これ以上彼女の傷つけないでくれ！）

そんな思いを打ち砕くように、銃弾は次々と彼女に当たる。

それでも彼女は笑顔を絶やさなかった。そして、途切れ途切れの言葉を繋げて俺に言った。

「代わりに、私の分までしっかり生きてね。私が……迎えない明日を……楽しんでね。それでね……他のみんなを……守って……笑顔に……わたしが見れなかった……希望を……」

彼女の声はどんどん弱々しくなっていく。

俺は泣きたかった、泣きたくて泣きたくて仕方がなかった。だけど

泣けなかった、泣いたら見つかってしまう。それだけは嫌だったのだ。

そんな二人を他所に未だに撃ち合っている二人。俺は撃ち合ってる二人に殺意を感じる。

「やめろおお！」

恐怖も疲労も吹き飛ばして、俺は二人に斬りかかる。

そして

「あ、あのー……剣斗くん？」

「はあはあはあ……？」

俺が肩を掴み、その首に影打を当てているのは副担任の山田先生だった。

場所はIS学園一年一組の教室。時刻は10時を過ぎたところで、今は世界史の授業を受けている。

「えーと、ですね。珍しく授業中に眠っていて、うなされてたみたいなので起こそうと思ったんですが……」

「あ、はい……」

気が付くと身体中から汗が出ている。滴り落ちる汗は、机にあるノートを湿らせている。

「で、出来れば刀を下ろして欲しいんですが」

「あつ！すみませんでした！」

頸動脈にあてていた刀を鞘に納め、椅子に崩れるように座る。

周りのみんなも驚いていて、手を止めてこちらを見ている。

前の生徒から大丈夫？と聞かれたので、大丈夫、心配してくれてありがとう。と笑顔で返した。

「別に気にしなくて大丈夫ですよ。今は織斑先生もいないですし」

「そうですか、助かります」

千冬さんが居なかったのは本当に幸이었다。もし千冬さんがいたら今頃教室にはいなかっただろう。

それでも山田先生に刀をあてたには変わりない。わざわざ起こそうとしていたのに、どうかしている。

「はい、みなさん。授業を続けますね」

山田先生の言葉でみんなはまた授業に意識を向ける。

「続けますね。先程も説明したようにISを使用しない最後の戦争はバルダニア共和国とドイツとの戦争です」

バルダニア共和国、アフリカ北部にある貧しい国だ。ISは一機も持っていないが、数多くの有名スポーツ選手を排出しているスポーツ

大国だ。

そんな国がひよんな事からドイツと戦争になった。理由はバルダニア共和国が送ったスパイだった。バルダニアにはスパイ行為は否定したが、ドイツは認めずに戦争に発展した。戦争は1ヶ月ほどで終わったが、たくさんの戦死者が出た。しかもその多くはバルダニア国の人だった。

「この戦争にはボーデビッツさんの所属する『シュバルツエ・ハーゼ』も参加していました」

「……」

俺は黙って聞いていたが、内心は怒りを沈めるのに必死だった。

『シュバルツエ・ハーゼ』 通称『黒ウサギ隊』。ラウラの所属する隊で、ドイツ国内十機のIS内三機を持っている、ドイツ最強の部隊だ。

「それではボーデビッツヒさん。そのときの様子を話してもらえますか」

山田先生が促すと、ラウラはスタッと立ち上がり誇らしげに話す。

「戦争と言っても我が国との戦力差は明らかだったし、『シュバルツエ・ハーゼ』もある村で一日だけ戦闘しただけなので何とも言えないが、我が隊では一般人に被害をださないことを心掛けたな。そのお陰で我が隊が一番一般人に被害を出さなかったので表彰されたのを覚えている。あれは私の誇りでもあるな」

(誇りだと!?)

気が付くと俺は授業中にも関わらず、立ち上がるとラウラに詰め寄った。

「どうした?さては私に惚れ直したか、よかろう授業中にはあるが頭を撫でてもいいぞ」

頭を差し出すラウラに俺は胸ぐらを掴んで持ち上げ、怒号を放つ。

「ラウラ!お前は本気でそれを誇りに思ってたのか!?!」

「なっ!?!」

いきなりの出来事にクラスのみんなも立ち上がる。山田先生はどうしたらいいのかは分からず織斑先生を呼ぼうか悩んでる。

「おい聞いてんのかよ!お前はそれが誇りなのかよ!」

「落ち着いてよ剣斗、どうしたの!」

真っ先に動いたシャルロットが剣斗を止めようとする。

「うつせえ!テメエは黙ってる!」

シャルロットは突き飛ばされて机にぶつかりそうになるが、間一髪信太がシャルロットを受け止めた。

シャルロットはいつもと違う剣斗に声も出ない様子だった。

「剣斗!いい加減にしろよ!」

続いて一夏が剣斗に詰め寄ろうとするが信太が間に入る。

「退けよ信太！剣斗を止めなくちゃ駄目だろ！」

「やめとけ、今のあいっつには俺たちが見えてねえよ。いざとなつたら俺がちゃんと止めるよ」

平然を装う信太も剣斗の様子に驚く一人だった。

（今まであいっつが怒ることは何回かはあったが、シャルロットや仲間が見えてないのは始めてだな。一体何があつたんだ？）

啞然としてるみんなの前で剣斗はラウラを問い詰めていた。

「なあ、お前は人の命を数で数えるのか！どうせ死んでも少なかつたからよかつたのか！？」

「ちがう…私は」

「何が違うだよ！お前がそれを誇りに思ってるのは事実だろ。もしお前がそんな考えを持ってんなら俺はお前をぶっこ」

すばあんっ！

剣斗が全てを言い終える前に乾いた音が教室に鳴り響く。

「授業中に問題を起こすとは何事だ！」

「織斑先生」



そこには出席簿を持って仁王立ちする千冬がいる。きつと騒ぎを聞き付けて駆けつけたのだろう。

「授業の邪魔をするなら今すぐ教室から出ていけ！」

「……」

千冬の声が一瞥する。普通の人なら縮こまってしまいが、剣斗は縮こまるどころか千冬を睨めつけている。それはいつもの尊敬と敬意の眼差しでなく明らかな反抗の眼差しだった。

張り積めた空気だ教室を包む。暫く睨み合っていた二人だが、落ちて着いた剣斗は小さく

「わかりました、すみません」

と答えて、荷物もまとめずに教室を出ていった。

「隣から凄い音がしたけど、どうしたのよ！」

二組の前を通るときに窓から顔を覗かせた鈴が剣斗に話しかける。剣斗はため息をつくと作り笑顔で答えた。

「何でもないよ。ちょっと体調が悪いから保健室に行くだけさ」

剣斗が嘘をついているのは明らかだったが鈴はそれ以上は何も言わなかった。

「そう、気を付けなさいよ」

「わかってるよ、じゃっまた明日」

廊下を歩く剣斗を鈴は唯見送ることしか出来なかった。

(何やってんだ、俺は……)

時刻は変わって午後の6時。教室を出た俺は一日中屋上にいた。昼に一度食堂に行こうと思ったが、みんなの視線が痛そうだったのでやめといた。だからさっきからお腹が鳴りっぱなしである。

(あれはラウラが悪いわけじゃない。なのに何であんなに怒ってたんだろう、おまけにシャルを突き飛ばすなんて)

あの時は信太がいなかったら、シャルは確実に怪我をしていた。それに一夏も止めてくれた。もし一夏が来ていたら俺は何をしたかわからなかった。

ガチャ。

後ろから扉が開く音がする。

「剣斗、ここに居たのか」

声の主はラウラだった。俺は振り返ることも、話すこともしなかった。

「やっぱり私みたいな奴とは話したくないか」

違う。逆だ、俺がラウラと話す資格がないから無反応なんだ。そうは言えずに俺はアリーナを見続けている。

「ご飯、ここに置いとくぞ。食べてないだろ」

「……」

それでも何も反応しない俺。ラウラは部屋に戻ろうと扉に手をあてるが、堪らず後ろから剣斗に抱きついた。

「!?!。ラウラ」

「わかってる、私は最低な人間だ。人の命を数で考えていた。最低だ。だけど、嫌いにならないでくれ。剣斗に嫌われたら私はもう……」

「ラウラが悪いんじゃない。俺が悪いんだ、全て俺が」

そうだ、今まで黙ってた俺がいけないんだ。みんなには話さなくちやいけないんだ、だから……

「ラウラ、俺はお前のことが嫌いになったんじゃない。そこは勘違いしないで欲しい。だから、ちょっと頼みごととしていいか」

「頼みごと？」

「ああ、専用機持ちのみんなに明日の9時に駅前に集まるように言ってくるんじゃないか。そこで全部話すよ。何で今日あそこまで起こったか。だから無理してでも明日は来て欲しい」

正直明日は急すぎる感じもするが、早い方がいいに決まってる。みんなの為にも何より自分の為に。

「わかった。みんなには私から言うておく。それと、本当に私のこと嫌いになってないか」

「なってないよ。俺が一番嫌いなのは自分だからな」

「そうか。では明日な」

「おう、またな」

ラウラは早足で屋上を後にする。きっとみんなのことだから明日は来てくれるだろう。

(残る問題は俺だけだな。明日までに色々準備しないとな)

空はいつの間にか雲に覆われ暗くなってゆく。それは剣斗の心を表してるようだった。

## ナタージャ

翌日。駅前には剣斗を除いた全員が既に集まっていた。剣斗の希望から、みんな制服を来ている。休日というのもあって、駅前は結構混んでいた。

「それにしても、遅いわね」

鈴は時計を見ながら文句を言っている。実際にはまだ集合時間前なので、さほど怒ってはないが一分でも遅れたら鈴の飛び膝蹴りが剣斗の顎を正確にとらえるだろう。

「まだ時間前だろ、そうカリカリすんなよ」

「そうだけど、こっちは急に呼び出されたのよ。あたしたちより先に来るのが礼儀でしょ!？」

「剣斗さんが時間ギリギリになっても来ないなんて、珍しいですね」

みんなが一樣に心配し出した頃、剣斗が奥からスタスタと歩いてきた。その顔色はあまりおもしろくなかった。

「ごめん、準備に時間が掛かった」

「まだ時間前だろ。気にすんな。で、俺たちを呼んだ理由は？」

一夏が笑顔で聞いてくるので、剣斗も笑顔で答える。

「みんなに会わせたい人たちがいるんだけど、ここからだ電車では行けないんだ。だから今は黙ってついてきて欲しい」

「わかった。じゃあ行くか」

一夏が言うと一人納得のいかない人物もいたが、みんな黙ってついてきてくれた。

電車に乗った剣斗たちは、席にシャルロット・剣斗・ラウラの順に座り、その前に鈴・信太・篤・一夏・セシリアの順に立っている。

みんなそれぞれ小声でお喋りをしている。剣斗だけは落ち着くために音楽プレイヤーで自分の好きな曲を聞いていたが、それでも手が震えている。そのことにいち早くシャルロットが気付く。

「手、震えてるけど大丈夫？」

「問題ないよ」

そうは言ってみせるが、手の震えはますます激しくなっていく。シャルロットは自分の左手を剣斗の右手にそっと重ねた。

「ねえ、もしかして今日話そうとしてるのって、臨海学校の時と関係あるの？」

「関係どころかそれと同じ話だよ」

「でもあれってまだ剣斗の中で整理出来てないんじゃない？」

「できてなくても話さなくちゃいけない時が来たんだよ。話しとか

ないと後々面倒だからな」

「わかった」

二人の会話はそれっきり続かなかったが、目的地に着くまでシャルロットはその手を離さなかった。

そして剣斗もいつしかその手を握りしめていた。

「みんな、次の駅で降りるから」

あれから一時間半経って、電車はようやく目的地に着いた。

電車から降りて駅を出るとそこは自然豊かな田舎だった。駅の周りには店がぼつぼつとあるだけであとは山ばかりである。右手には海も見える。

きつとここに来た人全員が、老後はここで暮らしたいと言っぐらいのどかだった。

「で、その会わせたい人はどこにいるのよ」

ご機嫌斜めな鈴が不満そうに言う。

どうやら本当は鈴も友達と出掛ける用事があったのだが、剣斗がどうしても言うからついてきてみたが、結果的に後悔していた。

そんな鈴の気持ち察して剣斗は手を合わせて謝る。

「用事があるのに無理矢理つれてきたのは悪かったと思ってる。けどこれは鈴にも知ってほしかったんだ。だから、もう少し俺のわがままに付き合ってくれ」

鈴はうなだれていたが、やがて勘弁したのかため息をつく。

「まあいいわよ。ついていくって決めたのはあたしだしね」

「ありがとう。それでその人に会いに行く前にちょっと買うものがあるから待っていてくれ」

「待っていてくれって、どこに行くんだよ」

一夏の言葉が耳に入っていないのか、剣斗は駆け足で何処かへ行ってしまう。

数分後、買い物を終えて戻ってきた剣斗の腕には両手でやっと抱えられる程大きな花束があった。

花束にはバラやカーネーションにチューリップ、さらにはすすらんもあり正に色とりどりの花束である。

値段にしたら一万円はくだらんだろう。それを剣斗は迷わず買った。本当は剣斗が花屋の人に色々要望を言ったらたまたまこの値段になったのは彼だけの秘密である。

「派手な花束だな、これから会う人にか？」

「まあな、その人に会いに行くのも久しぶりだからな」



「だったら早くしよう。人を待たせるのはあまり良くないからな」

「そう…だな」

箒に促されて先頭を歩く剣斗の背中には何か言葉では表せない、黒い何かを感じたのはシャルロットと信太だけだった。

「着いたな……」

駅から三十分ほど歩いて剣斗たち一行は待ち合わせ場所に着いた。そこは海を一望できる小さな丘で近くに木がある以外は何も無かった。

「来たはいいけど、誰もいないじゃない」

怒りを通り越して、あきれ声をだす鈴。それでも剣斗は表情一つ変えずに一歩踏み出して言った。

「俺が会わせたい人はあそこにいるぜ」

指を指す剣斗だが、指先には誰もいない。そのかわりに小さなお墓が置かれていた。

全てを理解しきれないみんなは気にせず、剣斗は墓の前まで行く。と膝について花を添え手を合わせる。

「それって誰の墓なの？」

恐る恐るシャルロットが剣斗に問いかける。

「これは、バルダニアのある村の人たちの墓だよ。墓と言っても骨とか何一つ埋めてないけどな」

「!？」

みんなはそれぞ驚いた表情をしている。

これが誰かの墓なのは容易に想像できた。しかしそれがバルダニア人の墓とは思わなかった。第一、剣斗とバルダニアの人との関係があったことが一番の驚きだった。

「これから話すのは俺の愚痴みたいなもんだからな。みんなは茶でも飲んで気楽に聞いてくれ」

剣斗はブルーシートを敷くとその上に花束と一緒に買った飲み物や食べ物と並べ、座ることを薦める。

当然みんなは遠慮していたが、だったら話さないと子供みたいに駄々をこねたので渋々座った。

剣斗はみんなに背中を向けるように立って話し始めた。

「これは俺が中一の時の話だ。俺は剣術修行と興味本意から世界放浪の旅に出たんだ。けど、計画性が全く無かったからなアジアは気合いで乗り切れたんだが丁度バルダニアに着いた辺りで食料が底をついて、ある村で行き倒れしちまったんだよ。その村で俺に食料を分けてくれたのがナタージャつう女性だった」

剣斗は昔を思い出しているのか、空を見上げながら話す。

「ナタージャは俺より3つ上でな、見知らぬ俺を村まで運んでくれて、バルダニア語を話せなかった俺の通訳として何時も傍にいられたよ。彼女は強くて、可憐で何より笑顔が絶えない女性だった。彼女のお陰で俺は村のみんなにも認められて少しの間だけその村にとどまった。たった四日間だけだったけど本当に楽しかった。一日中子供たちと遊んで夕方になったらナタージャの家でご飯を食べる。そんな生活を送った五日目に戦争が始まったんだよ」

「……………」

みんなは何も言わないが、それでも剣斗は話し続けた。

「村のみんなは必死で逃げた。俺は逃げるみんなを誘導することにした。いざというときは自分の命を犠牲にしても、みんなを守ろうと思ったんだけどさ、俺ってチキンだからさ相手の銃を見た瞬間腰が引けちゃってさ動けなくなっちゃったんだぜ。情けねえよな」

あはは、と愛想笑いをする剣斗だったが、その声はちっとも笑ってなかった。

「だけど、その時も俺を助けてくれたのはナタージャだった。ナタージャは俺に覆い被さって流れ弾から俺を守ってくれた。流れ弾があたっても俺を不安にさせないようにずっと笑ってくれた。ただど逆にそれが俺には辛くて堪らなかった……………」

剣斗は墓に手をあて、目を閉じて話す。

「彼女は死ぬ間際に俺に名前を言って欲しいって言ったんだ。恐怖

で声が出なかったんだけど、俺が何とか言った一言が『死ぬのは嫌だ、生きたい』だったんだぜ」

途中まで明るい口調で話していた剣斗の声はだんだん湿ったものになる。

「ナタージャは一瞬だけ悲しそうに顔したけどさ、またすぐに笑ってんだぜ。おかしいよ。何で笑ってたんだよ、俺はナタージャを裏切ったのに……。ナタージャが死んですぐにその村での戦争が終わって両軍の兵隊が撤退した。俺は起き上がってナタージャに心臓マツサージや人工呼吸して何回も名前を呼んだけど、意味なんてなかった。そこには本当に、唯眠ってるだけのよう横たわってるだけだった。周りを見たけど、村のみんなは全員死んでた」

剣斗は拳を強く握りしめる。爪が食い込み血が出るのもお構いなしに。そして声と肩が震え始める。

「俺は、最低だよ……。目ので次々とみんなが倒れていくのに……。俺は、自分を犠牲にして守ってくれてたナタージャに……。命声しか出来なかった……」

「もう話さなくていいよ」

シャルロットが優しく言うが、剣斗は止めない。いや、止められなかった一度動き出した口は全てを話さないと止まらなかった。

「俺は、その日から自分が嫌でしょうがなかった……。他人の命を犠牲にして悠々と生きてる自分が憎たらしくて！」

「もういいよー」

シャルロットは堪らず抱き締めていた。

これ以上剣斗が剣斗をけなしてほしくなかった。自分が最も愛している人がこんなにも辛そうにしているのがシャルロットには耐えられなかった。

「あの時、ナタージャはどう思っただんたろう。俺を恨んでたのかな？」

誰も答えない。下手に答えると剣斗を傷つけてしまう、そう思うと何も言えなかった。

暫くした後、この静寂を破ったのは意外な人物だった。

「きつと、ナタージャさんはお前の幸せを願ったんじゃないか」

「信太？」

「ナタージャさんは世界中の誰よりもお前の幸せを願ってたよ。だから、お前を守ったんだろ？」

「だけど……」

俺はナタージャを裏切った。剣斗にはそれがつかい棒になっている。

信太はやれやれといった感じのため息をつく、ブルーシートからサンドイッチを持って剣斗の隣に座った。

「お前がそう思えないのは、ナタージャさんに対する罪悪感だろ？  
けどよ、生き物が生きていくには必ず誰かの犠牲が必要なんだぜ。  
俺たちが生きていく為に食べるサンドイッチにだって豚や野菜が入ってんだよ。ある意味同じだよ」

「人と豚や野菜は違う！」

「違わなくねえよ。人も豚や野菜も全部一つの命だろ。まあ、ナタージャさんの場合はちよつと違うだろうが、それでも生きるということは結局は誰かの命が必要なんだよ」

「そうかもしれない。けどナタージャさんは……」

「けどもくそもねえよ」

信太は拳骨を剣斗の頭にヒットさせる。頭から鈍い音がして、シャルロットが心配そうに見つめている。

「第一、死んだ人の気持ちなんてわかるわけないじゃん。答えがないんだから幾らでも例えは出せるさ。…だったらさ、せめてプラス思考で考えようぜ。それに、悠々と生きてる自分が嫌いっていったけどお前が生きてたから、『希望』を見つけられた奴だって沢山いるはずだぜ。俺もその一人だしな」

その言葉が剣斗の心に深く突き刺さった。そして、彼女の最後の言葉を思い出す。

『他のみんなを…守って…笑顔に…わたしが見れなかった…希望を…』

「……やべつ、マジで泣きたくなっちゃった……」

「泣いちまえよ。幸い、胸を貸してくれる奴がいるじゃん」

剣斗が振り返る。その目には悲しみが全て詰まった涙が溜まっていた。そして抱き締めてるシャルロットの目にも涙が溜まっていた。

「ちょっとだけ…泣いてもいいか？」

「勿論だよ。それに剣斗言ったじゃん。一人で何でも抱え込まなくて。僕も同じ気持ちだよ、剣斗も一人で抱え込まないでよ」

「う……うわああああ！ごめん！俺は、俺は！守りたかった！なのに、ごめん！」

「いいんだよ剣斗。きつとナタージャさんもわかってるよ」

剣斗はシャルロットのお腹に顔を押し当て、泣き続けた。

シャルロットは、大丈夫だよ。と慰めながら子供をなだめるように頭を撫でた。

「ふうー。ありがとう、スッキリしたよ」

数分後、泣き止んだ剣斗は目薬をさす。きつと泣いてたのが恥ずかしかったのだろう。誤魔化すために急いでつける剣斗が面白くてシャルロットはつい笑ってしまう。

「今更目薬しても、遅いんじゃない？」

「うるせえ、それは個人の自由だろ。さてと、かなり話がそれたが戻すな。これで俺が昨日怒っていた理由がわかってくれたと思うけど、実はもう一つあるんだ」

「もう一つ？」

シャルロットが聞き返す。

「俺はラウラとその戦場であっていた」

「!？」

これにはみんなが驚いて、一斉にラウラを見る。

ラウラは何も言わない。だけど、そこまで驚いた様子じゃない。きつとだいたい予想出来たのだろう。

「俺がナタージャに覆い被さられていた時に腕の間から見えたんだよね、男性兵士と撃ち合うラウラが。勿論最初は推測だった。けど、昨日ラウラがああ戦争に参加していたと聞いて確証に変わったんだ。そしたらラウラがあんな事を誇りなんて言うからついカツとなつてな」

「だったら！」

急にラウラが立ち上がる。その目には申し訳ない気持ちもあるが、怒りがそれを上回っていた。

「私を殴ればいいだろ！殺せばいいだろ！私はお前の大切な人も沢



山殺したのだぞ！」

「そんな事して何になるんだ」

ラウラの訴えにも剣斗はあっさり答えてみせる。その声には感情が一切感じられなかった。

「ラウラを殺したって誰かが生き返るわけじゃないし、みんなもそれを望んでないのはわかる」

「っ！？そうかもしれないが、私が憎くないか！？」

「憎くないよ。言ったら俺は今のラウラが好きだって。それともあれか？ラウラはわざと村の人たちを殺したのか？」

「それはない！私はできる限り一般人に被害を出さないようにした！あの戦争は最初から無意味だった。やる必要なんてなかったんだ」  
「その言葉が聞けただけで充分だよ」

剣斗はシャルロットの傍から離れるとラウラの前に座った。

「人間ってさ、地球上で最も嫉妬深い生き物だけどさ、逆に地球上で最も他を許せる心を持つてる生き物なんだぜ。だから俺は人間だからラウラを許す。」

「剣斗……うわぁぁん！」

ラウラは剣斗の胸に飛び込むと涙を流す。

その涙は剣斗の大切な人を奪った罪悪感からの涙と、剣斗から嫌わ

れないで良かったという歓喜の涙だった。

「何だよ、次はラウラの番だよ。しょうがないな、今度は俺が胸を貸してやるか」

剣斗はシャルロットとは逆に何も言わずにラウラの背中を擦っていた。

「どうだったナタージャ、みんな良い奴ばっかだろ」

現在剣斗は墓の前で一人でジュースを飲んでいる。  
あ後はみんなで世間話をして先に帰ってもらった。最期は二人つきりで話があった。すべてにけじめをつけるために。

缶ジュース蓋の開けて墓の隣に置く。空にはいくつあるかわからない位の星がキラキラと光っている。

「今日は星が綺麗だね。俺たちがあった日もこんな星空だったよな」  
決して返事が返ってこないとわかっていても剣斗は話し続ける。

「俺さ、あの日からずっと自分が憎くて仕方がなかったんだ。あの

時ナタージャと言っていれば何かが変わっていた思ってた。俺は罪悪感から逃げるために人助けをしてきた。けど、これからは自分の意思で人助けをしていきたいと思うんだ。変かな？」

「……………」

「信太が言うのが100%あつてると思えないけど、ナタージャは俺の幸せを願ってたのかな？……わかるなけないよな。じゃっ、明日も学校があるから俺はもう行くよ」

剣斗はゆっくり立ち上がり、その場を後にしようとする。

その時

『ありがとう』

「え？」

『私のお願い叶えてくれて、だからあなたは幸せになってね。わたしたちの分まで…………』

振り返るがそこには誰もいない。

幻聴だったのか？それとも唯の妄想？  
どっちだって良い。でも、

「最後に君の声が聞こえてよかったよ。わかった、俺も幸せになるように頑張るよ。君が迎えられなかった未来を楽しく過ごすよ」

その場を後にする剣斗。

墓に添えられた花束は潮風にゆれていた。それはまるで剣斗を見送る彼女が手を振ってるようだった。

## ナタージャ（後書き）

いかがですか？

今回のオリジナル話は前からあの事件と言っていたので書いてみました。ちょっと暗い感じがしてISっぽくないと思いましたが、別にいいよね？たまにはOKだよね？

それで次回はもう一つオリジナル話を書きます。内容としては、あの一角獣が出ます。果たしてその正体は！？（だいたいわかるかな……）

それではまた次回の更新で！

やっとだよ！PV25万突破特別編！シャルと剣斗の出会い（前書き）

衝動的に書いてみました。

## やっとだよ！PV25万突破特別編！シャルと剣斗の出会い

私が彼と会ったのは中学1年の夏休みだった。

その日、私は夕御飯の材料を買いに行こうと家を出ると、彼はそこにいた。彼はボロボロの体でうつ伏せで倒れていた。見た感じでは私と年は変わらなそうだった。けど彼には周りの中学生とは違っていた。

「これって確か、刀だよな」

腰に携えていた刀はどうやら本物みたいだった。この子をどうすればいいのだろう。やっぱり警察に届けるべきなのか、お母さんに相談するべきか……。

「うっ……」

「！。。君、大丈夫！？」

「……………」

彼は何も言わずにまた気絶してしまった。

私はどうするか悩んだ末、彼をとりあえず家に入れることにした。

これが正しい判断かはわからなかったけど、あのままにしとくのは間違っているのはわかっていた。

それに、お母さんならきつとなんとかしてくれると思っていたからだ。

（でも何でこの子はこんなにも怪我だらけなんだろう？フランス人には見えないけど……）

それがシャルロット・デュノアと神城剣斗の出会いだった。

しばらくしてお母さんが帰ってきた。

「ただいま」

「お母さん、おかえりなさい」

「あら、その子どつしたの？」

帰ってきたお母さんはベットに寝てる彼に気付く。

「それが、買い物に行こうとしたら倒れてたんだ」

「こんな幼い子が？」

お母さんは彼を不思議そうに眺めている。すると彼が目を覚ました。

「こんにちは」

「！？」



お母さんは笑顔で挨拶をするけど、彼は素早く立ち上がって身構える。でも、傷が痛むのかすぐにうずくまってしまふ。

「大丈夫よ。私たちは敵じゃないのよ」

「……………」

彼は半信半疑だったけど、観念したのかベットに座り込んだ。

「私はシエルビアよ。この娘は娘のシャルロット。あなたの名前は？」

「……………」

彼はうつむいて何も答えようとはしなかった。それでもお母さんは笑顔を崩さなかった。

「話せない事情でもあるの？」

「……………」

「話さないか。まあいいわ、あなたはしばらく家で預かるわね」

「！..?」

彼は首を左右に振って否定するがお母さんには意味がなかった。

「駄目よ、自分の事も話せない子を外に出すわけにはいきません」

「……………」

「もう否定しないわね。だったらあなたの名前も必要ね！」

お母さんは人差し指をあごにあてて考える。テーブルを一周して何か思い付いたのか、手を叩く。

「シャニ！うん、シャニがいいわ。あなたは今日からシャニ・デユノアよ！いいわね？」

「……………コクッ」

彼も勢いに負けてついうなずいてしまう。

こうして私たちの生活にシャニが加わった。

シャニが家族の一員になってから一週間が経とうとしているが、私ことシャルロットはシャニの事を全く理解できずにいた。あれからシャニは一度も口を聞かないし、こっちの質問には首を縦か横に振るだけだった。シャニについてわかってるのは、無口・大食い・何故か刀を使わない・家事は出来る。と4つだけだ。その中でも大食いに関しては本当に驚かされた。最初は生き倒れていたからお腹が減っているのも納得できたけど、それから毎回3人前は

食べている。それでもお母さんは「作りがいがあるわ」と喜んで  
た。

他の人から見たらシャニを変な人と思うかもしれないけど、彼にも  
優しい所はたくさんあった。

それはシャニと買い物に行った時だった。

その日はお母さんが

「シャニは日本人だからお米が恋しいでしょ」

と言ったので買いに行くことになったけど。

「シャニってやっぱりお米好き？」

「……………コクッ」

「ふーん。買い物もよく行ってた？」

「……………コクッ」

「何か買いたいものある？」

「……………ブンブン」

「……………そう」

これである。一応会話は成り立ってはいるけどこれを無表情でされ  
るからシャニが何を考えてるが全くわからない。

あの状態からしてきつと心の傷があるのかもしれないけど、せめて  
私とお母さんにぐらいには心を許してほしかった。

そう思っているとシャニに肩を叩かれた。どうやらスーパーを通りすぎようとしていたらしい。

「もう着いてたんだ。ありがとうシャニ」

「……………」

「シャニはここで待つてる？」

「……………コクッ」

「わかった。じゃあ待っててね」

私はカゴをカートに乗せてスーパーに入った。スーパーはこの村には一つしかないのが必然的にスーパーの人とも顔見知りになる。スーパーの人も私がお母さんと二人暮らしと知っていて色々サービスをしてくれる。

「えっと、今日必要な物は」

ちなみに今日はシャニがカレーを作ってくれる。お母さんが何か作れると聞いたら、シャニは紙に『色々作れるけど個人的にはカレーが作りたい』と書いていたので作ってもらうことになった。

「じゃがいもに玉ねぎにんじん。あとはお米だけか。えっ、じゅ、10キロか」

棚にあった10キロのお米を持ってみたけど女の子にはかなりきつかった。何とかカートに入れてレジで会計を済ました。会計中にパートのおばちゃんから「カート持って帰るかい？」と言われたけど

自分だけカートを持って帰るのも悪いと思って丁重に断っておいた。

「お待たせ。帰ろっか！」

「……………コクッ」

私は右手にお米の袋、左手に他の材料が入った袋を持って歩いている。シャニは何も持たずに私の隣を歩いている。

正直持つて欲しいと思ったけど私から言うことはできずに歩いている。

（シャニも少しは持つてくれたっていいんじゃないかな？）

そんな不満を言えずに最初の信号で止まって一旦荷物を置く。まだ20メートルしかあるいてないのに、もう腕が痛くなってきた。信号を待つてる間に彼の顔を見たけど相変わらずの無表情で持つてくれそうに無かった。

（まだ家まで1キロはあるのにな……。あ、もう青になっちゃった）

私は重い荷物を持つと手を下ろす。けどそこに荷物は無くて、ただ手をグーパーしてるだけだった。

あれ？と思つて前を見るとシャニが重い荷物を軽々しく持つて歩いている。

（もしかして、さっき見てたのがバレたのかな？）

もしそうならみっともない。なんか自分が重たい荷物を持たしたみたいで恥ずかしくなってしまう。

「重くない？」

「……………ブンブン」

「一つ持とうか？」

「……………ブンブン」

「本当に大丈夫？」

「……………コクッ」

そう頷かれても、私だけ手ぶらなのもやだなあ……………。そうだ！

私はシャニに近づくと軽い方の荷物を奪い取ると空いた手でシャニの手を握った。シャニは手を握られると顔を真っ赤にする。

「照れてるの？」

「……………コクッ」

「離してほしい？」

「……………コクッコクッ」

「だ〜め！家に着くまでは離さないよ」

「……………」

それからシャニは黙って私の質問にも答えようとしなかった。でも手だけはしっかり握っててくれた。

初めて握った男の手は私やお母さんより大きくて暖かかったのはよく覚えていた。

シャニがうちに来た話は瞬く間に広がり、周りの男子から格好のいじられ対象になった。

「おいシャルロット！今日もそんな奴といるのかよ！」

「家族なんだから当たり前じゃん」

私にとってはシャニは本当の家族だと思ってる。だけど、バカな男子には効果はなかった。

「嘘つけ、本当は彼氏なんだろう？」

「ち、違うよ！」

さくらんぼのように真っ赤にしながら否定する私を見て男子たちがゲラゲラと笑ってる。シャニはいつもの無表情で男子たちを見ていた。

「ムキになってやんの！」

「ムキになってないよ！」

私の必死の訴えにも男子は一層愉快そうに笑ってる。

なんで男子ってこんなにバカなんだろう。ちょっとした事で直ぐに騒ぎ出すくせにしつこいんだもん。

男子のバカっぷりにため息をついてるとシャニが私の手を取って家に帰ろうとしてる。

「おい待てよ変人！」

男子たちはシャニに向かって石を投げる。男子たちがシャニを毛嫌いしてるのはシャルロットと仲良くしてるからだ。

学校の男子たちの間ではシャルロットはマドンナ的存在である。本人は気づいてないが密かにファンクラブがあるほどだ。そんな彼女がいきなり現れた見知らぬ奴と仲良くしてるのが非常に腹立たしかった。

石はシャニにあたるが気にせず歩く。

「いたっ」

後ろを振り向くとシャルロットが頭を押さえてる。投げていた石があたったようだ。

シャニは涙目のシャルロットを自分の前に歩かす。こうすればシャ



ルロットに石があたることはない。

「シヤニは痛くないの？」

「……………コクッ」

「でも、石があたるのは嫌だから走って帰ろっか」

「……………コクッ」

そう言っただけで走り出す二人。最初はシャルロットがシヤニの手を引っ張っていたがいつの間にか立場が逆になっていた。途中まで追っかけていた男子たちも諦めていた。

「やっと家に着いたね」

あれから10分ほどで二人は家に着いた。走ったせいか二人は汗だくである。

「汗かいちゃったね。先にシャワー浴びてもいい？」

「……………コクッ」

シャルロットは早速クローゼットから着替えを取り出しバスルームに入る。

（全く、何でこんなに男子にからまれちゃうんだろ。恨まれる事でもしたかな？）

この時はシャルロットも一夏や剣斗同様、唐変木だったのは言ってもない。

「スッキリした。シャニも入るってあれ？シャニ？」

シャワーを浴び終えたシャルロットはリビングに入ったけど、そこにシャニの姿はなかった。

奥の部屋に行くと、そこでシャニが眠ってる。しかし、悪夢でも見ているのか顔色が優れず、寝汗もひどかった。

「シャニ、大丈夫？」

シャルロットが起こそうと肩に触れた。その瞬間

ドンッ

一瞬何が起こったのかわからなかった。気付いた時にはシャルロットは床に押し倒され、首に冷たい物があたる。

それはシャニの刀でシャルロットの頸動脈を捉えている。

「シャニ……？」

「くっ……！？」

シャニは直ぐにシャルロットから離れる。

「……ごめん」

「え？」

まさかシャニが話した最初の言葉が謝罪とは思わなかったシャルロットは啞然としている。

シャニは刀を納めると自分の荷物をまとめる。

「迷惑かけた。もうここに居られない」

「だ、駄目だよ！」

シャルロットはシャニの腕につかまる。

「そんな傷じゃまた直ぐに倒れちゃうよ。とにかく傷が治るまでうちになよ。大丈夫、お母さんから許可はとってるから」

シャニの動きが一瞬止まるが、直ぐに荷物をまとめて玄関に向かう。

ガチャ

シャニが開けるよりも先にドアが開く。仕事が終わったシェルビアが帰ってきたのだ。

「ただいま。どうしたのシャニ？」

「今までお世話になりました。今から出ていきます」

「話せるようになったの？だったらお話ししよう！」

まるで話を聞いてないシエルビアはシャニをイスに座らせ紅茶を入れる。

「話を聞いてください。俺はここを出ていきます」

「せっかくお話できるんだから、今日は寝かせないわよ」

「俺はシャルロットに刀を突きつけた！一歩間違えてたらあんたの娘を殺してたんだよ！」

しびれを切らしたシャニが大声で言い放つ。シエルビアもこれには驚いてシャルロットを見る。顔色を見て悟ったであろうが、紅茶を入れてクッキーを取り出す。

「お母さん違うんだよ。シャニは……」

「シャルロット、シャニと二人つきりで話がしたいの。悪いけど部屋に戻ってて」

「……うん」

シャルロットはシエルビアの鋭い視線に反論できずにリビングを出ていく。

シエルビアは紅茶の入ったカップを持って、シャニの向かいのイスに座る。

シエルビアは紅茶を一口飲むと話を打ち出す。

「そうね、先ずは言い訳でも聞いてみましょうかね」

「言い訳なんてありません。俺はシャルロットを殺そうとした。それだけです」

「あら、そうなの。いさぎいいわね」

クッキーをポリポリと食べながらシエルビアは話し続ける。

「出ていくならあなたの名前を覚えてほしいな」

「これから出ていくのに名前を言う必要なんてないですよ」

素っ気なく答えると席を立ち上がるうとしたシャニをシエルビアは「もう少し待ちなさい」と言って座らせる。

「残念だけどあなたが出ていくのを許可できないわ」

「俺が憎くないんですか、娘を殺そうとしたんですよ。だったら出ていくのが当たり前でしょ」

「そうかもしれないわ。けどね、あなたが名前を覚えてくれない以上あなたはシャニ・デュノアなの。私の息子なのよ。だからシャニがやった事だって私から見れば兄妹喧嘩や反抗期と一緒なのよ」

「……………」

「勿論シャニにも色々事情があると思うわ。あの時の様子を見ればだいたいわかる。だけどそれは私たちも同じなの」

「同じ……………?」

「私はね、ある人の愛人なのよ。だからシャルロットは愛人の子なの」

シヤニは言葉を失っていた。でもそれだったらこの家に父がいなかったのも納得できた。

「シャルロットは一度も父親の顔を見てないわ。というよりは、あの子は知らないのよ自分が愛人の子というのを」

シエルビアも話したくなかっただろうに健気に話してくれる。

シエルビアの気持ちに心打たれたシヤニは自分の事を話始めた。

「俺は親に捨てられました。理由は俺が男だったからです。両親はどうしても女の子が欲しかったらしいです」

まるで呟くように言ったが、すべてシエルビアの耳に入っていた。

「そんな酷い親が……って私が言える立場じゃないよね」

「それはないです！シエルビアさんはシャルロットを大事にして、自分の身の上も話せない俺にも優しくしてくれました」

つい大声を出していたことに気づいてシヤニは咳払いをする。

「ふふふ、ありがとうね。そう言ってもらえると助かるわ」

「いえ、そんな……」

シヤニは照れくさいのかクッキーを次から次へと食べる。シエルビ

アはそれは満足そうに見つめてる。

「ちょっと話がそれたけど話を戻すわね。シャニだっていつかは日本に帰らなきゃいけない時があるわ。その時は私も止めないわよ。だけど、それ以外の理由では出て行ってほしくないのよ。シャルロットだってきつと悲しむと思うんだけど、どうかな？」

「そう言われても、俺も一週間後にはもう日本に帰らないといけないんですが……」

「だったらあと5日はいてくれないかな？せつかく話せるのよたくさん話しましょうよ！」

「……………わかりました。あと5日間お世話になります」

結局最期は根気負けという結果でシャニは残り5日間をシャルロットの家で過ごすことになった。

最後の5日間では俺の表情は豊かになった。よく笑うようになったし、今まで話せなかった分を取り戻すように喋った。けど、楽しい時間はあっという間に過ぎて別れの日がやって来た。

「いやだあ〜！シャニと別れたくない！」

現在三人は空港にいる。俺が日本に帰るということでシャルロットとシエルビアさんが見送りに来てくれたのだが、

「シャルロット、いつまでも駄々をこねないの」

「シャニが帰るなんて認めない！」

これである。今日の朝に俺が日本に帰ると話したらずつと泣いて、俺の腕に抱きついてる。

シャルロットがここまで泣いてくれるのは嬉しいと言えば嬉しいけど、まさかこんなに泣くとは思ってなくて俺とシエルビアさんも苦笑いである。

「シャニだって帰りたくないでしょ!？」

「そうだけど、俺だって学校があるし……」

パシッ

いきなりの平手打ち。なんで？

「もう知らない！シャニのバカ!!」

シャルロットはそのまま大泣きで屋上に行ってしまう。

「あらあら、シャニもとんだ災難ね」

「追いかけた方がいいですかね？」



「このままお別れするよりはいいと思っつわよ」

「ですよね……」

ため息混じりに屋上に上がると、そこではシャルロットが泣きながら俺が乗る飛行機を見ている。

「おい、シャルロット」

「……どうせもう帰るんでしょ？」

むう、言葉に棘があるな。これは慎重にいかなくては

「20分後にはフランスを飛び立つよ」

「……………(ぷいっ)」

無視されちゃってるよ。そんなに怒ることかな、別に一生の別れじゃないのに。

俺はシャルロットの隣に行くとフグみたいに膨れた頬を

ぷにぷに。ぷにぷに。ぷ、ぷにぷに。

「シャニー……」

「あはは！ごめんごめん。だけど、そんな湿気た顔すんなよ。笑顔で見送ってくれてもいいだろ？」

「だって、だって……」

また泣き出しそうになってるよこの娘は。

「そんな泣かれると心配で日本に帰れないじゃないか」

「だったらシャニが守ってよ」

そうきたか。シャルロットは頭の回転が早いな。  
さて、俺は何て返そうかな。

「だったら一つ約束事をしよう！」

「約束事？」

「ああ、俺はまだシャルロットを守るほど強くはない。だから、俺は日本で強くなってシャルロットやシエルビアさんを守る自信がいたら絶対戻ってくるよ！」

我ながらナイスアイデアだな。これだったらシャルロットも納得してくれるだろう。

「本当に戻ってくる？」

「当たり前だろ。俺は地元では約束だけは守る男で有名だったからな」

「何それ、変なの」

やっとシャルロットが笑ってくれたよ。いつ見ても癒されるんだよなあ。周りの男子が惚れるのも頷けるな。

「そろそろ飛行機の間だし、行くか」

「私はここで見送るよ。搭乗口まで行ったらまた泣きそうだから」

「泣いたっていいんじゃないか？それはそれで可愛いと思うけど」

「女の子の泣き顔が可愛いなんて、シャニ悪趣味だよ」

何？俺が悪趣味だと、それは心外だぞ。実際シャルロットの泣き顔は10人中10人が可愛いと答える自信があるのに……。

「とにかくシャニはもう行って！」

「わかったよ。じゃあまたな」

「うん！待ってるからね」

俺たちは握手をする。その手は初めて握った時と同じで小さかったけど、優しさで溢れていた。

搭乗口前で俺はシエルビアさんと最後の会話をしている。

「シエルビアさんには感謝してもしきれないですね」

「もう、最後くらいお母さんって呼んでも言いのよ」

「俺でもそれは照れくさいですよ。じゃあもう時間何で行きます」

「ちょっと待って」

「はい？」

振り返ろうとした時にはシエルビアさんに抱き締められていた。

「いつでも帰ってきていいのよ。私たちは家族なの、あなたが帰ってくるのを待ってるわ」

シエルビアさんの話を聞くと自然と心が落ち着いてくる。これが母性というものなのか、親が居なかった俺にはわからないけどそう思いたい。

「……剣斗」

「ん？」

「神城剣斗。それが俺の名前だよ、母さん」

最後のほうは小さい声で言ったが、それでもシエルビアさんは満足そうに笑ってる。

「剣斗……いい名前ね。日本に帰っても体には気を付けてね」

「はい……」

顔を上げるとシエルビアさんの目にも涙が溜まってる。だけどその顔はすっかり見えない。見たら泣いちゃいそうな気がしたからだ。

「シャニー！」

突然シャルロットの声が聞こえた。  
屋上で見送るんじゃないか。たっけ。

「何だよ、結局見送りに来てくれたのかよ」

話しかけるけどシャルロットは下を向いたままモジモジしている。  
お腹でも痛いのか。

「ちゅっ。これはお礼だからね！バイバイ！」

いきなり、いきなり頬にキスをしたシャルロットはそのまま走り去ってしまう。

「あらあら、シャルロットも大胆な子になったわね」

「……………」

未だフリーズ中の俺をシエルビアさんはキスされた頬をつねって正気に戻す。

「私も行くわね。あの子を一人にしとくのは危ないから」

「わかりました。またいつか……」

「またね」

シエルビアさんが去ったのを見て俺も飛行機に乗り込む。その間もずっとキス&つねられた頬を擦っていた。

これは剣斗がIS学園に入る前の話。

## 夏休みのプール(前書き)

今回はかなり短めです……。

## 夏休みのプール

「あぢい」

8月。周りではアブラゼミが元気よく鳴いている。

テレビでは今日の気温は37 を越えるらしい。本当なら寮の部屋で1日ごろごろしてるか、ISの訓練でもしていたいのだが、神城剣斗は今月できたばかりのウォーターワールドのゲート前にいる。

「日本の夏は好きだけど、こんなに暑いと嫌になるな」

ぶつくさ文句を言いながらカラコン型のディスプレイでISデータを見ていると、俺を呼び出した人物が現れた。

「お待たせ」

小さく手を振りながら、ツインテールの少女凰鈴音がやってくる。

「悪いわね、昨日急に呼び出して」

「別にいいよ、IS学園にいたら訓練してるぐらいだからな」

「だったらいいわ。さっ、早く入るわよ!」

鈴は張り切った様子で俺の手を引く。その目はとてもプールを楽しむ目でなく、何か獲物を狙ってる野獣の目であった。



「それで、何で俺を誘ったのかな？」

ウォーターワールド内の喫茶店にて、俺は鈴に疑問を投げ掛ける。

「大した理由じゃないわよ。アンタが暇だと思って誘ったのよ」

「それは無いな」

「え？」

俺はアイスコーヒーを飲みながら自分の仮説を話す。

「第一に、こんなデートスポットみたいな所にわざわざ俺を誘うわけがない。誘うなら一夏のはずだからな。仮に一夏に断られたなら他の女子を誘うはずだからな」

「まあたまには私だって他の男子ぐらい誘うわよ」

俺の仮説に反論してみせる鈴だが、その声が半音高くなってるのを聞き逃さなかった。

「差し詰め、俺を何かに利用するわけだろ？」

「そ、そんなわけ……」

鈴が慌てて否定しようとした瞬間、園内放送が響き渡った。

『では！本日のメインイベント！水上ペアタッグ障害物レースは午後1時より開始いたします！参加希望の方は12時までにはフロントへとお届け下さい！なお！優勝商品には沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！』

「……………」

「なるほどね〜」

やっと鈴が俺を誘ったわけがわかったよ。

つまり優勝商品の沖縄旅行を一夏と行きたくてその為に身体能力が高めの俺をパートナーとして誘ったんだな。

鈴の奴やりおるな……………。

「あはは……………。ごめん！今回だけは手を貸してくれない？優勝したら何か奢るからさ！」

手を合わせて頭を下げる鈴。

俺も一度は沖縄に行きたいけど、鈴には昔から中華店で飯を奢ってもらったしな。それにあの唐変木・一夏にも彼女を作ってもらいたいし……………。

「わかった。優勝できるかはわからないけど俺も全力で優勝を狙うよ」

「ありがとう！剣斗がいれば優勝はもらったも同然よ！」

ガシツと腕を交わした剣斗と鈴。こうして、第一回にして歴代最強ペアが結成された。

「さあ！第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

司会のお姉さんがそう叫んで大きくジャンプする。慣性によってジャンプする方向とは逆方向に豊満な胸が上下に揺れる。

胸が揺れるたびに男性陣が拍手と歓声が入り乱れる。

お前らはここに何を見に来たんだよ……。

レース参加者はほとんどが女子で、ぽつぽつと男がいる。本当は参加を希望した男はもつといたのだが、受付で『お前空気読めよ』という無言の笑みに退却していった。

それでもどうしても沖縄旅行に行きたいごく一部の男は無反応でゼッケンを受け取る。

俺はそんな無愛想じゃないから受付の人と同じ様に満面の笑みで返したら何故か苦笑していた。

「さあ、皆さん！参加者の女性陣に今一度大きな拍手を！」

女性の部分を強調しして言う司会のお姉さんの呼び掛けで、再度巻

き起こる拍手の嵐にも反応することなく剣斗と鈴は念入りにストレッチをしている。

「1、2、3、4。5、6、7、8……。それにしても鈴は臨海学校のときより体が引き締まってんな。一夏にでも見せつけるのか？」

「な、なに言ってるのよ！あたしは規則正しい生活を心掛けてるのよ！そう言うアンタも随分筋肉ついてんじゃない！」

「わかる？いやあ、毎朝トレーニングしてる成果が出てきてるな」ストレッチをしながら会話をしてる二人。剣斗はただこのレースを楽しもうとしてるが、鈴は意地でも沖縄旅行を手に入れようと気合い十分である。

「では！ルールの説明です！この巨大プールの中央の島へと渡り、フラッグを取ったペアが優勝です！なお、途中に設置された障害は基本的にペアでなければ抜けられないようになっていきます！」

剣斗と鈴は説明を聞きながらコースを見る。

（泳げたら楽なんだけど、それは無理そうだなあ）

（ショートカットは無理そうね。それにプールに落ちたら最初からか……）

コース造りに感心しながらも鈴にはこのレースに勝てる確信があった。

（参加者が一般人なら楽勝よ）

鈴は専用機を持つ国家代表候補生で、その身体能力は一般人を上回っている。

そんな彼女達が通う学園でも身体能力なら学園内一・二を争う剣斗がペアなら負ける気がしないのは必然的である。

「さあ！いよいよレースの開始です！位置について、よーい………」

パンツ！と乾いた競技用のピストル音が鳴り響き、参加者たちが一斉に駆け出す。

「いくわよ剣斗！」

「おう！」

開始直後の足払いをジャンプでかわし、一番目の島に着地する鈴。すぐにでも駆け抜こうとするが後ろで悲鳴が聞こえた。

「ぎゃあ！」

「剣斗！？」

剣斗は相手の足払いによって見事にプールに落ちてしまう。

「何やってんのよ！アンタは！」

「まさか妨害ありなんて聞いてなくてさ………」

鈴は一度戻って剣斗を持ち上げようとするが、剣斗の体重に鈴が耐えられず一緒にプールに落ちる。周りの観客も大爆笑である。

「本当にアンタは……邪魔しかできないの！」

「面目ない……」

今度こそはふたりとも復活するが、すでに第一グループは全体の半分を越えていた。

「ありやりや、もうあそこまで行ってるんだ」

「ありやりや、じゃないわよ！どうするのよ、これじゃあ優勝なんて出来ないじゃない！」

怒りしんとつ鈴は剣斗の肩を激しくゆさり、ISまで展開しようとしている。それだけで鈴がこのレースに賭けてるかがうかがえた。

「おいおい、こんな所でISなんかだすんじゃないよ。それにここからでも逆転優勝狙えるぜ！」

剣斗はさつき自分がやられた足払いで鈴の体制を崩し、お姫様だっこでキャッチして走り出す。

「いきなりなにすんのよ！」

「文句ばかり言うな！こっちは優勝するために全力なんだから、少しは集中させる！」

剣斗はとても水上の島を走ってるとは思えないスピードで島をわたっていく。

最初の妨害は三メートル程の壁であり、一人が土台となって登り、それからロープを下ろしてもう一人が登るといふものだが剣斗は鈴を抱えたまま一気に駆け上る。

続く第二、第三の障害もスピードを緩めることなく突き進む。

「こ、これはすごい！最初は漫才でもしてるかのようなペアでしたが、今は猛烈なスピードで追い上げています！」

司会の実況を聞いて、前をいく五組のペアが剣斗たちを妨害しようとむかってくる。

「あれはきついんじゃない？」

「そうだな、それじゃあ振り出しに戻ってもらおうか！」

立ち止まった剣斗は渾身の力で足を島にぶつける。すると、剣斗を中心に波が起る。周りの島は激しく揺れ、妨害しようとしたペアが次々と落ちてゆく。

「やるじゃん！」

「こんぐらいならIS学園の生徒だったら誰でもできるよ」

続く障害も難なくクリアしていき、ついにトップのペアが見えてきた。

まともな競争では勝てないと踏んだのか、トップのペアが反転して向かってきた。

「はん！一般人ごときがあたしたちに勝てるんでも」

「おおっと、トップの木崎・岸本ペア！ここで得意の格闘戦に持ち込みようです！」

「格闘戦？」

「ご存じふたりはオリンピックのメダリストです！プライベートでも仲が良いと言っただけあって、素晴らしいコンビネーションです！」

「メダリストって……。体、でかすぎでしょ！？」

男より筋肉もりもりのペアは、もの凄い怒号とともに向かってきた。

「どうしてオリンピックのメダリストが出てるのよ！」

「おもしろそうじゃん！鈴、ちょっと降ろすぞ！」

「は！？」

鈴を乱暴に降ろすと、剣斗は先程と同じ様に足を島にぶつける。島は激しく揺れるが、そこはオリンピックのメダリスト、バランス力はいっしょかりしていてプールに落ちることなく向かってくる。

「オリンピックのメダリストともなると、あんなにじゃ落ちてくれないか」

剣斗が楽しそうに笑っていると、木崎が剣斗の左手を掴む。剣斗は慌てることなく、自身が回転して片足立ちになった木崎の足を払ってプールに落とす。

「まず一人」



「よくも、よくも木崎をー！」

仲間をやられたことで怒りが爆発した岸本が更に力強い怒号とともに向かってくる。

岸本は得意の柔道技で剣斗をプールに落とそうとする。

「勢いよく向かってくるのはいいけど、あんたは知らないのか？柔は剛を制すってね！」

岸本が伸ばしてきた右手を剣斗は掴み、相手の勢いを利用した背負い投げをする。

どっぱーん。

高く伸びた水柱を、剣斗は満足そうに見つめる。

「まあ、それなりに楽しめたかな？」

背伸びをする剣斗。すると観客が騒ぎ出した。

「決まりました！可憐な高校生美少女が今！フラッグを見事取りました！沖縄旅行をゲットした彼女に大きな拍手をお願いします！」

剣斗がメダリストペアと戦ってる隙に鈴はさりげなくフラッグを手に出している。観客の拍手に笑顔で手を振りながら答える鈴。その顔は勝ち誇った顔である。

( やっぱ抜け目がねえな )

鈴のずる賢さを改めて教えられた剣斗だった。

## 緊張

「いい加減白状したらどうだ！」

「そうですねよ鈴さん！」

「むう……」

寮での夕食、剣斗を除いたいつもの面々で夕食を摂りながら、箒とセシリアは鈴を問い詰めていた。

「何故鈴さんが一夏さんを沖縄旅行に誘うんですか!？」

「別にいいでしょ! 偶々沖縄旅行にペアで行けるから誘っただけよ! 文句ある!？」

逆ギレした鈴も怒鳴り出す。

その原因でもある一夏は信太と談笑を交えている。

「箒たちも何あんなに怒ってんだろうな。沖縄旅行ぐらいいいじゃないかな？」

「鈴と二人つきりが問題なんだよ」

「何でだ？」

相変わらずの唐変人っぷりに、信太とシャルは苦笑いすら出来ない。

ラウラは何が問題なのかわかっておらず、マカロニサラダをモグモグと食べている。

「剣斗もそうだけど、一夏はそれ以上かもね」

「そうだな、一夏の考えには時々殺意さえ沸いてくるよ」

信太は食べているステーキにナイフを突き刺して告げる。

「そ、そういえば剣斗はどうしたんだ？」

話を続けても身を滅ぼすと考えた一夏は話題を変えた。

「なんか事務室から届け物があるから、それを受け取ってから来るってさ」

「届け物？何なんだ？」

「さあな。ほら、本人が来たんだから直接聞いてみる」

信太が食堂の入り口に視線をやると、気持ち悪いほどの笑みで剣斗がいた。

その手には何かが握られていた。

「どうしたんだ、何か良いことでもあったのか？」

「良いことなんてレベルじゃないよ！ビックニュースビックニュース！とりあえずこれ読んでみてよ」

興奮冷めやらぬ様子の剣斗が一夏に持っていたものを渡す。それは丁寧に折りたまれた手紙で、受け取った一夏が代表として読み上げた。

剣斗へ

久しぶりですね。こうして手紙を書くのは初めてなので、上手く書けるかは自信が無いですが、書いてみました。

今日こうして手紙を書いたのは剣斗に知らせておきたいことがあるからです。臨海学校の時に言ったように、ついこの間イタリアで国内大会がありました。剣斗の言葉を信じて奮闘した結果、ギリギリではありましたが優勝できてイタリア代表になりました。早速ですが、約束を守ってほしいと思っています。

ですが、わざわざイタリアに来てもらうことはありません。この手紙が届く1・2日後には日本でポルトガル代表と親善試合を行う予定です。手紙と一緒にみなさんの分のチケットも入っています。急で申し訳ないですが、是非みなさんに来てほしいです。

それでは日本で会える日を楽しみにしています。

「へえ、フランさん代表になれたんだ」

「そうなんだよ！すごいよなフランさん！尊敬を通り越して憧れに変わっちゃうよ」

「それはよかったね……」

シャルは何故か言葉をにがしている。よく見ると他のみんなも同じ様な反応をしている。

「どうしたんだよシャル。嬉しくないのか？」

「嬉しいに決まってるじゃん。うん、嬉しいなあ」

言葉ではそう言っているが、あまり感情がこもってない。

剣斗が不思議そうに見つめると信太が平然と答えた。

「俺たちは知ってたぞ」

「へ？」

「フランさんが国家代表になったのは三日前。その瞬間に代表候補生には知らされたし、次の日の新聞にも一面を飾ってたからな。十代での国家代表は珍しいからな」

「……………」

剣斗は固まっていた。

一夏が肩を揺らすと剣斗は小さく笑い出した。

「信太君、何で教えてくれなかったのかな？」

今にも斬りかかろうとする衝撃を抑えて、信太にきく。

その手には既に影打が握られている。

「教える義理が無い。第一、こんな常識を知らないのが信じられないんだよ」

プツン

剣斗の何かが 切れた

「テメエ！」

影打で斬りかかるが、信太は手に持っていたナイフで受け止める。

「お前は優しさが無いのか！？普通知つたなら教えてくれるだろ！」

「だから、新聞にも一面を飾ったって言ったろ！新聞も読まないのか！？」

「俺は新聞はテレビ欄とスポーツ欄しか読まない主義なんだよ！」

「小学生か、お前は！」

「うるせえ、今日こそ壊す！」

「やれるもんなら、やってみろ！」

ナイフと日本刀とは不釣り合いな気もするが、それども激しい攻防が続いている。

周りの生徒たちも、ふたりのやり取りには慣れっこで寧ろ「やれやれ！」「そこだ！」とあおっている。

こうなってしまったら、止められるのは一人しかいなかった。  
ばしん！ばしん！とリズムカルな出席簿アタックが炸裂した。

「毎回毎回、兄弟そろって何をやってるんだ！」

そこにはジャージ姿の千冬がいた。

「違つんですよ、これは信太が悪いんです！」

「お前、人に罪を擦り付けるなよ。始めに斬りかかったのはお前だ  
ろ！」

「うるさい！」

千冬が一瞥すると、ふたりは背筋を伸ばす。

「頼むからお前たちは問題を起こさないようにしてくれ。私に残業  
を増やすな」

「「精進します……」」

「わかったさっさと食事を済ませろ」

騒動を沈めた千冬は頭を抱えながら食堂を出て行って。

あれほど騒いでいたギャラリーも、いつの間にか黙々と箸を動かして  
いる。



出席簿アタックをもらったふたりは頭を擦りながら席についた。

「それでだ、親善試合が明日なんだけど、みんなは来れるか？」

剣斗は咳払いをして話を戻す。

「僕は大丈夫だよ」

「私も問題ない」

「俺も明日は暇だな」

「一応俺も」

シャルロット、ラウラ、一夏、信太の順で答える。

「あそこのバカトリオは大丈夫だよな？」

未だ言い合ってる三人。見た限りでは鈴対篝・セシリアみただけ  
ど。

「問題ない、一夏が行くならあいつ等も来る」

「それもそうだな」

「何で俺が来ると三人が来るんだよ」

今日二度目の唐変人発言に、神城兄弟は信太の食べ掛けのステーキ  
にお互いの凶器を突き刺す。

「それ以上言うなら…殺すぞ?」

先程より二倍以上の威圧感を感じた一夏は、それから一言も話さなかった。

(どろじょうぶ、どろじょうぶ)

親善試合当日。

フランはイタリア側の選手控え室で、どうにか落ち着こうと試行錯誤していた。

いつもいるカルラさんはもう観客席に向かっていて、ここには私しかない。

とりあえず、近くにあった500mlペットボトルの水を一気に飲み干す。これで四本目で、量にして2Lである。ISに乗る前に飲み物を大量に飲むのはよくないが、こうでもしないと落ち着かない。けど、飲み終わるとまた不安で一杯になる。

(どろじょうぶ、負けたら、またカルラさんに怒られる)

今回の相手であるダルシアさんは長年ポーランド代表を務める、ベテラン操縦者である。使用するISは第二世代型のレオパルド、近接特化型だ。

私のジャッジメントは実弾兵器を多く持つ遠距離型ISだ。相性としてはこちらが有利だ。

私も負ける気はしなかった。昨日までは

実際にアリーナに来てみると、イタリアから来たと思われる多くの人たち。それに負けにくいくらいポーランドの人たち。

今まで挑戦者として挑んできた私は、その熱気に吞まれてしまった。一度吞まれてしまうと、自信も不安に変わってしまう。

剣斗との別れ際にもらったシュークリームが入ってた箱で折った鶴を見てると落ち着くはずなのに、剣斗が来てる前では負けられないと余計プレッシャーがかかってしまう。

コンコンッ

「フラン様」

「ひゃいつ!?!」

突然呼ばれて、声が裏返ってしまった。

恥ずかしくなって、5本目のペットボトルを飲み干す。

「どこかされましたか?」

「いえ、何でもないです。それより何ですか？」

「はい、試合前に面会希望者がいるんですが」

面会希望者、誰だろう？

「通して大丈夫です」

「わかりました。どうぞ、入っていいですよ」

係りの女性は少し不機嫌気味にその人を入れた。

「やあ、元気にしてますか？」

なんと、面会希望者は剣斗だった。

（ななな、何で剣斗が来てるの！？確かにチケットは渡したよ！来てくれるって思ってたよ！だけど試合前に来るなんて、普通考えないよ！）

完全にパニック状態に陥ってる私は剣斗と会話をしようとするが、出てくる言葉は「あ、や、ぬ………」というしどろもろの音だった。そして、六本目のペットボトルも飲み干した

「どうしたんですか、やっぱりフランさんも緊張してるんですか？」

「緊張！？何で！」

「だってあれを見ればねえ」

剣斗は空になつて六本のペットボトルを見る。私は脱兎のごときスピードでペットボトルをゴミ箱に投げ捨てる。

「のどが渴いてただけだ！飲んだらいけないのか！？」

「それはいいですけど、3Lは飲み過ぎじゃないですか？」

「もう！そうだよ、緊張してますよ！観客の多さにびびってますよ！情けないですね！代表失格ですね！！」

もう、自分でも何を言ってるのわからなかった。

八つ当たりするなんて最低だって頭ではわかっている。でも、頭ではわかつてても口は止まらなかった。

「落ち着いてくださいよ。そんなんで代表失格なわけないじゃないですか」

「そ、そうか」

「そうでしょ。でも驚きましたよ」

「何がだ？」

「フランさんも緊張するんですね」

「当たり前だろ！私は機械じゃないぞ！」

飲んでいたペットボトルを突きつけて剣斗に歩み寄る。

「あれ？違うんですか？」

「私は人間だ！」

「そのペットボトルの中身って燃料じゃないんですか！？」

「ただの水だ！」

「おかしいな。仕入れた情報に間違いは無いはずなのに」

「その情報源はどこだ！」

完全に調子を狂わされてるフラン。

普段の彼女を知ってる人がこのやり取りを見ると、きっと衝撃のあまりにその場に立ちすくしてしまうだろう。いつも冷静沈着な彼女が人の話にツツコムだから無理もない。

「冗談ですよ」

「わかっていたが、つい突っ込んでしまった。おまけに、気疲れしてしまった」

「普段そんな事しないですもんね。そのかわり、緊張もある程度和らいだんじゃないですか？」

「あっ」

確かに、剣斗と話してる時はツツコムことに気を使って試合なんてすっかり忘れていた。

フランが剣斗を見ると、剣斗は満足そうに笑ってる。きつとうまくいったぜとでも思っているのだろう。

「緊張なんてそんなもんですよ。他の事に集中してれば忘れてるもんですよ。それに、緊張なんてしてたら無駄に筋肉が縮まって実力が出せなくて損しますよ」

「そうだけど、実際にアリーナに違ってくるよ。観客から送られる声援は試合に集中してても聞こえてしまうよ」

考えただけで緊張してきたフランは7本目のペットボトルに手をつけようとす。しかし、それより先に剣斗がフランの手を掴んでいた。

「だったら、俺の取って置きを貸してあげますよ」

「取って置き？」

剣斗はポケットから星形のペンダントを取り出す。それをフランの首に付ける。

「これは？」

「俺に生きる意味をくれた大切な人のたった一つの形見かな」

形見。それだけでこれがどれだけ大切な物かわかる。

「こんな大切な物いいよ！ペンダントなんて付けてたら試合中に壊れる可能性だってあるし」

「別に壊れたって大丈夫ですよ」

「大丈夫って、たった一つの形見じゃないの!？」

「形見ですけど、その人の事はしっかりケジメをつけたんでそこま  
で大切な物じゃないんですよ」

これは剣斗の本心だった。

大切な人とは戦争で亡くなったナタージャの事で、剣斗は罪悪感か  
ら唯一の形見であるペンダントを手放せなかった。しかし、長年苦  
しめられた罪悪感からもやっと解放された剣斗は寧ろこれを捨てよ  
うと思っていた。

「けど……」

「フラン様。試合の時間です」

係りの人が呼びに来た。

「はい、今行きます。あれ?このペンダント取れない」

ペンダントのチェーンはいくつも輪が列を成して繋がっていて、  
どうやって取ればいいかわからなかった。

「それ、知恵の輪みたいなもんだから、すぐには取れないとおも  
いますよ」

「だったら取ってよ」



「試合に勝ったから取ってあげますよ」

今度はドヤ顔しながらペットボトルの水を飲み干す。

剣斗の頑固さは短い付き合いのフランでも充分わかっていたので、諦めて上に着ていた服を脱いでISスーツ姿になる。

「頑張つて勝ってくださいね」

「勝ったらペンダント取つてよね」

「わかってますよ」

他人事のように返事をする剣斗に苦笑いしか出ないフランは係りの人に誘導されてアリーナに向かう。

「あの人は彼氏ですか？」

「えっ！」

係りの人の突然の言葉に私は思わず足を止めてしまう。

係りの人でも剣斗を連れてきた人とは別の女性。赤髪の彼女は私の試合の時には何かとサポートしてくれる、いわばマネージャーみた

いなものだ。

名前はミユール、今年23歳で彼氏募集中。

「違いますよ！剣斗とはそういった関係では」

「なんだ、ただの片思いかあ」

ミユールに心を見透かされて、私は何も言えなくなってしまつ。

「フランも恋をするようになったのね」

ミユールは立ち止まっていた私に歩くよう促して話を続ける。ちなみに二人っきりの時は私を呼び捨てにする。私としてもその方が落ち着くから気にはしてない。

「駄目ですか？」

「そんな事ないわよ。どう、恋っていいでしょ？」

「はい……」

照れ臭くて私はうつ向きながら答える。

正直前まで恋なんていらぬ感情と教えられたし、私もそれに疑問を感じなかった。けど今は違う。少しでも剣斗に振り向いてもらうために毎日恋愛ドラマを見て勉強してる。カルラさんは下らないからやめると言うが、これだけは引き下がるわけにはいかなかった。

「それはよかつたわ。愛しの彼をゲットするように頑張りなさい」

「ライバルは強敵ですけど頑張ります」

「まあ、それはいばらの道ね」

にっこりと柔らかな笑み。それは男女問わず綺麗と思え、大人らしさをかもし出している。

私もあんな笑みが出来たらいいと思うが、それはまだ当分先になりそうだ。

「わかってる。その為にもこの試合は負けられない」

「大丈夫よ。フランなら勝てるわよ」

「ミュールもプレッシャーをかけないでよ」

「私はいつでもフランの勝利を信じてたわよ。例え相手が格上で周りが勝てないと思っけていても私は信じてた。まっ、当然負けることもたくさんあつたけどね」

「なんですか今さら」

私は更に照れ臭くなって、ミュールの前をすたすたと歩いていく。

私の気持ちを察してか、ミュールはまた微笑んだ。

緊張（後書き）

フランらしさが段々欠けてきた気がする……

親善試合（前書き）

やっと書けた……

## 親善試合

「みなさん、長らくお待たせしました！これよりポーランドとイタリアの親善試合を行います！」

『わあー！！』

アナウンスの声に観客のボルテージはMAXになる。

控え室から戻ってきた剣斗は信太の隣の席に座るのだが。

「また随分といい席を用意してくれたな」

剣斗たちが座る席はいわゆるVIP席というもので、周りにはテレビでも見たことがある人たちがいる。

「さっき調べたら、この席ひとつ50万円だったよ」

「50万って、うーい棒何本買える？」

「約5万本だな」

微妙な例えをしながらも、この席のありがたみを噛み締めながら剣斗と信太はアリーナを見つめている。

「それでは選手の入場です！まずは長年代表を務めるこの方！今日も得意の格闘戦に持ち込めるのか！？ポーランド代表・ダルシア選手です！」

颯爽とアリーナに現れるダルシア。ポーランドからの声援にも笑顔で返している。

長年代表を務めるだけあって、その表情には余裕が感じられる。

「続いてはこの方！若干10代にして代表に登り詰めた、若き天才操縦者！今日はどんな戦術を見せてくれるのでしょうか！？イタリア代表・フラン選手です！」

こちらも颯爽と現れるフラン。観客の黄色い声援に笑顔で答えているが、表情が固いのがよくわかる。

ダルシアのはマシユマロほど柔らかい笑顔なら、フランのはコンクリートほど固い笑顔だった。

「どうした、緊張してんのか小娘」

見かねたダルシアが声をかける。こんがり焼いたような褐色の肌と、白い歯が見事に対比していて同姓でさえ、かつこよく見えてしまう。

「懐かしいねえ。私も最初はそうだったなあ」

「そうなんですか!？」

「みんな最初は同じさ。過剰な期待と不安で押し潰されそうになるんだよなあ」

ダルシアは腕組みをして、懐かしむようにつなずきながら話す。

「だけど安心しな。試合が始まっちゃうえばそんな事忘れちゃうよ」

「そうなんですか？」

疑り深そうにダルシアを見つめるフラン。

「本当だよ、それを今から」

ダルシアはトンファアを呼び出し、姿勢を低くする。

「それでは始めてください！」

「証明してやるよ！！」

開始の合図と共に、ダルシアは瞬時加速でフランに近づく。

いかなりの特効に戸惑うフラン。とっさに地面にミサイルを撃ち弾幕をまり、風圧を利用して空へと上昇する。

「気を抜いたらやられるぜ！」

「わかっています」

ダルシアも空へと上昇する。距離はまだだいぶあるが、武器は変えずにトンファアを持つ。

フランが事前に調べた通りだった。ダルシアのレオパルドは武器がトンファアと薙刀の近接武器のみである。戦術としては白式や初期設定のホープ同様、相手の射撃を避けて防いで、接近戦で一気に勝負をつけるものだ。

なので、おのずとこちらの戦法も決まってくる。圧倒的火力差で相手に得意な戦い方をさせない！



フランは向かってくるダルシアにアサルトライフルとガトリングガンで狙い撃つ。

「うんうん、やっぱりそうくるわな」

ダルシアは降り注ぐ弾丸の雨を鼻歌混じりにかわしてみせる。

「くっ……！」

一定の距離が縮まったのを確認して、フランはアサルトライフルをしまい、通常サイズのショットガンを呼び出す。

「遅い遅い！」

トンファーから飛び出した鎖がショットガンとガトリングを固定する。そのまま自分の元に手繰り寄せ、トンファーの連続打撃を浴びせる。

(このままだと、負ける！)

フランは自分の事などお構い無しにミサイルを撃つ。ダルシアは鎖を元に戻して、後ろに下がる。ミサイルはフランの足元に当たり、爆風がフランを呑み込む。

「おい、大丈夫か？」

感情が一切こもってない言葉をかけると、フランは後退する形で爆風から現れる。

だけど、ダメージはずいぶん喰らっている。持っていたショットガンとガトリングガンは爆風の熱でひしゃげてしまい使い物にならなくなっている。

「おう、無事だったか」

「はあはあ……」

「近接特化型に対する対策。そして、アサルトライフルからショットガンに変えたり、鎖で捕まったときの対処、どれも基本的に忠実に100点満点だ。でも私にはそれが仇になるんだぜ」

フランはダルシアの言ってる意図が理解できず、とりあえず使い物ならないショットガンとガトリングガンを取り、アサルトライフルを腕に投げ捨て、アサルトライフルを呼び出す。それを見てダルシアは滑稽そうに笑う。

「その選択は間違いだぜ」

「!?!」

フランは今の選択が最善策と思っていたので何が間違っていたのかわからなかった。どうしたらいいのかわからず、ダルシアの言ってることははったりだと割り切ったフランはアサルトライフルを腕にむけて撃つ。

「その選択は間違いだと言ってるのに、素直に受け止めるよ」

ダルシアは迫ってくる弾丸を避けようとはせず、自身に当たると思われる弾丸だけをトンファーで弾き落とす。

フランは足を止めようとミサイルをダルシアの三步先に撃つ。

「そうくるのはわかってるぜ」

ダルシアは瞬時加速を使って、ミサイルが地面に着弾するよりも速くミサイルの間を通り抜け自分の間合いにフランを入れた。

フランを含め、誰もが今度はダルシア十八番の接近戦でかたがついたと思った。しかし、ダルシアはトンファアの打撃ではなく、フランの腕を掴んでアリーナ端まで投げる。飛ばされながらも八基のスラストを吹かして体制を立て直す。「もう一回言っぞ。基本に忠実なお前の戦い方だと、私には不向きなんだよ」

「どうしてですか？」

敵に聞くのは恥だとわかっていたが、聞かすにはいらなかった。何故基本に忠実なのがいけないのかフランには理解できなかった。

「私だって伊達に何年もこのスタイルでポーランド代表を務めてないぜ。その間には当然私の対策も沢山組まれたわ。それでも私は負けなかった。そしたらいつしかわかるようになったんだよ、相手の武装を見るだけで何処でどの武器を使うかな」

「……………」

フランは絶句していたが、あることに納得していた。実はダルシアのデータには一つ気になる点があった。デビューした当時は遠距離型のISによく負けていたダルシアがここ最近では逆に遠距離型のISに負けなくなっていたのだ。これは知識だけでどうにか出来るものではない。ダルシアとレオパルドのように数えきれないほどの

経験が生んだ一つの能力と言ってもよかった。

「これでもお前は基本に沿って戦うか？」

ダルシアが睨みを効かす。それは千冬と引きをとらない程威圧感たっぷりだった。

フランの体が小刻みに震え始める。それは目の前にいる強者に対する恐怖からくるものだった。

「フランは完璧に潰されたな」

VIP席で試合を見るラウラが目を細める。

「無理無いわよ。フランさんは基本に忠実だからこそ力を発揮できるのよ」

「それを逆手に取られてはとうしようもありませんわ」

ダルシアの説明はこちらにも聞こえている。それを聞いた瞬間、ポランド側の人からは安堵の表情が、イタリア側の人からは落胆の表情が伺える。

「剣斗と信太はどう思う？」

シャルロットがふたりに話を振る。一夏と篤は初めて見る国家代表の試合に口をあぐりとしている。

「状況から見ればフランさんの勝つ確率はかなり低いだろうな。ガトリングがなくなったのは痛いな、あれがあればまだ何とかなっただかもしれないがな」

冷静に戦況を見極めてる。信太に対して剣斗の答えは至って単純だった。

「フランさんが勝つよ。絶対に」

瞬間 剣斗は左側から視線を浴びる。

今回、剣斗たちが座っている席はポーランド側の首脳陣とイタリヤ側の首脳陣の丁度壁になるようにに座っている。剣斗はその壁の中でも一番左、ポーランドの首脳陣に一番近いところに座っている。なので剣斗の言ったことはポーランドの首脳陣に筒抜けだった。

「何でそう思えるの？」

せめてポーランドの首脳陣が納得できるような説明をしていることを期待したシャルロットだったが、剣斗の理由も至って単純だった。

「戦いは何時だって強い者が勝つんだよ。フランさんはあの人より強い、だからフランさんが絶対勝つんだよ」

更に非難の視線を浴びる剣斗だったが、それでも考えは変わらず楽しそうにアリーナのフランを見ていた。

（私は…この人に勝てない……）

私の頭の中に絶望がよぎる。

フランはいつも基本の繰り返しをしてきた。基本が一番だと思ってきたし、それが結果となってイタリア国家代表になれたのだ。だけど、ダルシアには自分が信じてきた基本は意味がない、寧ろ自分が不利になってしまう。

（経験が…足りなかったな）

よくよく考えてみればわかることだ。自分には経験があまりにも少なかった。それ故に基本に頼ってしまった。今回の戦いでは少ない時間だったが得るものが多かった。

（わざわざ応援に来てくれた人に申し訳ないけど、これ以上不様な姿は見せられないわ）

私は降参の証である両手をあげようとする。

キラッ

何か太陽の光を反射してフランの目を眩ます。何かと首もとに手を当てると、剣斗が試合前に渡してくれたペンダントがあった。

（剣斗……）

私はVIP席の方を見る。自分があげたチケットなので彼を直ぐに

見つけられた。彼はこちらを見ていて、私が見ているのに気づくと笑顔で手を振ってくれる。

もし私がここで降参したら、彼は何と言ってくれるだろう。マスコミなら何と言われても気にしない。けど、剣斗に情けないなど言われたら次の日には代表を降りているだろう。

勿論彼がそんな事を言うとは思っていない。彼なら「お疲れ様」や「次は勝てますよ」など、労いの言葉をかけてくれるだろう。

(でも私はそれを望んでいるのか?)

そんな筈はない。最低でもこんな惨めな姿を見せるために彼との約束を果たそうとしたのではない。

私は上げかけていた手を降ろす。その手には短剣と大型ショットガンが握られてる。

「まだ諦めるわけにはいけない!」

瞬時加速で一気にダルシアに接近する。

「そうだ、それでいい」

ダルシアはトンファーを戻して、薙刀を呼び出す。薙刀の長さを活かし、フランが間合いに入るよりも先に横に振るう。

(基本なら、ここは避けるか短剣で受け止めてショットガンによる反撃なんだけど、ここはあえて!)

フランは薙刀の動きを見極め、右足を当てる。

ドゴオオン！

瞬間にミサイルを発射する。こちらのダメージの方が大きいが確実に相手の武器を壊すことはできる。

ダルシアがトンプアーを呼び出す前に今度はフランが間合いを0にする。

「はあああー！」

短剣をがむしゃら振るう。基本に忠実な彼女からは信じられかもしれないが、それがダルシアを追い込んでいた。

「それだけじゃ私は倒せないよ！」

ダルシアはその場で逆立ちをし、足で短剣を持つ手を挟む。そのまま遠心力をフルに使って地面に叩き付ける。

「ぐふっ……！」

エネルギーはそこまで減らなかったが、衝撃は体中に行き渡り一瞬意識が遠退く。自分に激を入れて意識を取り戻すと一旦距離を置いた。

「いいねいいね。すごく良いぜフラン！」

ダルシアは豪快に笑っている。その間にもちゃっかりトンプアーを呼び出しているあたり、試合に集中はしている。

「わかっただろフラン、国家代表になるまでだったら基本は大事さ。だけど、国家代表になったら基本をどのように自分の個性にするか



「が大事なんだよ」

「……………」

「私は馬鹿だからさ、近接特化の個性になっちまったが結構気に入ってるんだ」

「そう、ですか……………」

「何だよフラン、関心が無いのか？」

「いえ、そんな事ありません」

フランは体を使って全力で否定する。

「そうかそれはよかった。話を戻すぞ。私は最近では国家代表になった奴とは出来るだけ最初に試合をするようにしている。代表になったばっかの奴は大概フランみたいに基本にこだわっちまうんだよ。それで私に負けるのがほとんどだった。だがフランは違った！」

ダルシアの声が荒くなる。

「私の威圧にも臆することなく、基本を投げ捨てて自分の個性を身に付けようとした。正に天才だよ、フラン」

ここでフランは気づく。ダルシアが途中からお前ではなく名前で呼んでる事に。

「だから私は世界で最初にお前を認める。ようこそ！」

国家代表という名の戦場へ」

「……………」

フランはまた体が震え始める。しかし、それは恐怖からくるものでなく、やっとスタートラインに立てた事による喜びと武者震いだっ  
た。

「ここからが本当の国家代表の試合だ！いくぞフラン！」

「はい！」

ふたりは同時に瞬時加速で距離をつめる

その時

ビュンツ…ドオオン！

上空から高エネルギー波がアリーナのシールドを突き破り、ふたり  
の間に衝突する。その場には巨大なクレーターができ、衝撃で吹き  
飛ばされてしまう。

「きやあぁー！」

「くっ、一体誰が！？」

ふたりがクレーターの中心に目をやると、そこには誰もいない。  
かわりに上空からエネルギー波と同じ軌道でISが降りてくる。

「誰だお前は！」

ダルシアさえ見たことの無いIS。その操縦者である赤髪の女性は冷たい視線をふたりに送りながら答える。

「私はハリス。愛機、インパルスと共にイタリア代表の実力を測り、その機体を奪いに来た」

## 親善試合（後書き）

いかがですか？

最近ますます書く速度が遅くなっています。オリジナルなので予想はしてましたがそれでも遅いです。

だったらやめるよと思うかもしれませんが、僕はオリジナルの話を書くのが好きなので、この更新速度で勘弁してください。

今度は水曜ぐらいに更新出来たらいいなあ……

それではまた次回の更新で！

どの立場(前書き)

久しぶりに速く書けた……

## どの立場

「きゃああああ！」

誰かが悲鳴をあげる。アリーナに突如現れた、謎の乱入者にスタツフたちもどう対応したらいいかわからず、パニックは瞬く間に客席に広がっていく。

「みなさん、落ち着いてください！慌てずに避難してください！」

そんな中でも取り乱すことなく、IS学園の専用機持ちたちは観客を誘導している。

「非常口はこちらですわ！」

「ちょっとアンタ！急ぐ気持ちはわかるけど、それはみんな同じなんだから列に戻りなさい！」

本当なら自分達もアリーナに向かって助けに行きたいと誰もが思っていたが、これだけの人前で無断にISを起動させたら、いくら緊急事態でも国際問題に発展してしまう。それに、アリーナには自分達よりも遥かに実力が上の国家代表がふたりもいるのだ。きっと直ぐに侵入者を捕らえてくれると信じて誘導していた。

順調に観客を避難させる。しかし、その場に剣斗と信太がいないことに誰も気づかなかつた。

「私の機体を……奪う？」

フランとダルシアは突如アリーナに現れた侵入者は敵だと判断して身構える。

「そつだ……」

ハリスと名乗る女性は冷たく答える。ハリスの目は明らかにふたりを見下していた。

「目的は何？誰の命令？」

「答える必要は……無い！」

ハリスは瞬時加速で距離を詰める。ハリスがインパルスと言っていたISは背中に大推力のスラスタと6枚の翼で、凄まじい機動をなしている。

フランはアサルトライフルを呼び出そうとするが、アサルトライフルが形成するよりも先にハリスはフランの懐に入っている。

「そんなものか？」

「っ……！」

ハリスはビームライフルの銃口をフランの腹に押し当てる。フランの顔が青ざめる。それを見てハリスは不適に笑ってトリガーを引く。

「させるかよお！」

銃口からビームが出る前に、トンファーを持ったダルシアが右腕を叩く。

銃口の向きはずれて、ビームはフランの脇をすり抜ける形となる。

「もう一発！」

「ふっ……」

ダルシアはトンファーを回転させてぶつけようとする。ハリスは空いてる左手でビームサーベルを持ってトンファーを受け止める。

「ISを奪いに来たってことは、お前亡国機業の人間だな！」  
ファントム・タスク

「だったら何だ？」

「決まってる。お前を連行させてもらう！」

「馬鹿ね。私をお持ち帰りできるのは彼だけよ」

左手に力を入れ、トンファーを弾くとハリスは後ろに後退する。ダルシアも追撃せんと、ハリスを追う。ある程度の距離が開いたのを確認してハリスは呟く。



「シルエットチェンジ。フォースシルエットからソードシルエットへ」

するとインパルスの背中のスラスタールが消え、代わりにインパルスの全高程の長さを持つレーザー対艦刀・ルプスが二本と二つのビームブーメランの近接武器が備わっている。

更に機体カラーも白と青を基調にしていたが、白と赤が基調になっている。

「なにつ!?!」

インパルスの変わりようにダルシアは加速を緩めてしまう。

こうなると予想していたハリスは背中 of ビームブーメランを投げる。腰を無理矢理捻ってビームブーメランをかわすことはできたが、体ながら空きになってしまった。

「終りだ」

両手にルプスを持ち、ハリスは振り下ろす。刃がダルシアに届く寸前に、トンファーをクロスさせてルプスを止めるダルシア。

「そんな鉄の棒でルプスは止められないわ」

ハリスは体重をかけてトンファーを持ち手の部分で切り裂き、ダルシアの腕の装甲も深く切り裂いた。

「私を連行したければ、せめて彼より強くなることね」

二本のルプスを連結させ、ひとつの巨大な対艦刀・ルギアにする。ハリスは体重を乗せた回転斬りをダルシアに当てる。飛ばされたダルシアにハリスが腰のビームライフルを三発当てたところで、レオパルドのシールドエネルギーが尽きて機能停止状態になってしまう。

「ダルシアさん！……こおんのおお！」

冷静さを失ったフランが短剣を持って突っ込む。

「所詮はイタリア代表もこの程度か……」

ソードシルエットからフォースシルエットに切り換えたハリス。ただ直線的に向かってくるフランにビームライフルを撃つ。

ビームライフルはジャッジメントの装甲とシールドエネルギーを確実に削っている。しかし、フランの勢いは削られるどころか増していく。

「へえ……」

フランとの距離はほとんど無くなっても、ハリスが慌てることはない。

「シルエットチェンジ。フォースシルエットからブラストシルエットへ」

振り下ろされる短剣を後ろに下がって避ける。と同時にまたインパルスのスラスターが消え、今度は小型スラスターと二門の大型ビーム砲・ケルベロスが呼び出される。機体カラーは白と黒、そして緑を基調にしている。

呼び出したケルベロスを肩に担ぐように構える。一門で4つ、二門で8つのミサイルランチャーが顔をのぞかせる。ハリスは躊躇うことなくすべてのミサイルランチャーを発射する。ミサイルはすべて命中し、すさまじい爆音と共に爆風がフランを飲み込んだ。

（仕事完了。イタリア代表はたいした実力なし。後は、彼女のISを頂いただけね）

ジャツジメントを取り外すための作業に取り掛かるハリス。そのとき、たちこもる爆風の中からフランの手が伸びてハリスの腕をつかむ。

「あら…」

爆風あら現れたフランだが、すでに戦える状態ではなかった。装甲は今の爆風でほとんどが吹き飛ばされ、左胸のところに黄色に輝くコアが見えている。それでも彼女の目から闘気が消えることはなかった。

「これでも喰らえ!!」

すべての武器を失った彼女が手に持つのは、さっきの試合でフランが壊したダルシアの薙刀。その先端部分である。これ以上の好機は無いとわかってるフランは普段は全身に働いてるパワーアシストを右腕に集中させる。これによって、今のフランの拳は一発だけながらも盾殺し（シールド・ピアス）と同等の威力を持ったことになった。

(これならもう外さない！)

ガシユ…

「えっ…？」

フランは驚く。彼女の薙刀はハリスの胸元でとまっている。理由は一瞬でわかった。ハリスはフランよりも先にビームジャベリンをジャツジメントの胸装甲に深く突き刺してるからだ。

「ぐあ…！」

フランは小さな悲鳴を上げると、そのまま気を失ってしまう。ジャツジメントも姿を維持できずに強制解除されてしまう。

「やっと倒れたわね。全く、世話がやけ(まだ終わってないぜ)！？」

ハリスは声の主を探すよりも先に後ろへ回避行動をする。ハリスが後ろに下がったのと同時に、白い閃光がハリスがいた所を通り過ぎる。

「誰だ？」

ハリスがビームがやって来た方を見ると、サテライトを装着している剣斗がいる。

「トイレに行ってたらすごい音がしたから来て見たら、また随分とすごい光景だね」

剣斗はサテライトを戻し、ミラージュ・ウイングに換装する。一瞬だけ驚きの表情を見せるハリス。だがすぐに納得したようにうなづく。

「なるほどね。あなたが神城剣斗か」

ハリスもブラストシルエットから機動力強化用のフォースシルエットにシルエットチェンジ。

それを見て剣斗は驚きのあまり固まってしまふ。

（今のはどう見てもパッケージの高速換装だ。だけど、あれは束さんが考えて、実際に形にしたのは試験機のフューチャーだけのはずなのに…）

剣斗の動揺を見逃さず、ハリスはビームライフルを撃ちながら向かってくる。

（考えるのは後だ！まずはあいつを何とかする）

ダメージを負っていたとはいえ、国家代表ふたりをほとんど無傷で倒した実力者。当然剣斗では相手にならないことはわかっている。だから、今回の剣斗の目的は相手を倒すことでなく、出来る限りの時間稼ぎだ。

（これだけの問題だ。すぐにもIS学園に連絡が入るはずだ。そしたら一番近くにいる俺たちが対処することになる。その連絡があるまではみんなもISを使えないはずだ。だから、それまで意地でも持たせる！！）

すでに自分が無断でISを使用することは伏せておいて。剣斗は

目の前の敵に意識を集中する。

向かってくるビームライフルを上昇することでかわした剣斗は、連射性を重視した短い銃シエイブの引き金を引く。撃ち出された5つの弾はフォースインパルスのシールドで簡単に防がれてしまう。ならばと、接近しながら威力を重視した長い銃クラッシュを放つも、ハリスは左右に動くことで避ける。

「だったらこれならどうだ！」

剣斗はスラスタの出力を60%に抑えてハリス向かう。瞬時加速並みのスピードが出ているが、ハリスは慌てることなく両手にビームサーベルを持ち、タイミングをあわせて十字に斬る。しかし、斬った筈の剣斗は塵気楼のようにブレ消えてしまう。

「はずれだぜ！」

「!?!」

剣斗はハリスの後ろに現れ背中にふたつの銃口を当てる。

これが、ミラージュ・ウィングの一番の特徴である、高速変動運動による残像造りだ。最初は残像はその場にいる状態でしか造れなかったが、一夏・信太・シャル付き添いによるもう特訓のおかげで60%までなら動きながらも残像造れるようになった。

剣斗は連続で引き金を引く。しかし、今度は剣斗が撃った弾はハリスを通り抜け、ハリスも塵気楼のように消えた。

「そのぐらいなら、フォースインパルスでも出来るわよ」

声のするほうに振り向こうとしたときには、シェイブとクラッシュは切り裂かれていた。武器を失った剣斗は一度下がろうとするが、ハリスは剣斗の後ろに回りこみミラーージュ・ウィングを象徴する3つの大型ウィングスラスターも切り裂き剣斗の頭を掴んで急降下する。

地面にぶつかる前にハリスは剣斗から離れ、剣斗だけが地面に叩きつけられた。ハリスは追撃しようとしてビームライフルを構えるが、このまま終わったらつまらないと思い、剣斗が立ち上がるのを待つことにした。

数秒して剣斗が立ち上がる。頭に強い衝撃を受け、視界がぼやけるのを頭を振って正気に戻す。

（やばいな、手も足も出ないぞ。ミラーージュ・ウィングはもう使えないし、サテライトだとのめになるし、スカイ・キャッスルは武器が無いから時間稼ぎは無理だ…。やっぱトラスト・ナイトしかないか）  
深いため息をついた後、トラスト・ナイトに換装する剣斗。いつもどおりの5秒掛かるのろまなパッケージ換装だが、ハリスは攻撃できたはずなのにあえて攻撃はせずに剣斗がパッケージ換装するのをまじまじと見ている。

「待つてくつるなんて、随分優しいな」

本当は換装中に攻撃されなかったことに感謝しつつも強がってみせる。ハリスはそんな剣斗を見て情けないと言いたげな顔をする。

「あなたの換装は何故そんなに遅いの？仮にも同じコンセプトで造られたISなのに」

「ISは関係ねえよ。単なる俺の実力不足だよ」

「そう、だったら参考になるようにお手本を見せてあげるわ」

そう言うと、ハリスはフォースシルエットからソードシルエットに変わる。さっきはパツケージ換装自体に驚いていた剣斗だが、今度はその速さに驚いた。ハリスの換装にはシャルの高速切替ラビット・スイッチほどの速さは無いが、それでも2秒も掛からず換装が完了している。これなら戦闘中でも剣斗みたく相手の隙を作らなくても自由に換装できる。

「その速さ、うらやましいね」

「うらやましがする必要は無いわ。あなたはもう負けて、私にISを奪われるのよ」

ハリスはルプスを持って剣斗に接近する。剣斗はそうはさせまいとアピアダガーを向かわせるが、ハリスはビームライフで撃ち落とし、ギリギリまで近づいてきたものにはビームブーメランで相殺して突き進む。

これ以上は無駄と判断した剣斗はアピアダガーを伍の型にし、アピアを長刀に変えてハリスを迎え撃つ。

お互いの剣がぶつかり合い火花を散らす。押し合いではけりがつかず、ふたりは乱撃に移る。接近戦ならかなりの経験を積んでるはずの剣斗だが、ハリスの剣技は上をいつていた。

生身の戦いなら剣斗のほうが分があつたかもしれないが、これはISでの戦い。接近戦では生身での実践経験より、ISで生身と同じ動きが出来たほうが上である。結果として、唯一剣斗が得意とする接近戦でもこのように押されてしまう。

「本当は使いたくなかったんだけど、今ここで負けるよりはマシか  
！！」



剣斗は頭の中で指示を出す。するとカラコンは粒子となって散り、銀色の瞳が露になる。

カラコンを外した後の剣斗はハリスの斬撃を的確に見極め、徐々にまき返す。

「流石だな。アルカーを使うだけでこんなにも変わるのか」

「アルカー？」

聞きなれない言葉に剣斗が聞き返す。

「あなたの銀色の瞳のことよ。私たちが勝手に名づけさせてもらったわ。意味は銀色で捉える」

「いいねそれ。じゃあ今度からはそういわせてもらうよ！」

アピアを横に大きく振るう。ハリスはルプスを背中に納めると一旦後ろに下がる。

「逃がさねえ！！！」

剣斗はトラスト・ナイトの全武器を呼び出して瞬時加速。もしかしたら倒せるかも。そんな言葉が頭をちらつき始めたころ、ハリスが笑っていることに気づく。その笑みは獲物を罠にはめて喜ぶ猟師に似ていた。

ソードシルエットからブラストシルエットに換装したハリス。ケルベロスを今度は脇から抱えるように構える。そして

ビュユン！！

ケルベロスと肩部に装備された二門のレールガンが同時に発射される。ハリスが放った4つの閃光は剣斗の武器と翼のようなスラスタ―を飲み込む。スラスタ―を失った剣斗はゆっくりとスピードが落ち、やがて何かに当たって止まる。よく見るとそれはケルベロスのもうひとつの武器である。4連装ミサイルランチャー×2。

ズドドドドドドドン！！！！

爆音がアリーナに響きわたる。あまりの衝撃に剣斗は叫ぶことも出来なかった。絶対防御が発動したフューチャーのシールドエネルギーはあつという間に0になり、フューチャーは待機状態の騎士の盾と剣の形をしたペンダントに戻る。

「うつ…、くつ…」

何とか立ち上がるうとするが、体のダメージが大きく立ち上がれない。ハリスはISを解除することなくこちらに歩み寄ってくる。

「あなたはよく頑張ったけど運がなかったわね。悪いけどこのISも頂くわよ」

手にペンダントを乗せながら話すハリスに、怒りを感じながらも何も出来ない自分が悔しくてハリスを睨め付けることしか出来なかった。

「あなたにも彼ぐらいの実力があればよかったのに」

ハリスの言う彼とは誰なのかと疑問に思いながらも、考えるほど脳

は働いておらず、今にも気を失いそうになる。

ハリスがペンダントを乗せている手に力を入れようとしたとき

「やめるハリス！」

どこからか男の声が聞こえたと思ったら、二人の間に刀が突き刺さる。

ハリスは刀が飛び込んできたほうをにらめつけるが、相手が誰かわかった途端その表情が一気に明るくなり、散々出てきた彼の名を呼ぶ。

「アポロ！」

剣斗は薄れゆく意識の中でアポロと呼ばれる人物を見る。しかし、そこにいるのは、

（信太………？）

そこで剣斗の意識は飛んでしまった。

「アポロ！」

ハリスが彼の名を呼ぶが、彼は苦笑いしながら歩み寄る。

「今は神城信太だ」

「あらそうだったわね。ごめんなさい」

ハリスは詫び入れる様子も無く、いきなり信太に抱きつく。信太も懐かしく感じてつい抱き締めてしまいが、すぐに離れて本題に入った。

「ハリス今回はもう戻るんだ。これ以上は面倒な事になる」

そう言うと、ニコニコ笑顔だったハリスの表情が真剣なものに変わる。

「それはどの立場の人間として言ってるの？そっち（IS学園）として？それとも

こっち（亡国機業）側として？」

「……………」

黙り込む信太。重い口をゆっくり開く。

「どっちでもない、俺個人の意見だ」

「戻らないでISを奪うって言ったら？」

信太は突き刺さる真打をハリスの喉元に突きつける。

「そのときは、俺が相手をする」

「……。止めときましょ、今のアポロじゃ相手にならないわ。本気でやりあいたいならせめてISぐらいは本当の姿を見せるべきよ」

「生憎この姿のコイツも気に入ってんだよ」

「そうなの？まあいいわ。折角アポロが助言してくれてるんだし、今回はこのまま帰らせてもらうわ」

「そうだな、今ここでハリスが連行されるのは嫌だからな」

「心配してくれてるの？アポロなら私連行されてもいいのよ。寧ろ連行してほしいくらいよ」

茶目つ気たっぷりにウィンクするハリス。目からハートらしきものが飛んでくるが、信太はそれを手で弾き落とす。

「冗談はいらないから早く戻れ」

「冗談じゃないのにな……。そうだアポロ」

上空に上がるハリスは何か気付いて剣斗を見る。

「こつち（亡国機業）側の仲間として忠告しとくわ。どんな形にせよ、いつかは裏切らなくちゃいけないの。私たちが、その子たちをね」

言うこと言ったハリスは、最後に信太に投げキッスをして飛び去っ

た。

「裏切り……か……」

ハリスが去った後も、自分の置かれてる立場を考えて信太は動けなかった。

## どの立場（後書き）

いかがですか？

ここで報告があります。忘れてる方も多いでしょうが、ずいぶん前にやった剣斗の銀色の瞳に関するアンケートですが、僕の身勝手な要望に答えてくださった。パクメンさんフウ太さん。本当にありがとうございます！

今回はフウ太さんのアルカーをそのまま使わせてもらいました。また、ここまで報告が遅れたのは、出す場面が来たら報告しよう。と思ったらこんな遅くなってしまいました。

本当に申し訳ありませんでした。またいつか不意にアンケートをするかもしれませんが、是非答えてもらえたら幸いです。

それではまた次回の更新で！

## 頼み

「本当に申し訳なかった（ありませんでした）！」

「だから、もういいですって」

場所はアリーナのすぐ傍にある大学病院。時間はアリーナに乱入者が現れた一件から一時間半。病室のベッドの上で包帯を巻かれてるダルシアさんとフランさんが俺に頭を下げてくる。

「いくら専用機持ちとはいえ、国家代表がふたりもいながら一般人にケガをさせちまうなんて情けない！」

「ごめんね、私が招待しなければこんな事にはならなかったに」

またふたりは深々と頭を下げられる。

お互いの国では、誇りだ英雄だと言われてる国家代表が、かの有名なIS学園といえども高校生に頭を下げる様を国民が見たらきつと落胆するだろう。

「ふたりが謝る必要なんて無いですよ。逆に俺が礼を言わなくちゃいけません。ふたりがいなくちゃ今頃どうなってたか……」

あの時はかなり焦ったね。ハリスと名乗った乱入者が去った後で、千冬さんたちIS学園の人が来てくれたんだけど、ISの無断使用はまずかったんだよねまずかったんだよね。直ぐ様俺が連行されそうになったんだけど、ダルシアさんとフランさんが弁解してくれたから軽い事情聴取ですんだんだけどね。

でも国家代表ってすごいよね。一言言うだけで警察やIS学園の人



がペコペコしだすんだもん。勿論千冬さんは動じてなかったけど、何も言わないでくれた。

「あれはあいつらがおかしいんだよ。お前は私たちを助けに来たのにそれで連行されるなんて納得いかねえよ」

「助けと言っても、俺は歯が立たなかったですけどね」

「それは私だって変わらねえよ」

三人は違わないと笑いだすが、笑顔とは裏腹に心のなかは悔しさで一杯だった。

きつと国家代表のふたりは、戦闘中だったとしてもいきなり現れた乱入者にいいようにやられ、最悪ISも奪われかけたのは相当ショックだっただろう。

俺も同じ気持ちだ。いや、俺はふたりと違って万全の状態で挑んだ。ハリスが言っていたアルカーも使った。換装の間も攻撃してこなかった。遊ばれていたのにたいしたダメージを与えることが出来なかった。だけど不思議と俺の中には悔しさだけが残ってたわけではなかった。

ハリスの乗っていたISのインパルスはどうしてかわからないが、俺のフューチャーと同じ『パッケージの高速換装』をコンセプトとしている。俺の場合はフューチャーを使いこなしてないから、いまいちそのコンセプトの凄さがわからなかったが、今日初めてその凄さを身を持って知った。

特に最後のは圧巻だった。見た感じでは近接特化のソードシルエツトだったので一気に距離を詰めにいったら遠距離型のブラストシル

エツトに一瞬で換装して、至近距離でビームを喰らってしまった。ソードシルエツトだから接近しても大丈夫と油断してしまったのが今日一番の反省点だ。

でも同時に俺の中に希望も見えてきた。同じコンセプトで造られたISなら俺もあれぐらいはできるようになるのかもしれない。今日の出来事は悔しかったが、明日の弾みなる収穫も得た。けどその分俺の被害は甚大だった。

フューチャーはそこまでのダメージは喰らわなかったが、ミラージュ・ウイングとトラスト・ナイトは損傷が激しく、当分はスカイ・キャッスルとサテライトしか使えなくなった。でもこれなら訓練にも限りがあるので、シャルとフランスに行くには丁度いいかもしれないな。後でシャルに言っておこう。

でも、その前に

「ちょっと電話がしたいんで席を外しますね」

「おい、丁度いいからメアドでも交換しようぜ」

「だったら私もお願いします」

三人が携帯を取り出し、赤外線通信でデータを送り合う。

国家代表のメアドを貰えるなんて俺って運いいな。

赤外線通信を終えて俺は電話ができる場所まで向かう。その足は自然と早足となっていた。

剣斗が病室を出る30分前。観客を誘導していたみんなが病院の受付にいる。最初は剣斗と同じ病室にいたのだが、国家代表を前に居づらさを感じて逃げるようにして受付に居る。

「どつしたのだ一夏」

その中で一夏はずっと椅子に座って何か物思いにふけている。箒が買ってきた缶ジューズを渡す。

「いやな、俺はこのままでいいのかなって思ってたな」

「何がだ？」

「俺って今回何も出来なかったと思えてな」

「そんなことは無いだろ。一夏だって観客を避難させていたではないか」

箒の言うとおりだった。一夏は主に一般席にいた人たちを誘導していたが、しっかりと役割を果たしていた。そのことについては千冬も「よくやった」と珍しくほめていた。

「けど、剣斗はいち早くアリーナに向かって戦ったんだぜ。なのに俺はただ誘導していたと思うとな…」

「馬鹿者！」

突然箒が怒鳴る。場所は病院なので当然周りの視線を集めて、箒はすみませんと謝って咳払いをする。

「一夏、お前のやった事は誇らしいことなんだぞ。今回は偶々観客席に弾などは飛んでこなかったが、もしもの事だっであり得たんだぞ」

「そうだけど男としては……」

一夏がぐちぐち文句を言っていると、箒が立ち上がる。

「心がたるんでるからそんな考えになるんだ。学園に戻るぞ。そのたるんだ心を鍛え直し手やる」

「ちよっ、箒落ち着けよ」

納得しきれてない一夏を箒は手を引っ張って病院を出る。

「箒！アンタ何抜け駆けしようとしてるのよ！？」

「このセシリア・オルコットがふたりつきりにするとお思いですの！」

「ふたり共落ち着いて！ISの展開はマズイよ！」

ふたりを追う形で鈴とセシリアは病院を出る。腕は既にISが部分

展開されている。そんなふたりを追うべくシャルロットも病院を出た。

病院に取り残された信太とラウラはお互い向き合うように座る。あれほど騒いだ後なので、今は一緒にいた信太とラウラに視線が集まるがふたりは特に気にすることもなくコーヒーを飲んでいる。

「ところで信太」

ラウラは飲んでいた紙コップをテーブルに置く。

「どうした？」

「お前はあの時何をしていたんだ？」

ラウラの問いに信太の表情が一瞬固まる。

ハリスが去った後、その場にいるのはまずいと判断した信太はアリーナから去り、暫くして一夏たちと合流した。幸い、剣斗やフラン、ダルシアは気絶していたのであればないと思っていた。

「通路のほうでラウラたちがしてたように、観客を誘導していたよ」

「へたな嘘をつくな」

ちらっとラウラの顔を見るが、張ったりではなく確信があるようだ。

「実は私はアリーナが見える位置にいたのでな。見えたんだよ、お前が敵と話してる様子がな。まあ、こっちも誘導するのに気がいつていたので何を話してるかはわからなかったがな」

「……………」

「答える。お前とあいつはどんな関係なんだ？」

ラウラの冷たい視線。クラスメイトに向けるものではなく、信太を敵として見ている。

信太は残ったコーヒーを飲むばかりで何も答えようとはしなかった。

「答える気は無いか……………」

「話さないといけない理由なんてないからな」

信太は空になった紙コップをラウラのと重ねて立ち上がる。

「待て、せめてこれだけには答えてくれ」

「……………」

「お前は敵なのか、それとも味方なのか？」

「今は何とも言えない。それだけだ」

重ねた紙コップをゴミ箱に投げ捨て病院をあとにする信太。

正体のわからなくなった仲間に、ラウラは深いため息をついて病院をあとにした。

「  
」  
高級ホテルのスイートルームで、ハリスは騒動の中さりげなく撮っていたアポロ（信太）の姿を見ていた。

「あゝ、いつ見てもかっこいいわ」

電子端末に映るアポロに思わず頬が緩んでしまう。

（久しぶりに会ったからつい抱きついちゃったけど、アポロも嫌がってなかったよね。だって抱き返してくれたんだもの）

アポロの手が触れた肩に自分の手を乗せ、あの時の事を思い出してベットの足を転げ回っている。

コンコンッ

ドアをノックする音で現実に引き戻されるハリス。妄想をぶち壊されて、多少不機嫌になりながらも来ている人物が予想できてるハリスは、ベットから起き上がってドアを開ける。

「やあハリス。ご機嫌いかが？」

「最高よスコール」

ハリスは訪れた彼女を部屋に入れる。

彼女の名はスコール。ハリスやアポロが所属する亡国機業の幹部である。

「だいたい予想はついてるけど一応聞いとくわ。今日は何で勝手に行動したの？」

「わかってるなら聞かないですよ。それより見て見て！アポロがまた一段とカッコよくなってるの！」

ISの無断使用をどうでもいいと切り捨てると電子端末に映るアポロをスコールに見せる。

まるで自分の好きなアイドルを友達に薦めてるようだった。

「いつもはしつかり仕事をしてくれるのに、アポロの事になると普通の女になっちゃうのが問題ねハリスは」

「女が男に恋して何がおかしいの？」

「男嫌いのくせによく言うわね」

「アポロはそこら辺の男とは違うのよ」

私は昔の事を思い出す。私はアポロよりも早く亡国機業に入った。私はISが現れる前から男はみんな自分より下の存在と思っていた。だから、男でISを使えるからって亡国機業に入ったアポロを気に入らず、その日の内に

「男なんてみんなクズだ！そんな奴亡国機業にいらない、私がぶっ倒してやる！」



と言いつ放ち。直ぐ様決闘。その頃からでも私はかなりの實力を持っていたが、結果はアポロの圧勝だった。

男に負けたのが悔しくて、握手を求めてきたアポロを突き飛ばして一晩中泣いてたのを今でも覚えてる。だけど次の日、私の世界観は180度変わった。

アポロは突き飛ばした私にまた笑顔で近寄って言った。

「君って強いね。今度から一緒に訓練しよう！」

今まで男はクズだと思ってた。いや、今でも男はみんなクズだと思ってる。だけど、アポロは違った。今までであった男は、男は女より上だと考え、たまたま私に勝ったときにはとことん私を馬鹿にした。それなのにアポロは私を馬鹿にすることなく、寧ろ私を誉めてくれて一緒に強くなるうと言ってくれた。

その瞬間私は恋に落ちた。それから出来るだけ毎日アポロと一緒に訓練するようにした。訓練だけじゃもの足りず、食事や外出にも一緒にいるようになった。

ずっと一緒にいたおかげか、ペアでのコンビネーションの良さからスコールなどからは『双子』<sup>ツヘミ</sup>と言われるぐらいになった。私としては双子より夫婦って呼ばれたいけど、それは実際になった時までの楽しみにしときましよう。

「だったらあの子はどうだった？アポロのお兄さんは」

アポロから別の男の話題になった途端、ハリスの目は冷めきったものになる。

「あの子はぜんぜん駄目よ。ISの使い方がなってないわ。ISが頑張ってる分何とか形になってる感じね」

「何だ、アポロのお兄さんだから期待してたんだけどな」

「安心しなさい、弱かったけど将来性はあったわ。最低でもスコールの期待に答えるぐらいは強くなるはずよ」

そう話すハリス。しかし、彼女はまたアポロの映像を見てうっとりしている。

「それならいいけど。でもこれからは気を付けてね。ISの無断使用ばかりされると私も黙っていられないのよ」

「わかってるわ。上司を困らせないようにするのが部下の仕事だからね」

「ふふふ、そんな上司想いの事を言ってくれるのはハリスぐらいね。それじゃあね、ハリス」

「ばいばい、スコール」

言うことを言い終えたスコールは、自分の部屋に戻った。

ドアがしまった後、そこでハリスはまたアポロの映像に目をやる。

「そう私が認める男はアポロだけ……。他の男はみんなクズ……」

病室を出た剣斗は電話が出来る待合室にいた。

「さて、あの人は電話に出てくれるかな」

俺は世界でも5人ぐらいしか知らない番号に電話する。

トゥルルルル、トゥルルルル、トゥル…

「は〜い！剣くんの永遠のアイドル！篠ノ之たb……」

ブチッ

いかん。つい電話を切ってしまった。一旦落ち着くんだ。

よし、もう一回電話しよう。

トゥルルルル、トゥルル…

「は〜い！剣くんの永遠の奥さん！篠n……」

ブチッ！

はっ！また切ってしまった。でも、もういいかな。電話するのも面倒だし……。

俺は携帯をポケットに仕舞う。すると知らない着メロが携帯から流れる。こんなの出来るのはあの人しかない。

俺はため息をつきながら電話にでる。

「もう剣くん！どうして電話切っちゃうの！？東さんショックグ  
ーだったよ！」

「いや、何ででしょうか。多分条件反射？」

「私の声を聞いたら電話を切るの！？それは酷いよ！」

相変わらず東さんとの会話は疲れる。早く用件だけ言おう。

「東さん、じゃなくて東姉。今日はちょっと頼みたい事があります」

「剣くんから頼み事なんて珍しいね。何かな、言ってみなさい」

東さんは何か作業をしながら電話をしているのか、カタカタとキーボードを叩く音が聞こえる。

「まず一つは今あるパッケージの更に強化パッケージを造ってもら  
いたいんです」

「パッケージの強化パッケージ？別に造るのは簡単だけど、剣くん  
に扱えるかな？」

「大丈夫です。これから訓練しますし、もし使いこなせないようだ  
ったら、あの瞳を使う時だけにしますから」

「なるほど、確かにあの目を使うときだけの強化パッケージっての  
も面白そうだね。いいよ造っとくね」

思ったより簡単に許可されちゃったよ。やっぱり束さんって暇なのかな。

まあいいや、それより次の頼みだ。

「次に二つ目は新しいパッケージを造って欲しいんです」

「新しいパッケージ？一つだったら造れる暇があるけど、どんなパッケージが欲しいの？」

「どんなのでいいです。そこら辺は束姉に任せます」

「私に任せていいんだね。了解、この束さんが造るんだからきつと剣くんが気に入るパッケージを造るよ！」

「ありがとうございます。それじゃあさようなら」

「ちょっと！折角の電話なんだから、もっとお話……」

ブチッ！

人にものを頼む態度じゃなかったかな？

束さんだったら別にいいか。用も済んだし、さっさと学園に戻ってシャルにフランスに行けるか聞かなくちゃ。

俺は急いで学園に戻った。

## 頼み（後書き）

いかがですか？

今回は色々な場面を書いてみました。こうしないとこのぐらい書けませんでした。

さて、次回からはシャルとフランスに行きます。よって登場人物もシャルと剣斗が殆どです。目標は3・4話です。

それではまた次回の更新で！

感想待ってます。

義兄妹（前書き）

かなり時間がかかった

## 義兄妹

「……シャルニ。起きて、もう着いたよ」

「ん……。なんだもう着いたのか。案外フランスも近くなったな」

「寝てたからそう感じるだけだよ」

今、俺とシャルは飛行機に乗っている。

病院を出て学園に戻った後、俺は早速シャルにフランスに行こうと言った。すると、シャルは待つてたと言わんばかりに俺の手を引いて空港に連れてこられた。当然荷物やパスポートの準備はしてなかったんだけど、それを言うとシャルは満面の笑みで「パスポートも荷物も準備できてるよ！」だつてさ。

……シャルつて他の娘に比べて大胆だよな。

飛行機から降りた俺達は最初にシエルビアさんが居るところ。つまり、シエルビアさんのお墓に向かう。途中で花屋に寄って花を買っていくことにした。シエルビアさんは花は何でも好きだと言っていたので、俺の勝手なイメージでひまわりを買った。

「シエルビアさんの墓って何処にあるの？」



「僕達が住んでいた家があったでしょ？あれを壊してそこに作ったんだ。お母さんが死んだらデュノア社に行くのは知ってたから。それに、あそこに作っておけばシャニがいつ戻ってきててもわかると思っ……」

「そうか……」

それから俺たちは終始無言で歩き続けた。

約3年ぶりにこの町に来たけど、何も変わってないな。家は前より少し多く建てられてるけど、スーパーやパン屋はまったく変わってないな。

「あれ！？もしかしてシャルロットちゃん!？」

歩いてると、突然シャルの名前が呼ばれる。声のする方を見ると、人当たりの良さそうなおばさんがいる。

「おばちゃん久しぶり!」

「おやおや、また随分な可愛くなったね。それで、その子はシャルロットちゃんの彼氏かい?」

おばさんが俺を見てニヤニヤと笑っている。おばさん止めてくれよ、シャルみたいな美人が俺みたいのを彼氏にするわけないだろ。シャルに失礼だぞ。

「ま、まだそういうのじゃないけど……。それよりおばちゃん、彼が誰だかわからない?」

シャルは俺をおばさんの目の前まで連れていく。おばさんは俺の顔をまじまじと見るが、わからないようで顔を捻る。

「もう。彼はシャニだよ！よく僕と買い物に来てた子だよ。シャニはわかるよね、スーパーにいたおばちゃんだよ」

そこでふたりは「あゝ」とお互いの存在を思い出す。

「あんたシャニだったのかい！？雰囲気も違ったからわからなかったよ」

「あの時は色々お世話になりました」

やっぱり俺って変わったのか。それに比べておばさんは変わらないな。あれだけ無口だった俺にも話しかけてくれた数少ない人物だし、話すようになってからは家に招待してもらった。

「知ってるかい？あんたが帰った後、シャルロットちゃん凄く落ち込んでたんだよ。うちに買いに来てても元気は無いしたため息ばっか。挙げ句の果てには店の中ですり泣きするときも……」

「おばちゃんは何事言わないで！」

シャルは顔を真っ赤にしておばさんの口を塞ぐ。

「シャニ、違うからね！僕は落ち込んでないし、ましてや泣いてもないからね！」

そう言われても、空港でもあんなに泣いてたからスーパーでの様子も容易に想像できるんだよな。

でも、あんまり言つとシャルもつるさいからな。

「もうわかったから、早く行こつぜ?」

「おや、これから何処が行くのかい?」

「うん。お母さんに会いにね」

「そうかい、シャニが来たならお母さんもきつと喜ぶよ」

おばさんはシエルビアさんとも仲が良く、その顔はどこか悲しげだった。だけど最後は笑顔で俺たちに手を振ってくれた。シエルビアさんが俺の理想の母さんなら、おばさんは俺の理想のおばあちゃんだろう。

おばさんと別れた後、俺たちは今度こそシエルビアさんの墓に向かった。シエルビアさんの墓、つまりシャルたちの家は町から少し離れた所にある。ふたりで歩いてる道。ここは本当に何も変わってない。右を見れば畑があり、左を見れば花畑がある。だけど、昔と一つだけ違うのがある。それは俺とシャルの間にシエルビアさんがいないことだ。

暫く歩いて俺たちは目的地に着いた。家は既に壊されていて、墓は丁度シエルビアさんの部屋があつた所に作られている。シャルが先に墓に向かう。

「お母さんただいま。今日ね、やっとシャニが帰ってきたんだよ。シャニもさ…帰ってくるのが…遅いんだよね。お母さんだって…もう一回会いたかったのにな?」

俺は何も言えずにシャルの隣でしゃがんでひまわりを添える。そして、目を閉じて手を合わせた。フランスでは合掌なんてしないんだろっが、癖でついやってしまった。

(母さん、帰ってくるのが遅れてごめん。母さんは怒ってるかな？ だけど、俺もやっと微弱だけどシャニも守れるぐらいの力は手にできたよ)

心の中でシエルピアさんに報告すると、後ろから車が停まる音がする。俺は立ち上がって車を見ると、運転席から執事らしき人が出てきて後部座席のドアを開ける。

後部座席からは一組の男女が現れた。男の人は見た感じでは二十歳ぐらいだろうか。金髪をかなりのショートヘアにしている、好青年のイメージを与えている。

女の方は俺たちとは歳はあまり変わらなそうで、男と同じ金髪を肩辺りまで伸ばしている。目はつり目で性格がきつそうな感じがする。

「久しぶりねシャルロット」

「そうだねノエル」

あれ、この人たちってシャルの知り合いなの？

「シャルこのふたりは誰？」

俺がシャルに耳打ちすると、男性が答えた。

「初めまして神城剣斗君。噂は聞いています」

「はあ……」

「まずは自己紹介からですね。私はジギル・デュノア。こちらが、ノエル・デュノアです」

デュノア？もしかして……

「だいたいお察しついでるでしょうが、私たちとシャルロットちゃんとは義兄妹、つまり腹違いの子供です」

ああ〜成る程ね、これはあれだ。

めんどくさい展開だね

場所は変わってデュノア社の社長室。そこには俺とジギルさんとデュノア社の社長がいる。シャルとノエルさんは機体のデータ取りの為に、今はデュノア社のアリーナにいる。

「私がデュノアの社長のマドック・デュノアだ。よろしくな、神城君」

「どうも」

俺の向かいに座る社長。威厳たっぷりな表情、社長にふさわしい人物だろう。

俺はその社長に敵意の目を向ける。

「君が私を敵視してる理由もわかるよ。シエルビアの事だろ？」

「それ以外に俺が貴方に敵意を向ける理由がありますか？」

「そうだな、彼女の事は残念だった」

「残念だったと！？ふざけるなよ！」

俺は社長の胸ぐらを掴む。直ぐにジギルさんが止めに入る。

「落ち着いてくれ神城君！父さんは本当に申し訳なく思っているんだ」

「落ち着けられませんよ！この人がシエルビアさんを恋人にしなればふたりはあんなに苦しまなかった！違うか！」

「違わなくない。だけどな、私がシエルビアを恋人にしなればシヤルロットが生まれなかったのも事実だ」

「テメエ！」

俺は社長を殴ろうと拳を振り上げるが、3人の屈強なSPによって床に押さえつけられていた。

「何すんだよ、離せよ！」

「頼むから私の話を聞いてくれ」

社長は膝をついて目線を俺に合わせる。

「私は今の妻を愛してる。それと同じぐらいシエルピアも愛していた」

「その大人の中途半端な考えの犠牲者はシャルみたいな子供なんだぞ」

「その通りだ。だが私は決してシャルロットを苦しめるつもりはなかった。私にはジギルもノエルもシャルロットもみんな私の子供なんだ」

「あんたにそんな事言う資格が」

「大変です社長！」

ドアを開けて慌てた様子で白衣の男性が入ってくる。おそらくデユノアの技術者だろう。

「どうしたんですか？」

「あつ、ジギルさん丁度良かった。アリーナでふたりが突然暴れだしたんです。最初は模擬戦かとおもったんですが、段々激しくなつて私たちには手に負えません」

「どうせまたノエルのせいだろう。神城君、君も一緒に来てくれな  
いか？」

「まだ話が終わってないです」

「それなら、また夜に時間を作る。それでいいかな？」

社長は指示して、S Pを俺から離れた。

俺は乱れた服を直して立ち上がる。

「わかりました。とりあえずは俺もアリーナに行きます。夜はちゃんと時間を作ってくださいよ」

「ああ、わかっている」

俺はジギルさんと早足でアリーナに向かった。

「こおんのおお！」

「死ねええ！」

ドンツガン！

アリーナに着いたのはいいけど、何か凄い事になっていますね。アリーナでふたりの鬼神が暴れまわってるし。



「あれがノエルさんの専用機ですか？随分独特ですね」

ノエルさんの専用機はラファールとは別物と思わせる機体だった。機体色はシャルのラファールと同じオレンジだが、とにかくゴツイ。装甲をいくつにも重ねているのか、普通のISより二回り以上は大きい。フューチャーのサテライトの脚部の大きさが体全体になった感じだな。背中にはふたりのキャノン砲もあり、まるで重戦車みたいだな。

「はい、彼女の要望を聞いてる内にあのような機体になりました。名は『ハインド』見てわかるように機動性はあまりありませんが、その分を厚い装甲で補っております」

ふーん。確かに機動性はあまり無いようだね。現にシャルがラファールの機動性をいかしてノエルさんを翻弄してるけど、ハインドには目立ったダメージは無いな。

「主力武器は背中のキャノン砲ぐらいですか？」

「そうですね。ですがハインドにはもう一つ面白い武器がありますよ」

「面白い武器ですか？」

「見てればわかると思います。そろそろノエルも使うでしょう」

アリーナではノエルさんがキャノン砲を散弾に変えてシャルを狙うが、ラファールの機動性の前に全く当たる気配がしなかった。

シャルはノエルさんの周りを時計回りに移動しながら、アサルトラ

イフルで微量ながらも確実にハインドのエネルギーを減らしている。

「まさか、このまま終わりなんて無いよね？」

「ちょこまかちょこまかと、逃げんじゃねえよ！」

ノエルが腕を振り下ろすと、腕全体を覆っているアーマーが何メートルにも伸びてシャルを捕らえようとする。

シャルも急上昇しながらアサルトライフルで腕部アーマーの軌道を反らして何とか逃れた。

「あれが面白い武器ですか」

「驚いたでしょ？」

「一応ね……」

「ただ、あれって凄い使いずらそうに見えるんだよな。腕を伸ばしてる間は本人は完全に無防備になってるし、伸ばすと言っても精々5メートルがやっとだから、逃げながら攻撃するのは難しくくないよな。」

「それで、何でふたりはあんなに怒ってるんですか？」

「私にもわかりません。昔から仲は決して良くはなかったのだから」

「そうですか」

何故ふたりがこうなったか。それは少し時間を逆昇る必要がある。剣斗が社長室で話をしていた頃、シャルロットとノエルは模擬戦の為にアリーナに来ていた。

「おい、シャルロット」

馴れ馴れしく話しかけるノエル。シャルロットは始めは無視をしていたが、ノエルがあまりにもしつこいのでつい返事をしてしまった。これがすべての始まりだった

「何？」

「お前ってあの神城剣斗って奴が好きなのか？」

「!?!。……だから何」

ノエルに気持ちを悟られたことに一瞬動じるが、直ぐに平然をよそおった。

「あんな奴のどこがいいんだが」

「人の好みにとやかく言われる筋合いは無いよ」

昔からノエルとシャルロットの好みがあったことは一度もなかった。シャルロットは猫が好きだが、ノエルは犬が好きだった。また、シャルロットは冬が好きだが、ノエルは夏が好きといった感じである。

いくら腹違いの姉妹でもここまで好みが変わらないのも珍しい。いや、本当は同じ好みもあるのだろうが、お互いが逆の好みを言っているのだろう。

「ISを使えるからって、あんなさえない奴は無理だな」

「……」

「見た感じへらへらしちゃってさ、あれが世に言う草食系男子なのか？」

「……」

「まあ、愛人の子にはお似合いかな？」

…プチッ

「男を見る目が無いなんて、デュノア社の娘もたいしたことないね」

「何だと？」

シャルロットは笑顔である。いつものニッコリ満面の笑顔。だけど、どこか禍々しいオーラを纏っている。

「聞こえなかったの？男を見る目が無い人がデュノア社社長の娘だと思うと、同じデュノアとして恥ずかしいよ。きつとジギルさんもそう思ってるよ」

ノエルの肩がふるふると震え出す。その背中には阿修羅が見える。

「テメエ、愛人の子供の分際でよくも言ってくれたな」

「愛人の子供でも同じデュノアなんだよね。残念ながら」

対するシャルロットはずっと笑顔だが、こちらの背中には不動明王が見える。

「だったら二度とデュノアと名乗れないように、今ボコボコにしてやるよ」

ノエルはハンドを展開する。同時にキャノン砲の標準をシャルロットに合わせる。

「直ぐに熱くなっちゃうところはシャニに似てるのに、あなただと凄くムカつくよ」

シャルロットもラファールを展開して、アサルトライフルとマシンガンを呼び出す。

「「まずは一回 やられなよ(ろよ)!!」」

「じゃっ、神城君あとは頼んだ」

俺とジギルさんはオペレーター室を後にして、一応アリーナの隅にいる。ただどジギルさん、頼んだって他人事みたいに言わないでくださいよ。俺にはふたりの鬼神の戦いに水を指す程の度胸はないんですから。

「神城君はふたりの気を反らしてくれるだけでいいんだ。ノエルは私が一言言えば大人しくなると思うので」

「その前に俺が屍にならないことを願いたいですね」

文句を言いながらも結局はやらなくてはいけないので、俺はフューチャーを展開してゆっくり、ゆっくりとふたりに近づく。

パッケージはサテライトにしてある。使えるパッケージはスカイ・キャッスルとサテライトだけなので、必然的にサテライトになるのだが。

（アース・ブレイカーの出力は10%に抑えてっと。当てたら洒落にならないからそこは気を付けないと）

俺は足を肩幅に開いてチャンスを伺う。

一方、ふたりの鬼神は未だに激しい模擬戦(?)を続けている。このままでは拉致があかないと思ったシャルがアサルトライフルを戻して近接ブレード『ブレット・スライサー』を呼び出す。そして瞬時加速で一気にハインドに接近する。

ノエルさんもシャルの行動を見てキャノン砲を止め、伸びる腕部アーマーを後ろに引く。ギリギリまでシャルを引き付けるつもりだろう。

お互いの距離が3メートルを切った。今だ！

俺はアース・ブレイカーの引き金を引く。アース・ブレイカーの銃口からはいつもの極太ビームではなく、白い球体のビームが飛ぶ。球体のビームはシャルとノエルさんの間の地面に着弾する。着弾した所で小規模な爆発が起こり、爆風によってふたりは吹き飛ばされる。

「きゃっ…！誰！？」

ふたりが揃って俺にガンを飛ばしてくる。

そんな目で見ないでくれよ、俺だってやりたくなかったんだよ。だけどジギルさんがやらないと駄目って言うんだもん。

「何だ、シャニ（お前）か……」

「お前等やりすぎなんだよ。アリーナを壊しても直すのは他の人達なんだぞ」

「だってね、ノエルがシャニの事馬鹿にしたんだよ。シャニだって僕が侮辱されたら怒るでしょ？」

「そりゃ仲間を馬鹿にされたら俺も怒るけど、他人に迷惑かけちゃ駄目だよ」

「だって……」

「こらこら、頬を膨らませて抗議100%の目で俺を見るな。可愛くてつい許しそうだよ。」

ノエルさんの方ではジギルさんがお説教してるよ。

「ノエルお前はいつもそうだな。もう少し後先考えて行動できないのか？」

「ジギル兄さんは俺が悪いって言うのかよ！」

「シャルロットちゃんが悪い事するわけないだろ」

「俺が愛人の子より悪いわけないじゃないか！」

ノエルの言葉に俺の怒り温度が上昇していく。

「そんなの関係ないだろ」

「関係おありだろ。だいたい父さんの愛人なんて絶対ろくな人間じゃないよ。そんな人の子供のシャルロットだつてろくな人間なわけないよ！」

「ノエル！いいかげんに（いいかげんにしろよ！）………神城君」

今まで我慢してきたけど、今の言葉で俺の頭の沸点は越えてしまった。

俺はノエルに歩み寄ると彼女の肩を掴んでこちらに振り向かせ、

パチンツ…！

頬をおもいつきり、ひっぱたいた。平手でなく拳で殴りたかったのだが、相手は女なのでそこを抑えて平手打ちにしといた。



「何すんだよ。男でIS使えるからって調子に乗るなよ」

「お前こそ社長の娘だからって何言ってもいいと思うなよ！」

ノエルはお返しの手ストレートをお見舞いしようとするが、俺は軽々と手の平で受け止める。ノエルの拳を力一杯握る。ノエルも痛みを顔にしかめる。

「愛人だったり、その子供だからってろくな人間じゃないって判断するなよ。シエルビアさんは誰よりも優しい人だった。シャルだつて思い遣りのある子なんだぞ」

「うるさい！デユノアでもないお前に言われる筋合いはないんだよ！」

「やめないか！！」

アリーナにジギルさんの怒声が響き渡る。空気が一瞬で変わり、俺とノエルの口論も止まる。

「ジギルさん…?」

ジギルさんの表情は険しいもので、先ほどまで持っていた好青年のイメージはどこえやら。あまりの豹変ぶりにシャルまでも固まっている。

「神城君の言う通りだ。会ったこともない人を侮辱するなんて最低だぞ」

「ジギル兄さん……」

「言い訳はいらない！」

いいぞジギルさん、もっと言っただけえ。

「全く、日頃の態度といい、さっきのシャルロットちゃんとの模擬戦といい、お前はデュノア社の恥だな！」

……。さすがにちよつと言い過ぎでしょ。

彼女だつて必死なんだからデュノア社の恥はねえ。

「俺はデュノア社の恥じゃない。ISに乗れないジギル兄さんが偉そうに言っつなよ」

ほら怒っちゃった。

「ISに乗れない分、私はお前にできないことをしている。正直お前よりは会社の役に立ててがな」

「もうわかったよ！俺は部屋に戻るからほつといてくれよ！」

ノエルはジギルさんを押し退けてアリーナをあとにする。

すれ違いざまにみた彼女の顔はとても悲しげで、今にも泣き出しそうだった。

## 友達

「1、2、3……」

デュノア社内にあるトレーニングルーム。様々な器具が備えられているのは、デュノア社の社員なら誰でも使える設備である。

時間も遅めなので、今はひとりしかいない。女性には重めの40キロのバーベルを上げ下げしているのはデュノア社社長の娘であるノエルだった。

「8、9、10……」

熱心にバーベルを持ち上げるノエル。頭をよぎるのは兄の言葉。

『お前はデュノア社の恥だな!』

悔しかった。自分がシャルロットより劣っていると思つと堪らなく悔しかった。

（俺は、俺はシャルロットなんかになんかに負けてない。俺はデュノア社にとって必要な存在なんだ!）

バーベルを胸元まで近付け、一呼吸置いてもう一度持ち上げようとしたときだった。

「よっ」

「わっ!?!」

突然目の前に現れた剣斗にノエルは思わず手を離してしまふ。40キロのバーベルが顔に迫ってくる。ノエルは反射で目を瞑ってしまふ。

「あぶねっ!」

剣斗も慌ててバーベルを持つ。バーベルはノエルの鼻上数センチの所で止まる。

「バーベル離すなんて、重すぎたんじゃねえか？」

剣斗は片手でバーベルを持ち上げると脇にそつと置いた。固まっていたノエルも体を起こして怒鳴る。

「急に目の前に出てくんやよ!びっくりするだろ」

「すまんすまん。話しかけても難しい顔して反応してくれなかったから」

剣斗は片手でごめんと謝る。ノエルは立ち上がってにらむ。

「で、何の用だ?まだ文句あんのか」

「違うよ。今はただお話しに来ただけだよ。立ち話もなんだから、あれでもやりながら話そうぜ」

剣斗はあごをクイツとやる。そこにはランニングマシンがある。別に断ることも出来たのだが、話してれば少しは気が紛れると思いいノエルはランニングマシンをやることにした。

ノエルはランニングマシンの設定を時速16キロにする。足場が動き出し、それに合わせて足を動かす。剣斗も同じように設定速度を決めて走り出す。

5分程走り、先に口を開いたのはノエルだった。

「なあ剣斗、お前には兄弟っているか？」

「一応同い年の弟がな」

剣斗も信太とは同一人物だったことは伏せている。話したところで信じてもらえるわけではないのだが。

「仲良いか？」

「良いとは決して言えないな。毎日くだんない事で喧嘩してるし。それでもお互い切磋琢磨し合えて、本人が居ないから言えるけど俺は弟を誇りに思ってるし、そんな弟を持てる自分も誇らしいよ」

話してすぐに照れくさくなった剣斗は、ランニングマシンの速度を上げる。設定速度はどんどん上がり、もはやランニングではなく自転車程のスピードが出ている。

それでも剣斗は呼吸ひとつ乱すことなく、平然と走っている。ノエルは剣斗のスタミナに驚いたが、弟と仲良く出来てる剣斗を見て呟いた。

「羨ましいな……」

誰にも聞こえないように小さく呟いたつもりだったが、剣斗にはし

っ  
つかり聞こえていた。

「何が羨ましいんだ？」

「お前にそんな弟が居ることだよ」

「ジギルさんだって立派なお兄さんじゃないか」

立派という言葉にノエルは固まる。足が止まったことでノエルは流され後ろに尻餅をつく。

「きゃっ」

「おい大丈夫かよ？」

剣斗もランニングマシンから下りて手を差し伸べる。

「ありがとう」

「何かしながらだと危ないから、座って話すか」

「うん」

近くにあった椅子に座る。剣斗は自販機で買ったスポーツ飲料を投げ渡す。お互い飲んだのを確認して、剣斗が話を戻す。

「ノエルはジギルさんが嫌いなのか？」

剣斗は率直に思ったことを聞いてみた。ノエルはさっきからジギルさんの話になると微妙に表情が暗くなっていた。アリーナのやり取

りでも仲がいいとは思えなかった。

「嫌いじゃないさ。でも、好きってわけでもないな」

「何でさ。ジギルさんって何でも出来そうですごくいいとおもっけど」

「確かにジギル兄さんは何でも出来る。周りからもパパを超える完璧な人間だって言われてるかね。だからかな、完璧な人間は妹にも完璧を求めてるんだ」

弱弱しくも、ノエルは言葉を続ける。

「他人よりもできるのは当たり前。常に求められるのは上位の結果さ。出来ないからって何かをされるわけじゃないんだけど、その時のみんなの目が厳しくてね」

ノエルは笑ってる。だけど、その笑顔とは裏腹に心が泣いてると感じる。

剣斗はいつかトレーニング中の鈴とセシリアと話していたことを思い出す。

「お前たちもよくそんな毎日頑張れるな。そんなに強くなりたいか？」

「頑張ってるより頑張らなくちゃいけないと言う方が正しいね」

「そうなの？」

「ええ。わたくしたちは代表候補生、しかも専用機持ちですわ。理由はどうあれ、求められるのは結果ですわ」

「あたしたちは剣斗や一夏と違って、結果を残せなかつたら専用機を取り上げられてもおかしくないからね」

「ふうん」

そのときの剣斗は深くは考えなかったが、これは本人に相当のプレッシャーを与えているだろう。ノエルは加えて、デュノア社社長の娘というプレッシャーがある。

「俺も口ではシャルロットに愛人の子供だからって色々言ってるけど、人のこと言えないよな。俺だってISには乗れるけど結果を残せなくちゃ意味が無い道具同然さ。今日だってジギル兄さんにデュノア社の恥だつて言われちまつたしな」

「……」

剣斗は何というのが一番彼女のためになるのか必死に考えていた。

（俺が下手に何か言っても慰めにもならないんだろうな。悔しいけど俺にはノエルの気持ちかわからない。ノエルの言うようにこれはデュノアの人間の問題なのかな）

「いつそのこと死んじゃおっかな……」

「何馬鹿なこと言ってるんだよ！」

剣斗は思わず立ち上がってしまう。

「だってそうだと、ジギル兄さんが死んだりしたらデュノア社は多分倒産するけどさ、俺が死んだってデュノア社には何の影響は無い



よ。きっと代わりはシャルロットになるだけ」

淡々と話しているノエルだが、その目には光が宿っていない。まるで感情を持たない人形のようなようだ。

「どうしたらそんな考えになるのかな。だいたいお前の代わりなんているわけ無いだろ」

「俺の代わりなんていくらでもいるんだよ。デュノア社にはISを動かせば誰だっていいんだ。それこそお前が変わりなれる」

「はあく、馬鹿なお前にもう一回言っぞ。この世界中どこを捜したって代わりなんていないんだよ」

「うるさい!!」

ノエルは剣斗を押し倒して馬乗りになる。

「お前に何がわかる!デュノア社社長の娘つつ肩書きがどれほど重みになるか。家族全員から見られる家族に向けないはずのあの視線を」

「わかるわけ無いだろ。俺はどこにでもいる高校生なんだから」

「だったら!!」

ノエルは右腕を剣斗の顔に振り下ろす。剣斗は拳を避けようとはしない、鈍い音と共に拳が肌利頬に当たる。それでも剣斗は言い続ける。

「お前の気持ちはわからないけど、代わりはいないってことだけは

「言える」

「黙れ！」

もう一度殴るノエル。

「黙れ黙れ！もう俺はこりこりなんだよ。周りからも、家族からもあんな目で見られるのは」

何度も何度も剣斗の顔を殴る。剣斗は一度も避けることはしなかった。途中から口の中が切れ、口の周りが血だらけになるが、ノエルは殴るのを止めなかった。

「お前もしつこいな。だったら俺が今から死んで代わりがいるって証明してやるよ」

殴っていた拳を止めて立ち上がろうとするノエル。剣斗は彼女の手をとって、自分の顔に近づける。お互いの鼻が付くか付かないかの距離である。

「な、何だよ？」

顔を赤くして動揺するノエル。対して剣斗は表情は変えずにノエルの瞳をじっと見ている。

「お前にたくさんの不満や不安があるのはだいたいわかった。ただけどさ、簡単に死ぬなんて言うなよ」

「そんなのお前に関係ないだろ？俺が死んだって何も変わら」

ゴンツ！

剣斗が近い距離ながらも強烈な頭突きをお見舞いする。

脳まで衝撃が届いてふたりは唸り声を上げる。いち速く元に戻った剣斗は文句を言われるよりも前に口を動かした。

「確かに死んだらお前が嫌がってる周囲からの視線はなくなるよ。でも、残された人間はノエルが死んだ事実を一生背負わなくちゃいけないんだぞ」

「残された人間だつてすぐに忘れちゃうよ。どうせ俺はそのぐらいの人間なんだよ」

今のノエルの目は、昏間に別れ際に見せた悲しげなものだった。助けを求めている、そう雨の日に段ボールに入れられてる子犬のような目。

剣斗はため息をつきながら、赤くなっている彼女のおでこを優しく撫でる。

「なあノエル、俺とお前の関係って何だとおもっ？」

「え？関係って言われても、今日あったばかりの顔見知りかな？」

ノエルの答えは正しかった。今日初めてあつて、特に何かあつたわけでもないのに顔見知りや人見知りと答えるのが普通だ。だけど、剣斗の答えは違った。

「俺が言うのもおかしいんだけどさ、まだ会って一日もたつてない

けど俺はもうノエルとは友達だと思っただ？」

「俺たちが友達？」

「うん。だからさ、死ぬの止めてくんない」

「！！仮に俺たちが友達だからって何で死ぬの止めなくちゃいけないんだよ。たかが友達じゃないか」

たかが友達という言葉に剣斗は苦笑いしながらも言う。

「お前にはたかが友達でも、俺には自分より大切な友達なんだよ。だから死ぬなんて言うなよ、友達になっただけで死なれたら悲しいじゃないか、俺は弱い人間だからお前が死んだ事実なんて背負えねえよ」

途中から剣斗の言葉が震えだす。

「それにさ、お前が死んだら世界中捜しても、俺の友達のノエル・デュノアの代わりなんてどこにもいないよ。シャルでもジギルさんでもノエルの代わりになれないんだよ」

笑顔に言う剣斗だが、その頬には涙が出ている。

剣斗も何故涙が出るのかわからなかった。もしかしたら、生きて欲しかったのに、みすみす死なせてしまったナタージャとノエルを重ね合わせていたのかもしれない。

「何だよ……」

剣斗の頬に自分のとは別の涙がたれる。

「今日初めて会って、いきなり平手打ちしたとおもったら……友達なんて言って……死んだら悲しいって……何だよお前……」

「俺は何処にでもいる高校生だよ。ただ他の人より友達想いだけさ」

「何だよそれ、馬鹿じゃねえの」

やっと笑ってくれたノエル。笑顔を見てほっとした剣斗はもう一つ気になっていたことを言う。

「それでさ、その……さつきから、ちらちらと見えてるんだ。短パンの隙間から……パンツがだね……その……」

「!……!」

言われてやっと理解したのか、ノエルは剣斗から飛び退いて短パンの裾をギリギリまで下ろす。

「……………」

ノエルは女子特有の抗議の眼差しを送ってくる。

「真面目に話してると思ってたに……案外剣斗ってえっちな」

「なあっ!?!おかしいだろ今のはどう見ても不可抗力だ!」

あらぬ冤罪をかけられた剣斗は必死に無実を訴える

ノエルは暫く抗議の眼差しを送り続けたが、剣斗の困った顔を見て

気が済んだのかまたにこりと笑う。

「安心しろ、今回は俺にも非があるからな、特別にゆるしてやる。感謝しろよ、デュノア社社長の娘のパンツなんてそうそう見れるものじゃないぞ」

「ありがたき幸せです」

「ただし！」

ノエルは人差し指を剣斗の鼻に突きつける。

「明日の朝一に俺と勝負してくれ。世界で数少ないISを使える男子がどのくらいか、実際に戦ってみたいんだ」

「別に構わないけど、フューチャーは前の戦いで修理が必要で万全の状態じゃないけどいいか？」

「いいに決まってるじゃん。万全の状態じゃなくてもやる価値はあるさ。俺も、お前もな」

「わかった。そしたら明日朝一にアリーナだな」

「それでた剣斗、もう一つ頼みがある」

妙にもじもじとしているノエル。

「パンツを見たことは誰にも話さないぞ？」

「その事じゃない！別の事だ」

「別の事？」

「ああ、そのだな……シャルロットに今まで悪かった伝えてくれ。これからは仲良くしたいとおもったりしてるとな……」

ノエルの真意がわかった剣斗は、憎たらしく笑う。

「それは自分の口から言わないと意味がないだろ？」

「……」

ノエルは他の女子が使った上目遣いを使用する。剣斗は出来るだけ目を見ないようにしたが、結局は剣斗が折れてしまう。

「わかったからそんな目で見ないでくれ。ちゃんとシャルロットには俺から伝えといてやるよ」

「サンキュー、恩にきるよ」

言いたいことを全部言ってスッキリしたノエルはスキップでトレーニングルームをあとにする。

トレーニングルームにひとり残った剣斗は、ランニングマシンを再開するが、頭の中は明日の模擬戦で一杯だった。

(ノエルのハインドはクセが強いけど、こっちもトラスト・ナイトにミラージュ・ウィングがないから条件は同じか。基本はスカイ・キャッスルで時間を稼いで、キャノン砲の弾が切れたらサテライトで一気に決めるか。いざとなったらユニコーンもいるけど、あれだ

と一対一の勝負にならないんだよな。バルバさんがどっちか一つでも直してくれないかな……)

色々問題はあったが、明日の模擬戦が楽しみで更にランニングマシンの設定速度を上げた剣斗だった。



## 会社の反乱（前書き）

もうぜんぜん書けない……。

## 会社の反乱

剣斗とノエルが友達（？）になった翌日。ノエルは剣斗より一足早くアリーナを訪れ、ハインドを軽く動かしていた。

「よし、スラスター出力にも問題なし。今日も絶好調だな」

剣斗が来る前に一度、小休憩を取ろうとハインドを戻そうとするとアリーナに知っている女性が現れた。

「あなたは確か、整備のキールだよな」

彼女は何故かラファールを纏っている。その手にはアサルトライフルが二丁握られている。

「悪いんだけど、俺これから剣斗と模擬戦やるんだ。だから、あんたが相手する必要は無いぞ」

「いえ、そう言うわけにはいかないですよ」

キールは不気味に笑っている。ノエルは数歩下がってキャノン砲の標準を合わせる。目には敵意を感じ取れる。

「どつという意味だ？」

「どつという意味ですよ！」

躊躇なくアサルトライフルの引き金を引くキール。

ノエルは弾丸を避けようとはしない。ハインドの厚い装甲の前では

アサルトライフルの弾など大したダメージには至らなかった。

「私たちには邪魔な、デュノアの人間はみんな死んでもらいますよ」

「!?!」

仲が良かったわけではなかったが、ハインドの事でよく話していたキール。そんな人から急に死んでもらうと言われ、驚くノエル。しかし、驚きは怒りであつたという間にかき消された。

「そんな事、俺がさせるわけないだろ！」

「あなたには私を倒せません」

「こつちだつて、ラファールに負けるわけないだろ！」

怒号と共にキャノン砲を撃つ。キールは落ち着いた様子でキャノン砲を避けると、アサルトライフルを仕舞いグレネードランチャーを3連射した。

「くうっ！」

急いで回避行動をとるが、機動性があまりないと砲撃に集中していたことから、全てを避けきれずに二発が着弾する。

「このおっ！」

バシユンと腕部アーマーを伸ばす。直線的に向かうアーマー速度は弾丸のそれと変わらなかった。

「ふんっ……」

キールは備え付けの実態シールドを呼び腕部アーマーの軌道をずらし、一気に距離を詰めた。

その右手には最強の近距離武器、盾殺し（シールド・ピラス）がある。

「ハインドでもこれなら効くでしょう」

ズガンツ！

ノエルの腹部に盾殺し（シールド・ピラス）の一撃が叩き込まれる。ハインドの装甲なら盾殺し（シールド・ピラス）の一撃も大ダメージには至らない。あくまでも一撃なら。

盾殺し（シールド・ピラス）はリボルバー機構により高速で次弾炸薬を装填。残りの5発を全て撃ち込んだ。

ズガンツ！ズガンツ！ズガンツ！ズガンツ！ズガンツ！！

合計6発も盾殺し（シールド・ピラス）を撃ち込まれたら、いくら重装甲のハインドでもシールドエネルギーを大きく削られた。

そして、空になった盾殺し（シールド・ピラス）を捨てて、新しい盾殺し（シールド・ピラス）を呼び出した。

「なめるな！」

ノエルは二つ目の盾殺し（シールド・ピラス）を喰らうまいと、腕下部にある鉄釘を撃ち出す。

キールのラファールは機動性を重視している。そのため、ハインドの一撃が当たればそれだけで戦闘不能になるだろう。しかし

「おっと！」

ハインドの動きは一つ一つが遅い。機動性を重視したラファールなら、昨日シャルロットがしてたように攻撃を避けるのは難しくなかった。

「攻撃力があっても、当たってくちゃいみがないんだよね」

「そんなの誰だってわかるよ！」

「この程度のISしか造れないからデュノアは駄目なんだよ」

「なんだと？」

怒りに満ちた視線を送るが、キールはさらりと受け流して話始める。

「ノエルだつてわかってるんでしょ？デュノア社はもう限界よ。未だに第3世代を造る様子も無いし、考えが古いのよ。それだから他国に」

デュノア社の整備士として、キールの性格を把握しているノエルはこの話になるとわかってている。キールに悟られないようにプライベート・チャンネルを剣斗に繋いだ。

「剣斗！聞こえてたら返事してくれ」

しばらくして、剣斗のだるそうな声が聞こえてきた。

『いきなりプライベート・チャンネル繋げるなんて、どうかしたん

ですか?』

「今襲撃されてんだよ、うちの会社からな。一人じゃキツイんだ、こっちに来てくれないか」

『無理だね』

「なっ!?!」

こちらの願いを即答で断られ、思わず声を上げるノエル。キールに気づかれまいと口を塞ぐ、幸いキールは話すに夢中でこちらの会話には気づいてなかった。

『お散歩中だからそっちに行けないんだ。ごめんね』

「お前昨日は俺は友達想いの高校生だよとか言ってたじゃないか。だったら今がそれを証明するときだろ」

『そうだけど、途中で散歩止めたら後味悪くない?』

「お前なあ! やばっ!」

また大声を出してしまい、慌てて口を塞ぐが今度はキールにはれてしまった。これ以上通信させまいとマシンガンを撃つキール。

「人が話してるのに、他人とお話なんて礼儀がなってないんじゃないの?」

「ばれちまったか……。剣斗、こっちは自分で何とかする。お前は悠々と散歩でも楽しんでけ!」

『おうそうか。こっちも早めに散歩が終わったらすぐに駆けつけるよ。それと、もう少してそっちにシ』

まだ何か言いかけていたが、戦闘に集中したいノエルは通信を切つてキャノン砲を撃つ。弾は通常弾に変わって、少しでも当たる確率が高い散弾に切り替えてるが、依然としてキールに当たる様子は無い。

「往生際が悪いわね。大人しく殺られなさいよ」

「会社に居てわからないか？デユノアの人間は諦めが悪いんだよ」

ノエルはキャノン砲と共に鉄釘も撃ち出すが、それでもキールには一撃も当たらず、とうとう盾殺し（シールド・ピアス）を当てられる距離まで詰められた。

「これでチエックメイトね」

「まだだ！」

ノエルは意味がないとわかってはいるが、腕部アーマー伸ばそうとする。

バシユン

「！！！？？」

突如二人の間に弾丸が突き貫ける。キールは舌打ちをしながら後退し、ノエルはその場に立ち竦んでいた。その二人の間に現れたの

は、自身の専用機であるオレンジのラファールを纏ったシャルロットだった。

「もうお仲間の登場かい。めんどろね」

キールは悔しそうに大きく舌打ちをするが、ノエルもなぜシャルロットがここにいるのかわからずに困惑していた。

「どうしてシャルロットがここに…?」

「ちょっと話がしたくてね」

「話って、俺にか?」

全く状況がつかめないノエル。とりあえずシャルロットが味方でいることにほっとする。

シャルロットは視線はキールに送りながらも話す。

「昨日の夜にシャニにお願いされちゃったんだ。そろそろノエルと仲良くしてやってくれないかてね」

「それはだな…」

昨日確かに剣斗にそう言ってもらったように頼んだが、本人を前にすると途端に恥ずかしくて頼んだのを後悔する。

「だから僕言ったんだ、何で僕がノエルと仲良くしないといけないの。ノエルがどんな子かシャニだって見たでって…」

「そうか、そうだな」



がっくりと肩を落とすノエルに、シャルロットは振り向いて苦笑いを見せる。

「そしたら、シャニが悲しい顔で言ったんだ」

『シャルの気持ちはわかるよ。だけどさ、ノエルはノエルでシャルにはわからない苦しみがあるんだ。それだけはわかってくれよ。どんな風に言ったって家族に代わりはいないんだよ、世界でただ一人の姉妹だろ？』

「あれは反則だったよ。あんな顔されちゃ、嫌でも許しちゃうよ」

「それってもしかして……」

ノエルが顔を上げる。すると今度はキールが二人の間に弾丸を撃ち込む。

二人は一旦距離をおいて、シャルロットが前、ノエルが後ろの形で位置取る。

「いつまでも仲良くしゃべってんじゃないわよ」

「あちらは随分お怒りのようだぜ」

「そうだね。僕、短期な人は嫌いなんだよな」

「奇遇だな、俺もだよ！」

ノエルはキャノン砲を連射するが、キールは同じように砲弾を避ける。それでもノエルには焦りは無い。

なぜなら

「そこだよ！」

砲弾を避けたキールに銃弾が命中する。シャルロットがキールとノエルの間でアサルトライフルで砲弾を避けた後の隙をずっと狙っている。

シャルロットの射撃も避けようとしていると、今度はノエルの砲弾が避けきれなくなる。

「やっぱり2対1は無理あったかしら」

キールはマシンガンで弾幕をはる。同じようにシャルロットもマシンガンを撃つ。

カチツ……

二人が同時に弾切れを起こした。直ぐに二人は新しい武器を呼び出す。そうとするが、シャルロットの高速切替ラピッド・スイッチによって先に呼び出されたアサルトライフルがキールを捕らえる。

これでキールはノエルの意識が薄れてしまった。しまったと思った時には遅く、ノエルの伸ばした腕部アーマーがキールを捕まえ、動きを完全に封じた。

「やっと捕まえたぜ」

「これで僕達の」

勝ちだ。と言おうとした時、キールが大声で笑いだす。

「急に笑いだしたけど、どうしたんだろう?」

「頭でも打ってバカになったんじゃないか」

二人が珍しいものを見る目で見てみると、やっと笑い止んだキールがニヤリと口元を歪めた。

「バカはあなた達よ。私の目的は足止め。本当の目的はこっちよ」

アリーナのモニターにデュノア社の整備室の映像が映る。しかし、二人が驚いたのは別のだった。

「パパ!ジギル兄さん!」

数名の技術者と一緒に中央にいるマドックとジギル。そして少し離れた所にマシンガンの銃口を向けているラファールがいる。

「これは何……?」

「別にあなた達はどうなってもいいのよ。私達の目的はあのバカな社長とその息子の命よ。だけど正直に殺そうとしたらきつと邪魔されるだろうから、私が足止めを受け持ったのよ」

キールの話も二人にはあまり聞こえてなかったようで、ずっとモニターを見つめている。その際にキールはノエルの拘束から逃れる。

「お願いだ、止めてくれ。頼むから、止めてくれよ」

さっきまでの強気とは違って変わって、か細い声で繰り返し頼むノエル。目には涙が溜まっている。頼む少女を見て、キールは歪みき

った笑顔を見せつけた。

「残念だけど、それは無理よ」

ズガガガガガ!

キールが指をパチンとはじくと、相方のラファールがマシンガンを撃ち出す。整備室は一瞬で煙に包まれ、アリーナからでは何も見えなくなる。

「うわあああ! パパ!!! ジギル兄さん!!!」

「……」

ノエルは父と兄の名を叫び続け、シャルロットは漠然とモニターを眺めている。キールはそんな二人を見て、また笑いだしている。

暫くして、マシンガンを撃つのを止めた。まだ整備室の様子は見えなかったが、誰もが予想した。

飛び交う血、横たわる幾つもの死体。その中にあるデュノア社社長と息子の死体。

だけど、次に聞こえてきたのはキールの相方でも、マドックでも、ジギルの声でも無かった。

「おいおい、一般人に向かってマシンガンなんて乱射すんなよ。全部防ぐの大変なんだぜ?」

「……!?!?」

アリーナにいる三人が同時にモニターを見た。

そこに映るのはスカイ・キャッスルで弾丸を防いだ散歩中のはずの  
剣斗だった。

その頃の日本（IS強奪作戦1）（前書き）

思いの外、フランス編が行き詰まってるので息抜きに書きます。

その頃の日本（IS強奪作戦1）

剣斗がシャルロットとフランスに行く前夜。

信太はホテル『テレシア』の最上階レストランに訪れていた。

「すみません。予約していたアポロなんですが」

「アポロ様ですね、既に皆様お待ちになられております。こちらへどうぞ」

初老のウェイターがレストランの奥にある個室に俺を案内してくれた。今回ここに来たのは私用ではなく、亡国機業のアポロとして招集がかかった。

扉を開けると、まず視界に入ったのは赤髪の女性だった。

「アポロ！」

そう言うなり周りを気にせず俺に抱きついてくるハリス。顔が胸に埋まるという他人からしたら憎まれてもおかしくない状況だが、もう何回もされて慣れっこな俺は表情一つ変えない。

「もう今日あっただろ？」

「好きな人には何回会っても嬉しいものなのよ！」

そついうものか？俺には今一わからない。

「ハリスさん。先輩から離れてくださいッス」

俺の左隣で不機嫌そうに口を尖らせてる美少年…じゃなくて少女。

茶髪の少女の名はニユー。彼女は亡国機業に入って一年、正確には俺が亡国機業に誘ってから一年。何故か俺の事を慕って先輩と呼んでいる。一応同じ年なんだが……。

「あら、アポロはお子ちゃまには興味ないのよ？」

「お子ちゃまじゃなくて同じ年ツス。それに先輩は年増の人にも興味ないツスよ」

「大人の魅力がわからないなんて、ますますお子ちゃまね」

また始めたよこの二人は。俺が見る限りは毎回喧嘩してる気がする。何故仲良くできないのか、仮にも同じ仲間だろ。

「うっせえんだよ、がき共」

俺たちの前に座っているロングヘアのオータムが会話に入ってくる。

出来れば入ってほしくなかった。オレの予想ではこの後……

「「うっさいババア！」」

カチンッ

「誰がババアだ！？ テメエ等殺すぞ！」

「「上等よ（ツス）！」」

やっぱりこうなるのかよ。結局は全員が幼稚じゃないか。



「三人とも、久しぶりにみんなが揃ってるのよ。喧嘩はよしなさい」  
見かねた金髪の超絶美人、スコールが手をパンと叩く。すると三人の動きはピタリと止まり、渋々ながらも席に座った。

スコールは亡国機業の幹部、つまりは俺たちの上司にあたる。立場上だけでなく、実力も兼ね備えてる逆らおうとは思わないのだろう。三人が座ったのを確認して、俺も席についた。

円形のテーブルには俺からハリス スコール オータム ニューの順で座っている。本当ならエムもいるのだが、今は仕事中和のことでないらしい。

「久しぶりねアポロ」

柔らかな笑みを見せるスコール。オータムは自分にされたわけでもないのに顔を赤くしている。

「そうだな、連絡の為に何度か電話で話したけど会うのは久しぶりだな」

俺はそう言うと、テーブルに用意してある料理に手をつけた。みんなも料理を食べ始める。食事中はうるさかった三人も静かに食べている。

最近は騒がしい中で食べることが多かったので、これだけ静かな食事に寂しささえ感じていた。

「さて、そろそろ今回アポロを呼んだ理由でも話しましょうか」

料理を食べ終え、今はデザートがくるのを待っている時。ようやくスコールを口を開いた。

「アポロ、仕事よ」

仕事よと言われても、随分突然だな。それでも断る気は無いが。

「内容は？」

「切替が速いわね。今回の仕事は太平洋沖の軍事基地にあるISの強奪よ」

「ISの強奪？それはエムやオータムの仕事だろ。何でまた俺に？」  
通常はISの強奪はエムやオータムがやっている。俺はISの強奪なんてやったことすら無い。最初のうちにめんどくさそうだから断っていたら、自然と俺には回らなくなっていたのになんでだ？

「理由は簡単よ。アポロは最近実戦から離れてるからね、たまには仕事でもさせないと思ってね」

実戦から離れてると言われてもISには毎日乗ってるし、周りに合わせてはいるが訓練だつてやってるから鈍ってる感じはしなかった。スコールはそんな俺の心情でも読んだのか、首を横にふった。

「悪いけどアポロが毎日やってるのは競技なのよ。そんなのは実戦なんて言わないのよ」

言われなくてもそれぐらいはわかっている、つもりだ……。でも言われると俺は鈍っているかもしれないな、実戦も気持ち的にもな。

「スコールの言う通りだな。久しぶりにやらせてもらおうよ」

「そう言ってくれと思うってたわ」

「だけど俺のISはどうするんだ？ホープでいくのはまずいだろ」

そのぐらいはこの場にいる全員がわかっている。俺も今では世界でISを使える数少ない男として有名になった。その男が使うISもまた有名になる。だからホープも世界的に有名なISになってしまった。

そんな時にホープにISの強奪なんてしたら、確実に俺が疑われちゃうよ。だったらもしかして……。

「今回はアイツをつかっていいのか？」

俺の言葉にみんなが一斉にスコールを見る。俺が言うアイツとは俺の本当の専用機。わけあって1年前からずっと凍結状態にある。その代わりとして造られたのがホープだ。

「あれはまだ使っちゃ駄目よ。アポロにはダガーを使ってもらおうわ」

「げっ、ダガーかよ」

俺も思わず不満を口にしてしまう。

ダガーは亡国機業が最初に盗んだとされる第一世代型のISだ。早

くコアを取り出して新しい機体を造ればいいのに、今は俺やニューみたいな新入りが入った時の訓練用として残されている。

「ねえねえスコール。その仕事私も参加していいでしょ!？」

さっきまでデザートを幸せそうに食べていたハリスがずっと気にしていたことを聞いている。

「勿論よ。アポロはダガーを使うからしっかり援護してあげてね」

「やったー! 頑張ろうねアポロ」

まるで遊園地に行くことになった子供のように喜ぶハリス。

そんなに喜ばなくてもこうなるのはわかってただる。俺たちが双子ジューミニと呼ばれるようになってから一人で仕事をした記憶が無いよ。まあ、ハリスが来てくれるなら心強いけどな。

「……………」

隣ではふくれっ面でニューが俺を見ている。

ニューはまだ専用機を持たされていない。だから仕事に参加できないのが不満のだろう。言っておくが、俺は一夏や剣斗みたいに鈍感でもなければ、唐変木でもないのでハリスとニューが俺に好意を持っていることは承知している。俺のどこがいいのかはわからないけどな。

「ニューはオペレーターとして俺をサポートしてくれ。これはニューにし頼めないんだ、できるか？」

「も、もちろんッス。ボクがしっかりサポートするッス!」

シッポがはえてたら全力で振りそうなニュー。こいつは本当に可愛いな。俺の肩ぐらいままでしかない身長に美少年と間違えられてもおかしくない顔立ち、二人で町に出かけた時には必ず一回は男友達か弟に間違われてるぐらいだ。間違われるたびに涙目で「ボクは女ツス！」と講義する姿も可愛かったりする。

「ニューも来ればいいのに、あつニューには専用機が無いんだつたね」

「ハリスさん、いい加減にしないとボクも何をしでかすか解りませんよ」

「お子ちゃまに何が出来るか見てみたいわね」

「何だと!?!」

ニューはナイフ持って立ち上がる、それだけならまだいいのだがハリスはISを展開しようとしている。

止めなくちゃいけないスコールの楽しげに見ている。

駄目だな俺の上司。結局は俺が止めることになるのかよ。

「はいはい、ハリスはニューをいじめない。ニューもいちいちムキにならないこと。さっさと仕事終わらすぞ」

「そうね、速く仕事終わらせてアポロといちゃいちゃしなくちゃ」

「先輩がそう言うなら止めとくツス」

お互いが納得して獲物をしまってくれた。

「それじゃスコール、いつちょ感覚でもとりもできてくるわ」

「あなたなら失敗は無いだろうけど頑張ってね」

失敗は無いなんてプレッシャーかけんなよ。

俺はダガーを受け取るために個室を出ようとしたとき、後ろから微かな殺気が送られる。送り主なんて見なくてもわかる、オータムだ。

「アポロ失敗なんかしてスコールの顔に泥ぬってみろ。俺が殺してやるからな」

オータムの放つ殺気なんて俺にはそよ風を感じる。まだ殺気を送られるのに慣れてないので肩をすくましている。

前より良い殺気を出せるようになってるけどまだ未熟だね。どれ、たまには俺もやってみるか。

「随分偉そうになったな、オータム」

！？

個室を覆いつくす鋭い殺気。オータムだけでなくハリスも反射で臨戦体勢に入る。

スコールは俺の放つ殺気は冷たさよりも鋭さが半端なく、心臓を直接握られてるような感覚になると言ってた。

「わかってんのか、俺が本気出せばスコール以外なら一瞬でころせるぜ」

「っ……っ！」

俺はニューが持っていたナイフをオータムの喉元に押し当てる。オータムは俺から目を逸らそうとしているが俺の殺気がそれを許さない。オータムの目には俺への恐怖が読み取れる。

「…冗談だ」

俺が小さく笑うと殺気は霧のように消えていく。

「IS学園だと殺気を出すだけでも先生に目をつけられちゃうからね。時々殺気も出しとかないといざって時困っちゃうからね」

「テメエ」

オータムが立ち上がろうとするが、スコールの手が制止する。

「スコール…」

「やめときなさい。アポロも速く仕事に行かないと怖い先生に怒られちゃうわよ」

「わかってる、もう行くよ」

今度こそ個室から出ようとした所で、ニューがまだ固まってる事に気付く。

俺は別にニューに放ったつもりはないんだが。

「ニュー、大丈夫かニュー？」

「ふえ！先輩、ボク悪い事してないッス。何も、何もしてないッス

よ！」

なにを勘違いをしているんだこの子は。

「勘違いすんなよ。俺は別に怒ってるわけじゃねえよ」

「えっ、そうなんツスか？」

「そつだ。ほら、速く行くぞ」

「了解ツス！」

さっきまでの恐怖はどこえやら、ニューとハリスは俺の後を追って個室を出ていく。

個室に残ったオータムは額を流れる汗を拭き取り、怒りを露にする。

「アポロの野郎ぶざげやがって、何時か絶対ぶち殺す」

「オータムもいい加減にしなさい。アポロに勝てないのはわかるでしょ」

「やってみなくちゃわからないだろ!？」

「あれを使われても？」

「うっ……」

オータムは悔しそうに唇を噛み締める。スコールは優しく抱きしめた。



「大丈夫よ。あなたもまだまだ強くなれるわ」

「ああ、俺はスコールの為に強くなるよ」

「ええ、信じてるわ」

寄り添う二人はまるで恋人同士のようにであった。

その頃の日本（IS強奪作戦1）（後書き）

いかがですか？

亡国機業のオリキャラ、ハリスとニューは次の話の後書きにでも詳しく書こうと思います

それではまた次回の更新で！

その頃の日本（IS強奪作戦2）（前書き）

もうぐだぐだです。

あっ、最後にアンケートを取るのをご協力お願いします。

その頃の日本（IS強奪作戦2）

「うう……、パパ、ママ……」

何も無い焼け野原となった町の中央で、一人の少女が泣いていた。

ザッザッ…

後ろから誰かが歩いてくる音がした。少女が振り向く、そこには少女と同じように身体中に血がついている少年がいた。

「君は、この町の子か？」

「うん…」

「それは、両親か？」

「うん、もう死んじゃたけど」

「そうか……」

少年は少女の元に歩み寄り、両親の目をそつと閉じさせた。そして少女に問いかけた。

「お前は憎いか？」

「憎いって誰が？」

「町を焼け野原にして、お前の両親や友達を殺した奴が憎いか？ 殺

したいぐらい憎いか？」

殺したいという言葉に少女は戸惑った表情をみせるが、決心したのか少年の目を見ていった。

「憎い。パパやママ、友達を殺した奴が憎い。殺してやりたい！」

「そうか、だったら俺と来い。俺がお前に町をこんなにした奴とそいつを殺すための力を与えてやる」

「わかりました。でも、あなたは誰ですか？」

少女の問いかけに少年は「ごもつとも」と言い、少女の顔に付いた血をハンカチで拭き取りながら答えた。

「アポロ、俺の名前はアポロだ。お前はこれから亡国機業に入ることになる。で、お前の名前は？」

「ニューです」

「ニューか、良い名前だな。これからよろしく」

「こちらこそ、よろしく願います先輩！」

先輩と言われて少年は驚く。

「先輩じゃなくてアポロでいいよ」

「いえ！これから亡国機業という所に入るならアポロさんは先輩です。だから先輩と呼ばせてもらいます」

「律儀な奴だな。まあいいや、ニューお前はもつこの町の人間じゃない、亡国機業のニューだいいいな？」

「はい！」

「良い返事だ。それじゃあ行くぞニュー」

「はい！！！」

このときの少女には、両親を殺した奴への殺意は消え、代わりに目の前の少年に対しての好意が芽生えていた。

『先輩！先輩！！』

「！！！」

通信で呼ばれていたのか、珍しいなああの時の事を思い出すなんて。俺とハリスは今太平洋の上を高速で移動している。移動と言っても俺が今使ってるダガーは第一世代型のISなので機動力は殆ど無い。だから俺はフォースシルエット状態のインパルスにおんぶする形で乗らせてもらってる。

『どうしたんですか先輩、体調でも悪いんですか？』

「いや、ちょっと考え事していただけだから問題ないよ」

「もしかして、私達の新婚生活について考えていたの？」

ハリスはどうかやったらそういう考えに至るのかな？

俺はあえてハリスの言葉を無視してニューと話す。

「ニュー、多分仕事が終わってそっちに戻る頃には日付が変わってるよな」

『そうツスね。失敗しても成功しても先輩達が戻ってくる頃には日付が変わってるツス』

失敗とか縁起でも無いこと言わないでほしいんだよな。俺って意外と気にする人間なんだよ。

「ふーん、なあ明日が何の日か知ってるか？」

『知ってるもなにも明日は先輩がボクを亡国機業に誘ってくれた日じゃないツスカ！』

よくそんな嬉しそうに言えるな。その日はニューが親と故郷を失った日だろ。

「あれからもう一年も経つんだな」

『そうツスね。一年も経つのになかなかボクの町をあんなにした奴は見つからないツスけどね』

声でわかる、ニューは今でも充分あいつを憎んでる。それこそ殺したいぐらいに。  
もう1年も経つものだから話してもいいかもしれない。

「ニュー、戻ったら大事な話がある」

「大事な話ツスか？」

「お前の今後に関係する大事な話だ」

「？。とりあえずわかったツス。あつ、先輩そろそろ目的地に到着するツス」

俺達の視線の先、目測でおよそ3キロ先に軍事基地が見えた。興味がないので詳しくは知らないが、アメリカ力を含んだ3国が合同でISの開発・実験をしてる施設らしい。

「いいかハリス。今回の作戦は俺が敵の気を引き付けるから、その間にISの回収を頼む」

「ダガーだと大変じゃない？なんなら私が気を引こうか？」

「スコールの情報だと今は警護用のISもいないから俺一人で充分だ。それにハリスだとやり過ぎなんだよ」

ハリスはちゃんと任務はこなすけど過激過ぎんだよな。前の任務だと負傷者を96人も出したらしい。本人は3桁いかなかったから上手く出来たと得意気に話していた。

「やり過ぎなんてアポロが言えるの。だってアポロ　　でしょ」



否定は出来なかった。ハリスの言ってることに嘘偽りは無い、俺が一番やり過ぎた。

「ごめん。これ、アポロが一番気にしてたことなのに……」

「別にいいさ、本当の事だからな」

「本当にごめん……」

ハリスは最初はガミガミ言い続けるけど、自分が悪いとわかるとしつかり反省する娘なんだよな。そこがまたハリスの良いところなんだけどな。

「もういいから、ほらもう着いたから任務を始めるぞ」

「了解！」

仕事モードに切り換えたハリス。瞬時加速で軍事基地の前にいく。そこから俺は地上にゆっくり降下する。ハリスはその間に大きく迂回してISがある場所に向かつてる。

「侵入者確認！戦闘員は至急滑走路に集まれ！繰り返す、侵入者確認！戦闘員は」

基地に警報が鳴り響き色々な場所から兵士がぞろぞろと現れてくる。兵士は警告を発する事なくアサルトライフルを掃射する。それらは一直線に俺に向かつてくるがISの絶対防御の前では無力である。

「ISを使って普通の人に攻撃するのは気が引けるけど、これも任

務だから許せよ」

俺は短剣を呼び出し、兵士たちを襲つ。

俺は短剣で兵士の銃を切り裂き、柄でがら空きになつてゐる兵士の溝に一撃を入れる。

「うっ！」

小さなうめき声をあげ兵士は気を失う。俺はそのまま次々と兵士たちを襲つていく。既にかなりの数の兵士を倒してるが、それを上回る量の兵士が流れ込んできている。

いったい何処にこんだけの兵士がいたんだよ。

「おいハリス、そつちはまだ終わんないのか？」

「一機は終わったんだけど、何でかもう一機あったからついでにそつちもやつてるからもう少し粘つて」

もう一機だと？まあ3国が合同でやつてるんだからISが2、3機あつてもおかしくないか。

もしかしてスコールは、これがわかつてたから俺たちに仕事をさせたのか。エムとオータムはとも他人と仲良く仕事がやれる奴らじゃないからな。

「敵の動きが止まつたぞ！撃て！撃てえ！！」

隊長らしき人の怒号と共に再び攻撃が開始される。

ライフルにマシンガンにミサイルランチャー、あらゆる対人兵器を注ぎ込む。ISの前では無力と思つていたが、塵も積もれば山と

なる』という言葉があるようにダガーにも段々とダメージが蓄積していつていた。俺は軽く舌打ちしたあと、また兵士を襲い始めた。相手の抵抗も虚しく、20分がたった頃には兵士は全員気を失い俺だけが立っていた。

「流石アポロ、もう終わっちゃったんだ」

振り返ると両脇にISを抱えたハリスがいた。どうやら少し前から見ていたみたいだ。

「ざっと320人の負傷者かね」

「誰も怪我はしてない、気を失ってるだけ。だから負傷者はゼロ」

「あらホント、アポロは優しいのね」

「面倒な事にしたくないだけだ。ほら帰るぞ」

「はい」

俺はハリスからIS受け取り、行きと同じ様に俺がハリスに乗っかる形で日本に戻った。

日本に着く頃には予想通り日付は変わり、太陽が水平線から顔を覗かせていた。

「朝日が綺麗ね」

「そうだな」

ハリスは朝日に見惚れていたが、俺は別の事で頭が一杯だった。

(遂にこの日が来ちまったか。かなり面倒だけど、こればっかはし  
っかりけじめをつけなくちゃな)

もう一度朝日を見ると、太陽はすでに全体を現し、眩しくて見えな  
いほどだった

「先輩、お疲れ様ッス」

海岸のすぐ側にはいつものようにスポーツドリンクを持ったニュー  
と、この日は珍しくスコールも俺たちを待ってくれていた。  
俺は抱えていた二機のISを近くにいた技術者たちに渡してダガー  
を解除した。

「いつも悪いな」

「いえ、先輩をサポートするのがボクの仕事ッスから」

俺はニューからスポーツドリンクを受け取って口を潤す。仕事終わ  
りにはキンキンに冷えた飲み物を飲むのが日課である。体、特にお  
腹に悪そうだが一度も腹を壊したことはない。

「二人ともお疲れ様。きつちり仕事はこなしてくれたようね」

「何が仕事だよ。圧倒的力を持つ奴が弱い奴から何かを奪って、や  
つてることはガキ大将と変わらねえだろ」

「そんな事言わないの。はいこれ、とりあえずは今回の報酬ね」

そう言われて渡されたのは10万円だった。  
高校生に簡単に大金渡すなよ、この金持ちは。

「今日はそれで三人とどつか遊びにでも行ったら？」

「遊びかあ。二人はどうす『行く(ツス)!!』 だよね」

三人で遊びに行くのも久しぶりだな。半年は行ってなかったから結  
構楽しみだけど、その前にやる必要があるんだよな。それやったら  
多分遊びに行けないだろうけど。

「遊びに行くのは構わない、けど行く前にニューに話しておきたい  
ことがある」

「それって行く前に言ってた大事な話ツスか？」

「そつだ、こつちに来てくれ」

俺たちは二人に聞こえない所まで行くと話を打ち出した。

「まず話す前に確認したいことがある。ニューは俺がニューを亡国  
機業に誘ったときに言ったこと覚えてるか？」

「亡国機業に入ったらボクに故郷をあんなにした奴とそいつを殺す力をくれる、でしたよね。！！、もしかしてわかったんすか!？」

勘が鋭いな。だてに一年も亡国機業にいないか。

「わかったと言うよりはわかってたと言う方が正しいな」

「どついう意味ッスか？」

「本当は最初つからわかってたんだが色々事情があつて話せなかつた」

「いまいち意味はわからないッスけど、誰かわかつてるなら早く教えてくださいッス！」

そんなに知りたいか、まあそれが当然の反応だよな。

「ただ俺はまだ迷つてる。このことを教えるのがニューの為になるのかと、教えたら一番つらいにはニューのはずだ。もしかしたらこのまま一生話さないのがいいのかもしれない。」

「いや、そんな事はない。話さなくちゃいけないんだ。ニューの、何よりも自分の為にも。」

「わかった。まずは殺すための力だな」

俺は腰から拳銃を取り出し、ニューに握らした。冷たい鉄の塊、人を殺すには充分すぎる物だ。

それを俺は自分の左胸の少し右側、つまりは心臓の部分に押し当てた。

「そして俺がお前が殺したいほど憎い奴だ」

「ちょっと冗談はよしてくださいよ」

あまりにも唐突過ぎて思考が止まってしまってるニュー。  
こうなるのはわかってたけど、辛いな。

「冗談なんて言うわけないだろ。俺がお前の家族や友達を殺した」

「何で、何でツスカ！？どうして先輩がボクの町を襲ったんスカ！？」

「簡単な話だ。それが仕事だったから、何で俺にそんな事さしたのかは知らないけどな」

「何すかそれ！」

ニューの大声にハリスとスコールもただ事ではないのがわかったようだ。

ニューが俺に銃口を向けてるのを見てハリスが凄い形相でこっちに来る。

「ニュー！何考えてるか知らないけど、アポロに銃向けるなんて死ぬ覚悟は出来てるの！」

ISを部分展開してビームライフルをニューに向けたハリスに俺は怒鳴った。

「やめろハリス」

「やめるわけじゃないでしょ！この子が何してるかわからないの。ニューが銃を下ろさないなら私がニューを殺す」

「やめる！..！」

「!?!」

殺気を混ぜた怒鳴り声にハリスも怯む。

「これは俺とニューとの問題なんだ。悪いがハリスは部外者なんだ」

「でも……」

「……」

何も言わないで俺はハリスの目を見た。やがて観念したのかハリスはため息をついた。

「わかった。アポロを信じてあっちで待ってるわ」

「うん、ありがとう」

「だけどね」

ハリスは振り返って言葉を続ける。俺ではなくニューに向けてだ。

「もしアポロを殺したら、私があんたをぶち殺すから」

ぶち殺すとは残虐的な言葉だな。

俺はハリスが向こうに行ったのを確認してニューと向き合った。



「ニユーは言いたいことあるか？質問には全て答えるぞ」

「…ボクが先輩の好きだったこと、知ってましたか？」

「知ってる、ついでにハリスもな」

ニユーは俺の答えに何の反応も示さず、次の質問に移った。

「ボクがあの時、どんなにつらかったかわかってたスよね？」

「ああ」

あの悲惨な場面を見れば誰だって辛い出来事だと思うさ。

「だったら！」

引金にかける指に力が入る。

「どうしてあの時直ぐに言ってくれなかったんスか？1年も経てば忘れるとも思っただんスか？ボクが先輩の事好きなれば殺さないとも思っただんスか！？」

違う、俺にそんなつもりはない。そう言いたいのがそれは出来ない。だから俺はあえて言う。

「そうだ、そうした方が生存確率だつて上がるし、なにより仇が目の前にいるのに仲間だと思ってるお前を見るのが面白かったからな」

「殺してやる！」

ニユーは更に指に力を入れる。  
それでいい、これでニユーの気も少し晴れるだろう。俺もそろそろ生きてるのも辛くなってきた。

あの仕事で俺が殺したのは164人。殺した時は何も感じなかったが、その後が地獄だった。毎晩夢に出てくる殺した人々。そして最後に出てくるのは亡き両親の前で泣きじゃくるニユーだった。  
今思うと、なんで俺はニユーを亡国機業に誘ったのだろうか。仕事内容ではニユーも殺さなくてはならなかった。なのに出来なかった、別に特別な感情を持ったわけでもない。俺も変わった奴だと思っ  
く思った。

勿論ニユーを連れてきたときにはスコールにもハリスにも反対されたがそれでも俺は全く気にしなかった。できることなら少しでもニユーに幸せになって欲しかった。それが俺に出来る罪滅ぼしだと思  
ってた。

だが半年ぐらい経った時からニユーが俺に好意を持ってくれることに気付いた。この時から俺はいつかは俺がニユーから全てを奪った事を話そうと思った。いつかはいつかはと思ってる内にまた半年が経ってしまったが、丁度1年が経つ今日に話そうと決心できた。  
たいして長くはない人生だったが、それなりに楽しめたから未練なんてものは無い。

……やけに回想シーンが長いな。そろそろ思い返す事もないんだが、  
見てみるとニユーは肩を振るわせながら、大粒の涙を流していた。

「どづした？早く殺せよ、俺が憎いんだろ」

「憎いッス。でも、でも……」

ニユーは途切れ途切れの単語を繋げて話す。

「殺そうとしても、先輩との、楽しい記憶が、頭をよぎって、ボク  
どうしたらいいかわからなくて……」

躊躇わずに殺せばいいだろ。そうしないとお前の1年は何だったんだよ。

「どうしたらいいかじゃなくて、俺を殺せば良いだろ。でなくちゃ  
殺されたみんなはどう思う、きつと仇を取ってもらいたいんじゃない  
いか？」

「先輩は、死にたいんすか？」

「死にたいな。人を殺すのは案外辛いからな、そろそろ楽になりた  
いかな」

「だったら、ボクは先輩を殺さないツス」

ニユーは俺に向けていた銃を下ろした。

何で殺さないんだよ。

「先輩が言ってることは、唯人を殺した事実から逃げたいだけじゃ  
ないんすか！そんな事されたら、それこそ殺された人はどう思うん  
すか！？勝手に殺されて、勝手に死なれたら何の為に殺されたかわ  
からないじゃないですか！だったらせめて生きてください、生きて  
罪を償ってください！」

「……………」

「それに、先輩でも耐えられ無い人殺しの重みをボクに背負わせないでください！ボクは、ボクは、うわああん！！」

言うだけ言って終いには泣き崩れてしまった。一体俺は何がしたいんだ。

人殺しの事実から逃げる？ 違う

ニユーを俺と同じ人殺しにしたい？ 違うだろ

まず俺がしたかったのは…

「ごめんな」

「うっ…ひくっ……」

まだ泣き続けるニユーの頬を流れる涙を俺はハンカチで拭いた。そうだ、俺は謝らなくちゃいけなかったんだ。最初会った時は謝っても聞いてもらえないと思った。だから俺はニユーを亡国機業に誘ったんだ。いつかは謝ろうと思ってたのに、俺を慕ってくれるニユーを見てると謝れなかった。結局、俺は怖かったんだ。死ぬことよりもニユーに嫌われるのがニユーの期待を裏切ることが怖かったんだ。ただ今とは違う。俺に好意を持ってってくれるニユーに誠意を持って対応しなければならぬ。

「俺がもっと早く言ったら苦しまなくてよかったのに、本当にごめん」

「……また拭いてくれたツス」

「また？」

「先輩、初めて会った時もこうして拭いてくれたツス」

拭きはしたが、あの時は涙じゃなくて血だったんだけどな。

「きつとあの時にはボクは先輩の事が好きでした」

「それは好きじゃないんじゃないのか？」

「そうかもしれないツス。けど一緒に居てわかったツス、いつも冷静で怒ると凄く怖くて、仲間想いな先輩が大好きツス」

わかっていても面向かって大好きなんて言われると、俺もいささか恥ずかしいな。

いきなり良いムードになってるのを感じたハリスがまた来ようとしているが、スコールがしっかりと押さえてくれていた。

「先輩、ボク家族や友達を殺されたり、殺したのが先輩だと知らされてとても辛かったツス」

「そつだよな、ごめん」

「でも、それ以上に大好きな先輩と同じ亡国機業にいて、ボク最高に幸せツス」

幸せか、仮にもそう思ってくれるならまだ気持ちになれる。

「それはよかった」

「だけど、先輩はボクの大事な物奪ったから、ボクも先輩の大事な物奪わせてもらおうツス」

俺の大事な物？

思い付くのは俺の専用機しかないのだが、あれをあげるわけにはいかないんだよな。

「気持ちはわかるけど、あれをあげるわけには　むっ!？」

首を傾げてる俺にニューは背伸びをしてお互いの唇が重なった。まさかのキス、もしかしてニューの言う俺の大事な物って…。

「先輩のファーストキス、奪わせてもらったツス」

やっぱりな、確かに俺にとってファーストキスだが、別に大切な物ではないけど。

だが問題なのはそこではない。それは

「小娘ええ!」

来たな邪神ことハリスが恐ろしい形相で向かってくる。止めていたはずのスコールもダメでしたとお手上げのポーズをしてる。

「あんだ、私ですら出来ずにいたキスするなんて、どういう神経してんのよ!」

なんだハリスもキスがしたかったんだ。キスを否定するつもりはな

いが、お互いのバイ菌を移し合う行為のどこがいいのか俺にはよくわからない。

「ある偉人は言ったツス、何事も早い者勝ちだと」

それよく聞くけど、たしか偉人の言葉では無かったような気がするんだけど。

「だったら私もやるわよ！」

え、今何て言った？

「私もキスするけどいいよねアポロ！ニューもしたんだから私にもやる義務があるわよね！」

どういう理屈だよ。

唇をつき出して迫ってくるハリスのおでこを全力で押し返す。

「何で拒否するのよ！ニューはよくて、私が駄目なんて立派な差別よー！」

「差別じゃねえよ、俺はニューから色々奪っちゃったからな。そのお返しだから許したんだ」

「だったら私も奪われたわ」

ほう、何を奪われたか興味があるな。俺には奪った記憶はないんだがな。

「アポロに、恋心を奪われちゃったわ」

そう来たか。ものは言い様とはこの事を言っただろうな。

「よしお前たち、早く遊びに行くぞ。時間は有限なんだぞ」

「はいッス」

「スルー！？そこでスルーはいくらなんでも酷いよアポロ」

二人の気分はきつと天と地の差があるだろうけど、それでも俺の後をしっかり付いてきてくれる。

最近はIS学園にいて色々考えることもあったけど、こうして三人で騒いでると改めて実感できる。

俺は亡国機業にいれて良かったと。



その頃の日本（IS強奪作戦2）（後書き）

いかがですか？

ニユーとハリスの詳細は後書きではなく、次回に書こうと思います。

さて、唐突ですがアンケートです。

以前に剣斗とシャルロットの出会いの話のように番外編の話を1、2話書こうと思います。

候補は次の通りです。

1・たまには書いてあげようよ

剣斗とフランのドキドキデート！

2・続きでも書いてみようか

亡国機業の三人の遊び！

3・オリキャラも増えたしそろそろやってみるか  
キャラクター人気投票！

4・意外な組み合わせ？

ニユーと剣斗が町で出会ったら

以上となっております。一応一人3票にしておきます。

ひとつに3票入れるのもよし、2つと1つや3つに入れるのありです。

投票は番号に何票と書いてほしいです

期限は約一週間にします。

ご協力お願いします。

オリキャラ紹介（亡国機業側）（前書き）

とりあえず書いてみました。

## オリキャラ紹介（亡国機業側）

名前・アポロ（神城信太）

年齢・15歳

身長・177 / 6（剣斗と同じ）

体重・68 / 3

髪型・銀髪の短髪、所々が黒髪

瞳・赤色

好きな物 事 人・IS、チキンカレー、亡国機業のみんな、

嫌いな物 事 人・弱いもの虐め、大根、織斑先生（嫌いより苦手）

専用機・ホープ&???

参考

剣斗の中にあつたもう1つの人格だったが、6年前に篠ノ之束によつて剣斗から離され、束が作った限りなく人間に近い体に人格を定着された。その後は束の身の回りの世話や仕事のサポートをしていたので、家事やISの知識はかなりのもの。詳しくは話されていないが、約2年半前から亡国機業に入りそこでアポロと呼ばれるようになる。また、仕事の中でニューの町を襲い、164人を殺したの

は亡国機業でも負の記録として残されてる。この仕事の本当の狙いは人殺しをさせることでアポロから人間性を無くそうとしたが、そこでニューと出会ったことで逆に人間性豊かになった。現在の専用機はホープだが、本当はもう一機あり、そちらが本来の専用機だが訳あって1年前から凍結状態にある。(でもアポロの意思でいつでも凍結状態は解除できる)

名前・ハリス

年齢・19歳

身長・169 / 2

体重・59 / 6

髪型・赤髪のロングヘアー(腰の少し上ぐらい)

瞳・碧色

好きな物 事 人・犬、ケーキ、アポロ

嫌いな物 事 人・虫、とろろ、アポロ以外の男

専用機・インパルス(待機状態は時間で色が変わる指輪)

## 参考

亡国機業に前からいる女性。世界中の男は全てクズだと思っているが、亡国機業に入ったばかりのアポロに完敗した後アポロから仲良くしようと言われアポロだけは他の男とは違うと思っている。スタイルは抜群だが、ニユーと仲良くしてるアポロを見る度にアポロがロリ趣向なのではと疑い、逆に自分のスタイルにコンプレックスを抱くこともある。後先考えずに思ったことを言ってしまうが、自分が悪いとわかるとしつかり反省する。専用機のインパルスはアポロが仲良くなった証にとくれたものなので何よりも大事にしている。

名前・ニユー

年齢・15歳

身長・159 / 8 (自称160)

体重・53 / 2

髪型・茶髪のショートヘア

瞳・黒色

好きな物 事 人・本、ハンバーグ、先輩アポロ

嫌いな物 事 人・芋虫、ミミズ、ピーマン、ハリス(ライバル視)

専用機・無し

参考

亡国機業に入ってたまだ1年の少女。1年前にアポロに故郷と家族を奪われ、さ迷っていたところを亡国機業に誘われた。最初は町を壊した人物を殺すために入ったが、それがアポロと知ってからはアポロの役に立つ為に日夜努力している。専用機は無いが、読書が大好きで部屋は本で一杯で寝る所が殆ど無いほど。そのお陰か、ISの知識は亡国機業一と言われている。男と間違われることもある容姿にひどいコンプレックスを持っている。その延長線上でスタイル抜群のハリスにはいつも反抗的。アポロのファーストキスを奪った。

オリキャラ紹介（亡国機業側）（後書き）

いかがですか？

剣斗やフラン、ノエルはフランス編が終わった後にも書こうかな。さて、次回こそはフランス編を終わらせねば……。

あつ、アンケートはまだ実施中なのでみなさんどんどん答えてください。（思ったより答えてもらえず、内心焦ってます） すみません唯の八つ当たりになってしまいました。

それではまた次回の更新で！



臆病者？それとも天才？（前書き）

かなり強引ですが、今回でフランス編が終了です

臆病者？それとも天才？

「神城君、どうして？」

マドックは現状が出来ない頭で剣斗に問いかけた。

突然現れた自分の会社の社員に銃口を向けられ、初めて死を意識した。引き金を引いたのを見てマドックはおもわずジギルを抱き寄せていた。しかし、いつまでたっても弾丸が二人の体を貫く事は無かった。

二人がゆっくり目を開けると目の前には長方形の浮遊物がすべての弾丸を受け止めていた。さらに視線の先にはISを纏った剣斗がいた。

「勘違いすんなよ」

視線は相手に向けながらも、剣斗はマドックの問いに答えた。

「俺はお前たちが死んでも何とも思わねえし、逆に社長が死んでくれたら俺も清々するよ。でもさ」

剣斗はビットを自分の周りに集合させて言葉を続けた。

「お前たちが死んだらシャルにノエルが悲しむんだよ。俺は誰かが泣くとわかってるのにはおっておけるほど薄情者じゃねえんだよ」

「そうか、感謝する」

「別に感謝しなくてもいいさ。その代わりマドックはちゃんとシャルと話せ、それとジギルさんはもっとノエルは誉めてやれ。ノエル

はあいつなりに頑張ってるんだ。その努力は無駄にしないでくれ」

ふたりは無言で返答する。

剣斗は一度ため息をつくとか何か武器がないか見渡した。

(使えそうな武器、使えそうな武器……あつ、これ見た目良さそうじゃん)

剣斗が近くにあった武器を手に取ると、周りから一斉に「げっ！」と声があがった。

「ちよつと待ちなさい、それは確か……」

相手の顔がひきつってるのが見えたが、剣斗は気にせず武器の引き金を引いた。

「わっ……!!」

凄まじい反動に剣斗の体勢が崩れる。それに対して相手は勢いよく吹き飛ばされて整備室の壁を突き破ってアリーナまで向かった所で止まった。

「ミーシャ大丈夫!？」

「ごめんキール、殺しそこねたわ」

「今はそんな事いいわ。それよりも先ずは目の前の敵よ」

二人の視線の先にはミーシャを追って来た剣斗がシャルロットとノ

エルと合流していた。  
剣斗が持っていた武器にキールは眉をひそめた。

「あれって、まさかうちの鎧殺し（アーマー・ピラス）？」

「そのまさかよ、全く面倒な武器を……」

鎧殺し（アーマー・ピラス）。人間が使う対戦車ライフルをIS用に強化した武器だ。威力はデュノア社のアサルトライフルやショットガンとは比べ物にならないが、その分一癖も二癖もある。例をあげるなら、一つは反動がもの凄いな事、もう一つは一発毎に弾を装填しなくてはいけなく、隙が生じやすい。それらの問題を解決出来ずに実用化されなかった武器。それを剣斗はなにくわぬ顔で使っている。そんな彼に二人は苦笑いしか出来なかった。

「一応聞くけど、大丈夫か？」

俺は座り込んで二人に声をかけた。外傷は少ないみたいだけど、さっきの映像が相当響いてるみたいだな。ノエルに至っては腰を抜かしてるかもしれない。

「ああ、何とか……」

「僕も……。でも、シャニが持つてるそれって鎧殺し（アーマー・ピラス）？」

これって鎧殺し（アーマー・ピラス）っていつのか。なるほど、見た目に負けない立派な名前だな。それにしてもデュノア社は武器に殺しつて名付けるの好きだな。もうちょっと可愛らしい名前付けなのかな。

「名前はよく知らないけどさっき拾った。だから俺の物」

「酷い理論だね」

「気にしたら負けだぞ。さてと、俺はあの仕付けのなってない社員をぶっ飛ばしてくるか」

「待てよ、これは俺達の問題だ。俺たちが何とか」  
強がってみせるノエルだが、体は正直で腰に力が入らず立てないらしい。

俺から見たら足が痺れて立てなくなってるみたいで笑いそうになるのを何とか抑える。

「立てないなら無理すんなよ、お嬢様」

「馬鹿にすんなよ。見てろよ今すぐ立って……、シャルロット、手かしてくれ！」

「あはは……」

もうシャルも苦笑するしかないよね。俺は苦笑しようとしたら爆笑

に変わってしまいそうなので、無表情で見つめて大きくため息をついた。

「もういいよ。シャル、ノエルについてやってくれ」

「一人で大丈夫？ シャニのフューチャーだって使えるパッケージ少ないんじゃないの」

シャルが言ってるのは間違いじゃない。今使えるのはスカイ・キャツスルとサテライトだが、これは攻撃と防御の一点に特化したパッケージだけど、いまだにパッケージの高速換装ができない俺にはちときつい。せめてあの時戦ったインパルスと同じぐらいの高速換装が出来れば話は別なんだけどな。

「負けねえよ。だって俺男の子だもん」

「それって理由になるの？」

なるんだよ、俺のなかではな。

俺はステアービットを前方に配置し、足元にあるステアービットを踏み込んで相手に向かっていった。

「来るわよミーシャ！」

「わかってるわキール！」

二機のラファールはライフルとマシンガンで直線に向かってくるフューチャーを狙う。弾丸は一直線に近づいてくるが、当たる数十センチ前でシールドビットが弾丸を弾く。これでライフルは全て防げ

るが、マシンガンではそうはいかない。防ぎきれない弾丸がシールドエネルギーを削り取るが、剣斗は怯むことなく向かっていく。

「少しは避けなさいよ！」

ミーシャが叫ぶが、剣斗はそれでも近づき一言。

「男の子が逃げるのはださいでしょ」

「うぎっ！」

「落ち着いてミーシャ。私に任せて！」

ミーシャを宥めながらキールが前に出る。

相手の狙いはわかってる。鎧殺し（アーマー・ピアス）は一発毎に弾を装填する必要がある。それに状況からして弾はそんなに持っていないはず、だからこそこつちの攻撃を無視して至近距離での射撃を狙ってる。だったらこつちの狙いも決まってる。

キールは右手の盾殺し（シールド・ピアス）を腰まで引く。軽く体を上下に動かしてタイミングを合わせる。二人の距離が１メートルを切った瞬間。

「そこっ！！！」

腕を力一杯前に伸ばす。甲高い音が鳴り響き、キールには確かな手応えがあった。しかし目の前で碎かれたのはフューチャーの装甲でなく。

「ステアービット!?」

驚きの声を上げるキール。しかし何が起きたかは瞬時に理解できた。剣斗はキールが盾殺し（シールド・ピラス）を引いたのを見て瞬時に相手の狙いを悟り、逆を突くように盾殺し（シールド・ピラス）の射程に入った時に前にステアービットを配置してその場から離脱したのだ。そして剣斗が狙うのは隙が出来たキールの右脇腹だ。

「男の子は逃げないんじゃないの?」

「普通はな。でも俺臆病者だから」

ガシャンと鎧殺し（アーマー・ピラス）をキールの顔面に向けるが、その顔には余裕がうかがえた。

「今よミーシャ!」

「OKキール!」

剣斗の逆側、キールの左脇腹から現れたのは両手にショットガンを持ったミーシャだ。

「念には念を。策は何重にも練つとかないとね!」

「策ねえ、だったら気付かれないような策を練ろよ」

ドンツと激しい音を立ててミーシャが派手に吹っ飛ぶ。

剣斗は先ほどまでキールに向けていた鎧殺し（アーマー・ピラス）の銃口をミーシャが現れるよりも前に左脇腹に向けてためらうことなく撃つたのだ。



ミーシャのラファールからは煙が立ち上がり、シールドエネルギーが尽きたことを示していた。

「おお、なかなかの威力だな」

「……………」

新しい武器に感心しながら次弾を装填してる剣斗を黙ってみているキールの頭にはある単語が浮かび上がっていた。

（天才……ね）

天才と言えば世のほとんどの人はISの開発者、篠ノ之束を思い付くだろうが、あれは造る天才。だが、戦う天才は間違いなく彼だろうとキールは確信していた。

（経験がないからまだ大した実力はないけど、その分吸収力が半端じゃ無いわね。前にデータで見たときとは全く違うわ。何も考えてないようでは実はよく考えてる）

目の前で鎧殺し（アーマー・ピラス）に弾を装填している剣斗は誰が見ても隙だらけだ。だけどキールは攻撃をしない、その行為すら読まれてる気がしたからだ。

「負けたわね……………」

キールはラファールから降りて両手を上げる。つまりは降参のポーズだ。キールの降参にミーシャだけでなくシャルロットやノエルも驚いている。例外として剣斗だけは

「えっ、降参しちゃうのかよ。これから楽しめそうだったのになあ」  
「がっかりした様子だったがISを解除して」

「まっ、戦う必要が無いならそれに超したことは無いか」

と自分で納得して、シャルロットたちの元へ戻っていく。

「一応勝ってきたけど、満足ですかお嬢様？」

嫌みたっぷりに言う剣斗にノエルは立ち上がって強がる。

「俺でも何とか出来たぞ！」

言ってはみたが、足はまだ震え、産まれたばかりの子やぎのようで可愛さしかなかった。

そんなノエルに剣斗は苦笑しながら立ち上がる。

「さてと、問題は解決したからな。俺は一足先に日本に帰らせてもらっよ」

「「えっ!?!」」

突然の帰ります発言にシャルロットとノエルも驚く。見るとアリーナの出口にはいつの間用に用意したのか剣斗の荷物が置かれている。

「いやさあ、俺日程考えずに衝動的にフランスに来ただけど、明日には日本で行かなくちゃいけない所があるんだよ。いやあ、すっかり忘れてたよ」

豪快に笑っている剣斗に二人はただ啞然と見つめていた。

「シャルはどうする？もう少しフランスにいるか？」

「うーん、僕も別にやることはないし日本に帰ろっかな」

「えっ！シャルロットもか！？」

今度は一人で驚くノエルに剣斗とシャルロットはニヤリと笑って振り向く。

「もしかして帰ってほしくないの。寂しい？」

「ばっ、バカ野郎！寂しくねえよ、ただ一人だとやることがないだけだ！」

つまりは寂しいって事じゃないのかと思いつつながら剣斗はノエルにあるものを渡した。ノエルが手を開くと手の平にはIS学園のバッチが置かれていた。

意味が分からず首を傾げていると剣斗はシャルロットを連れてアリーナを出ようとしていた。

「あんまり居ると面倒な事になりそうだからさっさと帰らせてもらっわ」

「おい、この二人はどうするんだよ！」

「そんなの自分で考えろよ。社長の娘だろ」

「関係無いだろ！つかこのバッチは何だよ！」

渡されたバッチを掲げながら見せるノエル。剣斗達は既にアリーナを去ろうとしていたが、剣斗が最後に一言。

「それ、俺たちが逃げるためにノエルから気を引く用の道具」

「なんじゃそりあー！」

叫ぶノエルだが、剣斗達はもうアリーナにはおらず、一人残されたノエルは肩を振るわせながら誓った。

「あの野郎、面倒事だけこっちに押し付けやがって。覚えてろよ、いつか絶対仕返ししてやる！」

再びアリーナにノエルの叫び声が虚しく響いた。

臆病者？それとも天才？（後書き）

いかがですか？

次回はみなで剣斗の故郷に行きます。一応蘭ちゃんみたいなオリキャラも出ます。お楽しみに！

あと前に取ったアンケートなんですが、こっちの勝手な事情により票数に関係なく2をやらせてもらおうと思ってます。

アンケートに答えて下さった皆さん。本当に申し訳ありませんでした……。

## 普通の町

未だ衰え知らずの太陽が空で元気に活動している真夏のある日。駅前にはいつもの面々が集まっている。

前に集まった時は全員制服だったが、この日は私服のためか周りからの視線を一身に受けている。

「よし、みんな集まったか？」

「一応……」

「よろしい、じゃ出発だ」

「ちょっと待ちなさい！」

剣斗が腕を上げて歩き出そうとした時、鈴が呼び止めた。振り返るとシャルロット以外は全員が何か言いたげだった。

「どうしたんだ皆？その文句言いたそうな顔は」

「文句ありまくりよ！前にもあったけど、また急に呼び出しとして今回は何処に行くのよ！？」

話は遡ること昨日の夜。どたばただったフランスから帰ってきた剣斗は、学園に着くと直ぐに専用機持ち全員に、

「明日朝9時に駅前集合ね。時間厳守だからな」

と言ってきた。当然全員が意味がわからず聞き返そうとしたが、用

件だけ言つと剣斗はさつさと何処かに消えてしまった。結局誰も理解はできなかったが、行かない訳にもいけないのでこうして集まっている。

「言つてなかったっけ？今回は俺の町に行くぞ。信太を皆に紹介したいしな」

「それでしたら信太さんだけでよろしくなくて？」

セシリアの疑問に剣斗は頷き、事前を買っていた切符を配りながら答えた。

「実はさ、もうすぐ町で夏祭りがあつてな。セシリアとかは日本の祭りとか知らないかなつて思つて誘つたんだ」

「誘つたじゃなくて、強制したんでしょ」

「あれ、そうだったっけ？まあ、こうしてみんな来たつてことは大丈夫つてことだろ？」

そう言われては反論できないのが今の現状で、剣斗もみんなの反応を見て納得して

「それじゃあ俺の町にレッツゴー！」

一人ハイテンションで電車に乗り込み剣斗。最終的付いていくことになることに、つくづく自分は甘いと全員が思った。

剣斗の町は電車で30分、前に行ったナタージャの墓の時とは逆方向である。

「ここが剣斗の故郷か？」

「そつだ、いい町だろ」

一夏の問いに剣斗も全員に問いかけるが、みんなはどう答えたらいいかわからなかった。とりあえずみんなが思ったのは

(普通だな……)

駅から見える景色は昭和の町並みを想わせる。周りには都心のような高層マンションは無く、ぼつぼつと見える民家と商店街。これがザ・町だなとおもった。

これに対して感想を求められても何とか言っているかわからないのが普通だ。

みんなが何と言っていいか迷っていると、聞いてきた剣斗が代わりに答えた。

「いい町と言うよりは普通の町だろ？」

「そんな事は無いぞ。あつちには山だつてあるし、そつちには川がある。都内ではなかなか見られないぞ」



フォローしようと思が誉めようとしたが、言ってることは遠回しに田舎と言っているようなものだった。みんなもそれは駄目だろと思つたが、それを聞いて剣斗は笑っている。

「遠慮しないでいいよ。正直に田舎って言っても大丈夫だよ」

剣斗は先頭を歩きながら話す。

「確かにここには都心程の便利さはないけど、箒が言ったように山や川だつてあるから子供たちの良い遊び場所になるし、修行にはもつてこいの場所だぞ」

そんな話をしてしていると剣斗たちは商店街に入っていた。しかし、商店街に入った瞬間前々からあつた視線がより一層剣斗たちに注がれている。

軍人のラウラも含めてこれだけの人に見つめられるのは、いささか気分も悪くなるだろう。剣斗以外が後退りするなか、民衆の一人である八百屋のおじさんが剣斗に大根を向けながら

「お前剣斗か？帰ってきたのか」

「当たり前だろ、夏祭りには帰るって連絡しただろ」

剣斗が答えると一瞬商店街が沈黙するが、すぐにそれは歓声に変わった。

「おお！剣斗が久しぶりに帰ってきたぞ！！」

「何だよ、全く帰ってこないからてつきり死んだのかと思つたぜ！」

「バカ野郎！定期的に手紙とか電話してたら、つかお前たちIS学園を戦場と勘違いしてないか!？」

剣斗は八百屋や肉屋の店主にさらわれてもみくちやにされている。突然の出来事に残されたみんなはどうしたものかと悩んでいたが、やがて代表として信太が剣斗を中心に盛り上がってる群衆に向かつていく。

「おい剣斗、テメエ一人で盛り上がりやがって、俺等のこと忘れてんじゃねえよ」

「……」

群衆は一度固まり、剣斗と信太を数回見比べた後、一呼吸置いて再び歓声が上がった。

「なんだコイツ！めちゃくちや剣斗に似てんじゃないか！」

「だから前に言っただろ。俺の弟（仮）の信太だよ」

「お前、（仮）はなんだ（仮）は」

信太はため息をつくが、その間に信太も群衆に飲み込まれて二人を使って遊び出した。

「本当にそっくりだな。身長も全く同じだな」

「この生意気な顔も同じかよ!！」

「違つのは髪と目だけかよ！」

「……」

抵抗するのも無駄と判断した信太もされるがままになっている。そして、完全に蚊帳の外にされてしまった一夏達は電車で剣斗に渡された地図を便りに旅館に向かうことにした。

「しかし、さっきのは凄かったな」

商店街を迂回する形で進む途中で幕がふと思い出す。

「日本の民衆は随分派手なコミュニケーションをとるんだな」

「ラウラ、あれは日本じゃなくて世界でも珍しいよ」

ラウラの勝手な独自解釈にシャルロットが訂正している。一夏達が今歩いているのは剣斗と信太がもみくちやにされてる現場から東に500メートル行った所で、周りには似たような建物が連なっている。だが、一夏はそこである問題に直面にしていた。先頭を歩いている一夏が不意に振り返って一言。

「……」

「はぁぁ!?!」

女子から一斉に避難を浴びる事になる一夏。一夏は率先して俺が行くと言っていたのでこうなるのは当然の結果である。しかし一夏は首を激しく振って抗議する。

「俺のせいじゃないぞ! 剣斗の書いた地図がめちゃくちゃなんだよ」

「言い訳すんじゃないわよバカ! ちょっと貸してみなさいよ!」

鈴が一夏から地図を奪い取るが、暫く地図とにらめっこした後同じく一言。

「わからないわ……」

「鈴さんは地理が苦手ですの? でしたらこのセシリア・オルコットにお任せください!」

「いや、ここは日本人である私に任せろ!」

「何を言う、軍人の私が見た方が早いに決まってる!」

「待ってよ、僕も地図には詳しいよ!」

鈴から地図を受け取った四人が地図と周りを見比べるが五秒もたたず、

「わかるかつ!」

地図を床に叩きつけていた。

「こんなのを地図と呼んでいいのですの!？」

「こんなのが地図な訳がないだろ！」

「もしかして何かの暗号か？」

「なかなか独創的な地図だね……」

みんながそれぞれに文句を言う。因みに剣斗の書いた地図は紙の下に駅と書いてあり、右斜めに十センチのところに旅館と書かれてい  
るだけでとても地図とは言えるものではなかった。

しかし、現在迷子になってしまった事實は代わり無く、周りを見渡  
しても殆どの人が剣斗がいる商店街に行っていて道を聞くことも出  
来ない。来た道を戻って剣斗と行くことも可能だが、今更戻るのも  
恥ずかしくて出来なかった。項垂れていると一夏があつと声を出す。

「なあ、あの人に聞いてみないか？」

一夏の言葉の先には和菓子屋の前でベンチに座る人だった。

「あの人にですか……?」

セシリアが少し嫌そうな顔をする。理由はベンチに座っている人の  
服装だ。真夏だというに長袖長ズボンで、手袋にフードを深く被っ  
ていて見ているこっちまで汗をかいてしまいそうだ。

「大丈夫だって、人は見かけで判断するべからずだぜ？」

そう言って一夏はその人の元に歩みよった。

「あの、すみません」

「!?!?、……」

その人は一瞬肩をすくませたが、すぐに一夏の腹辺りまで視線を上げた。

「ちょっと道を聞きたいんですが、この近くに旅館があるはずなんですが道に迷ってしまって、何処にあるか知っていますか？」

「……」

その人は喋らない代わりにジェスチャーで何とか伝えようとするが、これもなかなかアバウトで一夏にはいまいち理解できなかった。その人の様子からして旅館の場所を知っていると思った一夏は困った顔できく。

「ええと、出来れば口で言ってもらえると有難いんですが……」

そう言うとその人は俯いて黙ってしまったが、暫くしてから妙に低い声で答えた。

「この通りをずっと進んで、4つ目の信号を右に曲がって進めばそこに旅館がある。町にはそこしか旅館が無いからきつとそこが君たちの目的地だろう」

説明を聞いたことで先ほどのジェスチャーの内容も理解できた一夏は感謝の意味を込めて一礼。その上で一夏は聞いた。

「あの、そんなに着こんで暑くないんですか？」

「問題ない」

そう答えるも、その人が汗を流しているのが一夏もわかっていて。その人の服装について他人がとやかく言うのをどうかと思うが、しっかり者の一夏は気になってしょうがなかった。どうしようかと顎を撫でていると、一夏達の左手側からもみくちやにされて髪をボサボサにした剣斗と信太がやって来た。

「一夏、あまり他人に迷惑かけんなよ。後で文句言われるのは俺なんだから」

「かけてねえよ！」

「まあどうでもいいか」

「いいのかよ！」

一人叫び続ける一夏に落ち着けと左手でなだめる剣斗。

「とりあえず道がわかったなら信太も含めて先に行っててくれ」

「剣斗はどうするんだ？」

「久しぶりに帰ってきたから色々やることがあるんだよ」

一夏はやりたいたい事は何だと聞こうとしていたが、その前に信太が一夏達を引き連れていく。

視界から一夏達が消えた後で剣斗は文庫本を読み始めたその人の隣

に座った。木でできたベンチは剣斗の体重が掛かるとミシツッ音を起てるがそれもすぐに止み、二人の間には沈黙の時間が流れた。その人は決して剣斗と話そうとはせず、ひたすらに文庫本を読み続ける。剣斗もいつもと違って積極的に話しかけずにニコニコと笑いながら周りの町並みを見ていた。時間としては20分程経った頃、文庫本を捲る手を止め、しかし視線は文庫本に向けながらその人はおもむろに口を開いた。

「剣斗さん、IS学園での生活は楽しいですか？」

その声は一夏と話していた低い声でなく、高く透き通る女の声だった。声の変化に剣斗は眉ひとつ動かさず、視線を合わせようとしないうその人に笑顔で答える。

「それなりに楽しくやってるよ。IS動かすのって結構大変だけど、逆にそこが面白いんだよね」

「それはよかったです」

剣斗の答えにその人はほっと胸を撫で下ろす。読んでいた文庫本を閉じて足の上に乗せて言葉を続ける。

「IS学園って女子しか居ないって聞いてたから、もしかしたら剣斗さんは嫌々IS学園に行ってるかと思いましたので」

「そんな事ないって、俺以外にも二人は男子もいるし、女子だって男子だからって差別する人は誰もいないよ」

「そうですね……」



それを最後に二人はまた黙り込んでしまう。二人が座っている前の通りにも人通りが多くなり剣斗の存在に気付いてはいたが、商店街の時に違って誰一人として話しかける人はいなかった。通りすぎる人達を見て剣斗は思う。

みんな気を使ってくれてんだな、俺達に……。

そんな気遣いに剣斗は感謝する。ふと時計を確認すると、一夏達と別れてたからもう30分以上経っていた。

（もう一夏達も旅館には着いてるかな、そろそろもどるとするか）

そう思った剣斗は立ち上がる。また文庫本を読み始めたその人に剣斗は

「それじゃあ俺も旅館に行くわ」

「はい、さようなら」

素っ気なく返すその人に剣斗は嫌な顔一つせず、じゃあなと手を振る。数歩進んで剣斗があつと何かに気付いて振り返る。

「なあ！今年の夏祭りに行くのか！」

その人は何も答えない代わりに首を下に振る。それを見て剣斗はそうかそうかと頷くと、

「わかったわ！せいぜい夏祭り楽しめよー!!」

「……………」

その人はまた何も答えないけど、剣斗は何も言わずに走り去る。その人は走る剣斗の見ながら誰にも聞こえないように呟く。

「もう、私を夏祭りに誘ってくれないのですね剣斗さん」

同じ時、剣斗も走りながら耳に流れる風の音と共に呟く。

「剣斗さんか、もうそうしか呼んでくれないんだね君は」

**愚弟の姉（前書き）**

自分でも驚きの執筆速度。普段の3倍はでてるかも……。

## 愚弟の姉

「ここが剣斗の言ってた旅館か」

和菓子屋で道を聞いた一夏達は言われた通りの道を進んでやっと目的地である旅館に到着した。距離はそんなに無かったが話ながら来たのでおもったより時間がかかってしまった。

「結構立派な旅館だね」

「それもそうだが、俺は他の事が気になるんだが」

信太が見る先にはこの旅館の看板が置かれている。そこには大きな文字で

『神城旅館』

と書かれていた。

「これ、神城旅館って書いてありますわよね」

「もしかしてあいつの実家って旅館だったの？」

「そう言えば剣斗の実家について私も聞いたことないな」

看板の文字にみんなが頭に？を浮かべていると、後ろから女性の声が聞こえた。

「あらどうしたの。もしかしてお客さん？」

振り返ると黄色いウェーブヘアの女性が腕を組んでいる。

「ええと、ここって神城旅館かみしろであってますか？」

とりあえずシャルロットが聞いたが、女性は口に弓の笑みを作ると、

「ここは旅館だけど、名前が違うわよ。神城旅館かみしろじゃなくて神城旅館しんじょう、よく覚えておきなさい」

女性の訂正に、へえと言う7人に女性は歩み寄りながら、

「それで、お客さんじゃないようだけど、何か用でもあるの？」

「用と言うか、友達の神城剣斗にここに行けと言われたので来ただけなんですか」

「剣斗？」

女性は足を止めると一夏達を通り抜け、旅館で前で両手を広げる。

「貴方達、愚弟の友達！？だったら早く言いなさいよ。勘違いして堅苦しく対応しちゃうところだったじゃない。だけどしっかり相手を選んで接客出来る私って素敵っ！！」

突然のキャラ変更に信太も含めた全員が反応できずに立ち尽くしている。女性は満面の笑みで一人一人と握手をしていく。

「私は神城瑠理。聞いてわかるように愚弟の姉、つまり優姉よ！」

わけがわからずともそれぞれが軽い自己紹介をする。瑠理は一人一人の紹介に頷き、

「わかったわ、一揆君に信犬君に、塵取りちゃんにセシルちゃん。それに風鈴ちゃんにシャーベットちゃんにラウムちゃんね」

全然違うよ！と全員のツッコミにも瑠理は動じず、

「ごめんなさいね、私って人の名前覚えるの苦手なのよね。だけどそんな私も素敵っ！！」

「……」

もうどうしたらいいかわからず、ただ瑠理を見つめることにした。夏達。すると後ろから救いの声が聞こえた。

「やっぱりもう着いてたか。あれ？姉ちゃんがこっちにいるなんて珍しいな」

走ってきたのか剣斗の額にはつつすら汗が見える。瑠理は剣斗を見ると腕を組み直して言う。

「フフ愚弟、感謝しなさい。貴方がやるはずだった友達の自己紹介もこの優姉がすませておいたわ。さあ、感謝の言葉を述べなさい！」

「姉ちゃん久しぶりに会ったのにいきなりこれなんて頭狂ってんじやねえの？」

「フフフ、優姉の秀才ぶりに追い付けないのね。仕方ないわ、だって貴方は愚弟だから！」

「はいはい、どうせ俺は愚弟ですよ。さっ、みんな上がってくれ、部屋は男子と女子で分けてあるからな」

「無視ね、無視をするのね！？　だけど愚弟に無視される私も素敵っ  
！！」

二人の笑みでのやり取りに、他のみんなは苦笑いをしている。そして思った。

流石は剣斗の姉だ。剣斗と違つところで普通じゃない……。

「さあ、ここが貴方達の部屋よ」

瑠理に連れられた女子達は旅館の一室の戸を開けると、女性達はおと声を上げた。

「凄い豪華……。でも僕達そんなにお金無いんですけど」

「フフ安心しなさい、愚弟の友達からわざわざ金を取るほど私も鬼じゃないのよ」

瑠理は部屋の各部を説明し終わると、棚からせんべいを取り出して

人数分のお茶を注いだ。女子達はテーブルを囲むように座った。みんながお茶を一口含んでせんべいに手をつけたところで瑠理が話す。

「質問会でもしましょうか。まずは私から、愚弟はしっかりやってくる?」

この質問に篤が答える。

「剣斗ならしつかりやっています。時々無茶をしますが、それが逆にみんなを救うこともよくあります」

「それはよかったわ。じゃあ篤ちゃんが質問していいわよ」

どうやら瑠理の質問会では質問に答えたものが質問できるようだ。質問する権利を得た篤は何を聞くかと迷ったが、最初というものもあるので無難なことを聞いてみた。

「瑠理さんについて教えてもらってよろしいですか?」

「女性の事を聞くのはマナー違反だけど、ルールだから答えるわ。名前は神城瑠理、誕生日は9月7日の乙女座。歳は19歳で専門大生だけど、この女将も任されてるわ。スリーサイズは上から87、58、89。これでいいかしら?」

「はい…、ありがとうございます」

自分が思ったよりも深く教えてもらったので篤は頭を下げた。

「次は私ね。愚弟にそっくりだったあの子は誰?」



これにはセシリアが答えた。

「元は多重人格の一人の人格だったんですが、その後色々ありまして……、今は剣斗さんの弟ということになってますわ」

「ふうん、優姉にはよくわからないけど、愚弟の弟というのはわかったわ。じゃあ質問どうぞ」

「では、剣斗さんと瑠理さんは本当の姉弟ですか？」

「当たり前でしょ、偶々同じ名字だからって姉弟になるの？違つてしょ」

瑠理は肩を自分で揉みながら話す。

「みんなも愚弟が捨て子だって事ぐらいは知ってるでしょ。その時に里親となったのが、もう死んじゃった私の母だったのよ。だから戸籍上でも正式な姉弟よ。これでこの質問はお仕舞い、次の質問ね。私ってISの事よく知らないけど、愚弟って強いのか弱いのか？」

これには誰にでも答えられたが、一番最初にシャルロットが答えた。

「正直言つと弱いですね」

「あらそうなの、愚弟あれでもケンカは負けた事無いからイケると思っただけだね」

「ISはそこまで甘く無い」

猫舌のラウラが熱々のお茶をフーフーと冷ましている。彼女はペロペロと舐めながら答える。

「確かに剣斗は剣術もかなりのものだが、ISでその特徴を活かすきれてない。動きは単純で感情的になりやすい」

しかし、とラウラは続ける。

「学習能力は誰よりもあるな。やったことをただ学ぶだけでなく、そこから発展させていく技術は軍人の私すら感心してしまう」

「それは将来有望だと捕らえていいの？」

勿論とラウラは短く答えた。

「それは良かったわ。まだ望みがあるんですもの。さて、次はそっちからね、これが最後だからしっかり考えてね。私普段は質問されても答えないから、私からは沢山質問するけどねっ！」

みんなの前でポーズをとる瑠理に苦笑いをする。そして最初に質問に答えたシャルロットが質問した。

「和菓子屋で座ってた厚着の人を知っていますか？」

瑠理は一瞬眉を低くしたが、直ぐに笑みを戻す。空になった湯呑みにお茶を注ぐ。お茶の水面に写る自分の顔を見て話す。それはまるで自分に言ってるかのようだった。

「彼女の名前はメアリっていうのよ」

「彼女？あの子女だったの」

鈴が驚くがそれはみんなも同じだった。そして瑠理も予想通りといった顔をしている。

「どうせあの子はフードを深く被ってたんでしょう？あの子って普段はいつもあだから」

瑠理がなくなつたせんべいを補充をしてる間にシャルロットは気になつていたことを聞いた。

「剣斗とあの子って知り合いなんですか？」

瑠理は器に色々な種類のせんべいを入れて戻つてくると質問に答えた。

「元々愚弟とメアリは幼なじみなのよ。そしてメアリは愚弟の初恋の相手よ」

「えええー!!」

これには剣斗に好意を抱いてるシャルロットとラウラ以外のみんなも驚く。一夏と並び、唐変木・オブ・唐変木の称号を持つ剣斗が初恋をすでにしてる事は衝撃的だった。周りでは一夏と剣斗は一生恋心を持たないのではと言われたほどだ。

実は瑠理が嘘を言ってるのではないかと思つたが、笑顔でもその顔からはとても嘘を言つてるとは思えなかつた。

「それで、その初恋はどうなつたんですか？」

衝撃的事実にシャルロットとラウラは固まってしまつてしまつが、シャルロ

ツトは決死の覚悟で聞いてみた。二人の反応を見て何かを悟った瑠理はクスツと笑う。

「どうなったか知りたい!? 知りたいわよね、そうでしょう! だけど教えないわ!!」

ええ? とみんなが疑問の声を作る。すると瑠理は意味ありげに頷く。

「ごめんなさいね。所詮は私も他人だから勝手に話すわけにはいかないのよ」

「そう、ですよね ……」

がつくりと肩を落とすシャルロットを見て、瑠理はやれやれと言うと携帯を取り出す。

「あつメアリ? 今暇? 暇よね! 暇に決まってるわよね! だったら今からうちに来てくれない、ええ、着いたらそのまま浴場に来てちょうだい。たまには昼間に入るお風呂もいいものよ。わかったわ、じゃあね」

電話を切った瑠理はふうと息をつくと立ち上がった、

「今からメアリが来るわ。これからちょっと辛気くさい話になっちゃうからお風呂にでも入りながら入りましょ」

「剣斗の初恋の話が辛気くさい話になるんですか?」

筭の質問に、質問は終わったはずよと注意しつつも、部屋を出る際

に瑠理はしつかり答えた。

「辛気くさ過ぎる話よ。なんたって、愚弟の初恋の話は、弟が愚弟になつた話だからね」

みんなが首を傾げる。瑠美はもう一度笑みを作つて、

「安心しなさい、貴方達にもわかるように話してあげるから。さつ、早く行くわよ。あの子近道知ってるからきつとすぐ来るわ」

みんなは急いで着替えの準備をして瑠美のあとを追う。瑠理はみんなが付いてきてるのを確認する。窓から外を見ると、裏道を通つて相変わらずの完全装備でこつちに来るメアリがいた。瑠美はメアリと後ろの彼女を交互に見て思う。

(フフ、貴方達はこの後話を聞いてどう思うのかしら？私のように愚かだと思ふのかしら、もしくは…)

そこまで考えて瑠理は考えるのをやめた。

(いけない、先のことを考えるなんてつまらないのに、つい考えてしまうわ)

瑠美はいつもと違う自分を自覚しながら彼女は少し早足で浴場に向かった。

一方、女子と別れた男子グループも話題はメアリについてだった。こちらは剣斗が窓際でカラコンでISのデータを見直し、一夏は布団などの確認をして、信太はせんべいをかじりながらテレビを見たりと、それぞれが別のことをしている。

「じゃあ駄菓子屋に居た子って剣斗の幼なじみなんだ」

一度出した布団を棚に戻す一夏という言葉に剣斗は首を下に振る。しかしその表情は何だか浮かなかつた。心配になった一夏が声をかける。

「どうしたんだ、そんな難しい顔して」

「いや、昔の事を思い出してただけさ」

「昔の事？」

ああ、と頷いて剣斗はまぶたを閉じる。次にまぶたを開けると瞳に映っていたデータは消えていた。

「聞きたいか、昔愚かな弟が犯した馬鹿な過ちを」

「あ……ん……」

一夏も興味はあったが、聞いていいことなのかわからず、つい曖昧な返事をしてしまう。するとテレビを見ている信太がせんべいをかじる手を止めずに言った。

「話せよ、俺はその話に興味がある。剣斗の初恋の話のはずが何でそんな話に転がるのかな」

「お前ももう少し剣斗の気持ち考えろよ、あいつだって本当は触れてほしくないかもしれないだろ？」

「知るか、俺は知りたいから聞くんだ」

テレビを見ながら話してる信太は一見興味なさそうにしているが、  
剣斗は何かを察したのかのりせんべいを手に取る。

「向上心があるとは関心関心。それじゃあ話しますか、馬鹿な弟  
が愚かな弟になった話をな」

愚弟の姉（後書き）

いかがですか？

本当に辛気くさいになっちゃいます。



## 8年前の夏祭り（前書き）

これから当分、会話が中心となりそうです。

## 8年前の夏祭り

「おおお……」

浴場に着いたみんなは関心の声を作る。浴場は広い。二十五畳程度の空間の内、八畳ほどが浴槽だ。周りは三メートルの長さの竹に囲まれおり、しかし正面からは町の景色を一望出来る造りになっている。

みんなが輝く瞳で露天風呂を見ていると後ろから戸が開く音がした。振り返ると長袖長ズボンでフードを深く被った人、メアリがおそらく着替えが入っていると思われる袋を持って入ってきた。メアリは浴場に瑠理以外の人がいることに気付き直ぐに出ようとしたが瑠理がその道を塞ぐ。

「大丈夫よメアリ、彼女達なら貴方の姿を見ても毛嫌ったりしないわ」

「しかし……」

何かを言おうとしたが、瑠理の無言の笑みに促され渋々自分の服に手をつける。

みんながメアリの体に注目する。彼女はみんなの視線に体をもじもじさせるが、半分やけくそで上の服を全部脱いだ。

「……えっ？」

みんなが一瞬固まる。目の前には柔らかい金髪の下、頬を朱にした顔がある。だがみんなは違うところに目がいった。

「傷……？」

シャルロットの呟きにメアリは顔を俯く。彼女の体には無数の切傷がある。傷は体だけ無く、腕や手、そして鼻には両目頭ほどの長さの深い傷がある。

メアリはタオルで傷を隠そうとするが、体の至る所に傷があるため全部を隠すことが出来ない。あたふたするメア리를庇うように瑠理が前にでる。

「何みんな素っ裸で立ちすくしてるの、もしかして裸族？違っなら早くお風呂に入るわよ」

瑠理に言われて一旦みんなも見るのを止めて浴槽に浸かる。瑠理とメアリも一緒に浸かる。メアリは出来るだけ傷を見られないように肩まで浸かり、防水性のある文庫本を顔の前で開く。

「メアリ、人の前で文庫本は読まない。駄目な女がやることよ」

瑠理の言うことにメアリははつきりと、

「嫌です……」

と断られ、瑠理はやれやれ、と声を漏らす。それ以上催促する事はせず、瑠理は自分の肩にお湯をかけながら話始めた。

「さて、話しましょうか、弟が愚弟になった話でも」

みんなはゴクリと唾を飲んだ。対するメアリは虎視眈々と文庫本を読み続ける。

「あれは丁度、五年前……いや六年だったかしら、それとも四年？」  
こちらに聞いてくる瑠理に、知らないです！。とツツコムと隣から、  
八年です、とメアリが修正する。

瑠理はそうね、そうだったわね。八年前だったわよね。でも、そんな度忘れしちゃう私って素敵っ！、とまたポーズを取る。そんな彼女にメアリは、

「話すなら早く話してくれませんか？でなくちゃ私、帰りたいんですけど」

と言うので、瑠理は一度咳払いをして話を戻す。

「うちの愚弟とメアリは家が近所だから幼稚園からの付き合いなんだけど、それが八年前に急に私の部屋に入ってきて言ったのよ」

『姉ちゃん姉ちゃん！俺明日の夏祭りでメアリに告るわ。ちゃんとシチュエーションやプレゼントだって用意してんだぜ。だから楽しみにしてくれよ！』

「随分大胆だね、今とは大違い……」

うんうん、と周りが頷く。

「だけどもまた何で夏祭りになんだ？」

「フフ、私たちの町には夏祭りに告白して成功したら結婚できる言い伝えがあるのよ。愚弟にしてはメルヘンな所があったわ」

でも

「愚弟は告白出来なかったわ」

「えっ!?!? どうして?」

それはね、と前置きして瑠理は浴槽の淵に座る。そして景色の向こうにある一点を指差す。

「あそこに林に囲まれた道が見えるでしょ? 愚弟が告白すると決めた夏祭りの前日、今は無くなったんだけど夏祭りの前夜祭があつてね、愚弟は勿論メアリと一緒に行ったわ。だけど」

そこで瑠理は話すのを止めてメアリを見る。

話してもメアリは大丈夫?

瑠理は視線で訴える。部屋でも本人が言ったように瑠理自身もこの話では他人だ。その他人が人の傷心に触れる話をべらべらと話しているのかと。瑠理の心配とは裏腹にメアリは何も言わずに文庫本を読み進める。

何も感じてない、わけないわね……。

しかし、と瑠理は自分に言い聞かせる。

話さないといけない、愚弟と一緒にいるこの娘達のためにも、メアリの為にも……。

「前夜祭の帰り道、二人の前でトラックが横転してメア리를巻き込んだのよ。奇跡的にも命に別状はなかったんだけど、誰が頼んだが知らないけどその時にトラックに積んであったのが刃物類でね、横転した時にそれが全部メアりに流れ込んだのよ」

聞いているみんなが背筋を伸ばしている。  
ちよつと刺激が強すぎたかしら……。

「愚弟は急いで病院に運んだわ。だけど傷跡は一つも消えること無く体に残ったのよ」

「確かに酷い話ですけど、それだけなら告白しなかった理由にはならないんじゃないですか。寧ろ、その分彼女を幸せにしようと思わないんですか？」

箒の言い分に瑠理はそうね、と頷く。

「でもね、話はこれで終わりじゃないのよ」

瑠理はもう一度湯槽に浸かる。彼女は両手でカエルを作ってそれに話しかけるように話す。

「事故があつた次の日は凄いい雨でね、当然夏祭りは中止になつたわ。なのにいつ約束したのか知らないけど、メアリは土砂降りの雨の中ずっと愚弟を待っていたのよ。全身を包帯で巻かれたミイラ状態だね」

だけど

「愚弟は結局来なかつたのよ」

「どうしてですか？」

「そんなの知らないわ。知りたかつたら愚弟に聞いてみたら？」

それは無理だろ、と内心でみんながツツコム。

「まあそのせいでメアリが風邪引いちゃってね、私と愚弟がお見舞いに行ったらメアリが無表情で」

『私は大丈夫ですから気にしないで下さい、剣斗さん』

って言ったのよ。あんなに仲良くしてたのにいきなりよそよしくされて愚弟だけじゃなくて私もフリーズしちゃったわ。最初は一時的なものだと思ってたけど、いくらたつてもメアリの愚弟に対するよそよそしい態度は変わらなかったわ」

瑠理は手のカエルを崩して背伸びをする。

「これには愚弟も相当応えたみたいでね、それ以来愚弟にも変化が起きたわ」

「変化？」

みんなが一様に首を傾げる。瑠理はちょっと待ちなさい、と言うと後ろにある石を強く押す。すると石は真ん中で開き中から二つのポタンとマイクが現れる。瑠理は浴槽から少しは身を乗り出すとポタンを押しながらマイクに話しかける。

「愚弟聞こえてる？聞こえてるわよね！？聞こえてるに決まってるわね！！だったら早く返事しなさい」

スピーカーからはノイズ音だけが聞こえる。暫くすると剣斗の声が聞こえてくる。

「姉ちゃん、久しぶりにこれ使ったからいきなり大声出すなよ」

「フフ愚弟、そんな事今はどうでもいいのよ。それより今、優姉喉が渴いたの。みんなの分7本コーヒー牛乳買って来て。そして男湯から隣の女湯に投げ込むのよ！いい、制限時間は三分よ！三分！」

「全く、こっちは絶賛男子会中だったのに。わかったよ、コーヒー牛乳7本でいいんだな？」

「そうよ頼んだわよ愚弟」

瑠理は用が済むと押していたボタンを離して隣のボタンを押す。開いていた石は逆再生するかのように元の状態に戻る。

「ええと、それは何ですか？」

触れるべきではない気はしたが、聞かずにはいられずシャルロットは尋ねる。

瑠理は聞かれたことに？を浮かべる。

「何って、何時でも愚弟を使うための通信手段よ。殆どの場所は私しか知らないけど、旅館の至る所にあるわよ」

最早苦笑すらできない一同。それから暫くの沈黙の後、竹の向こうから戸が開く音がする。

ぴちゃぴちゃと水を踏む音がし、続いて竹を叩く音がした。

「姉ちゃん頼まれたコーヒー牛乳買ってきたぜ！だけどよ、さっきおもったんだけど姉ちゃんとみんな入れても6人しかないんじゃないかねえか？姉ちゃんとうとう数も数えられなくなっちゃったのか」



「愚弟、あまり優姉を馬鹿にするものじゃないのよ。いいからさっさとこっちにコーヒー牛乳を投げなさい」

わかった、と返事が返り、竹の上を綺麗な放物線を描いてコーヒー牛乳が浴槽の真ん中に落ちる。6個まではほとんど同じく場所に落ちたのだが、最後の一個だけが大きく反れてメアリと文庫本の間には落ちる。ぼちゃんと水しぶきと共にメアリのきゅっ！、と悲鳴も重なって響く。

声の主がわかった剣斗が大きな声で言う。

「何だよ、七人ってお前だったのか！風呂場にいるってことはみんなにその体みせてるのか？珍しい事もあるんだな！」

「……………」

メアリは返事すらしなが、お構い無しに話を進める。

「なあ姉ちゃん、そいつがいるってことはもしかしてみんなにあの話してんの？」

「そうよ愚弟、みんなが愚弟の体たらくぶりをぶりをどうしても聞きたいってしつこいから……………」

「そんな事言ってますん！！」

全員の声が見事にハモリ、隣から剣斗の笑い声が聞こえてくる。

「案外姉ちゃんの言ってることも間違いないから別にいいさ。それより話が長引いてのぼせるなよ、勿論お前もだからな！」

そう言つて剣斗は浴場を後にする。瑠理は剣斗が投げたコーヒー牛乳を一人ずつ配る。みんなが一礼してコーヒー牛乳を口にする。口に広がる甘苦さにほっと一息つく。

「どう、愚弟のおかしな所に気付いた？」

そう言えば剣斗が呼ばれたのはこれが目的だとみんなが気付く。しかし考えてみても先ほどの剣斗はいつも通りで変化がわからなかった。もしかしたら今自分達がいいつも通りと思つてることが変化なのかもしれない、と思つていると、瑠理がまたやれやれとため息をつく。

「愚弟一度もメアリを名前で呼んでないでしょ？」

「あっ！」

みんなが納得したように手をポンツと叩くのを見て瑠理は、意外と観察力が無いのね……と少し落胆したのは彼女だけの秘密だ。

「それつて剣斗がメアリの事を嫌つてるのか」

ラウラの言葉をシャルロットがすぐに否定する。

「それは無いと思うな。剣斗の事だからきつと自分にはメアリさんの名前を呼ぶ資格は無いと思つてんじゃないの」

「それが一番正しいわね。愚弟いつも笑つてるけど、自分をいつも責めてるからね」

瑠理は空になった牛乳ビンの口をさつき見ていた道に向ける。

「あの日からもう8年が経つけど、愚弟は一度もあの道を通ってないわ。今まで何回か通ろうとしたんだけどね、やっぱり駄目だったのよねえ」

それに、と付け加えて瑠理はメアリの隣に座る。

「メアリだつて愚弟の事が嫌いってわけでもないのよ」

そう言うと瑠理はメアリが読んでいた文庫本を取り上げてみんなに見せる。文庫本にはカバーがしてあったが、表紙を捲ると最初のページには文庫本のタイトルと体に傷のある少女が描かれていた。

「これって……?」

「随分前に発売された本だね。あらすじとしては、体に大きな傷を持った少女が田舎の平凡な少年と出会って世界の価値観が変わり、やがて結ばれる話よ。つまりメアリも待ってるのよ、この本のよう  
に自分を変えてくれ」

「違います!」

メアリが、瑠理の言葉を奪うように、こう言った。

「私はそんなの待っていません!私はこのままがいいんです、誰とも関わらずに過ごしていくのが一番なんです!」

瑠理の目には涙がたまっている。みんなは突然の出来事に固まった。

メアリは瑠理から文庫本を奪い取るとそのまま浴場を出ていく。

「素直じゃないわね……」

瑠理も立ち上がると浴場を後にしようとする。戸に手を当てたところで彼女は振り返って言った。

「これだけじゃあ、まだ足りない？」

瑠理の言葉に、はつとしてみんなが振り向く。しかし誰一人として頷く者は居なかった。

「貪欲ね。だったら夕飯まで時間があるから町の人に色々聞いてみなさい、愚弟をどうおもってるか。ある程度聞き終えたら三丁目に住んでる向井由乃むかいゆのって女の子がいるからそれを話してごらん。そして愚弟の事を全部知れるわよ。まあ、強制はしないわ」

言葉と共に、瑠理は脱衣場に入る。

何なんだっつんだろう、という思いがみんなの心に生まれる。あまりにも急な展開で頭が追い付いていけない。ただ解るのは、一つの事実。

……まだ、私たち（僕達）は何もわかってないと言うことが。

少ししてから箒達もお風呂から上がり部屋に戻った。部屋には瑠理の姿は無く、代わりにテーブルの上に地図が置かれている。

地図といっても、剣斗が渡したような手書きの地図ではなく、町会で配られてる物なのでかなり詳しく書いてある。そして地図の右下の部分に赤ペンで丸く囲まれている。おそらくここが向井由乃の家だとみんなが予測する。とりあえずやることもなかったので、瑠理の言われた通りに聞き込みに行くことにした。

「それじゃあ町の人に聞きに行くけど、五人全員が固まるのも時間の無駄だし、2・3にでも分けとく？」

鈴の提案にみんなが頷く。

「僕はラウラと一緒に行動するね。何言い出すかわからないから」

「ん？私が何か変なことでも言うと思ってるのか？」

素で疑問に思っているラウラにみんなは苦笑する。

どうせラウラのことだから、『私の嫁についてどう思う？』といきなり爆弾発言をしたり、もし剣斗のことを悪く言われたら、『ほう、私の嫁を愚弄するか。おもしろい…』など言っつてISを展開しかねないと思う。だからこそストップパーであるシャルロットがラウラと行動を共にするのは必然的であつた。

「じゃあアタシは箒とセシリアと行動するわ。とりあえず午後3時にこの向井って家の近くにある自然公園に集合ね」

了解、と言って少女達は分かれた。

「ここが由乃の部屋よ」

午後3時。商店街、旅館周りを中心に聞き込みをした篤達は時間通りに自然公園に集まり、さっさく向井由乃の家に向かった。しかし、いざ家に着いてもいきなり知らない人が来て怪しまれないかと心配したが瑠理が事前に知らせてくれていたらしく、こうして由乃の母親に何の疑いもなく部屋に案内してもらえた。

由乃の母は部屋をドアを数回ノックする。すると中から小さな声で「はい……」と返事が返ってきた。

「由乃、瑠理ちゃんが話してた剣斗君のお友達だけど入れて大丈夫？」

「は、はい。だ、大丈夫、夫、だよ……」

歯切れの悪い独特なしゃべり方だなみんなが思っていると由乃の母はみんなを部屋に入れ、ごゆっくり、とだけ言って部屋を出ていった。

部屋の中央には黒髪のロングヘア少女があり、目元が見えないほど長い前髪をこちらに向けている。

「え、ええと、け、剣斗君、の、友達、だ、だよね？」

少女の問いかけに箒から順に自己紹介をする。

「シャルロット・デュノアです。よろしくね由乃さん」

「……」

シャルロットで全員の自己紹介が終わったはずなのに由乃は未だに箒達を見続けている。これだけ多国籍の人が来れば珍しがられるのは無理ないが些か居心地の悪さを感じたセシリアが口を開く。

「あの、由乃さん？一応自己紹介は終わりましたがどうかなされましたか？」

「あつ！」「ごめん、なさい。わ、私、目が、見え、ないから……」  
えっ！？とみんなが驚きの声を作るが由乃は気にすること無く立ち上がると箒達に歩いていった。目が見えない由乃が歩き出したので箒達も立ち上がるうとしたが、由乃は数歩だけ歩いて箒達に手を差し出した。握手を求めていることは容易に想像できた。でも箒達はまたえっ！？と今度は疑問の声を作った。由乃の差し伸べた手は握手をするには遠すぎず近すぎない、つまり普通に握手するのに適した間隔だった。一体どうして彼女はこんなことができるのかと疑問に思うと、由乃は握手をしながら答えた。

「私、目が、見えない、けど、か、代わりに、耳は、いいから、だいたい、場所は、わかる……」

みんなは成る程と納得する。

身体障害者や知覚障害者には障害の部分を補うために他の部分が優

れている場合がある。由乃の場合は目が見えない代わりに聴覚が人より優れているらしい。

「そ、それで、私、に、何の、用……?」

「ああ、用と言うよりはお前の意見を聞きたいと思ってな」

「意見……?」

ああ、と頷いて箒は一つのルーズリーフを由乃に渡した。それは先ほど自然公園で箒達が書いたもので、それには町の人の剣斗に対する印象を年齢別などに詳しく書かれているのだが

「……?」

盲目の由乃には紙に書かれた文字など全く意味がない。それに気付いた箒はすまない、と謝るとルーズリーフを受け取って口で言う。

「実はだな、瑠璃さんに言われて私達は町の人に剣斗について聞いてきたんだが、今から言うからそれを聞いて上で貴女の意見を聞きたいのだがいいか?」

「はい、だ、大丈夫、です」

では、と箒は口を開く。

「商店街の様子からだいたい予想はできていたが、剣斗は町の人に好かれているのだな」

「う、うん。剣斗、君は、とっても、いい子、だから、みんなも、



好きなんだと、思う」

そうか、と頷く一方、箒は眉をひそめて言葉をつなぐ。

「だが、一部の人は剣斗を毛嫌いする人もいたんだが、その事についてには心当たりはあるか？」

「それは、た、多分、私、の、せい、です」

どうして？と問いかけると由乃は前髪で隠れているまぶたを手でなぞりながら言う。

「私、目、見えない、から、よ、よく、からかわれて、た、んだ。でも、そしたら、ぜ、絶対、剣斗君、来て、くれて、それで……」

由乃は一旦口を止めた。

ここで、何て言えばいいんだろう。変な言い方すると剣斗君の印象悪くしちゃうし……。

悩んだ末彼女が選んだ言葉は、

「剣斗君、が、ぼ、ボコボコに、しちゃったんだ……」

「……」

箒達は由乃の言っているボコボコの意味がだいたいわかる。剣斗は今でも自分の事はどうでもいいのに他人の事になると激情して後先考えずに行動してしまう。きっとこれもそうなのだろうと思う。五人の中で一番付き合いの長い鈴にいたっては思い当たる節があった。

「あいつ、中学の時も派手にやってたのよねえ」

「そうなんですの？」

「まあね。中学に入学してあたし達同じクラスだったんだけど、その中に一人外国人がいてさ、何人かの男子が髪色とか肌とか色々言っていたんだけど、そしたらいきなり剣斗が立ち上がった」

『そんな下らねえ事をぐちぐち言ってるじゃねえよ！』

とか言ってる場で大喧嘩になったのよ。今思えば剣斗も自分の目の色の問題でこっちに来たようなものだからね、怒るのも無理ないね」

「それで、その時はどうなったの？」

シャルロットの問いに鈴は顔をひきつらせながら、

「当然剣斗の圧勝よ。剣斗は顔にかすり傷が二つ位だったけど相手はみんな大怪我で一人は骨折してね、その後こっぴどく叱られたけど、悪いのは相手だったからそれ以上は問題にはならなかったのよ」

篤達全員はその時の状況が頭に浮かび苦笑している。軍人のラウラだけは流石私の嫁だな、感心しているがみんなはあえて突っ込まない。

目の見えない由乃にも空気が悪くなっているに気がき、で、でも……！、と声を上げる。

「き、きつと、子ども、達は、誰も、剣斗君、の、こと、嫌って、ないでしょ……？」

「確かに、嫌ってるのはみんな親だったな。どうしてわかる」

「かたん、だよ。剣斗君、は、別に、悪い、こと、してない、から。それ、は、相手も、わかって、るから、恨ま、ないよ。剣斗君、も、次の、日からは、普通、に、接したり、お見舞いに、行つて、る。だから、剣斗君、の友達、は、一度は、お、大喧嘩、して、るの……」

男は本当に単純だな…、と篤は思い、昔の事を思い出す。

あれは小学校低学年の時だ。当時から私は剣道をしてたり、口調が女の子っぽくなかったせい、よく男女など言われていた。別に私は気にしなかったが、一人の男子はそうではなかった。一夏だった。一夏も男子達と喧嘩になつて剣斗ほどではないがあの方は千冬さんと呼ばれて怒られていたのをよく覚えている。だけど次の日には喧嘩した相手と仲良く登校していたのだ。あんなバカな事が成り立つのは一夏だけだと思つていたが、剣斗もその一人だったのか…。

思わずため息が出た篤に、「ど、どうかしたの……？」と由乃に心配され、問題ないと短く返した。

聞き込みで疑問に思つたのはほとんど解決できたな。残るは、

「次が一番私たちが聞きたいことなんだが、由乃さんは8年前の事故について何か知つているか？」

「え、…と…？」

由乃は目が見えないにも関わらず、辺りをきよきよろしだした。動揺してるのは誰が見ても明らかだった。

やはり他人が話すのは気が引けるか。

そう感じ取つた篤は由乃に言う。

「安心してくれ、ちゃんと本人の了承はとってある」

「ほ、ほんとう……?」

本当だ、と言うと、由乃は言っているのか、大丈夫かな、と数回ほやいた後口を開いた。

「み、みなさん、は、あの、事故に、ついて、ど、どこまで、聞いて、ますか……?」

「一応夏祭りの前夜祭で二人が出かけたときに、刃物を積んだトラックが横転してメアリがそれに巻き込まれた。そして夏祭り当日で雨の中ずっと待っていたのに結局剣斗は来なかった。それ以来あんな関係になつたと聞いているが」

由乃はうん、そう…、と頷いた後で、

「でも、ちょっと、違うよ」

「違う?何が違うんだ」

「メアリちゃん、は、トラックに、巻き、込まれた、わけじゃ、ないの。あの、日、二人、で、前夜祭、行った、けど、途中で、ケンカ、したの」

「ケンカ?どうして」

由乃は首を横に振る。わからないということだ。

「それで、メアリちゃん、走り、出して、剣斗君、も、必死、に、

追いかけて、たけど、間に、合わなくて、メアリちゃん、が、道路に、跳び出して、それを、トラックが、避けようと、して、横転、したの」

「そうだったのか…」

篤は疑問に思う。

なぜ瑠理さんはこの事を教えてくれなかったのだ？姉なら知らないはずはないのに…。

しばらくしてから、いや違うな、と己の考えを否定する。

言わなかったのではなく、言えなかったのだな。

あの場には目アリがいた。彼女とは直接話したわけではないが、話の内容や彼女の最後の一言からして彼女は常に他人に気を使っているのはわかる。そんな彼女の前で、ケンカのせいでこうなったと言え、メアリが自身を責めるのは目に見えてる。

だから瑠理さんはこの子の家に行かせたのか。

瑠理の意図がやっとわかり、頭のもやもたが少し解消された篤は頷いていると、由乃が、

「あ、あの…」

「ん？どうした」

「お、お願いが、あ、あります」

「お願い？」

はい、と言って由乃はまた立ち上がる。そして、手探りで机に向かうとあるものを持ってそれを篤達に渡した。

それは中学の時に書かれた卒業文集で、由乃のページには『私の夢』

の題で書かれている。

「読んでいいのか？」

「はい」

由乃は頷いた。

……この人たちだったら、大丈夫。

正直これを他人に見せるのは恥ずかしい。でもこの人たちならきつと叶えてくれる、私の夢も、剣斗君とメアリちゃんの気持ちも……。

「字、ほとんど、ひら、がなで、列も、ずれて、るけど、だ、大丈夫……？」

「大丈夫だ、問題ない」

箒は再度卒業文集を見る。字は歪んでいるが、気持ちは伝わる。箒は読み上げるため先に文章を読んでいたが途中から紙が濡れて歪んでいた。それは由乃の涙だった。彼女は泣いていたんだ、目が見えないから読み返すことはできないが、そのページを開きその文章を思い出して泣いていたのだ。

本当に私が読んでいいのか……。

正直そうは思わない。しかし彼女が託してくれたんだ。だったら彼女の意思に応えるのが礼儀だ。箒は最初のページに戻り文章を読み上げる。

私の夢

3年4組

向井由乃

私には夢があります。それはみんなが持つようなプロ野球選手になりたいとか、看護師になりたいとかではありません。私は階段を登りたいです。小学校の前にある長い階段です。そんなのは簡単に出来ると思われるかもしれませんが。でもただ登るだけじゃ駄目なんです。

私が初めて階段を登ったのは小学校の入学式です。でも両親は用事があつて来られませんでした。私は大丈夫だよと言いましたが、本当は寂しかったです。小学校に行くには階段を登らなくてはいけませんでした。私は階段が嫌いです。だから私は階段の前で止まっていました。周りでは両親と楽しそうに話ながら階段を登る音が聞こえます。私はその場にいると泣き出しそうでした。帰ろうとしましたが、声が届きませんでした。

「おい、どうしたんだ？」

「何かあったの？」

剣斗君とメアリちゃんでした。

メアリちゃんには両親がいますが、剣斗君にはいません。代わりにお姉さんがいます。でも先に小学校に行っていてそこには二人しかいませんでした。

「お前何ポーとしてんだよ、お前も一年生だろ？」

私はいかなり話しかけられて何て言えば言いかわからず震えています。するとメアリちゃんが、

「剣ちゃん！怖がらしちゃ駄目ですよ！！！」

「俺！？俺がいけないのか！？！」

「そうだよ！あつごめんね。ええと、名前は？」

聞かれたことに私は向井由乃と答えました。すると剣斗君は、

「向井由乃？何だ俺達と同じクラスになる奴じゃないか」

「剣ちゃん何で知ってるの？」

「そんなの決まってるだろ、昨日学校に忍び込んで見たに決まってるだろ！」

「……」

一瞬の空白の後、何かを頭を叩く音がしました。私には見えないけど剣斗君がメアリちゃんに叩かれたらしいです。剣斗君はしばらくうめき声を上げていましたが、メアリちゃんが私の左手をとって階段を登ろうと言ってくれました。

私は聞きました。

「いいの……？」

入学式はもう始まるうとしていました。急げばまだ間に合うかもしれないけど目が見えない私がいたら間に合いません。すると今度は剣斗君が私の右手をとって急ぐぞと言いました。

ただどその場から動こうとしませんでした。二人はどうしたの？と聞いてくるので、

「わ、私、目、見えない、から、早く、い、行けないの。だから、



先に、行って、いいよ」

言うと二人は私の手をとったまま何もしません。私が行かないの？、  
と言っても何も言いません。少しして小学校から鐘の音が聞こえて  
きました。入学式が始まったのです。それを聞いた剣斗君が言っ  
てくれました。

「よし、これで急ぐ必要は無くなったな。じゃあゆっくり階段でも  
登るか」

そして二人は私の手をとって私達は階段を登りました。

私は覚えています。周りにはさっきまで聞こえていた子供達の声は  
なく、二人の声だけがありました。ゆっくり登っていたはずなのに、  
私には一瞬に感じました。階段を登り終えると二人は手を離しまし  
た。そして離れた手で剣斗君が私の頭を撫でながら、

「お疲れさん。よく頑張ったな、これからよろしく！」

メアリちゃんも私の頭を撫でながら

「これからよろしく！」

私は自分でもわからず泣いていました。それを見て剣斗君が慌てて  
何故かまたメアリちゃんに殴られていました。

簿は文章のページをめくる。

それから毎日二人と一緒に階段を登ってくれました。私はもう一人  
で階段を登れました。それでも二人は私の手をとってくれました。

私はこんな平凡な毎日がいつまでも続くと思っていました。  
でも

7年前からそれは無くなりました。メアリちゃんが事故にあったのです。私がお見舞いに行くときメアリちゃんは元気そうでした。けどメアリちゃんはいつの間にか剣斗君の事を剣ちゃんではなく、剣斗さんと呼んでいました。私は胸の中に何かを感じました。それ以来私が階段を登る時はいつも手をとってくれるのは一つだけだです。決して二人の手をとってくれることはありません。お互いが毎日交互に階段を登るのです。それは剣斗君が転校しても変わりませんでした。

でもそんな日々でも一度だけチャンスがありました。それは中学校の入学式でした。その日は剣斗君と一緒に階段を登る日でしたが剣斗君は違う中学なので来ないと思ってメアリちゃんも来たのです。私は嬉しかったです、また三人で一緒に階段を登れると思ったからです。私は剣斗君に手を振りました、剣斗君も手を降り返してくれます。でもこっちは来てくれません、結局剣斗君は入学式に遅れるからと行って去ってしまいました。それは逃げるための口実なのは私にもメアリちゃんにもわかっていました。その日も三人で登る事はありませんでした。

箒は一度読むのを止め、深呼吸をして読み出す。

私には夢があります。

それは階段を登ることです。

また三人で仲良く階段を登ることです。

それは簡単なようではなかなか叶いません。だけど私は願います、願

うのは夢じゃないかもしれない、だけど私は願います。そして信じてます

きっとあの時のように笑いながら階段を登れる日が必ず来ることを。

「うっ……ひくっ……」

篤が文章を読み終える頃には由乃は泣き出してシャルロットと鈴が必死に慰めていた。

一体何が起きたんだ？

読むのに夢中になっていた篤は現状を理解できない。ただ何かを訴えるように四人がこっちに視線を送ってくる。

私がいけないのかー!？

そんなはずはないとわかっていても、目の前で少女が泣いていて他のみんながこちらを見ていたら明らかに泣かしたのは篤みたいな雰囲気になっているのは事実だ。

「すまない！私が悪かった、本当にすまない!!」

「だ、大丈夫、です。篤さん、の、せい、じゃ、ないです。でも…

…!」

由乃は箒の腕を掴む。決して力が入ってるわけではないが、箒は何か見えないものに掴まれた気がした。

「お願い、します！ 剣斗君、と、メアリちゃんを……」

そこまで言っただけで由乃はまた泣き出しそうになる。箒達は思うそうか、好きなんだな、この娘も剣斗君の事が。

出来れば力になってあげたい。だけど自分達には何が出来るのかわからない。由乃は自分達を信じて卒業文集を読ませてくれたけど自分達にはそこまで出来る力はない。シャルロットは意をけっして言う。

「気持ち嬉しいけど、僕たちには何も」

そこまで言っただけの時だった。

不意に声がみんなの耳に届いた。それは他の誰のものではなく、

「おいおいゆうちゃん。なに泣きそうな顔してんだよ」

聞き覚えのある少年の声。彼はあの時のように頭を撫でる。

「言っただけ、悲しいときや困ったときは俺に言えって、この神城剣斗さんがズバツと解決してやるって」

剣斗はそう言っただけで笑顔を見せた。

卒業文集（後書き）

瑠理「さあこれから優姉と由乃による後書きコーナーの始まりよ！」

由乃「瑠理さん、いきなり、どう、したの？」

瑠理「フフ、これはね話の後に私と貴方でこの作品のちよとした裏話や読者のちよとした質問に答える素敵なおコーナーよ！！」

由乃「なん、で、また、こんな、コ、コーナーを……？」

瑠理「そんなの作者の気まぐれよ！」

由乃「じゃ、なん、で、私、たち、なの？」

瑠理「それも簡単よ、私達が脇役だからよ！優姉をこんな所で使うなんて、そんな私も素敵っ！！」

由乃「……」

瑠理「それじゃ第一回は質問も無いし、私たちの設定でも話しましょうか」

由乃「こ、今回、は、私、と、メアリ、ちゃんに、瑠理さん、だね」

瑠理「私達はみんなが他の作品のキャラクターがモチーフね。だれど名前が一致してるのはメアリだけね」

由乃「私、は……？」

瑠理「由乃もメアリと同じだけど、名前だけはまた別のキャラクターよ」

由乃「どう、して……？」

瑠理「それはね、そのキャラクターは鈴すずって名前なんだけど、漢字だけだと……ね」

由乃「あゝ」

瑠理「つまりそういうことね」

由乃「なんか、ざ、残念、です……」

瑠理「フフ、気にすること無いわ。名前はアクセサリみたいなものなんだから、大事なものは中身よ中身」

由乃「はい……！……！」

瑠理「それじゃあ今回はここまでよ。質問があったらどしどし書いてね！いいのね書くのよ！これは命令よ……！」

由乃「バ、バイバイ……」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2189t/>

---

インフィニット・ストラトス その刀に宿す心

2011年11月24日00時57分発行